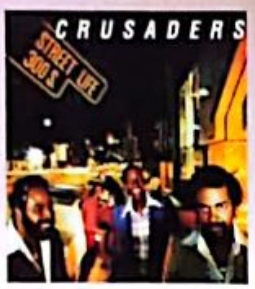
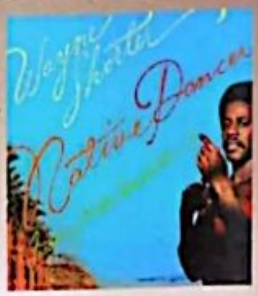
1985年8月2日第3種郵便物認可・2024年5月1日発行・毎月1回1日発行・第43巻第6号 Record Collectors' Magazine

レコード・コレクターズ

5
2024
Vol.43, No.5



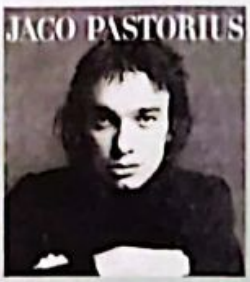


FUSION BEST 100

フュージョン・ベスト100

洋楽編

70～80年代を席巻した
一大ムーヴメントを再評価する



ジューダス・プリースト／ヴィサージ／梶芽衣

CamScannerでスキャン

26 特集 フュージョン・ベスト100 洋楽編

28 本誌執筆陣20名の投票によって選ばれた必聴の100枚
選・文＝池上尚志／エブリデ／岡田拓郎／金澤寿和／ガモウユウイチ／栗本斉／近藤正義
サエキけんぞう／柴崎祐二／高橋アフィ／立川芳雄／土佐有明／鳥居真道
能地祐子／萩原健太／原雅明／原田和典／松井巧／松永良平／村井康司

69 70年代以降にジャンルを跨いで起こった歴史的変化を振り返る 文＝村井康司

74 ヴェイパーウェイヴ以降に発生したリヴァイヴァルの流れ 文＝鳥居真道

78 選者アンケート：私にとってのフュージョン

89 特集 ジューダス・プリースト

90 革新を重ねながらもヘヴィ・メタルを貫いた半世紀 文＝杉原徹彦

94 ディスコグラフィー オリジナル・アルバム 文＝行川和彦

107 ディスコグラフィー 重要編集盤選 文＝舩曳将仁

112 特集 ヴィサージとUKニュー・ウェイヴ・クラブ・シーンの夜明け

112 ラスティ・イーガン・インタヴュー 聞き手＝田山三樹

118 ニュー・ウェイヴ・クラブ・シーンを知るための8作 選・文＝田山三樹

120 ムーヴメントを彩る楽曲をまとめたコンピレーションで当時の喧騒を追体験 文＝田山三樹

121 音楽ジャーナリストが現代の視点から考えたニュー・ウェイヴ・クラブ・シーンの意義 聞き手＝田山三樹

122 イギリスにおけるエレクトロニック・ミュージックの受容実態をクラブDJの重鎮が語る 聞き手＝田山三樹

124 ルーチョ・バッティスティ 文＝石川真男
イタリア音楽シーンのゴッドファーザーによる70年代の6タイトルがリイシュー

128 サントラ・キャンペーン2024 文＝片島吉章
ユニバーサルの豊富なカタログから名作71タイトルが一挙リリース

136 大滝詠一 文＝小山守
できうる限りの手法を投入してアルバムの新しい姿を見せた『EACH TIME VOX』

140 梶芽衣子 インタヴュー 聞き手＝真鍋新一
70年代作品の海外でのリイシューなど新たな展開を迎える女優・歌手が新作を発表

CamScannerでスキャン

5 2024 Vol.43, No.5

COLLECTORS' TOPIC

132 ジェイムス・テイラー 文＝能地祐子
久々の来日公演を記念してリイシューされた
円熟の時代を俯瞰する2作品

134 〈アライヴ・ザ・ライヴ〉レーベル 文＝立川芳雄
XTCやトーキング・ヘッズなどニュー・ウェイヴ系を中心とした5タイトル

144 UGUISS 文＝馬飼野元宏
83年に唯一のアルバムを残した佐橋佳幸らによる
バンドのアナログがリリース

146 アドリブ・ベスト・レコード・SACDコレクション
文＝ガモウユウイチ
フュージョン再発シリーズの第3弾として国内作品3タイトルがリイシュー

165 国内外で評価の高まる当山ひとみの
ベスト＆レア曲集がリリース 文＝池上尚志

連載

17 Legendary LIVE in U.K. 写真＝イアン・ディクソン

18 ミュージック・ゴーズ・オン
入江陽 取材・文＝柴崎祐二

24 ブリティッシュ・ロックの肖像 写真・文＝雷岡秀次

148 大鷹俊一のレコード・コレクター紳士録 菅谷晋一さん

154 矢野誠の点と線 取材・文＝除川哲朗

158 スティーヴ・クロッパー・リメンバーズ 取材・文＝稲葉光俊

162 ヴィクター・ハーバートから夢綴る
ロスト・アメリカーナ 文＝高橋健太郎

167 初盤道 文＝真保安一郎

169 和久井光司のアナログ奇聴怪会

170 ウィ・ヒア・ニュー・サウンズ 文＝武田昭彦

171 赤岩和美の海外盤DVD&Blu-rayロック映像情報

172 コモエスタ八重樫のちょっと一服

173 DJフクタケのゆるみっくす7"

174 インフォ・ステーション
174 ピックアップ・ニュース
178 ブックス
182 ライヴ・リポート
183 コンサート＆イヴェント

186 レターズ＆編集後記

189 バック・ナンバー、定期購読のご案内

最後から見るページ

1 リイシュー・アルバム・ガイド
2 4月のリリース情報
8 国内盤
26 海外盤
35 ニュー・アルバム・ピックアップ

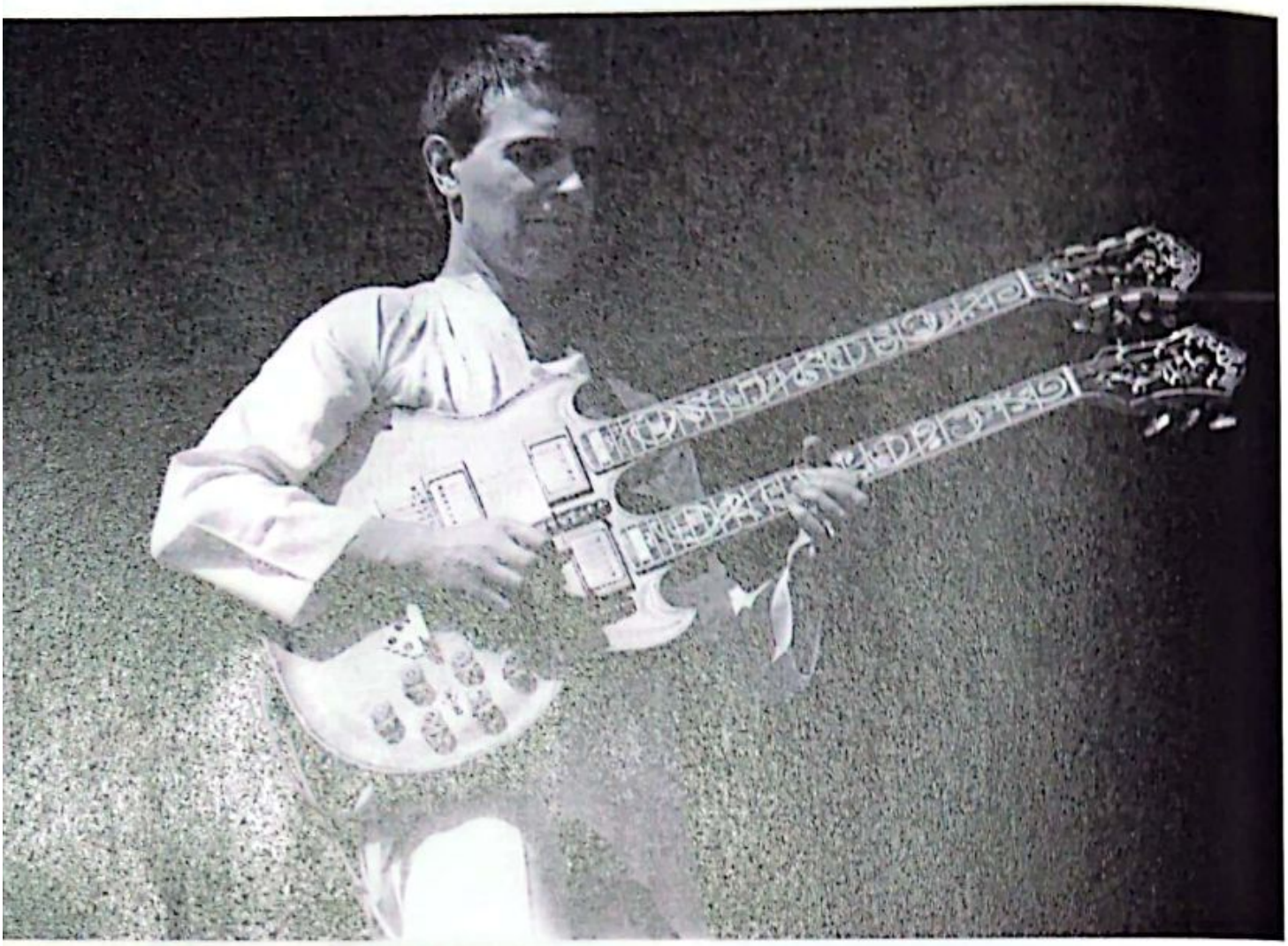
STAFF

編集長▶祢屋康
編集▶杉原徹彦／工藤大／芦崎強樹
表紙・本文デザイン▶川畑あずさ
デザイン＆プリプレス▶
荒川典久／柳井健仁／浅木美和
広告▶矢川俊介

Copyright ©2024 by Music Magazine
All rights reserved. Printed in Japan
本誌記事の無断複写・転載は固くお断りいたします。

CamScannerでスキャン

LEGENDARY LIVE IN U.K.
a photograph by Ian Dickson



shot 169: John McLaughlin
Knebworth Festival, Knebworth House, Hertfordshire 20 July 1974

レコード・コレクターズ 5

2024 Vol.43, No.5

文中の記号

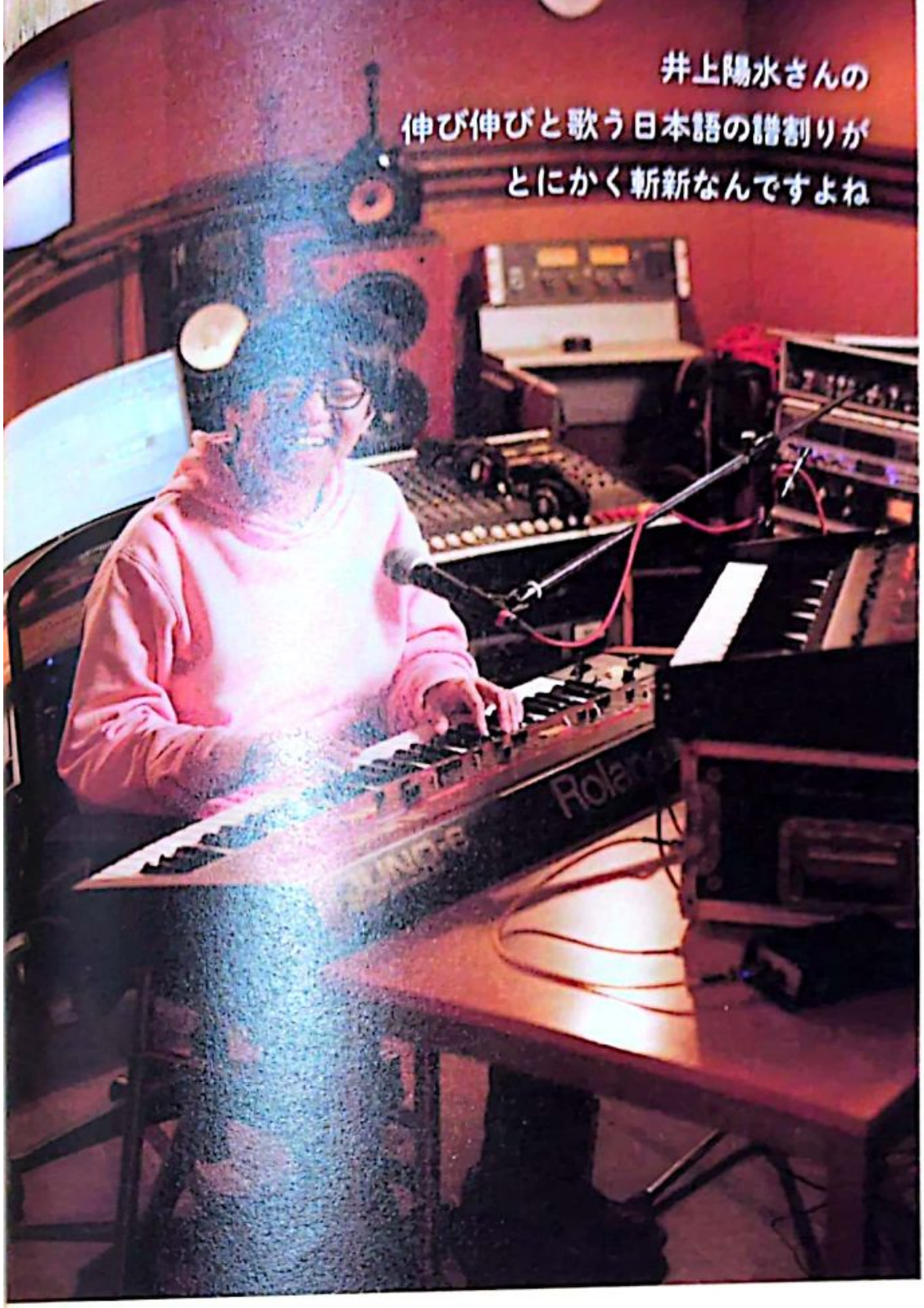
アルバムを示す記号	シングル、曲名を示す記号
国内盤=『　』	国内盤=「　」（インタヴュー記事などでは＜　＞）
海外盤="　"	海外盤='　'

＊本誌ではアルバムやシングルを、オリジナル盤のタイトル／レーベル／番号で表記するケースが多くあります。アーティストの出身国または日本以外のメーカーから発売されたレコードのみ、その国名をレーベル名の後に記します。
＊掲載されている価格は、特記されている場合を除き税抜き価格です。

楽器略号

ac-=アコースティック／acc=アコーディオン
as=アルト・サックス／b=ベース
bs=バリトン・サックス／cl=クラリネット
ds=ドラムス／el-=エレクトリック
fh=フリューゲルホルン／fl=フルート／g=ギター
hca=ハーモニカ／kbd=キーボード
org=オルガン／p=ピアノ／per=各種打楽器
s=各種サックス／sg=スティール・ギター
ss=ソプラノ・サックス／syn=シンセサイザー
tb=トロンボーン／tp=トランペット
ts=テナー・サックス／vib=ヴィブラフォン
vln=ヴァイオリン／vo=ヴォーカル

CamScannerでスキャン



いりえ・よう
1967年、東京都新大久保生まれのシンガー・ソングライター。2013年にファースト・アルバム『水』を発表する。『仕事』（15年）、『5F』（16年）、『15H』（17年）と作品を重ねつつ、映画『街の上で』、ドラマ『東京の雪男』、ゲーム『プロジェクトセカイ』など、様々なシーンに合わせた作品を提供している。今年2月に発売された『恋愛』は、7年ぶりとなるオリジナル・アルバム。

入江陽

第68回

最新音楽生活考

MUSIC GOES ON

取材・文＝柴崎祐二　写真＝栗原論　イラストレイション＝我喜屋位瑳務

撮影協力＝目黒・いろはスタジオ

CamScannerでスキャン

シンガー・ソングライター、文筆家、映画音楽作家、プロデューサー、俳優。世にマルチな才能を持つミュージシャンは数多くいるが、入江陽ほど幅広く活躍しているアーティストは稀だろう。

2013年にアルバム『水』でデビューして以来、変幻自在な音楽性と個性的な歌声で多くのリスナーを魅了してきた彼だが、その才能は映像業界の先鋭的クリエイターからも注目を集め、これまでに、『街の上で』（監督：今泉力哉）、『タイトル、拒絶』（監督：山田佳奈）、『最低。』（監督：瀬々敬久）、『月極オトコトモダチ』（監督：穐山茉由）など、多くの映画作品で劇伴音楽を手掛けてきた。また、Netflixなどの配信コンテンツに並々ならぬ知識を持つことでも知られており、雑誌『装苑』で「はいしん狂日記」という連載をもつなど、カルチャー系ライターとしても優れた仕事を重ねてきた。本誌の姉妹誌である『ミュージック・マガジン』でも「ふたりのプレイリスト」という連載を持っていたので、それを通じて入江の名を知ったという読者も少なくないはずだ。

その幅広さは、音楽性の面においても同様だ。フリー・ジャズ等の前衛的な音楽にも通じている一方、ヒップホップやR&Bをはじめとした、現代のメインストリームとも共鳴するようなポップなサウンドもまた、彼の音楽の特色となっている。

『恋愛』
Pヴァイン PCD25372／CD／¥2500／発売中
タイトル通り、キャリアで初めて真正面から恋愛を描いた5作目のアルバム。LP（PLP 7696／¥4000）も発売中

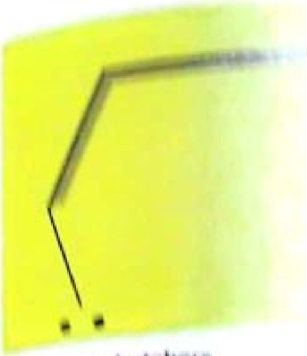
去る2月、そんな彼が、17年の『Ⅱの工』以来7年ぶりとなる会心の新作アルバム『恋愛』をリリースした。ネオ・ソウルやR&Bを基調に、ポップと先鋭の間を貫く特徴的な楽曲は、これまでの様々な彼の活動の集大成とよぶべきものであるのと同時に、Jポップのオルタナティヴな姿を探るような、野心的な試みとなっている。この異能のミュージシャンは、一体どんな音楽に触れ、刺激を受けてきたのだろうか。入江が普段から音楽制作の拠点としているという東京目黒の〝いろはスタジオ〟で、話を訊いた。

サントラを始点にオルタナ・ロックへ

「父が映画好きで、自宅に名作からB級映画までDVDがたくさんあったんです。父は基本的にミーハーな人だったんですけど、昔のB級ヨーロッパ映画とか、日本のものだと塚本晋也監督の作品のコレクターズ・ボックスとか、妙にマニアックなものもあったり、ちょっと不思議なバランスなんです（笑）。映画音楽のCDもたくさんあって、僕も小さい時からよく聴かせてもらっていました。エンニオ・モリコーネやフランソワ・ド・ルーベ、エリック・セラのような巨匠や、塚本作品で音楽をやっているメタル・パーカッショニストの石川忠さんのような先鋭的な方のスコアだったり、最初は主に映画を通じて音楽に開眼していきました。

そんな様子なので、小学生の頃から、友だちが聴いている流行りのJポップを斜に構えて捉えていて、〝自分はそういうのとは違うモノを聴いているんだ〟と悦に入っていました（笑）。映画音楽って、もちろん聴きやすいものもたくさんありますけど、イタリアのマカロニ・ウェスタンのスコアにしても、ポップスとは明

CamScannerでスキャン



bloodthirsty butchers
Yamane
東芝EMI TOCT-24634 [2001]
CD

あるように思えるが……。

「自分のベースになっている大好きな音楽だからこそ、そのサウンドをただ再現するような表現には向かわないんだと思います。轟音ロックの語法とは異なる形で、ブッチャーズやピクシーズから受けた影響や感動を表現してみたいと考えているのかもしれません」

ジョニー・ホッジスの孤高性

リスナーとして音楽に親しむ一方、幼い頃から演奏経験も積んでいたという。

「家にアップライト・ピアノがあったので、小学生の頃から自作曲を作って遊んでいました。〝新しい表現をするために既存のルールに縛られてはいけない〟みたいな話をどこかで仕入れてきて、真に受けて譜面も見ずに完全に自己流の演奏をやっていました（笑）。稚拙でもいいから、単に既存の曲を弾くんじゃなく、感覚で弾くことを重要視していましたね。

中学では吹奏楽部でオーボエを演奏してました。けど、一旦やめてしまって、高校では学外でバンドを組んで作詞作曲とギターをやり始めました。演奏はブッチャーズ、歌詞はザ・スミスのようなものを目指していたんですけど、全然形になりませんでした（笑）。それもオルタナ系の表現とは別の何かを探求するようになった要因の一つかもしれません。

その後は医療系の大学に進んで、ジャズ研究会に入りました。ピアノをはじめ、ベース、ギター、オーボエ、なんでも演らされました。先輩たちから、電化後のマイルス・デイヴィスや、エリック・ドルフィー、チャールズ・ミンガス、サン・ラー等、先鋭的なジャズをたくさん教えてもらったことをきっかけに、そのあたりのアヴァンギャルドなジャズにどんどん惹かれていきました。

その頃にアルト・サックス奏者／ビート・メイカーのnikaru yamada君（筆者註：21年11月号掲載の本連載に登場）と出会ったのも大きかったです。彼とはミクシィのエリック・ドルフィーのファン・コミュニティで知り合ったんです（笑）。彼はすごいディガーなので、超大量のフリー・ジャズ系音源を教えてくれましたね。バンバンに音源データが入ったハード・ディスクを貸してくれたり、いろんなミュージシャンと繋いでくれたり、まさに恩人の一人です」

今号の特集と関連する質問として、エレクトリック・マイルスのお気に入り作品についても訊いてみた。

「僕は『ダーク・メイガス』（77年）が一番好きですね。74年のカーネギー・ホール公演を収めたものですけど、さっき話したピクシーズと同じく、活動休止に向かう混沌の中で記録された音というか、未整頓の迫力が漲っているように聞こえるんです。独特の毒々しいムードも、学生時代のモヤモヤした自我や不安さと共鳴しているように感じました。

その一方で、流れるように美しいジャズも大好きでした。ジョン・コルトレーンがシンガーのジョニー・ハートマンと共演した『ジョン・コルトレーン&ジョニー・ハートマン』（63年）とか、めちゃくちゃいいですよね。あまりに綺麗で、聴いていると泣けてきます。デューク・エリントンとの共演作『デューク・エリントン&ジョン・コルトレーン』（63年）も愛聴盤です」

デューク・エリントンと共演者たちへの愛にも並々ならぬものがあるようだ。

「ハマったきっかけは、ミンガスとマックス・ローチとのトリオ録音『マネー

CamScannerでスキャン

・ジャングル』（62年）でした。若々しいピアノだし、エリントン自身あんなに偉大な人なのに、ともすると拙く聞こえてしまいそうな演奏をするのに躊躇がないということに感動しました。並行してエリントンの色々な時代の録音に関心が広がって、彼の作曲のパートナーだったビリー・ストレイホーンや、ビッグ・バンドでアルト・サックスを吹いていたジョニー・ホッジスの存在を知りました。

ホッジスの演奏は本当に素晴らしい…。自分の中で、ブッチャーズの吉村秀樹さんと重なる部分があるんですよ。抽象性の高い表現で、どこか世の中と隔絶している感じがして。バンド・リーダーであるエリントンからはまだ大衆へのサーヴィス精神を感じるんですけど、ホッジスの演奏からは、決して社会に溶け込むことのない孤高性のようなものを感じてしまうんですよね。音色も独特ですよね。

『極東組曲』の〈イスファハン〉とか、ビリー・ストレイホーンと組んだ『ジョニー・ホッジス・ウィズ・ビリー・ストレイホーン・アンド・ジ・オーケストラ』（62年）に入っている〈デイ・ドリーム〉とか、色気のあるコード進行のバラードで吹いているときが特に絶品です」

Duke Ellington
"The Far East Suite"
RCA Victor [US] LPM3782 (mono) / LSP3782 (stereo) [1967] (LP)
前題は『極東組曲』。アジア・ツアーで得たインスピレーションをもとにしたコンセプト・アルバム

どメジャーの魅力には抗えない

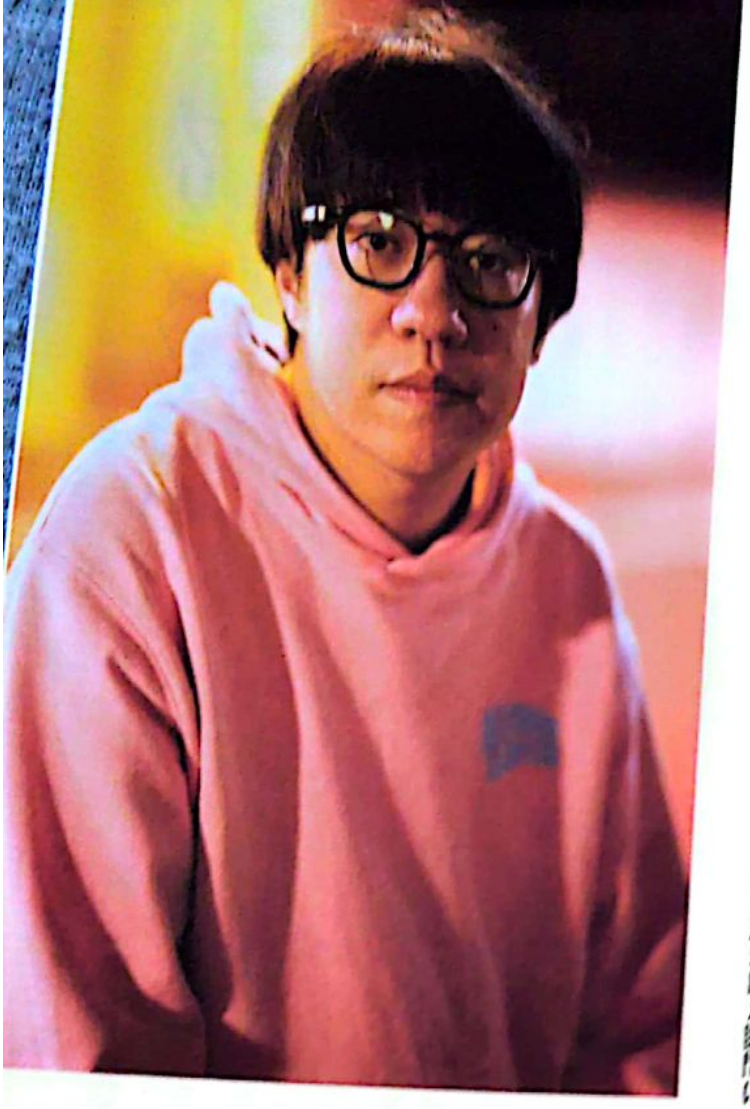
ジャズ研での活動の傍らで、ソロ・アーティストとして自ら歌うということに試行錯誤する日々を過ごしていたという。

「ジャズ研の先輩からディアンジェロやラファエル・サディーク等、ネオ・ソウル系の音楽を教えてもらって、自分で歌うことに本格的に興味が出てきたんですけど、そのまま英語で歌うのがどうしても恥ずかしくて…。日本の歌手で参考になる人を探しているなかで出会ったのが、井上陽水さんでした。名前はもちろん、ある程度、曲も知っていたんですけど、改めてじっくり聴くと、日本語の譜割りがとにかく新新なんですよね。Jポップのように整合性を重視した歌というより、書きなぐりのような譜割りですごく伸び伸びと歌っているように感じたんです。この歌い方を参考にすれば、ネオ・ソウル的なビートに日本語を乗せるのもいけるんじゃないかと思うようになりました。曲の構造もA→B→サビみたいなカチッとした構成から自由で、ちょっとループ感があるんです。『スニーカーダンサー』（79年）に入っている〈今夜〉や、アルバム単位でいうと、『UNDER THE SUN』が大好きですね。陽水さんの歌声って、バックがどんな音だったとしても確固として成立するというか、サウンドとして強い魅力がありますよね。

自分の歌に直接的な影響を与えているという点でいうと、矢沢永吉さんの存在も大きいです。二人とも大メジャーな人なので、もはや改めて意識することもな

井上陽水
『UNDER THE SUN』
フォーライフ FLCF30220 [1993] (CD)
ドラマ「素晴らしきかな人生」主題歌「Make-up Shadow」など収録

CamScannerでスキャン



いかもしれませんが、冷静に聴くと、とんでもなく個性的で、かつ自由なんですよね。最近のメジャーな世界だともしろ平均な歌声の方が支持されていると思うんですが、僕はやっぱり、個性を強く感じさせるスタイルの方が好きですね」

その後、作品を重ねるに従い、音楽の嗜好にも徐々に変化が生じてきたという。

「大貫崇生さんにプロデュースしてもらった2枚目のアルバム『仕事』（15年）をきっかけに、本格的にネオ・ソウル～R&B系に傾倒していきました。ヒップホップ系にハマったり、よりメジャーなシンガー、たとえばクリス・ブラウンの魅力に開眼したり…。父親の趣味の話にも回帰していくんですけど、結局、どメジャーなアーティストの魅力には抗えないんですよ（笑）。近年だと、ドレイクとかトラヴィス・スコット、ウィークエンドあたりをよく聴いています。共通しているのは、やっぱり声が個性的ということですね。イントロで声が出た瞬間に〝あ、誰々だ〟ってすぐにわかる、圧倒的な記名性があるんです。みんなシグネイチャー的な声色を持っていて、そのあたりは個性的な音色を詰った昔のジャズ・プレイヤーにも通じる文化という気がします。

ドレイクがスコットをフィーチャーした『フェア・トレード』（21年）が特に好きなんですけど、歌詞も素晴らしいんです。大スターなのにどこか卑屈なドレイクのパーソナリティがよく表われていて、大好きです。J・コールをフィーチャーした去年の曲『ファースト・パーソン・シューター』（22年）も最高です。この曲もどこか物悲しいんですよね。

僕の新作『恋愛』も、一見ポップなフォルムなんですけど、そういう人間の陰の部分をテーマにしている曲が多いんです。普段、みんなネットでは外交的で意識の高そうな発言をしているけど、同じ人がどうやったら好きな人を振り返らせられるかに必至になってカッコ悪いことを考えたりしているわけですよね。けど、それこそがリアルな姿だと思うんです。人間のそういう面にこそ惹かれてしまう し、愛おしく思ってしまうんです」

（3月11日　目黒・いろはスタジオにて）

CamScannerでスキャン

ブリティッシュ・ロックの肖像

371

Portraits In British Rock From London

フィル・コールター(中)

アイルランドを代表する作曲家が語る、自身のキャリアを象徴する名曲

写真・文＝富岡秀次

――各種のスポーツ・イヴェントの国際試合で歌われているスポーティング・アンセム〈アイルランズ・コール〉の誕生について。

「以前は、国歌として〈兵士の歌（The Soldier's Song）〉がアイルランドで歌われていた（1926年に採用）が、アイリッシュ・ラグビー・フットボール・ユニオン（IRFU）の国際試合で、アイルランド・チームの大半はアイルランド共和国人だったが、20%は北アイルランド人、という状況があった。彼らの国歌は〈ゴッド・セイヴ・ザ・クイーン〉（現在は〈ゴッド・セイヴ・ザ・キング〉）なわけだ。95年のワールド・カップに備えて、アイルランド人が共通して抵抗なく歌える曲が必要と、ラグビー・ユニオンから私に依頼が来たんだ。それ以来、この歌はクリケット、ボクシング、ホッケー、A1グランプリ・チームほかで、国歌に替わるものとして広く歌われている。

今のアイルランドの子供たちに尋ねると、ほとんどがこの曲を国歌だと認識している。とても誇りに思っているよ」

――ザ・ダブリナーズとの出会いは？

「64年にロンドンに移り、65年にデンマーク・ストリートにある音楽パブリッシャーと作曲契約をした。ヨーロッパでは有名な音楽祭である、ユーロヴィジョン・ソング・コンテストで、67年にサンディー・ショウの'Puppet On A String'が第1位になった。翌年は、クリフ・リチャードの〈コングラチュレーションズ〉が、残念にも第2位に終わるが、UKチャートでは1位。この2曲で、ソングライター&プロデューサーとして、ポップ・シーンではかなり早くに名前が知られるようになった。

しかし、アイリッシュ・フォークに対する愛情も常に持っていたんだ。特にザ・ダブリナーズは、最もカラフルなキャラクターで根強く活動をしていた。67年には、トラッド曲'Seven Drunken Nights'をアイルランド・チャート1位、UKチャート7位とヒットさせていて、そのためにUKのヴァラエティ・ショウにも出演していた。それで有名になったけれど、ヴァラエティ・アクト的に軽く見られていたし、ヒットの注目を失っていた頃だった。

マネージャーが替わってバンドが新しい方向を探していた時に、マネージャーが私と作曲の相棒のビル・マーティンに声を掛けてきた。売れっ子作曲デュオの一人がアイリッシュ・ミュージック愛に溢れていたのは、デンマーク・ストリート界隈では知られていたから。

ヒット曲を提供するつもりはなかった。アイリッシュ・フォークの伝統に相応しい深さに対峙したかった。それこそが彼らに必要な楽曲だと感じたから。私自身、ポップ・ミュージックのソングライターというレッテルから踏み出すのに、とてもいい機会になったと思っている」

――ザ・ダブリナーズに提供した曲で、特に思い入れの強い曲は何

CamScannerでスキャン

ですか。

「一つは前述の〈私がこよなく愛した街〉（73年／"Plain And Simple"収録／前号参照）で、もう一つは"Revolution"（70年）に収録されている'Scorn Not His Simplicity'だ。私の長男が、ダウン症を患って誕生した。彼に対する思いを綴った曲だ（註：4歳で亡くなる）。ヴォーカルのルーク・ケリーに聴かせたら〝このパーソナルな曲は、特別な機会にしか演奏するべきではない〟と言われたよ。確かに、私にとってとてもパーソナルで、特別な曲なんだ」

――'Scorn Not His Simplicity'という曲名から既に〈彼の単純さを軽蔑しないでくれ〉と、直接的に思いを語った強くて美しい曲ですね。

「これから彼に待ち受けているであろう困難を率直に語った。父として彼をいつまでも守りたい気持ちが溢れてきたからね。そして妻の思い。息子が生まれてきてくれた喜びと、障がいを持っていると知らされた時のショックと当惑。同じ経験を持った人たちの慰めになれば幸いだと思ったんだ」

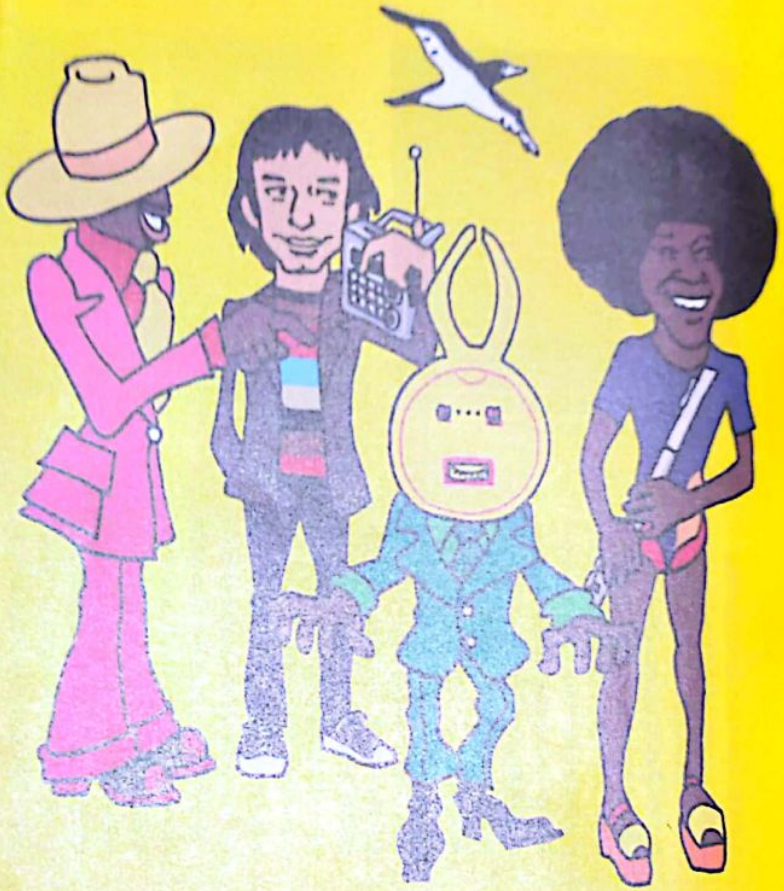
――ルーク・ケリーの力強い歌声も魅力的ですが、あなたがライヴで歌うこの曲の優しい歌声も感動的です。

「父親だからね。シェナイド・オコーナーやケルティック・サンダー、バディ・レイリーらも素敵に歌ってくれている。本当に嬉しいんだ」

〔インタヴューは23年7月18日、ダブリンのコールター・オフィスで〕

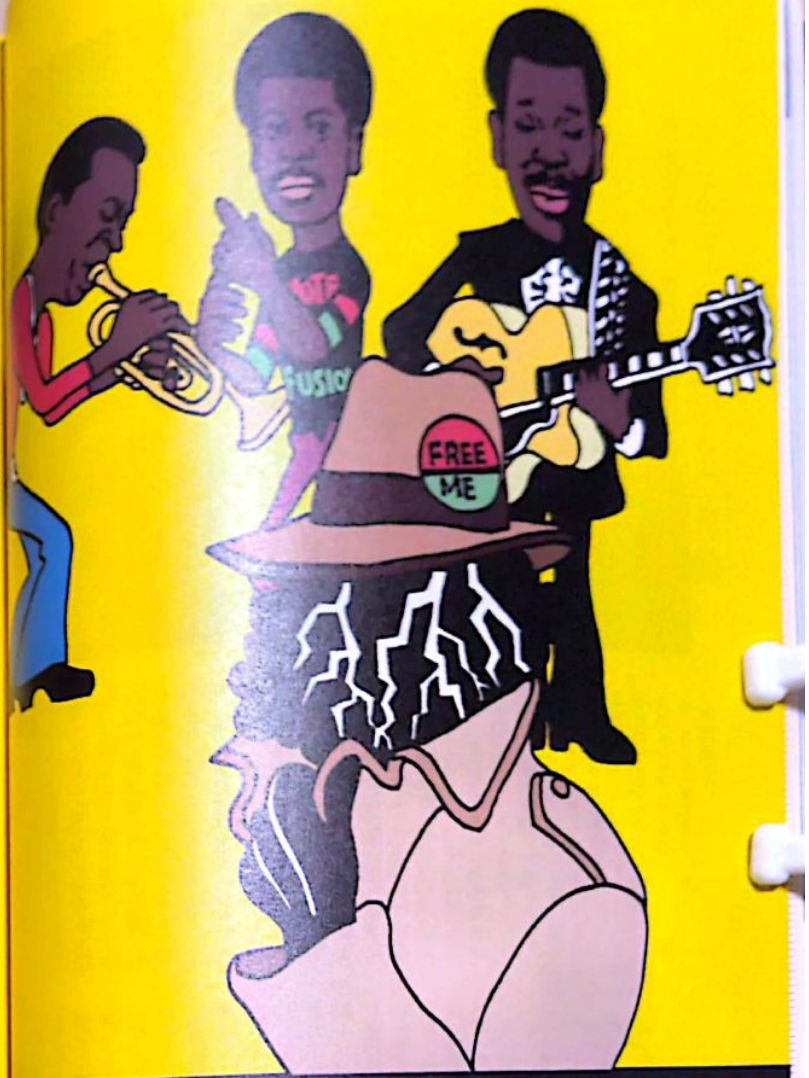
The Dubliners
"Revolution"
Columbia SCX6423[1970] (LP)
フィル・コールターのプロデュースでは2作目のアルバム。コールターの作曲は'Scorn Not His Simplicity'のみ

CamScannerでスキャン



選・文
池上尚志／エブリデ／岡田拓郎／金澤寿和／ガモウユウイチ／栗本斉／近藤正義／
サエキけんぞう／柴崎祐二／高橋アフィ／立川芳雄／土佐有明／鳥居真道／
能地祐子／萩原健太／原雅明／原田和典／松井巧／松永良平／村井康司

60年代の終わり頃からジャズ・シーンで顕著になってきた、同時代のロックや黒人音楽、ブラジル音楽などを取り入れる動きは、70～80年代を通してフュージョンという大きな流れになりました。その後もヒップホップやダンス・ミュージックにサンプリングされたり、その影響は根強いものがありましたが、近年、また違った観点から注目を集めるようになっています。今回も幅広い世代の筆者の方に、69～89年の作品から選んでいただき1～100位を決定しました。

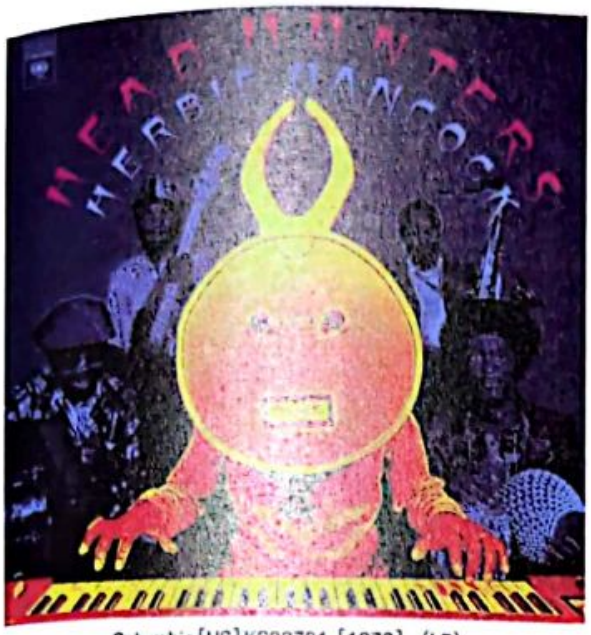


特集

フュージョン・ベスト100

洋楽編

CamScannerでスキャン



Columbia[US]KC32731 [1973] (LP)

1位

Herbie Hancock
Head Hunters

ハービー・ハンコック
ヘッド・ハンターズ

74年頃、アメリカから帰ってきた友人に「ニューヨークのシーンでは現在、ジャズとはファンク音楽のことを指している」と言われ、衝撃を受けた。その頃、彼の地ではジャズはエレクトリックなビートを指すようになっていたようだ。その震源地はもちろん、この盤。マイルス・デイヴィスの目論んだ〝ジャズとロックとの融合〟という方向性ではない、ループ性、バック・ビートという黒人音楽の特徴を、そのままエレクトリックの力により突然変異させた。構造的には極めてシンプル。旧来のジャズの力を借りず、一方で電気性／衝撃性ではロックを踏み越えた！　僕にはそう思える。

ハービー・ハンコック自身は制作の動機を「アッパーな音楽をやりすぎていた。より地に足がついていて、少し拘束的な音楽をやる必要があると考えた」と語っている。この〝地に足がついた〟という趣旨は、ファンク観を指すのだと思う。ファンク性はキャロル・キング『喜びは悲しみの後に』で叩いたハーヴィー・メイソンと、ド新人だった天才ベーシスト、ポール・ジャクソンをLAで雇うことによって可能になった。さらに拘束的＝ミニマル度を高めたヘヴィなファンク音楽が発明されたのだ。ハービー自身は「（従来のジャズより）何か軽いものをやりたかった」と語っているが、僕には後に連なるファンク音楽の歴史を切り開いた、極めて重すぎる作品のように感じる。

それまでのジャズの、シンバル・ワークが過剰な4ビート・ドラミングとは真逆。音数最小のシンプルな人力リズム・ループなのだ。その核はコクのある音色のベースとバス・ドラム。それは、この時期の録音技術の進化で可能になったフュージョン音楽の大事な要素だ。そして、同じフレーズが繰り返されることが、麻薬のように美味なニュアンスをもたらす。知らずに開いた口からヨダレがたれる。残りのメンバーはサックスとパーカッションだけ。メロディ楽器が少ないので、広大に空いた空間が上空に。そこにハービーの鬼のようにクールなクラヴィネットやストリングス、絶妙なシンセサイザー音が、抽象画のようにネジれた色彩で描かれていく。エレクトリック・ピアノのタッチのクールさもシンプルなだけにすさまじい。坂本龍一は、この盤に深い影響を受けたと思われる。そして、このミニマルさはもちろんヒップホップの予言。80年代にハービーがそれに関わるのは必然だった。フュージョンの基礎を作ると共に、90年代ポップ音楽の源流ともなった奇跡の内容。

（サエキ）

CamScannerでスキャン

ECM[US] ECM1022 [1972] (LP)

2位

Chick Corea
Return To Forever

チック・コリア
リターン・トゥ・フォーエヴァー

72年7月にECMレコーズからリリースされたこのアルバムは、同年10月1日に日本盤が発売された。発売前からの『スイングジャーナル』誌の強力なバックアップも功を奏して（同誌はこの作品を、ブラジル音楽との関係を強調して紹介した）、『リターン・トゥ・フォーエヴァー』は72年末までに国内で6万枚以上売れたという。

マイルス・デイヴィスのバンドを脱退後、アンソニー・ブラクストンたちとフリー・ジャズ色の強い〝サークル〟を結成していたチック・コリアが、若いベーシストのスタンリー・クラーク、マイルス・バンドの同僚だったアイアート・モレイラとその妻、フローラ・プリムたちと新しいバンドの構想を練り始めたのは、71年秋のこと。このアルバムは同年2月2日、3日に、リリース先のレコード会社が未定のまま、ニューヨークのA&Rスタジオで録音された。コリア自身が〝フリー・ジャズからの脱出〟を図ったこともあり、『リターン・トゥ・フォーエヴァー』も、ジャズの歴史の中での〝フリー・ジャズからの脱出〟を象徴する作品だと思われている。しかし、本当にそうなのか。

個人的な話をすると、当時、ロックばかり聴いていた中学3年生の私は、ある日ラジオでこのアルバムのA面を聴き、その不穏な響きにたいへん驚いたのだった。え、不穏？　なんで？とお思いの方も多いだろう。たしかに当時のジャズ・ファンの多くが、『リターン・トゥ・フォーエヴァー』のさわやかなサウンドがジャズ界の空気を一変させてしまった、と回想しているので、あれをいきなり聴いて〝なんだか不穏な音楽だなあ〟と思った中学生の意見は単なる的外れなのかもしれない。とはいえ、A面冒頭の「リターン・トゥ・フォーエヴァー」は転調を繰り返すモーダルな曲想で、フローラ・プリムのうめき声がたっぷりと披露されていて、50年以上経過した今聴いても十分に〝不穏〟だ。プリムの歌をフィーチャーした「ホワット・ゲーム・シャル・ウィ・プレイ・トゥデイ？」は実に明るくてさわやかなのだが。そして、B面を占める「サムタイム・アゴー～ラ・フィエスタ」のメドレーは演奏時間23分13秒。こんな長時間の曲を、たとえば76年のジョージ・ベンソン『ブリージン』以降のフュージョン・ファンたちは聴いてくれなかったはずだ。エレピやフルート、ヴォイスといったパーツはライトな響きを持っているが、音楽全体からはどこか60年代的な緊張感が漂っている。

（村井）

CamScannerでスキャン

Warner Bros.[US] BS2919 [1976] (LP)

3位

George Benson
Breezin'

ジョージ・ベンソン
ブリージン

68年に逝去したギタリスト、ウェス・モンゴメリーの後継として、ジャズのイージー・リスニング化を背負ったベンソン。しかしもともと評価が高かったギター・プレイに加え、レオン・ラッセル「マスカレード」を滑らかに歌って全米トップ10入り。アルバムはポップ、R&B各チャートで首位に立ち、ジャズの枠を超えたクロスオーヴァー・ヒットになった。グラミーでもアルバム及び楽曲で6部門にノミネートされ、三つのウィナーに輝いている。ベンソンはこれを機に自身のキャリアを大きく飛躍させただけでなく、ジャズ・フィールドにおけるヴォーカル曲の在り方を改革、ジャズの大衆化を大きく推進させた。本作の歌モノはたった一曲だけなのに、それが意外に感じられるほど、「マスカレード」は大きな存在感を示している。

ただしアルバムのコンテンツ自体は、特別に斬新なモノではなかった。ベンソンはもともとシンガー志望で60年代からギター片手に歌っていたし、「マスカレード」もヘレン・レディやカーペンターズ、セルジオ・メンデス&ブラジル'77などが先に録音している。本作プロデューサーのトミー・リピューマは、彼が優れたシンガーなのを事前に知っており、良い曲があれば歌わせようと画策。この曲も当初はインストの予定だったが、原曲をチェックしたベンソンが詞に惹かれ歌うことになった。後に十八番になるギターとスキャットのユニゾンも、それまでのライヴで磨き上げたもの。さらにアルバム・タイトルに掲げた後続シングル「ブリージン」は、ハンガリーのジャズ・ギタリスト、ガボール・ザボの71年作『ハイ・コントラスト』からで、ボビー・ウーマック提供曲。これをプロデュースしたのも他ならぬリピューマで、原曲で演奏したウーマックとフィル・アップチャーチの参加込みでベンソンに提案している。結果的にウーマックの録音は使用されなかったが、アップチャーチが75年にカーティス・メイフィールドに書いたとされる「シックス・トゥ・フォー」も収められた。

ロニー・フォスター、ホルヘ・ダルトらツアー・バンドにハーヴィー・メイスンやラルフ・マクドナルドらを加え、オーケストラ・アレンジにクラウス・オガーマン、録音にアル・シュミットを起用。これらすべてが選りすぐりの楽曲をベストの状態に仕上げるリピューマの采配。音楽のクオリティと商業性を見事に両立させ、ライト・フュージョンのメソッドを完成させた歴史的名盤だ。

(金澤)

CamScannerでスキャン

Columbia[US] PC34418 [1977] (LP)

4位

Weather Report
Heavy Weather

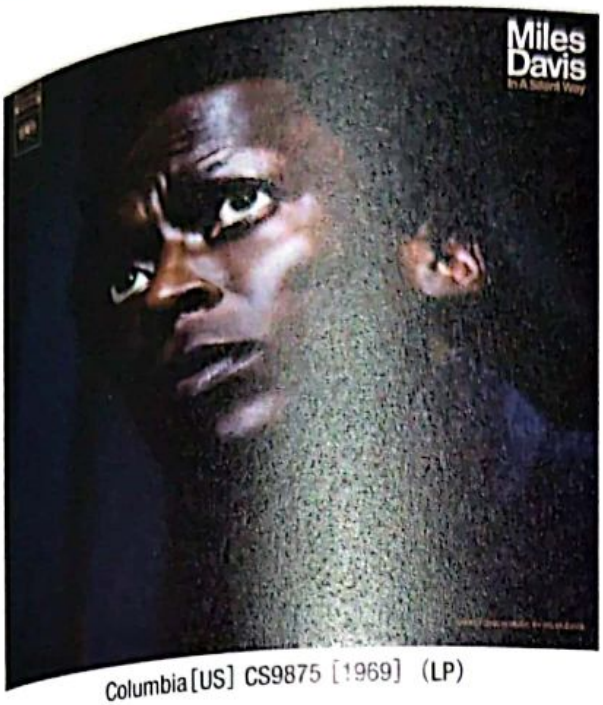
ウェザー・リポート
ヘビー・ウェザー

ナチス統治下のオーストリア、ウィーンで育ち、バークリー音楽大学の奨学生資格を利用してアメリカに渡ったユダヤ人ベーシスト、ジョー・ザヴィヌル。彼はマイルス・デイヴィスに才能を買われて『イン・ア・サイレント・ウェイ』のセッションに参加し、そこでアフリカ系アメリカ人のサックス奏者、ウェイン・ショーターと出会う。こうして結成されたのがウェザー・リポートだ。本作制作時のメンバーは、この二人に加え、ペルー出身のドラマー、アレックス・アクーニャと、プエルトリコ出身のパーカッショニスト、マノロ・バドレーナ。さらにラテン系と思われるアメリカ人ベーシストのジャコ・パストリアス。これは当時では（もしかすると現在でも）考えられないようなメンバー構成だ。複数の文化・民族を平然と混交させたさまは、まさに"フュージョン"。アルバム『ヘヴィ・ウェザー』は、後のワールド・ミュージック・ブームはもちろん、21世紀のグローバリゼーションをも予見していたかのような先駆的作品なのである。

バンドの実質的リーダーがザヴィヌルであることを考えると、作品は、ユダヤ＝キリスト教文明による非西欧世界のまき配を連想させるものにもなりかねなかった（実際、いわゆるワールド・ミュージックの作品には、そうした植民地主義的なものも少なくない）。しかし、本作がそれを免れているのには、ザヴィヌルが、共同プロデューサーとしてショーターだけでなくジャコをも起用したことが大きい。生演を暗して録音曲による人工庭園的世界の構築に執心したザヴィヌルだが、本作では若き天才ベーシスト、ジャコ・パストリアスの放つ精気を浴びて、庭園の植物たちが繁茂している。そこに生まれたのは、聴く者を疾風する音のジャングル——私にはそんなイメージが浮かび上がる。

フレットレス・ベースを駆使し、スタッカートとレガートを自在に組み合わせて一人でリズムを作っているかのようなジャコのプレイが、演奏全体を牽引する。もちろん多くのファンが指摘するように、ハーモニクス奏法に代表される彼のトリッキーな演奏も素晴らしい。バトレーナのシャウトするウォーカルと打楽器のみによるライヴ音源「ルンバ・マー」も、作品全体の絶好な味付けになっている。そうした奔放な演奏に対抗しているのが、ザヴィヌルのアレンジも他の作品以上に構築的。プログレッシヴ・ジャズといった時代もふさわしく思える名作である。（立川）

CamScannerでスキャン



Columbia[US] CS9875 [1969] (LP)

5位

Miles Davis
In A Silent Way

マイルス・デイビス
イン・ア・サイレント・ウェイ

今回の特集がなぜ1969年を起点としているのか。それは、本作がリリースされた年が69年だったからに他ならないはずだ。言い方をかえれば、本作こそがフュージョンの夜明けを画した記念碑的アルバムであるということである。

ウェイン・ショーター、ハービー・ハンコック、チック・コリア、ジョー・ザヴィヌル、ジョン・マクラフリン、デイヴ・ホランド、トニー・ウィリアムス。同年2月18日に行なわれたセッションにマイルスが呼び寄せたのは、以上の7名だ。かねてから演奏を共にしてきた仲間と新参の者の取り合わせとなるグループがこの日、取り組んだのは、〝エレクトリック・マイルス〟の本格的な幕開けを宣する、歴史的なセッションだった。

アコースティック・ジャズの最終形ともいうべき熱い演奏を繰り広げた時代と、続く半電化時代を経たうえでたどり着いた、エレクトリック・マイルスの最初の完成形。そういう伝説的な事実に過度の荷重をかけてしまいがちな現代のリスナーの期待に肩透かしを食らわせるように、ここに収められた音楽は、実に〝サイレント〟かつ柔和である。ジミ・ヘンドリクスに傾倒していたマイルスからすれば、もっとあからさまにロックのドライヴ感やノイズを取り入れた電化サウンドをいきなり披露する手段もあったろう。しかしここで彼が取り組んだのは、いかにも静謐で、(後の用語で言うところの)アンビエント的とすらいえるサウンドだった。ミクソリディアン・スケールを基軸に、ドローンと反復が醸す色彩感が空間に充満していくその様は、後の類型化したフュージョンの姿を飛び越えて、ポストロック~音響派、さらにはテクノ等の論理/美意識とも響き合っている。と同時に、彼の音楽の母胎ともいうべき静謐なブルース意識への回帰も窺われる。

そして、右のようなサウンドを実現するにあたりきわめて重要な役割を担ったのが、プロデューサー、テオ・マセロの融通無碍な編集だった。映画の編集者であり前衛サックス奏者でもあった彼は、複数のセッションをおさめたテープに大胆なエディットを施し、非再現性と一回性を基本的教条としてきたジャズの論理に、不可逆的な変革をもたらした。グルーヴとテクスチャーの切断、持続、貫入、馴致、異化、融合。その再構築技はほとんど魔術的といっていい。フュージョンという音楽(の概念)は、もしかすると誕生の時点が最も豊かで先鋭的であったのかもしれない。

(柴崎)

CamScannerでスキャン

Warner Bros.[US] BS2968 [1976] (LP)

6位

Stuff
Stuff

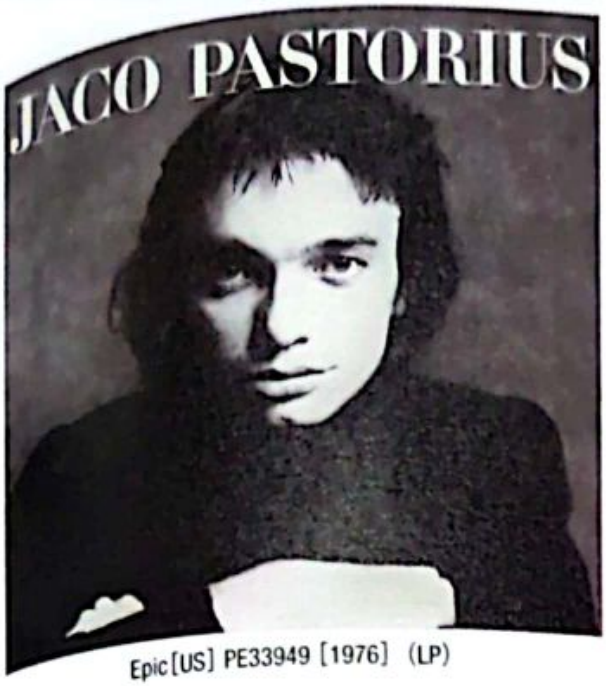
スタッフ
スタッフ!!

ここで今さら持ち出す話じゃないかもしれないけれど、〝フュージョン〟という言葉がどういう音楽を指すのか、演る人、聞く人、語る人それぞれでずいぶんとイメージが違うと思う。そういう意味ではこの人たち、けっこう微妙な立ち位置かも。ウィキペディアとか眺めてみるとたしかに〝ジャズ・フュージョン・バンド〟と定義されてはいるものの、本作が76年にリリースされたとき、少なくともぼくは、腕ききセッションメンによるファンキーかつポップなインスト盤ということで、ブッカー・T&ジ・MGズの70年代版という感じで受け止めたものだ。そう。R&Bインスト。もちろんジャズ側からの視点で言えば、たとえばキャノンボール・アダレイとかホレス・シルヴァーとかドナルド・バードとか、〝R&Bインストとしてのジャズ〟的な人気者たちもいて。そのあたりとブッカー・Tとの真ん中くらいにこの人たち、スタッフが存在していたのだろう。

シンプルでアコースティックな音像の下での活動が中心だったシンガー・ソングライターたちが、70年代半ば、こぞってより洗練されたサウンドを採り入れるようになったことで、そうした音像を編み上げるうえで大きな役割を果たしたバック・ミュージシャンたちに注目が集まるようになり、日本でも輸入盤屋さん周辺でちょっとしたセッション・ミュージシャン・ブームが巻き起こったことがあったけれど。そんなブームを牽引した顔ぶれ、ゴードン・エドワーズ(ベース)、リチャード・ティー(キーボード)、エリック・ゲイル(ギター)、コーネル・デュプリー(ギター)、クリス・パーカー(ドラム)、スティーヴ・ガッド(ドラム)が組んだスーパーグループによるファースト・アルバムが本作だ。プロデュースはトミー・リピューマとハーブ・ロヴェル。ゴスペル・ソウルのJ・C・ホワイト・シンガーズ、ソウル・ジャズ系のレオン・トーマス、ポップR&Bのザ・ドリフターズらのカヴァーも含め、どの曲もソウルフルであると同時に、とことんキャッチー。ポップ。各メンバーのソロもジャジーにスケール・アウトするようなことはいっさいなく、ブルージーに、ゴスペル・ライクに、きわめて明瞭なフレーズとグルーヴを聞き手に届けてくれる。スタジオ・ミュージシャン・ブームが顕著だった日本で特に高く評価された印象も。日本のセッション・ミュージシャンたちに与えた影響も大きい。という意味ではシティ・ポップの礎、みたいな?

(萩原)

CamScannerでスキャン



Epic[US] PE33949 [1976] (LP)

7位

Jaco Pastorius
Jaco Pastorius

ジャコ・パストリアス
ジャコ・パストリアスの世界

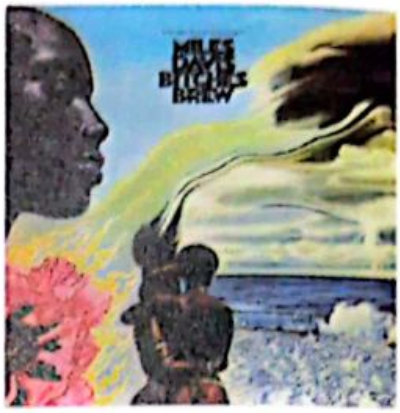
“ここ50年間に登場した最大の音楽的アイコンのひとり”ジャコ・パストリアス、24歳の公式デビュー作。ブラッド・スウェット&ティアーズのドラマー、ボビー・コロンビーがプロデュースを務めている。ツアー先のフロリダ州で女性を口説いたところ“私の夫は世界一のベーシストなの。ぜひ聴いてみて”と勧められ、それじゃと“夫”の実演に接したところ仰天。“すごい天才がいる”とばかりに、NYにオフィスのあるエピック・レコーズの重役陣に伝えたことが本作の制作へとつながった。ヴェテランのポール・ブレイ（アネット・ピーコックとはすでに離婚していたが、電気鍵盤楽器への探求は続いていた）や夜明け前のパット・メセニーともセッションに興じたことがあるとはいえ、75年当時のジャコは、たとえば同年のベース奏者スタンリー・クラークとは天と地ほどのネーム・ヴァリューだったはず。コロンビー（＝エピック）は、無名同然の新人のセッションにサム&デイヴ、ハービー・ハンコック、ウェイン・ショーター、ヒューバート・ロウズなど大物を招き、しかもホーンやストリングス群も導入したのである。なんという大冒険、果敢な先行投資か。メンバーの何割が以前からジャコの存在を認識し、あるいは共演経験があったか私は知らない。だがこの若手ベーシストは彼らを鼓舞し、途方もなく生き生きした“本気の演唱”を引き出した。

作品づくりにおいてコロンビーが考えたのは、ジャコのあらゆる面を収めることだったという。ジャズの古典「ドナ・リー」を打楽器とのデュオで演奏し、ノンストップでソウル・ミュージックの「カム・オン、カム・オーヴァー」へ。メロディ・メイカーの才とフレットレス・ベース（ジャコ自ら加工・調整）の音色の妙味が味わえる「コンティニューム」があると思えば、無伴奏の「ポートレイト・オブ・トレイシー」では技巧の極みというべきハーモニクス奏法を用いつつ、きわめて抒情的なアプローチを行なう。前代未聞といいたくなる独創的なベース・ラインや見事な音程（なんといってもフレットレスなのだ）に聴き惚れるうち、ラストに登場するのはジャコ流交響楽というべき「忘れ去られた愛」。ここには一切ベースが登場しない。ちなみにジャコは76年1月にウェザー・リポートの録音に参加、4月から正式メンバーとなった。彼がその一員にならず、すぐさま自身のバンドを組み主役として本作の多彩な音楽性を世に問うていたら、ジャズ／フュージョン界の地図はどうなっていただろう。（原田）

CamScannerでスキャン

8位 Miles Davis Bitches Brew

マイルス・デイビス
ビッチェズ・ブリュー



Columbia[US] GP26
[1970]（2LP）

フュージョンはジャズとロックや電子楽器の融合という端的な説明がなされることもあり、それも決して間違いではないと思うのであるが、同時にジャズとエスニック・ミュージックとの本格的邂逅（特にアフリカ的土着音楽への回帰）という側面が音楽面では強かったように思う。なるほど確かに音楽的な追求の帰結として民俗音楽に到るのは自然な流れではあるが、極度に高次元な構成での融合は、その誕生から50年以上経過した現在でもフュージョンの他に類を見ないと思う。そしてその音楽の誕生にぜひとも数えたいのが70年のこの作品である。

反復されて離れてまた着地するモチーフ、不協和音の轟音、土を踏みしめるようなリズムの連続。優秀なセッション・メンバーで奏でられるこの組曲はほとんど主旋律を持たないが、なぜか耳に残る。つまり極めて〝ポップ〟である。なお、このアルバムは六つの楽曲で構成されているが、筆者は二つの楽曲としてずっと聴いていた。そのような聴き方は珍しくないと思う。（エブリデ）

9位 Shakatak Night Birds

シャカタク
ナイト・バーズ

Polydor[UK]POLS1059
[1982]（LP）

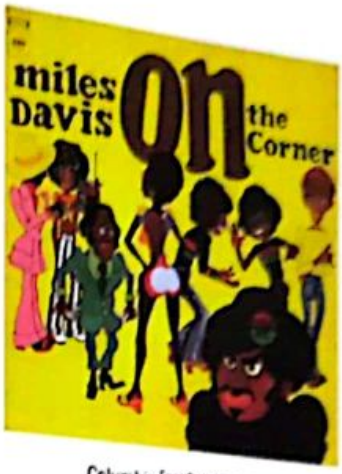
フュージョンにおいて、ジャズと他ジャンルの融合ということ以外に重要な要素があるとすれば、〝難解で高尚な音楽〟となっていたジャズのポップス化だ。その観点で考えれば、イギリスのフュージョン・バンド、シャカタクの代表作であるこの『ナイト・バーズ』は、最もポップスに近づいたフュージョンの一つといえるだろう。アドリブ性をほぼなくし、メロディを聞かせることを重視したアンサンブルは、つねにキャッチーで煌びやか。大々的にフィーチャーされたコーラスも、ポップスとしての完成度を高めている。

また本作は、近年再び盛り上がりつつある、ブリット・ファンクの文脈からも（再）評価されるべき作品だ。レヴェル42なども活躍したそのシーンでは、バンドの生演奏とDJが入り混じるイヴェントが多かったという。そう思って聞くと本作は一貫して、バンドならではの生々しくダンサブルなグルーヴを志向している。ビートの荒々しさに、当時の彼らの勢いが溢れ出ている。（高橋）

CamScannerでスキャン

マイルス・デイビス
イン・ザ・コーナー

Miles Davis On The Corner 10位



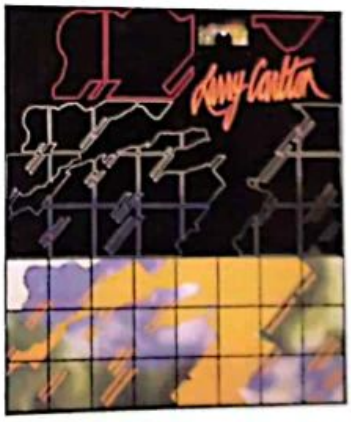
Columbia [US] KC31906
[1972] (LP)

ニュー・ロックの要素を加えた『イン・ア・サイレント・ウェイ』と『ビッチェズ・ブリュー』によってジャズのファン層拡大に成功したマイルス・デイヴィスだったが、逆に黒人リスナーからはそっぽを向かれることに。それへの対策と自身の新たな関心のためにスライ&ザ・ファミリー・ストーン等のファンクから着想を得たのが72年録音の『オン・ザ・コーナー』だった。

もっとも、上記の観点だけなら前年発表の『ジャック・ジョンソン』も十分にファンキーな秀作である。本作をさらなる不朽の名盤ならしめ、後の世代をしてヒップホップやエレクトロニカの先駆けと評させた要因は、その着想をより豊かなサウンドへと昇華させるためにカールハインツ・シュトックハウゼンの電子音楽やテープ・コラージュの手法、オーネット・コールマンやイギリス生まれの作編曲家ポール・バックマスターの音楽理論、インド音楽等の要素を合わせて取り入れ独自のグルーヴを編み出したことにある。（松井）

ラリー・カールトン
夜の彷徨

Larry Carlton Larry Carlton 11位



Warner Bros. [US] BSK3221
[1978] (LP)

68年に二十歳でリリースしたデビュー作のほうが老成して見える。73年のセカンドは内省的なシンガー・ソングライター的だ。だが、数々のスタジオ・セッション仕事やクルセイダーズへの加入を経て、3度目のソロ・キャリアのスタートとなる本作で、ついにリスナーの心をとらえるスター性を獲得したのだから音楽は面白い。ある意味、フュージョンという流行が彼の若さを解き放った。ロック・ギタリストのような長髪で、難解なジャズ・スケールを嬉々として弾きまくるこの時期の勇姿は、日本ではギター小僧たちにとっての憧れのアイコンとなり、本作はチャートでもロングランした。

代表曲"Room 335"は、愛器ギブソンES・335をタイトルにしている。曲を聴けばすぐにわかるが、スティーリー・ダン"Peg"のリフが下敷き。同曲のギター・オーディションでは彼のソロは不採用に終わったものの、許可を得て楽曲の骨組みを借用し自分の代表曲にした。そんなフットワークの軽さにも好感を覚える。（松永）

CamScannerでスキャン

ーヴァー・ワシントンJr.
ンライト

Grover Washington Jr. Winelight 12位

Elektra[US]6E305
[1980] (LP)

クワイエット・ストームなんていう言葉があったが、まさに静かなる嵐を思わせる洗練を極めたサウンドが聴けるスムーズ・ジャズの先駆け。そういうとなんだか無味乾燥なサウンドをイメージするかもしれないが、卓越したプレイヤーがスタイリッシュなイメージに向かって構築していった極上の音楽である。有名なJust The Two Of Usにおけるビル・ウィザースの歌の素晴らしさはもはや説明不要だろうが、アルバム・タイトル曲やIn The Name Of Loveといったインスト・ナンバーもメロウでアーバンな雰囲気たっぷりで耳に優しく響く。

メンバーには、共同プロデューサーのラルフ・マクドナルドを筆頭に、リチャード・ティー、エリック・ゲイル、マーカス・ミラー、スティーヴ・ガッドなどの精鋭が集結。個々の精緻なプレイをじっくり堪能するのもいいが、この心地好さはBGMとして聴くのが正しい味わい方。

ル・ドゥープリー
ーネル・ドゥープリー、このフ
ーな男に何が起ったか?

Cornell Dupree Teasin' 13位

Atlantic[US]SD7311
[1974] (LP)

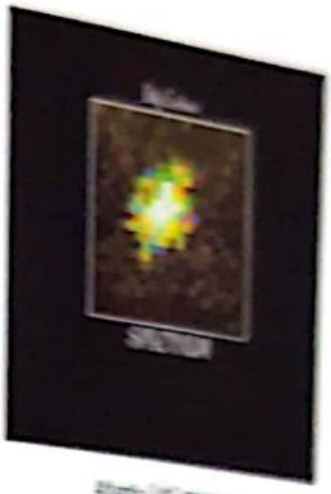
60年代の初期から活動する名セッション・ギタリスト。ブルースやR&Bをルーツとしながらも様々なスタイルに対応できて、名手でありながら要らなければ弾かないという潔さも持ち合わせた、まさに職人。

この時、既に重鎮でありながら、74年になってようやくリリースされた初のソロ・アルバムは、クロスオーヴァーが幕を開けようとしていた時代に、ルーツから最新スタイルまでを詰め込んだ、この人らしい何でもありのインスト作品となった。タイトル曲Teasin'のように、R&B的なプレイ・スタイルを洗練された曲調の中に馴染ませるのが実に上手く、この2年後にデビューするスタッフでもプレイされたエリック・ゲイル作Slow Love Will It Last?でも、同様の小粋なセンスが聴ける。プロ・キャリアの始点となったキング・カーティスのカヴァーや、ゲイトマウス・ブラウンのジャンプ・ナンバーOne

CamScannerでスキャン

ビリー・コブハム
スペクトル

Billy Cobham Spectrum 18 ㎡



Atlantic [US] [SD7299]
[1973] LP

筆者がビリー・コブハムのドラムを本格的に意識した契機は二つ。ミックスCDの金字塔とされるフランソワ・ケヴォーキアンの"Essential Mix"に、彼のドラム・ソロがフィーチャーされていたこと。そして、ビリーがマイルス・デイヴィス『ビッチェズ・ブリュー』に貢献していたことだ。『スペクトラム』でビリーは、のちにディープ・パープルに加入するトミー・ボーリン（g）、マハヴィシュヌ・オーケストラでもビリーと同期だったヤン・ハマー（kbd）と組み、暴風と雷と豪雨が同時に吹き荒れるような、苛烈なサウンドを展開する。

高揚感溢れるジャズ・ロックを軸に、むせかえるような熱気に満ちた本作は、脂っこくて暑苦しいほどのテンションがいい意味での魅力となっている。蛸足の異名を取るビリーのツー・バスも全開で、ドラムの吸引力に圧倒される。なお、このグループは、75年にジョージ・デューク、ジョン・スコフィールドなどを迎えてリリースを続けたが、70年代末には活動を停止した。（土佐）

リー・リトナー&ジェントル・ソウツ
ジェントル・ソウツ

Lee Ritenour & His Gentle Thoughts Gentle Thougths 19 ㎡

JVC [ビクター] [JDC]
[1977] LP

リー・リトナーの名前が一躍クローズアップされ始めたのがこの時期。1970年前後から推し進められてきたジャズ界におけるクロスオーヴァーの流れにおいて、この時期にブームを牽引していたのがギタリスト人気だったことも追い風となった。スタジオ・ミュージシャンとしての仕事の数々や、76年と77年に既に発表していた2枚のソロ・アルバムにおける正確無比なプレイで注目を集めていた彼は、ここで若手ナンバー・ワン・ギタリストの座を決定的にした。そして素晴らしい選曲とアレンジ、凄腕ミュージシャンの演奏による本作はフュージョン・アルバムの金字塔として今も親しまれている。

ダイレクト・ディスクとは音質優先の考え方から発想された、LP片面を一発録りし同時にカッティングまで行なってしまう本作の録音方法。編集やダビングができないので、高度な集中力と演奏力が要求される。プレス枚数の制約があるためセカンド・プレスは"テイク2"がリリースされており、聴き比べるのも一興。（近藤）

20位 The Brecker Brothers Heavy Metal Be-Bop

ブレッカー・ブラザーズ
ヘビー・メタル・ビイ・バップ

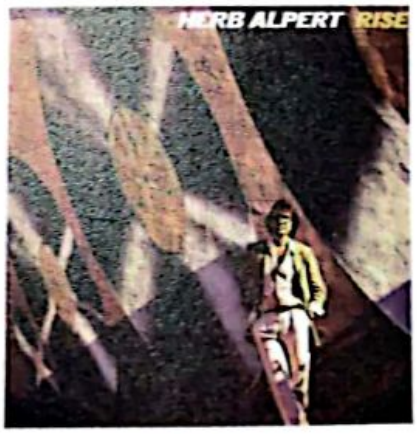
Arista[US]AB4185
[1978] (LP)

ポップス界でも数々の名盤に参加してきた売れっ子セッションマン、ランディとマイケルのブレッカー兄弟。75年にブレッカー・ブラザーズ名義で初アルバムを発表以降はフュージョン界の立役者としても大活躍した。前3作のドラムはハーヴィー・メイソン、クリス・パーカー、スティーヴ・ガッドというビッグ3だったが、本作ではかつてフランク・ザッパのライヴで共演したテリー・ボジオを起用。表題通りのロック味を獲得してみせた。

なんといっても1曲目のインパクトに尽きる。歌とコーラスをフィーチャーしたこの曲のみスタジオ録音だが、トリッキーなイントロといいポップなメロディといい終始吠えまくるホーンの迫力といい、ライヴ感満点。時代の寵児、ボブ・クリアマウンテンの音作りもアクセル全開の傑作ジャズ・ファンクだ。2曲目以降はニューヨーク郊外のクラブでのスリリングなライヴ録音。ジャズ、ロック、ファンク、R&Bを奔放に行き来する楽曲の完成度に初期3部作から急成長した凄みを感じる。(能地)

21位 Herb Alpert Rise

ハーブ・アルパート
ライズ



A&M[US]SP4790
[1979] (LP)

A&Mレコードの創設者であり、60年代にはハーブ・アルパート&ザ・ティファナ・ブラスとしてヒットを連発していた彼であるが、ソロ・ミュージシャンとしての活動を模索していた70年代も終わろうとしていた79年に発表した本作は、アルバムが全米6位、アルバムに先行してリリースされたシングル「ライズ」が全米1位をマーク。さらにグラミー賞受賞という大ヒットとなった。

当時、四十代半ばの彼が、爽やかでカジュアルなファッションに身を包み、16ビートに乗ってフュージョン・シーンに参入。それがまたカッコ良かったのだ。

当時、旬だったディスコ・ビートを採り入れたアルバム・タイトル曲「ライズ」の伸びやかなトランペットが奏でる哀愁のメロディは文句なしに万人にウケ、実際にディスコでもヘビロテされていた。アルバムとしてもA面をオリジナル、B面をカヴァーで固めた選曲が親しみやすい。イージー・リスニング寄りのポップなサウンドが、より多くのリスナーを巻き込んだ快作。(近藤)

CamScannerでスキャン

Pat Metheny Group
Still Life (Talking) | 22位

パット・メセニー・グループ
スティル・ライフ

Geffen[US]GHS24145
[1987]（LP）

人間は誰だって多面体だ。メセニーは律儀にそれを音楽化して差し出す。ルー・リード『メタル・マシン・ミュージック』へのアンサー音響にも感じられる『ゼロ・トレランス・フォー・サイレンス』（94年）には背筋がヒヤリとしたが、一方で優しく音で語りかけるのも彼だ。なかでも"行ったことのない、だが確実にどこか懐かしい場所に連れ出してくれる"軸もしさ、"歌謡性が溢れ出る旋律"、"多様な楽器の音色"、"世界のリズムが手をつなぎあっているような躍動感"という点においては、パット・メセニー・グループ名義の、しかもワートレス男声ヴォーカルを導入した80年代半ば以降の作品が胸に迫る。本作は87年度グラミー賞最優秀ジャズ・フュージョン・パフォーマンスにも輝いた、メセニーの表通りのセンターをゆく一枚。「ミニヌワノ（68）」や「ラスト・トレイン・ホーム」を耳にすれば心に刻まれること間違いなし。ブラジル（ミナス）音楽からの触発を考えつつ浸るのも一興だろう。

（原田）

Weather Report
8:30 | 23位

ウェザーリポート
8:30（エイト・サーティー）

ARC/Columbia[US]PC2-36030
[1979]（2LP）

一人か二人のリーダーを立て、サイドメンを数人集めた短期間セッションでアルバムを録音することが多いジャズ界にも、そうした一期一会的なセッションとは一線を画すパーマネントな人気グループがいる。ジャズテット、ジャズ・メッセンジャーズ、MJQあたりが50、60年代の代表例だとすれば、70年代の代表格がウェザー・リポートだ。不動のメンバーはジョー・ザヴィヌル（キーボード）とウェイン・ショーター（サックス）だけだが、76年にジャコ・パストリアス（ベース）を迎えてからの彼らは、まじ無敵モードだった。

特に、この3人にピーター・アースキン（ドラム）を加えた編成によるライヴ音源を中心として、一部にスタジオ録音も交えて構成された本作は最強。ミステリアスなものからファンキーなものまで、ザヴィヌル／ショーターが内包するあらゆる要素が炸裂している。ジミ・ヘンドリクスから映画音楽まで自在に引用したパストリアスのベース・ソロ「スラング」も圧倒的だ。

（萩原）

CamScannerでスキャン

24位 The Tony Williams Lifetime Emergency!

トニー・ウィリアムス・ライフタイム
イマージェンシイ

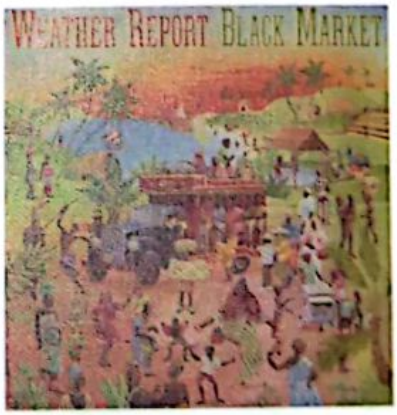
Polydor[US]25-3001
[1969]（2LP）

次作"Turn It Over"の裏ジャケにある"Play It Loud, Play It Very Very Loud"の文字がトニー・ウィリアムスの本バンドにおけるコンセプトを最も的確に表わしている。桁違いの瞬間風速を送り出すスピード感とパワーが持ち味のトニーを中心に、オルガン奏者としては珍しくモーダルでコズミックなコルトレーンイズムを感じさせるラリー・ヤング、そしてジャズ・ロックのパイオニア的存在ジョン・マクラフリンからなる、ジャズ史上最もラウドなレコードが本作。ジミ・ヘンドリクスやクリームといった長尺のインプロヴィゼイションを得意とする同世代のロックのサウンドを、古典的なソウル・ジャズ・バンドの編成であるオルガン・トリオに置き換えた。

代表曲"Emergency"は、けたたましい4コードのテーマ、コズミックな高速スウィング、テンポを落として浮遊するモーダルなパートをジェットコースターのように行き来する。録音テープの許容量を超え歪んだシンバルの音が、当時の現場の熱気をリアルに伝えている。（岡田）

25位 Weather Report Black Market

ウェザー・リポート
ブラック・マーケット



Columbia[US]PC34099
[1976]（LP）

私を含め多くのフュージョン・ファンが"好きな音しか出てこないアルバム！"と言い得るウェザー・リポートの76年作品。好きすぎて完コピしたという猛者の話もよく聞く。それは耳馴染んだ懐かしい過去の音楽のようでもあり、また、聴いたことのない遠く未来の音楽のようでもある。したがって、音楽的には完璧である。コンセプトが明示されているわけではないが、笛のようなサックスやシンセのリフ、力強いリズムでアフリカ大陸のサウンドを、あくまでも自然に展開している。

そして、これも触れずにおられない。ベースは半分以上の曲で前作に引き続きアルフォンソ・ジョンソンが演奏しており、ジャコ・パストリアスは、A面2曲目の「キャノン・ボール」および自作B面3曲目「バーバリー・コースト」で秀逸なベース・プレイを手がけている。ところで余談を申し上げると、私が親から引き継いで所有している本作のLPはブートレグなのだが、なんだかそれが妙によくて買い直す気にはなれずにいる。（エブリデ）

CamScannerでスキャン

Azymuth
Águia Não Come Mosca
26位

アジムス
涼風

Atlantic [Brazil] BR20.021
[1977] (LP)

アジムスのセカンドにして、アトランティック・レコードからの世界発売が実現した、いわゆる出世作。日本でも、ラジオ番組「クロスオーバー・イレブン」のテーマ曲'Vôo Sobre O Horizonte'の初演版（ラジオに採用されたのは79年版）収録という耳馴染みもある。ブラジル音楽からの影響を大量に摂取したアメリカのクロスオーヴァーがブラジルに還流して、特異点として進化し、新たな洗練を獲得したという意味で、個人的には本作に勝る〝フュージョン〟はない。ほぼ3人のアンサンブルで、音の隙間を味方にして作り出したグルーヴは、ファンク中心で音を詰め込んできた時流に対する密かなゲームチェンジャーでもあった。今ならブレインストーリーを好む耳にもフィットするだろう。（松永）

Return To Forever
Romantic Warrior
27位

リターン・トゥ・フォーエバー
浪漫の騎士

Columbia [US] PC34076
[1976] (LP)

ラテン・テイスト溢れるヴォーカルとバーカッション、透明感を湛えた電気ピアノが鮮烈な印象の初期を経て、ハードなギターと多彩なシンセサイザーの音色を特徴とするフュージョンに舵を切ったリターン・トゥ・フォーエヴァーは、チック・コリア、アル・ディ・メオラ、スタンリー・クラーク、レニー・ホワイトのラインアップで黄金期を迎えた。本作はその4人で制作されたアルバムのラストにして代表作。プレイヤー全員が驚くべきテクニックの持ち主であることは演奏が始まった直後からすぐに理解できるが、それがちっとも鼻につかないのはすべてのパートが楽曲の構成要素としてこれ以上ないくらい美しく収まっているためだ。躍動感と繊細さが矛盾なく共存する名盤。（松井）

Ramsey Lewis
Sun Goddess
28位

ラムゼイ・ルイス
太陽の女神

Columbia [US] KC33194
[1974] (LP)

全米ヒット・シングルを持つジャズマンというのはそう多くないが、この人はとてつもない。65年に全米5位にランクした「ジ・イン・クラウド」を筆頭に、70年代にかけて20曲近くをポップ・チャートに送り込んでいる。そんな人気ぶりが改めて炸裂した一枚がこの74年作品だ。かつてトリオのドラムを担当していたモーリス・ホワイトほかアース・ウインド&ファイアのメンバーが多数参加。その後、サンプリング・ネタとして重宝されることになるリズム・ブレイクやギター・リフ、そして、何よりもルイスの奏でるメロウ&ファンキーなエレクトリック・ピアノなどが心地よく全編に溢れる。全米ジャズ・アルバム、およびR&Bアルバム両チャートで1位。表題曲もダンス・チャート5位！（新保）

CamScannerでスキャン

29位 The Brecker Brothers / The Brecker Brothers

ブレッカー・ブラザース
ブレッカー・ブラザース

Arista[US]AL4037
[1975] (LP)

元ドリームスのマイケル・ブレッカー（ts）とランディ・ブレッカー（tp、flh）が、デイヴィッド・サンボーン（as）を加えた3管編成でデモ・テープを制作。それを聴いたアリスタ・レコードが興味を持ち、ドリームス時代の盟友であるウィル・リー（b）やボブ・マン（g）などの協力を得て本作が制作された。3管によるホーン・アンサンブルとタイトなリズム隊によるグルーヴ。他ジャンルとの融合が目立っていたフュージョンに、ジャズならではのテクニックを持ち込み、本作の登場をきっかけに腕に自信のあるミュージシャンがフュージョンを演奏するようになった。「サム・スカンク・ファンク」と「スポンジ」は、『ヘヴィ・メタル・ビ・バップ』でも選曲され、彼らの代表曲に。（ガモウ）

30位 Bobbi Humphrey / Blacks And Blues

ボビー・ハンフリー
ブラックス&ブルース

Blue Note[US]BN-LA142G
[1973] (LP)

ミニマルなグルーヴ、メロウでスタイリッシュなコード感、そして、ここぞの場面で印象的に使われるコズミックなシンセ。マイゼル兄弟のプロデュース・チーム〝スカイ・ハイ・プロダクション〟による、フュージョン時代におけるブルー・ノート・サウンドのイメージを決定づけたレア・グルーヴ／ジャズ・ファンク名盤である。ボビーの囁くような歌声に導かれるメロウ・チューン〝Just A Love Child〟は、ジャンルの枠を越えて今なお愛される大名曲となっている。ニュー・ソウル調のタイトル曲は、エリック・B&ラキム〝Keep The Beat〟、マッドリブ〝Stepping Into Tomorrow〟などでも使用されたネタ。人気のサンプリング・ソースは、次世代のリスナーの耳を引く音楽という証でもある。（岡田）

31位 Donald Byrd / Black Byrd

ドナルド・バード
ブラック・バード

Blue Note[US]BN-LA047F
[1973] (LP)

50年代からハード・バッパーとして鳴らしてきたバードが、大胆にジャズ・ファンクへ移行した記念碑的作品。フォンス&ラリー・マイゼル兄弟が創設したスカイ・ハイ・プロダクション初作でもあり、当時はジャズ・ファンから酷評された。それでも歴代ブルー・ノート作品のトップ・セールスを記録するなどリスナーから広い支持を獲得。ジャズの既成概念を破壊する原動力となった。デイヴィッド・T・ウォーカーやチャック・レイニー、ジョー・サンプル、ハーヴィー・メイスンらが構築する黒いファンク・グルーヴに、キレ味鋭いバードのトランペットが鮮やか。ボビー・ハンフリーに代表されるスカイ・ハイ後続作や数あるジャズ・ファンク名盤も、本作が開拓した道を辿っただけかも。（金澤）

CamScannerでスキャン

マイルス・デイビス
ゲット・アップ・ウィズ・イット

Miles Davis Get Up With It 32位

Columbia [US] KG33236
[1974] (2LP)

一体全体、この熱さ、冷たさ、粘り、滑らかさ、明るさ、暗さはどういうわけなのか。背反的要素のいびつな同居と相克。70〜74年の間に行なわれたスタジオ・セッションをまとめたものだが、数あるアウトテイク集とは異なり、不思議な統一感がある。ブライアン・イーノに影響を与えたことでも知られる'He Loved Him Madly'も、確かに静謐ながら、霊的な緊張感が漂う。ロック、ファンク、ラテン、現代音楽。数多の音楽要素が、マイルスの巨大な眼鏡を通じて他に似たもののないサウンドへと昇華される。その手さばきの特異さは、徐々に柔和化していく同時代のフュージョンの流れと比べてみれば一目瞭然だ。全編にわたり、マイルスの音楽観のエッジが特に強烈に表出した傑作といえる。（柴崎）

エウミール・デオダート
ツァラトゥストラはかく語りき

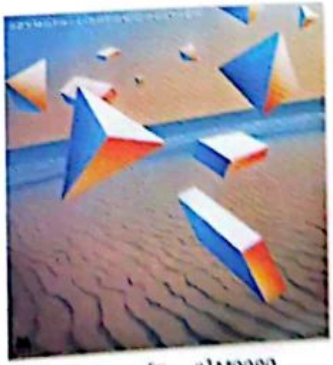
Eumir Deodato Prelude 33位

CTI [US] CTI6021S1
[1973] (LP)

イタリア系ブラジル人の作・編曲家で鍵盤奏者でもあるエウミール・デオダートが、クリード・テイラー率いるCTIレーベルから放ったヒット作。邦題の『ツァラトゥストラはかく語りき』はシングルになった曲のタイトルで、リヒャルト・シュトラウスのドラマティックな交響曲を、ファンキーなリズムと優美なストリングスが印象的な曲にアレンジ。日本では当初イージー・リスニング的な文脈で受容されていたようで、FMラジオでポール・モーリアなどと一緒にオンエアされていたと記憶しているが、後になって振り返ればフュージョンの先駆け的な作品だったのだ。洗練された演奏を聴かせるのは、スタンリー・クラーク（b）やビリー・コブハム（ds）をはじめとする豪華な面々である。（立川）

アジムス
ライト・アズ・ア・フェザー

Azymuth Light As A Feather 34位



Milestone [Brazil] M9089
[1979] (LP)

日本で最も有名なブラジルのバンドの一つ、アジムス。それは70年代当時に人気FM番組「クロスオーバー・イレブン」のテーマ曲に'Fly Over The Horizon'が使われたことも理由の一つ。かつて60年代に米国のジャズを経由してボサノヴァの世界的ブームが巻き起こったように、フュージョンはコンテンポラリーなブラジル音楽とお互いに影響を与え合っていた。じつはアジムスのこの曲は2ヴァージョンが存在し、上記番組でも両方が使われていた。77年の『涼風』に収録されたヴァージョンはアコギによるコードのつまびきがボッサ的な心地よさを演出しており、素朴な味わい。一方、79年のこのヴァージョンはシンセによる圧倒的な空間の広がりとそこに佇む涼しげなエレピの響きが印象的。（近藤）

CamScannerでスキャン

35位 Azimuth / Azimuth

アジムス
アジムス

Som Livre [Brazil] 410.6003
[1975] (LP)

ブラジリアン・フュージョンを代表する3人組のデビュー作。レア・グルーヴの定番として知られる一枚だ。アジムスはエリス・レジーナやジョルジ・ベンの録音に参加していたスタジオ・ミュージシャンによって結成されたグループで、マルコス・ヴァーリの代表作"Previsão Do Tempo"のバッキングを務めたのはデビュー前の彼らだ。何よりジョゼ・ホベルト・ベルトラミの鍵盤が冴えている。エレピ、クラヴィネット、シンセのレイヤーは、ときにメロウ、ときにユーモラスだ。加えてアレックス・マリェイロスとイヴァン・コンチのリズム隊から繰り出される粘っこくて人肌程度に温いグルーヴも腰に響く。アメリカ産のジャズ・ファンクのグルーヴをブラジリアン・マナーでメロウに昇華した一枚。(鳥居)

36位 Herbie Hancock / Sunlight

ハービー・ハンコック
サンライト

Columbia [US] JC34907
[1978] (LP)

本企画はインスト作品を選ぶのが原則なのでルール違反かもしれないが、御大が使うヴォコーダーは楽器扱いでもいいかなと勝手に判断。それくらい歌モノのイメージとは一線を画しており、『ヘッド・ハンターズ』から始まったクロスオーヴァー路線のひとつの到達点と言える作品である。ジャズ、ファンク、ソウルなどを絶妙にブレンドし、クールで無機質さを装いながらもプレイ自体は熱を持っている。やはり、笠井紀美子もカヴァーした"I Thought It Was You"のポップな高揚感は飛び抜けて素晴らしく、"Sunlight"や"No Means Yes"のグルーヴも捨てがたい。ジャコ・パストリアス、トニー・ウィリアムス、ワーワー・ワトソンなどを楽曲によって使い分けた采配ぶりも聴きどころ。(栗本)

37位 Lonnie Liston Smith & The Cosmic Echoes / Expansions

ロニー・リストン・スミス
越境

Flying Dutchman [US] BDL1-0934
[1975] (LP)

萌芽は、サックス奏者ファラオ・サンダースの傑作"Thembi"(71年)にあった。そこで浮遊感あるエレクトリック・ピアノを弾いていたロニー・リストン・スミスが、やはり参加メンバーであったセシル・マクビーらと組んだ人気盤。楽想は一段とソフト&キャッチーになり、マクビーの爪弾くコントラバスもほどよい電気増幅が加わってロング・トーンが粘っこく伸びる。先日、彼に話をきいたら、エレクトリック・ベース的にも聞こえる表題曲のプレイに関して"多くのポピュラー音楽に影響を与え、のちのヒップホップへとつながった最初のベース・ラインだ"と言われることも多々あるそうだ。ロニ・サイズがサンプリングした「シャドウズ」もマクビーの強靭なラインあってこそ。(原田)

CamScannerでスキャン

クルセーダーズ
南から来た十字軍

The Crusaders
Those Southern Knights

38位

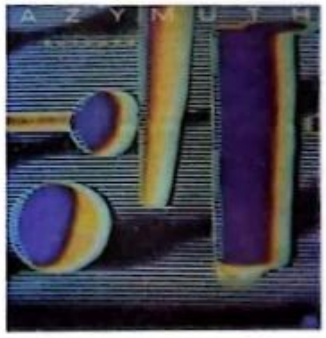
Blue Thumb/ABC [US] BTSD6024
[1976] (LP)

1972年にブルー・サムに移籍して7枚目のアルバムで、『南から来た十字軍』の邦題でリリース。本作からは、ザ・ラスカルズのロバート"ポップ"ポップウェル(b)が参加。オリジナル・メンバーの4人に、ポップウェルとラリー・カールトン(g)という最強ラインナップとなった。冒頭の「スパイラル」からメンバーのコンビネイションは抜群で、後半にはポップウェルの強力ベース・ソロもフィーチャー。「キープ・ザット・セイム・オールド・フィーリング」ではヴォーカルも担当した。そんな彼に触発されたかのように、ほかのメンバーも強力なプレイを聴かせてくれたが、本作を最後にバンド・リーダーだったウェイン・ヘンダーソン(tb)が脱退。唯一の編成の作品となった。(ガモウ)

アジムス
ディア・プレリュード

Azymuth
Outubro

39位



Milestone [Brazil] 504.7154
[1980] (LP)

アジムスのベストを一枚選べといわれると悩ましいが、モンド的なイージー・リスニングから抜け出して独自のフュージョンとしての方向性を決定づけた意味では、このアルバムを選んで間違いないと思う。シンセサイザーやヴォコーダーを用いた未来的でどこか可愛げのあるサウンド、イヴァン・コンチによる土着的リズムの探究など、近年の作品まで続く"型"の発見がこの作品で見られる。このアルバムのハイライトはなんと言っても、ベースのアレックス・マリェイロス作曲のB面3曲目"Un Amigo"だろう。ベース・ラインが際立つアジムスの作品の中で彼の楽曲は多くないが、そのキッチュでリズムがユニークなプロダクションは脳味噌を鷲掴みにする中毒性と多幸感に満ちている。(エブリデ)

ジョイス・クーリング
キャメオ

Joyce Cooling
Cameo

40位

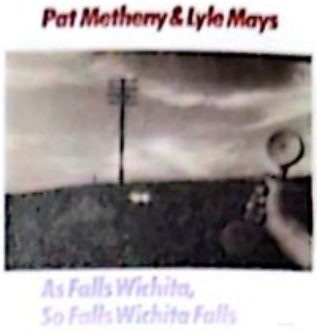
Nucleus [US] NJ441
[1988] (LP)

サンフランシスコ出身の女性ギタリストの、19歳の時のデビュー作。本国よりも日本で何度も再発されてきた人気作で、昨年はアナログでも発売された。その理由は、1曲目に収録された"It's You"がジャズ・ボッサのキラー・チューンとしてDJの間で定番となっているから。デビュー前のジョイスは、同じく西海岸をベースに活動する、"Skindo-Le-Le"で有名なヴィヴァ・ブラジルにゲスト的に参加。それをきっかけに、このアルバムはヴィヴァ・ブラジルのメンバーが全面的にバックアップすることになり、ブラジリアン・ジャズなテイストで覆われた、クールで洗練された仕上がりとなった。中でもキーボードのジェイ・ワグナーとは、この後、長きにわたって活動を共にすることになる。(池上)

CamScannerでスキャン

41位 Pat Metheny & Lyle Mays / As Falls Wichita, So Falls Wichita Falls

パット・メセニー&ライル・メイズ
アメリカン・ドリーム



ECM[US]ECM1-1190
[1981] (LP)

ポップなフュージョン作は数多くあれど、ポップでありながら高尚なまでの音楽的深遠さを表現したのは、パット・メセニー・グループをおいて他にないだろう。その方向性を決定づけたパット・メセニー、その後も長きにわたりグループを支え続けた鍵盤奏者、ライル・メイズ、そして、ブラジル音楽の至宝と呼ばれる打楽器奏者、ナナ・ヴァスコンセロスによるトリオ作。どの曲も演奏の透明感や浮遊感が素晴らしいが、特に、20分を超える1曲目の表題曲は必聴。ギターや様々なシンセ、打楽器、リズム・マシン、フィールド・レコーディングまで使用した多層的な音像は、現代のアンビエント／ニューエイジやエクスペリメンタル作とも引けをとらない、心地よくも刺激的なものとなっている。（高橋）

42位 Pat Metheny Group / Offramp

パット・メセニー・グループ
愛のカフェ・オーレ

ECM[US]ECM1-1216
[1982] (LP)

フュージョンという言葉で括るのは憚られる唯一無二の音世界。パット・メセニーが初めてローランドのギター・シンセサイザーG・303を使用したアルバムであり、商業的にも成功を収めた代表作である。なかでも"Are You Going With Me?"における反復するリズムと浮遊感に満ちたメロディのアンサンブルは極上で、ライヴでも重要なレパートリーになっている。本作の鍵は、当然ライル・メイズの音空間設計であるが、同時にブラジル人パーカッショニストのナナ・ヴァスコンセロスが醸し出すプリミティヴなエッセンスも大きな特徴のひとつだ。オーネット・コールマンに捧げた"Offramp"とジェイムズ・テイラーからヒントを得たという"James"が同居しているのも彼らならでは。（栗本）

43位 Jon Hassell / Power Spot

ジョン・ハッセル
パワー・スポット

ECM[US]ECM1327
[1986] (LP)

"第四世界"というコンセプトで知られるトランペット奏者ジョン・ハッセルが、名門ECMからリリースした作品。西洋音楽と非西洋音楽がモダン・テクノロジーの拡張の中で並列化していく時代の空気、つまりワールド・ミュージック・ブームの気配と共振しながら先鋭的な表現を行なった同作は、狭義のフュージョンにカテゴライズするにはあまりに多面的だ。反復する民俗的ビートと、躍動するシンセサイザー、極度に音声変調されたトランペット、そして、アンビエント的な音像…。これは、いうなれば"未来のフュージョン"である。ここで開陳されるサウンドは、同時代のシーン以上に、むしろ現代のアンビエント・ジャズへと一直線に繋がっているようだ。近年の再評価も当然というべき。（柴崎）

CamScannerでスキャン

44位 Jaco Pastorius Word Of Mouth

ジャコ・パストリアス
ワード・オブ・マウス

Warner Bros.[US]BSK3535
[1981] (LP)

ジャコがウェザー・リポートを脱退した時期に発表された、2枚目のソロ作。「半音階的幻想曲」や「ブラックバード」でのベースもさることながら、ここではジャコの作・編曲の才能が理想的な形で表出されている。ウェザーの『ナイト・パッセージ』にも提供した「スリー・ヴューズ・オブ・ア・シークレット」は、オーケストラとトゥーツ・シールマンスのハーモニカが参加したスケールの大きなサウンドで演奏され、カリビアンなテイストを持つ「リバティ・シティ」はビッグ・バンド仕様で、トゥーツとオセロ・モリノー(スティールパン)、そしてハービー・ハンコックのピアノ・ソロがフィーチャーされている。この2曲は、この後始動したビッグ・バンドの主要レパートリーとなった。(村井)

45位 Blue Montreux (Arista All-Stars) Blue Montreux

ブルー・モントルー
ブルー・モントルー

Arista[US]AB4224
[1979] (LP)

ヴィブラフォン奏者マイク・マイニエリの『ラヴ・ブレイ』(77年)でのセッションをベースに、エディ・ゴメス、トニー・レヴィン、スティーヴ・ジョーダン、ラリー・コリエル、スティーヴ・カーン、ウォーレン・バーンハート、ランディ&マイケル・ブレッカー…という当代最強のセッションマンが勢揃いして超絶にジャムった、モントルー・ジャズ・フェスティヴァルのライヴ録音。新たな音楽ジャンルを啓蒙するショウケースにして最高傑作となった作品という意味でも、あえてレーベル名を冠した名義も含め、ジャンルは異なるもののサルサにおけるファニア・オールスターズの『ライヴ・アット・チーター』を想起せずにはいられない。同年、同じライヴの未収録曲を集めた続編も出た。(能地)

46位 Mahavishnu Orchestra Birds Of Fire

マハビシュヌ・オーケストラ(ジョン・マクラグリン)
火の鳥

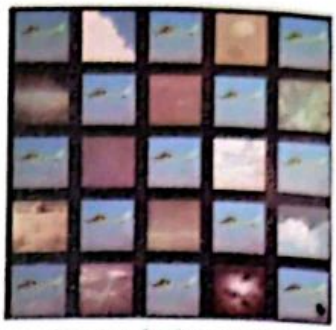
Columbia[US]KC31996
[1973] (LP)

『ビッチェズ・ブリュー』に自身の名がついた曲まであるギタリストが、マイルス・デイヴィスの強い勧めにより結成したグループ。ここに挙げたのはヤン・ハマーやビリー・コブハムを擁する第1期ラインナップの2作目(最終作)だ。インド思想に基づくスピリチュアルなコンセプトをヘヴィでスケールの大きな演奏で具体化するアイデアは1作目とも共通するが、名義から"フィーチャリング・ジョン・マクラフリン"が外された本作の方が参加メンバー全員の存在感がバランスよく示され、バンドとしての成熟度は高い。収録曲の一つを「マイルス・ビヨンド」と名付けたのは尊敬ゆえの対抗意識か。テクニカル・フュージョン、インスト派ロックのどちらにも多大な影響を与えた。(松井)

CamScannerでスキャン

47位 Donald Byrd / Places And Spaces

ドナルド・バード
プレイシス・アンド・スペイシス



Blue Note[US]BN-LA549G
[1975] (LP)

ドナルド・バードとマイゼル兄弟のコラボレーションから生まれ、70年代ブルー・ノート最大のロングセラーとなったのは初作"Black Byrd"(73年)だが、全米R&B2位のシングル・ヒット"Change (Makes You Want To Hustle)"を送り出したのはこちら。ジャズ・ファンクからディスコへ、という時流をうまくつかみ結果を出した。さらに、本作の人気はレア・グルーヴ的な文脈でも再生した。ラリー・マイゼルのディレクションによるふわふわしたヴォーカル&コーラスの多用が最大の特徴だが、70年代モータウンとの交流やMPBへの意識から生まれたライトで繊細なサウンドは、今なお示唆に富む。クロスオーヴァーという態度の目標を、白熱ではなく高く飛ぶことに変えた革新的な傑作。(松永)

48位 Jeff Beck / Wired

ジェフ・ベック
ワイアード

Epic[UK]EPC86012
[1976] (LP)

前作のフュージョン/クロスオーヴァー路線をさらに研ぎ澄ました作品だ。当時、ベックがマハヴィシュヌ・オーケストラに夢中だったことから、ヤン・ハマーとナラダ・マイケル・ウォルデンに召集がかかった。ベックはプロデューサーのジョージ・マーティンにリファレンスとしてグレアム・セントラル・ステイションを聴かせたそうだ。たしかにこのアルバムには異形のファンクといった趣がある。キメに次ぐキメで構成される"Led Boots"は、"誇張しすぎたジャズ・ファンク"とでもいうような特異なアレンジだ。崩壊ギリギリのアンサンブルを高度な技術でつなぎとめているかのような演奏がスリリング。ウォルデンのドラムが炸裂している。分離が良くなければ成立しないサウンドだ。(鳥居)

49位 The Chuck Rainey Coalition / The Chuck Rainey Coalition

チャック・レイニー
ブラック・ファンクの原点

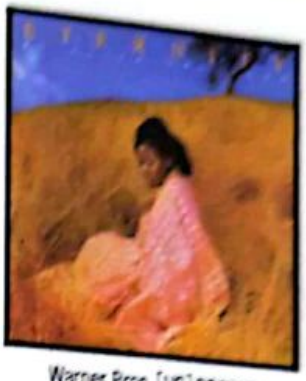
Skye[US]SK1008D
[1970] (LP)

69年に録音され、それまでのジャズとロックから70年代フュージョン音楽への橋渡しの瞬間を捉えた最重要盤。スタッフの半分、リチャード・ティー、コーネル・デュプリー、エリック・ゲイルが重要な役割を果たし、スタッフの代表曲「ハウ・ロング・ウィル・イット・ラスト」がここで開帳となっているため、予言的な盤となった。壮麗なストリングスと深いエコーは60年代イージー・リスニング的だが、今聴くと、それが妖しくて心躍る。それらの底に大蛇のように蠢くチャックのベース。それは新しい発想で人間ばなれしたグルーヴ。裏ビートに満ちたフレーズ、華麗なピッキング・ハーモニクス等、フュージョン・ベースの手本となるテクニックが、すでにしっかり録音されている。(サエキ)

CamScannerでスキャン

アリス・コルトレーン
永遠なる愛

Alice Coltrane Eternity 50位



Warner Bros.[US]BS2916
[1976] (LP)

この10年での中古盤市場におけるアリス・コルトレーンのレコードの価格の値上がり具合から、新しい世代からの絶大な支持が見て取れる。本作は彼女の作品カタログの中でも、フリー色は薄くソフトでグルーヴィーな印象を受ける。お馴染みアリス印のオルガンが印象的なジャズ・ファンク"Los Caballos"がやはり目玉曲だが、今聴き直すなら、静謐なハープを中心とした"Wisdom Eye"、自然の息吹を感じさせるスピリチュアル・ジャズ"Morning Worship"にも耳を向けたい。ナラ・シネフロ、ブランディー・ヤンガーなど、後進への絶大な影響を感じさせるアンビエント・トラック。現行のロサンゼルスやUKのジャズメンたちがフェイヴァリットに挙げることも多いのもうなずける。(岡田)

ウェザー・リポート
ウェイン・ショーター=ジョー・ザヴィヌル

Weather Report Weather Report 51位

Columbia[US]KC30661
[1971] (LP)

アンビエント・ジャズ・クラシックとしての再注目を浴びるマイルス・デイヴィスIII A Silent Way"の作者ジョー・ザヴィヌルが、その同時期に結成したウェザー・リポートのファースト・アルバム。冒頭トラックの"Milky Way"は、目隠しして聴かされたらブライアン・イーノ以降のアンビエントを聴いているような錯覚に陥るオーパーツ的な楽曲。シンセ・パッドのように聞こえる浮遊した和音は、ミュージック・コンクレート的なテープ操作でアタック音が消えるように編集されたピアノのようにも感じられる。ポストバップに電子音が混ざり合う"Seven Arrow"、爽やかなアンビエント的息吹を感じさせる"Morning Lake"など、今、聴きたい楽曲が目白押しとなっている。(岡田)

ボブ・ジェームス
はげ山の一夜

Bob James One 52位

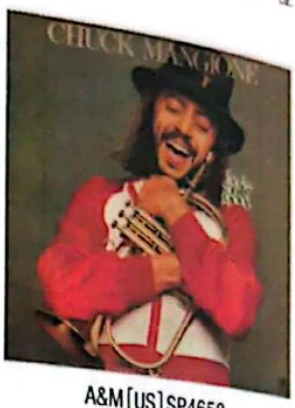
CTI[US]CTI6043
[1974] (LP)

フォープレイ(90年発足)以降は、小編成のバンドで味わい深いアコースティック・ピアノを弾く人、というイメージが強いはずだが、それ以前のボブ・ジェイムズはガンガン管楽器を鳴らし、ストリングスを爆裂させる書法を持つ大編成向きの作編曲家にして、自身も強靭な打鍵を行なうキーボード奏者であった。サンプリング率が圧倒的に高いのも70~80年代の作品であるはずだ。若きボブの血気ほとばしりぶりを見事に伝える一枚が、フュージョン路線での初リーダー・アルバムとなる本盤(それまでの自己名義の作品は現代音楽寄り)。ムソルグスキー作「はげ山の一夜」における満艦飾ぶりに唸ったり、「ノーティラス」におけるドラマティックな展開に酩酊していただきたい。(原田)

CamScannerでスキャン

ーネ

Chuck Mangione Feels So Good 53位



A&M[US]SP4658
[1977] (LP)

60年代にはアート・ブレイキー&ザ・ジャズ・メッセンジャーズに参加するなど、本格派のトランペッターとして活躍していたチャック・マンジョーネ。60年代後半にはフリューゲルホルンに持ち替え、ラテン色を取り入れるなど柔軟なサウンドに変化。A&Mでの4作目となる本アルバムのタイトル・トラックは、テンション・コードや分数コードを極力排除したポピュラリティ溢れたサウンドながら、グラント・ガイスマン（g）のワウを通したカッティングや美意識を感じさせるソロなど、ジャズ的な聴きどころも同居。アルバムは米『ビルボード』で最高第2

Fruitcake Fruitcake 54位

ビクター VIJ6401
[1983] (LP)

シャカタクが人気を博していた80年代の初期、アイスランドのメゾフォルテと同様にユーロ・フュージョンの一派として一躍注目されたのが、オランダのフルーツケーキ。後にバンドはベニー・バン（kbd）と口ブ・タキエマ（g）のユニットへと移行するが、このデビュー・アルバムでは4人編成のバンドだった。いわゆるフュージョンだけでなくAORやブラコンの影響下にあるサウンドは、とにかくクリーンでクリア。キャッチーなメロディとシンプルなアレンジ、軽快で明るい作風、しかもテクニックを誇示することもないニュートラルな感覚。それが功を奏したか

Al Di Meola Elegant Gypsy 55位

Columbia[US]PC34461
[1977] (LP)

アル・ディ・メオラにとって、リターン・トゥ・フォーエヴァーから独立し本格的にソロとなって初のアルバム。本作には、これ以降、レギュラーで組むことになるヤン・ハマー（kbd）も加わり、メンツとしてはまさにスーパーグループ。複雑なメロディや超速弾きギター・ソロなど、高度な技術で演奏された本作は、地中海志向によるスパニッシュな旋律がフュージョン界に新しい機軸を作り上げただけでなく、当時のロックやジャズのギタリストたちへも大きな影響を与えた。また、後にスーパー・ギター・トリオを組むことになるパコ・デ・ルシアもゲスト参加。

CamScannerでスキャン

スティーブ・ティベッツ
セイフ・ジャーニー

Steve Tibbetts Safe Journey 56位

ECM[US]1-25002
[1984] (LP)

これほどまでに〝ECMの風景〟が表現されたアルバムはないと思っている、スティーヴ・ティベッツ、84年の作品。ティベッツはそのいでたちやギター・プレイからメタル畑出身かと思っていたが、どうもブルースやサイケデリック・ロックを音楽的な出自とするようだ。高い山の朝や霧の草原を思わせるテープ・エフェクトを用いて生み出された神秘的な雰囲気にカリンバやスティール・ドラムを使ったエキゾチックなフュージョン・サウンドは、近年のアンビエント・リスナーも魅了するところだと思う。ベースにはボブ・ヒューズと、パーカッションに同窓のマーク・アンダーソンが控える。入浴後の夏の夜涼みにごくごく小さな音でじっくりと聴き入り自律神経を整えるのに使いたい作品。（エブリデイ）

パット・メセニー・グループ
ファースト・サークル

Pat Metheny Group First Circle 57位

ECM[US]ECM1-25008
[1984] (LP)

パット・メセニーとライル・メイズという稀有な才能にスティーヴ・ロドビー、ポール・ワーティコ、ペドロ・アズナールを加えた5人を核とするアルバムは、メセニーが理想とするパット・メセニー・グループとしての世界観をどれも究極にまで高めている。通算4作目となる本作は、その出発点。ポップさと複雑さのバランスの妙においていずれ甲乙つけがたい同系作のなか、特筆すべき点があるとすれば、冒頭の調子っぱずれな（ただし、それも高度な計算に基づいていたに違いない）マーチング・バンド調と軽快な8ビートの次曲とのコントラストや、変則拍子を起点にしながら突き抜けるような心地よさを同時に湛えたタイトル・トラックなど、振幅の大きさが醸し出す奥行きだろう。（松井）

ハービー・ハンコック
スラスト（突撃）

Herbie Hancock Thrust 58位

Columbia[US]PC32965
[1974] (LP)

現代のジャズ・シーンに最も大きく影響を与えている作品の一つだろう。ロバート・グラスパーやグレッチェン・パーラト、ジュリアス・ロドリゲスなど、近年、多くのアーティストにカヴァーされ、新たなスタンダード曲となっている「アクチュラル・プルーフ」「パタフライ」を収録。作曲・演奏・録音の3拍子が揃ったものがことフュージョンにおいては名盤といわれることが多いが、本作の凄まじさはそのすべてが最高峰でありながら、これ以外にも到達点があることを感じさせるような余白にある。印象的な楽曲と高度な即興性を両立させることで、プレイヤーたちの個性が詰まっており濃密。それと同時に、さまざまな可能性を予期させる。これからも多くの人を刺激し、挑発し続ける名作だ。（高橋）

CamScannerでスキャン

59 The Crusaders
Scratch

クルセイダーズ
スクラッチ

(1974) LP

結成時にはファンキー・ジャズイターズ名乗り、やがて本格的に独自のクロスオーヴァー・スタイルを確立。その後、強烈なグルーヴ感を押し出すクルセイダーズの歩みの定番となる74年に発表された『スクラッチ』はライヴ盤。またウェイン・ヘンダーソン（トロンボーン）、ウィルトン・フェルダー（サックス）との分担による真しいアンサンブルを、ジョー・サンプル（キーボード）の強力なタッチと、スティックス・フーパー（ドラム）の粘っこいビートが支える。スタジオ盤ではフェルダーが兼任することも多かったベースはマックス・ベネット、ギターはラリー・カールトン。ソロも個人技の熱い演奏が演奏と一体となって、聴く者の気分をいっそう煽りまくる。（彩見）

60 Zawinul
Zawinul

ザヴィヌル
ザヴィヌル

Atlantic (US) SD1579
(1971) LP

キャノンボール・アダレイ・クインテット時代の貢献とマイルス・デイヴィスのジャズ革命に影響を与え、作曲家としても重用されたジョー・ザヴィヌル。70年録音のソロ名義作はウェイン・ショーターとミロスラフ・ヴィトウスの他にハービー・ハンコックやトランペットのウッディ・ショウも加えた編成となっている。その音楽は、即興的なソロによって紡がれるアンサンブルという発想や一般にイメージされるジャズとは異なるヴォイシングの導入などを通じて、ウェザー・リポートの原型、あるいはザヴィヌル版『イン・ア・サイレント・ウェイ』+『ビッチェズ・ブリュー』とでもいうべき心地よい緊張感に富んだ仕上がりに。質の高さが歴史的価値をさらに意義あるものにしている。（松井）

61 Airto Moreira
Touching You... Touching Me

アイアート・モレイラ
タッチング・ユー、タッチング・ミー

Warner Bros. (US) BSK3279
(1979) LP

マイルス・デイヴィスに見初められ、リターン・トゥ・フォーエヴァーの初期重要メンバーとして活躍したパーカッション奏者の代表作。タイトなリズムのジャズ・ファンク・チューンもあれば、パートナーであるフローラ・プリムによる縦横無尽のスキャットを大々的にフィーチャーした幻想的なブラジリアン・フュージョンまで、顔ぶれ多彩なナンバーを収録。ジョージ・デューク、アルフォンソ・ジョンソン、ジョー・ファレル、ヒューバート・ロウズなどCTI時代に集った人脈が大挙参加し、この時代のトレンドを上手く取り入れている。比較的楽曲重視ではあるが、「Taba De Cuia」などではヴァラエティに富んだ打楽器のリズムを披露し、プレイヤーとしての才気を感じさせてくれる。（熊本）

CamScannerでスキャン

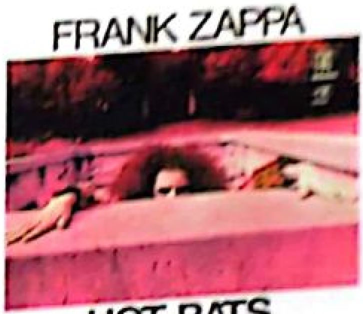
Chick Corea
Mad Hatter
62位

Polydor [US] PD1-6130
[1978]（LP）

チック・コリア
マッド・ハッター

ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』をテーマにしたトータル・アルバムで、チックの作・編曲の質も非常に高い。しかしこの作品の本当にすごいところは、チック〜ジョー・ファレル〜エディ・ゴメス〜スティーヴ・ガッドによるカルテットのテクニカルな演奏、そして「マッド・ハッター・ラプソディ」にゲスト参加したハービー・ハンコックのエレクトリック・ピアノだ。以後、何度も再演されスタンダード化した難曲「ハンプティ・ダンプティ」でのファレルのテナー・サックスは生涯のベスト・プレイだといえるし（サックス・ソロの途中に作品全体のライト・モティーフである「フォーリング・アリス」のメロディが登場する）、ハンコックの出番はエレピ・ソロ[illegible]（[illegible]）

Frank Zappa
Hot Rats
63位



Bizarre/Reprise [US] RS6356
[1969]（LP）

フランク・ザッパ
ホット・ラッツ

何もフュージョンは、ジャズ側からのロックやソウルへの回答のみではない。本作はそういった意味では、ロックからのジャズへの回答といえる。インストを中心とした作品で、各所にソロ・パートも組み込まれるが、ジャズらしいインプロヴィゼイションによるアンサンブルというよりは、構築的に書き上げられたアンサンブルのようだ。緻密なポストプロダクションや装飾的なオーヴァーダブ、実験的なミキシングといった録音物ならではの仕掛けは、やはりロック／ポップス・サイドからのアイデアのように感じられる。ジャズ・ファンク文脈で人気のドラマー：ポール・ハンフリーや、フュージョン・ヴァイオリニストのジャン＝リュック・ポンティら、ちょっと意外なメンツが参加。（[illegible]）

Gong
Gazeuse!
64位

Virgin [UK] V2074
[1976]（LP）

ゴング
ガズーズ

70年代前半にコズミック・ファンタジー的なプログレ作品を連発していたゴングは、バンド創設者のデイヴィッド・アレンが脱退した後、技巧派ドラマーのピエール・ムーランが中心となってジャズ・ロック・バンドへと転身していく。本作は転身後の1作目といえるアルバムで、ギタリストのアラン・ホールズワースが参加。印象に残るのは鉄琴・木琴奏者ミレーユ・ボエのプレイで、打ち込みと聴きまごうような正確無比の高速アルペジオで楽曲を引っ張っていく。彼女の演奏と名手ミノ・シネルのパーカッション、そしてムーランの精緻なドラミングの絡みが絶品だ。プログレが演奏技術を追求し、必然的にフュージョンへと向かうことは多々あるが、[illegible]（[illegible]）

CamScannerでスキャン

65 Hermeto Pascoal Slaves Mass

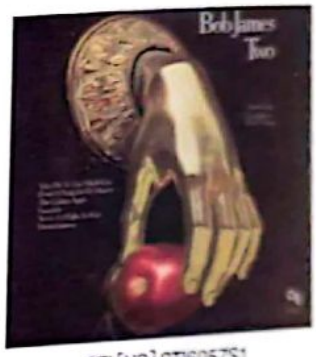
エルメート・パスコアール
スレイヴス・マス

Warner Bros. [Brazil] 36-021
[1977] (LP)

パスコアル関連作で最も秀逸なのはクアルテート・ノーヴォのアルバムだと思う筆者でも、現代音楽とジャズ・ロックとサンバを貫通するような本作には、聴くたびに深い感興を覚える。比較すべき同時代の才能を挙げるなら、マイルス・デイヴィス、フランク・ザッパ、エグベルト・ジスモンチくらいか。豚や鳥の鳴き声から、人間の会話やスピーチまで様々な音を採取し、演奏内に落とし込む手法は唯一無二。いわば、サンプリングやサウンド・コラージュの元祖であり、ミュージック・コンクレートとも響きあう。02年に筆者がパスコアルに取材した際に最も印象的だったのは、ジャングルの奥地で育ったという逸話。無邪気に動物や森の声を聴いて長じたと聞いて納得したものだ。（土佐）

66 Bob James Two

ボブ・ジェームス
ボブ・ジェームス2



CTI [US] CTI6057S1
[1975] (LP)

70年代中盤はCTI、その後は自身で設立したタッパンジー、90年代は新たに結成したフォープレイと、ピアノだけでなく編曲やプロデュース・ワークでも常にフュージョン・シーンの最先端を歩いてきたボブ・ジェイムス。しかしヒップホップ時代の到来以後は、サンプリング・ソースを多く含むCTI初期作が大人気だ。とりわけ本作に収録されたポール・サイモンのカヴァー「夢のマルディ・グラ」は、ランDMCやビースティ・ボーイズを筆頭に、その数すでに400を超えるクラシック・ネタに。でも実際はそれ以前から各種テーマやBGM、ジングル等に頻繁に使用され、フュージョン名曲として広く親しまれていた。ビゼーのアダプト「ファランドール」もお忘れなく。（金澤）

67 The Claus Ogerman Orchestra Gate Of Dreams

クラウス・オガーマン・オーケストラ
夢の窓辺に

Warner Bros. [US] BS3008
[1977] (LP)

坂本龍一が多大な影響を受けたことでも知られる西ドイツ出身の編曲家、クラウス・オガーマン。本作は、自身のオーケストラ名義でリリースした70年代の傑作だ。古くはクリード・テイラーと組んでソフト・サウンディングなジャズ作を数々手掛けてきた彼だが、ここでは、その進化系ともいうべき非常に洗練されたフュージョンを聴かせる。トミー・リピューマがプロデュースを、アル・シュミットがエンジニアリングを手掛け、さらにはジョー・サンプルも参加。同様の布陣で臨んだマイケル・フランクスの名作『スリーピング・ジプシー』にも通じる、完璧なメロウネス〜スムーズネス。クラシックを下敷きにした品格と清涼感に満ちた弦アレンジをたっぷり味わえる。まさに、シルクの如き耳触り。（柴崎）

CamScannerでスキャン

Eberhard Weber
The Colours Of Chloë
68位

エバーハルト・ウェーバー
カラー・オブ・クレー

ECM[Germany]ECM1042
[1974]（LP）

ドイツのベース奏者エバーハルト・ウェーバーがECMから発表した初作。チェロを織り交ぜた室内楽的アンサンブルの中で、ソリッド・ボディのアップライト・ベースから弾き出される特徴的なサウンドが躍動する。ライナー・ブリューニングハウスの操るシンセサイザーのフレーズは、ほぼミニマル・ミュージックのそれであり、テクノ的とすらいえる。もはや、狭義のフュージョンというよりも、のちのポストロックやポストクラシカルに近いと評するのが適切な、あまりにも先駆的な内容だ。けれど、各人の演奏の丁々発止ぶりは、紛れもなくジャズ。その奇跡的なバランス感よ。カンタベリー系にも通じる長尺曲「ノー・モーション・ピクチャー」はプログレ・ファンも絶賛するだろう。（続）

Phillip Upchurch
Darkness, Darkness
69位

フィル・アップチャーチ
ダークネス・ダークネス

Blue Thumb[US]BTS6005
[1972]（2LP）

60年代初頭以降、自身のリード作からセッション・ワークまで幅広く活躍したシカゴ出身の名ギタリスト。同じくシカゴ出身のダニー・ハサウェイの多くの作品に参加する盟友的存在。72年にブルー・サムからリリースされた6枚目のソロ・アルバムは、フュージョンというよりニュー・ソウル的でブルージーなインスト作品だが、少しサイケな混沌が匂うのが初期のブルー・サムらしい。チャック・レイニー、ジョー・サンプル、ハーヴィー・メイソンという後のフュージョンの時代を支える名手たちがバックを支え、レーベル・メイトのベン・シドランも加わってセッションを繰り広げる。10曲入りだが、曲は長めでLPは2枚組。LA録音だが、シカゴ録音の2曲にはダニー・ハサウェイが参加。（池上）

Ornette Coleman
Dancing In Your Head
70位

オーネット・コールマン
ダンシング・イン・ユア・ヘッド

Horizon/A&M[US]SP722
[1977]（LP）

ジャマラディーン・タクマ（b）、バーン・ニックス（g）、チャーリー・エラービー（g）、ロナルド・シャノン・ジャクソン（ds）からなるオーネット・コールマンのエレクトリック・バンド＝プライム・タイムの演奏と、マスター・ミュージシャンズ・オヴ・ジャジューカとの演奏が収められている。ロンドン交響楽団と共演した『スカイズ・オブ・アメリカ』のテーマを参照した「テーマ・フロム・ア・シンフォニー」でのファンク化した演奏は、80年代までオーネットの音楽に共通するものだった。そのハイブリッドなファンクはフリー・ジャズにもフュージョンにも括れないものとして宙に浮いていたが、フュージョンのプロトタイプの一つであり、ポストパンクを準備した音楽だった。（瀬）

CamScannerでスキャン

71. Joe Sample / Rainbow Seeker

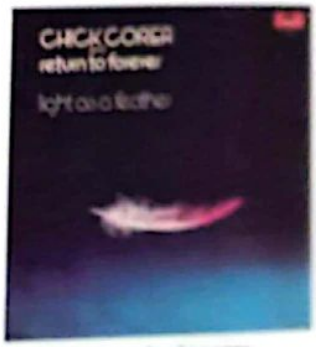
ジョー・サンプル
虹の楽園

ABC [US] AA1050
[1978] (LP)

ザ・クルセイダーズの鍵盤奏者による出世作。ユニットでのファンク路線から一変して叙情性が前面に出た作品、というのが定評だが、現代から聞くとどの曲にもファンクネスが溢れている。むしろファンク〜ソウル的なリズムの快楽と、アコースティック・ピアノで表現されるリリカルなメロディの美しさ、そして、ジャズのプレイヤー性を並立させたことが本作のキモといえる。それは、一方ではよりメロウなスムーズ・ジャズに繋がったのだが、もう一つ重要なのはヒップホップへの影響。アレステッド・ディヴェロップメント、マッド・スキルズ、そして2パックの代表曲の一つ「ディア・ママ」など、本アルバムでのリズミカルかつ抒情的なフレーズはヒップホップの一時代を支えた。（高橋）

72. Chick Corea & Return To Forever / Light As A Feather

チック・コリア&リターン・トウ・フォーエヴァー
ライト・アズ・ア・フェザー



Polydor [US] PD5525
[1973] (LP)

チック・コリアのソロ作"Return To Forever"に参加した面々がそのまま再びスタジオ入り。リターン・トウ・フォーエヴァーというバンドの初アルバムとして改めて世に問うた。登場の衝撃は前作に譲るが、バンドのエネルギーで勝るのはこちらだろう。まさに名曲名演なのpart、そしてフローラ・プリム&アイアート・モレイラ夫妻とコリア、スタンリー・クラークが猛烈なチェイスを繰り広げるCaptain Marvel"は強烈。同時代に強烈な印象を残すマイルス・デイヴィスのRated Xにも並ぶというか、眼前で行なわれている技術と才能の放出という意味で70年代の頂点が記録されている。夫妻が脱退し、メンバー変更後の次作以降は、技術の解放が強調されすぎて別のユニットという認識。（松永）

73. Ornette Coleman & Prime Time / Virgin Beauty

オーネット・コールマン
ヴァージン・ビューティ

Portrait [US] [illegible]
[1988] (LP)

オーネット・コールマンとプライム・タイムが到達した最高の作品は、自身が開拓したフリー・ジャズをファンクへと拡張した"Of Human Feelings"だと思うが、最も売れたのは本作だ。一筋縄ではいかないフレーズ／リズムを内包しつつも、プライム・タイムの演奏するハーモロディック・ファンクはこなれてうまくなればなるほど、普通のファンクに近づいていったのかもしれない。ジェリー・ガルシアをゲストに招き、終始グルーヴィで陽気な祝祭的ムードに包まれている。ここで聴かれる、あっけらかんとすらしているグルーヴは、同時代のマイルス・デイヴィスよりはるかに明るく、ディキシーランド・ジャズに通じるものすら感じさせる。この陽気さにはまだこれから発見される余地がある。（原）

CamScannerでスキャン

クインシー・ジョーンズ
スタッフ・ライク・ザット

Quincy Jones
Sounds... And Stuff Like That!!

74位

A&M [US] SP4685
[1978] (LP)

ハービー・ハンコックの'Tell Me A Bedtime Story'は、ハービーの自演版、笠井紀美子版など素晴らしい解釈が他にもあるが、個人的には本作収録のヴァージョンがトドメを刺す。ハービー自身がエレピで参加して楽曲に必要な甘やかさを加味しているのみならず、まるで器楽奏者のインプロヴィゼーションのように自在に動き回るストリングスのスコアをクインシー・ジョーンズが提供している後半の数分間に圧倒される。アルバム・タイトルは直訳すれば"音…のようなもの"というような意味だが、あえて使った"Stuff"というワードは、本作の演奏の軸を、かのスタッフの面々が担っているというシャレでもあるし、自身の世界を支えるミュージシャンたちへの多大なリスペクトであると思える。（松永）

ロドニー・フランクリン
ロドニー・フランクリン

Rodney Franklin
Rodney Franklin

75位

Columbia [US] JC36747
[1980] (LP)

カリフォルニア州バークレイ出身のピアニスト。小学生の頃からジャズ・ピアノのレッスンを始め、78年に二十歳でソロ・デビュー。セカンド・アルバム"You'll Never Know"（80年）からは、'The Groove'というレア・グルーヴの超定番曲がシングル・ヒットしている。しかし、フュージョンという基準で見た時にはジャズ・ピアノ色が強いセカンドよりも、バンド・サウンド強めでフュージョン的な9th感と、早すぎたスムーズ・ジャズ的なアーバンさが全開となったこのサード・アルバムが上を行く。なんといっても1曲目の'Windy City'が名曲だが、ダンサブルな'I Like The Music Make It Hot'も良い。アルバムの後半にはうっすらとブラジリアン・ジャズ風味も。（池上）

24thストリート・バンド
24thストリート・バンド

The 24th. Street Band
The 24th. Street Band

76位

デノン（コロムビア）YX7547ND
[1979] (LP)

フュージョン・ブームは実力派の演奏家たちによるセッション・バンドをいくつも生み出したが、24丁目バンドもそのうちのひとつ。ニューヨークのバンドだが日本での人気が高く、すべてのアルバム（スタジオ盤2作とライヴ盤1作）が日本制作である。ハイラム・ブロック（g）、クリフォード・カーター（kbd）、スティーヴ・ジョーダン（ds）、ウィル・リー（b）という4人組で、全員がヴォーカルも担当する。フュージョン・マナーに即したテクニカルな演奏だが、それ以上にロック感覚が強く、楽曲も明快でポップ。本作は彼らの1作目だ。なんでもできるプレイヤーがあえて少人数編成でシンプルなロックを演奏する。イギリスに置き換えればポリスあたりかな、などと個人的には思う。（立川）

CamScannerでスキャン

77. Spyro Gyra / Morning Dance

スパイロ・ジャイラ
モーニング・ダンス

[illegible]

ニューヨーク州バッファローでサックス奏者のジェイ・ベッケンスタインとキーボード奏者のジェレミー・ウォールを中心に結成されたスパイロ・ジャイラ。当初はバーバンドとして活動していたが、ホルンのメンバーを含む若手たちとは異なる高い演奏力と、ヴィブラフォンを活かした透明感あふれるサウンドが人気を博し、たちまち人気者に。77年の自主制作盤に続き、ブレッカー兄弟、ウィル・リーらをゲストに迎え制作されたメジャー・アルバムが本作だ。スティール・ドラムのハッピーな響きが印象的なタイトル曲は、超絶テク・ジャズ+ラテン風味、というフュージョン方程式を象徴する一曲となった。全米総合チャートで最高27位。現在まで100万枚以上のセールスを記録している。　（熊谷）

78. Herbie Mann / Memphis Underground

ハービー・マン
メンフィス・アンダーグラウンド

[illegible]

ブルースを抱いた渡り鳥、ことハービー・マンがロイ・エアーズ、ソニー・シャーロック、ラリー・コリエルらを引き連れてメンフィスのアメリカン・サウンド・スタジオでレコーディングしたアルバムだ。バッキングはハウスバンドのメンフィス・ボーイズが務めた。サザン・ソウルを作り上げた職人たちだ。ハイライトはサムとデイヴのカヴァー「Hold On, I'm Comin'」である。メンフィス・ボーイズの土っぽいグルーヴをバックに、マン、エアーズ、コリエル、シャーロックが火花散るソロ合戦を繰り広げる。ちなみにここでベースを弾いているのはウェザー・リポートのミロスラフ・ヴィトウス。一発録りの生々しさが溢れ出している。異種格闘技戦としてのフュージョンを体現する作品だ。（島田）

79. Deodato / Deodato 2

デオダート
デオダート2／ラプソディー・イン・ブルー

[illegible]

ブラジルを代表するキーボード奏者のエウミール・デオダートによるCTIレーベル第2弾。高評価を得た前作「ツァラトゥストラはかく語りき」から半年後のリリースという仕事の早さもさることながら、一曲ごとの演奏力の強靭さとアレンジのクオリティの高さに圧倒される。有名なガーシュインの「Rhapsody In Blue」やラヴェルの「Pavane For A Dead Princess」もいいが、本領発揮しているのは自身が作曲した「Super Strut」と「Skyscrapers」だ。いずれもファンキーなサウンドながらどこか醒めたクールな感覚は[illegible]ることがない。ジョン・トロパイ、スタンリー・クラーク、ビリー・コブハムといったスペシャルなバンド・メンバーのプレイも聴き逃がせない傑作だ。　（坂本）

80. Freddie Hubbard / Red Clay

フレディ・ハバードのCTI移籍第1作で、A&Mから独立したCTIの最初のリリース作品だ。ジョー・ヘンダーソン、ハービー・ハンコック、ロン・カーター、レニー・ホワイトというメンバーが参加。クールでファンキーなジャズといった趣の表題曲は、その後のCTIの路線も方向づけ、さらにはフュージョンの嚆矢となった。アドリブ部分はボビー・ハブがピッピ、と同じコード進行だ。ドラムの演奏はジェイムズ・ブラウンの"Cold Sweat"のビートを模し、ランダムに生成したかのようなパターンとなっている。この表題曲をジョック・ウィルキンスがカヴァーしたものをア・トライブ・コールド・クエストがサンプリングした

CTI [US] CTI6000
[1970] (LP)

81. George Duke / A Brazilian Love Affair

70年代後半に『リーチ・フォー・イット』(77年)などのファンクな部作をリリース。アメリカでは評判だったが、セールスが芳しくなかった日本やヨーロッパでは、まだファンキーな音楽を受け入れる準備ができていないとデュークは感じたという。そんなことから、彼が愛していたブラジル音楽をテーマにした作品を制作することとなった。ローランド・バウティスタ(G)やバイロン・リー・ミラー(B)などのおなじみのミュージシャンに加え、フローラ・プリム(VO)、ミルトン・ナシメント(VO、G)、アイアート・モレイラ(DS)など、ブラジリアン・ミュージシャンが多数参加している。クロスオーヴァーとブラジル音楽を融合したブリリアント・フュージョン

Epic [US] FE36480
[1980] (LP)

82. David Sanborn / Straight To The Heart

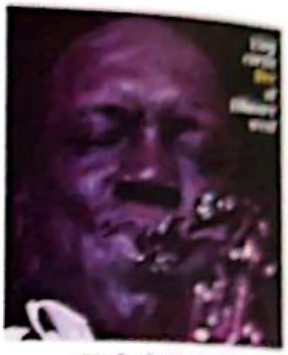
サンボーンはもともとキング・カーティスやハンク・クロフォードといったソウル系サックス奏者の影響を強く受け、ビ・バップはプロになってから学んだという。ソウルフルな肉声っぽい音色とコブシを効かせた歌いっぷりがサンボーンの魅力だが、それを80年代の最新フュージョン・サウンドの上で全面展開したのがこのライヴ盤だ。サウンドの要となっているのはマーカス・ミラーの弾力と切れのあるベースで、マーカスのスラッピングがびしびしとみまりまくるファンク曲「ラン・フォー・カヴァー」の乗りのよさにしびれる。マーカスとよくコンビを組んでいたバディ・ウィリアムスの叩きだすタイトなドラミング、ファン

Warner Bros. [US] W1-25150
[1984] (LP)

CamScannerでスキャン

83位 King Curtis / Live At Fillmore West

キング・カーティス
ライヴ・アット・フィルモア・ウェスト



ATCO [US] SD33-359
[1971] (LP)

冒頭の「メンフィス・ソウル・シチュー」は、世界一かっこいいメンバー紹介だ。ジェリー・ジェモットのベースに始まり、バーナード・パーディの〝ダチーチー〟ドラム、コーネル・デュプリーの軽快なテレキャスター・サウンドと一人ずつ増えていく演奏は、メンフィス・ホーンズがフォルテシモでどばあっと入ってきて最高潮を迎える。71年3月、アリーサ・フランクリンのバック・バンド兼ファースト・アクトとしてフィルモアに出演した腕利き集団の腰の据わったファンクネスが、この一曲に凝縮されているのだ。実際、セットの最後に演奏されたこの曲を頭に置いた編集は大正解。アリーサと彼らの三日分の演奏をすべて収録したボックスもあるが、まずはこれを聴きましょう。（村井）

84位 Herbie Hancock / Mr. Hands

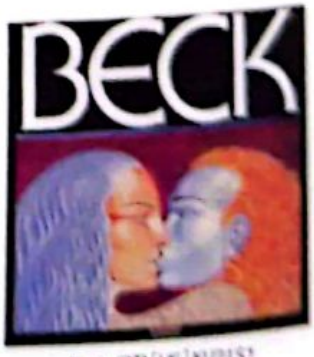
ハービー・ハンコック
ミスター・ハンズ

Columbia [US] JC36578
[1980] (LP)

過去のボツ曲に自身の〝手〟によるキーボードをダビングして仕上げたハービー・ハンコック80年の作品集。セッション・メンバーも楽曲ごとに異なることから、他の作品のようにアルバム全体としての統一感は感じられないが、ハンコック・フリークが一通り辿ったあとに必ず回帰してしまうようなツボを押さえた楽曲が多々。南国趣味も漂うあたり、彼の中でもきっとイージー・リスニング的な位置付けにしたかったのだろうなと思う。B面3曲目〝Textures〟は無条件でハンコックのベスト10に加えたいメロディアスな一曲だが、全パートが自身により演奏されている。シンセサイザーのみのそのグルーヴには、どこか佐藤博『Awakening』を感じる、と思って調べてみると元ネタらしい。（エブリデ）

85位 Joe Beck / Beck

ジョー・ベック
ベック



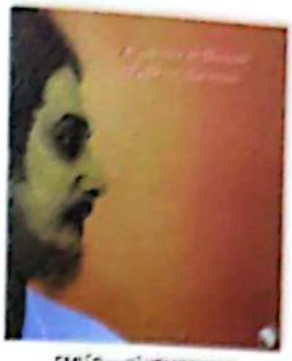
Kudu/CTI [US] KU21S?
[1975] (LP)

マイルス・デイヴィスが電化に向けて試行錯誤を重ねていた67年、ジョー・ベック（g）は彼の録音に2曲参加している。当時、ベックはマイク・マイニエリ（vib）と組み、ジャズ・ロック界を代表する存在であり、マイルスからの招集も納得だ。75年録音の本作では、ベックお得意のブルース・ロックの旨味を凝縮しつつも、いなたくなりすぎず、適度にソフトで洗練されたサウンドが展開される。そこは、CTIというレーベルのカラーを意識した結果だろう。ドン・セベスキーによる弦アレンジも心地よさを倍加させている。ジョーのファズの効いたギターの音色も極上。名手、デイヴィッド・サンボーンとの共演作でもあり、その全身で歌っているようなエモーショナルなプレイは圧巻だ。（土佐）

CamScannerでスキャン

Egberto Gismonti
Academia De Danças
86位

エグベルト・ジスモンチ
未来のシェヘラザード

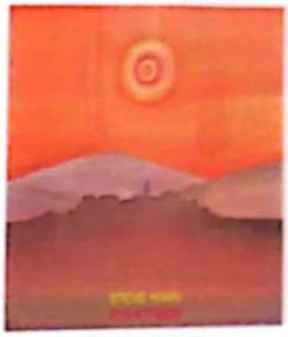


EMI[Brazil]/EMC37008
[1974] (LP)

エグベルト・ジスモンチのEMIオデオン時代の代表作で、ターニング・ポイントとなったアルバム。『アラビアン・ナイト』をモチーフとした組曲になっていて、ストリングスやシンセが大胆に導入され、エレクトリック・ジャズやシンフォニックなプログレッシヴ・ロックを思わせたり、フランク・ザッパや現代音楽を想起させる破天荒な展開もある。MPB的な音作りから離れてエクレクティックなサウンドを目指した本作も、独自のフュージョン作品といえるだろう。74年当時の欧米の音楽と比べても、壮大で手の込んだアレンジ、テクニカルで美しい演奏は類を見ない。ECMに移ってからの洗練された作品とは対照的に、ジスモンチはポップ・カルチャーの中にも可能性を見出していた。(原)

Steve Khan
Eyewitness
87位

スティーブ・カーン
目撃者

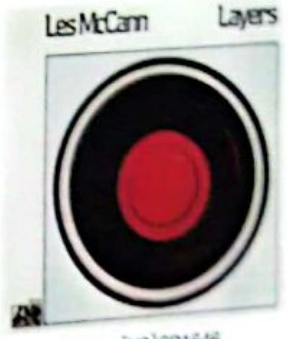


トリオ AW25010
[1981] (LP)

きわめて構築的な音楽だ。しかし、わかりやすいキメもドラマもない。淡々としているのだが、一つ一つの音が緊密に絡み合って、モザイクのような音世界が組み上げられているのだ。数多くのセッションに参加している米国人ジャズ・ギタリスト、スティーヴ・カーンのリーダー・アルバムで、参加メンバーは、アンソニー・ジャクソン(b)、スティーヴ・ジョーダン(ds)、マノロ・バドレーナ(per)。全員の演奏力がきわめて高いが、なかでも私が聴き惚れてしまうのは、アンソニーのベース・プレイ。キーボードレスの編成だが、彼とカーンとが作る計算されたような音の重なりによって、浮遊感と空間的広がりが生まれている。クールで知的なフュージョンを好む人に、ぜひ薦めたい一枚だ。(立川)

Les McCann
Layers
88位

レス・マッキャン
レイヤーズ



Atlantic[US]SD1646
[1973] (LP)

当時の意識的なニュー・ソウル系アーティストたちとの活発な交流に刺激を受けたレス・マッキャンが、73年に編み上げたメロウでソウルフルでスペイシーな音世界。ジミー・ラウザーのベースとラルフ・マクドナルドらのパーカッションをバックに、フェンダー・ローズ・ピアノ、ARPシンセサイザー、クラヴィネットなどをひとりで駆使し、自らの頭の中に渦巻くオーケストレイションを具現化してみせた。ジャズの分野で、ここまで本格的にシンセサイザーをフィーチャーしたアルバムは本作が初だとも言われている。が、ARPの音色はホーンのようでもありストリングスのようでもあり、人の歌声のようでもあり。全編きわめてヒューマンな感触に貫かれている点が最大の魅力か。(野崎)

CamScannerでスキャン

ブラウン
ラヴ・アプローチ

Tom Browne
Love Approach | 89位

GRP/Arista [US] GRP5008
[1980] (LP)

ニューヨーク、クイーンズ出身のトランペット奏者のセカンド・アルバム。1曲目に収録された代表曲の"Funkin' For Jamaica"は『ビルボード』のR&Bチャートで3週連続1位となり、現在もダンス・クラシックの基本中の基本で、サンプリング・ソースとしても知られる名曲(91年のドライザボーンによるリミックスもいい)。GRPからデビューしたものの、作品を重ねるごとにR&B色を強めていったこともあってか、フュージョン方面から顧みられることは多くない印象だが、この頃は高度に洗練されたアーバンなサウンドでニューヨーク的なムード満載。アレンジャーにウェルドン・アーヴィンやこの翌年にソロ・デビューするリセット・ウィルソンが参加しているところも注目。

(池上)

ロイ・エアーズ・ユビキティ
エヴリバディ・ラヴズ・ザ・サンシャイン

Roy Ayers Ubiquity
Everybody Loves The Sunshine | 90位

Polydor [US] PD1-6070
[1976] (LP)

ジャズのみならず、ヒップホップやDJシーンからも愛されるヴィブラフォン奏者による、自身のバンドを率いて制作された代表作。美しく澄んだ音色からメロウな楽曲で使用されることが多かったジャズ・ヴィブラフォンをファンクやソウルと融合させた第一人者であり、本作ではその一つの完成系ともいえるサウンドを聞くことができる。そしてもう一つの聴きどころは、ライヴ感から離れて録音物としての作品性を高める重層的なアレンジだ。ポップスやソウルの影響がみえるコーラス/ホーン、印象的なシンセ使いは、スタジオ・ワークによって音楽性を拡張していったこの時代のジャズ/フュージョンの魅力を感じさせる。全曲フェイド・アウトなのも、ある意味で録音作品ならでは。

(高橋)

セクション
セクション登場

The Section
The Section | 91位

Warner Bros. [US] BS2661
[1972] (LP)

73年初頭に来日したジェイムズ・テイラーのフロントで行なわれたザ・セクションのステージにはノックアウトされた。ジャズのイディオムとは違う、ロック的な構築のインストゥルメンタルなのだが、その稼働の流麗さがジャズそのものなのである。各楽器が平等に展開に関与し、狙うエクスタシーに予定調和を感じない。ジャム・セッションの新しい姿を提示したと思えたバンドの魅力を封じ込めたのがこの盤である。ベースのリーランド・スクラーの途方もないテクニックのランニングに、奔放で無邪気なダニー・コーチマーのギターが絡んだ瞬間が最大の快感だ。細野晴臣のキャラメル・ママのお手本になったともいえる西海岸のカルテット。そのアンサン

92位 Gabor Szabo High Contrast

ガボール・ザボ
ハイ・コントラスト

Blue Thumb[US]BTS28
[1971] (LP)

ハンガリーに生まれ、60年代半ばからインパルスやスカイで作品を重ねていた個性派ギタリストが、トミー・リピューマ制作下で作ったブルー・サムでの2作目。ラウンジ・スタイルでポップス・カヴァーを演る一方、サンタナに影響を与えたりインド音楽とも交流してきたが、ここでは積極的にオリジナル曲に取り組み、ギターで参加のボビー・ウーマックが4曲提供。そこに後年、ジョージ・ベンソンで有名になる「ブリージン」があった。さらにベースでフィル・アップチャーチが参加。この後、ザボもCTI入りするなど、リピューマが本作をプロトタイプにしてベンソンの76年作に臨んだのは間違いない。一緒にスカイを設立したゲイリー・マクファーランド同様、

93位 The Chick Corea Elektric Band The Chick Corea Elektric Band

ザ・チック・コリア・エレクトリック・バンド
ザ・チック・コリア・エレクトリック・バンド

GRP[US]GRP-A1026
[1986] (LP)

発足メンバーはチック・コリア(kbd)、ジョン・パティトゥッチ(b)、デイヴ・ウェックル(ds)。彼らはまた〝チック・コリア・アコースティック・バンド〟の構成員でもあった。片方では最先端の機材を使ってプログレッシヴなオリジナル曲を連発、もう片方では古典的なジャズ・ピアノ・トリオのフォーマットをとってスタンダード・ナンバーまじりのプログラムを組む3人の〝スキゾぶり〟は疑いなく80年代後半のジャズ界の大きな話題であり刺激であった。いまとなっては〝どちらも彼らの自然な表現意欲の発露〟というところに落ち着くのだろうが…。トリオとエクスペリメントを並行して率いるロバート・グラスパーの心のふるさとのひとつはこのあたりなのでは、と

94位 Joe Zawinul Di-A-Lects

ジョー・ザビヌル
ダイアレクツ

Columbia[US]FC40081
[1986] (LP)

ウェザー・リポート解散となった86年にリリースされたジョー・ザヴィヌルのソロは、シンセサイザーとリズムマシンを使った、プログラミングされたエレクトロニック・ミュージックだった。のちにザヴィヌル・シンジケートで展開されるワールド・フュージョンのプロトタイプのようなサウンドでもある。テクノやハウスを通過した今の耳で聴くと、リズム・トラックがけっして単調なループではなく、起伏に富み、ザヴィヌルの演奏が様々に関与していることが分かる。表面的にはジャズ的なサウンドは聞こえてこないが、ジャズ・ミュージシャンでないと作れない、複雑で細かいフレージング、リズミカルなコンピングがある。本作がベッドルーム・プロデューサー

CamScannerでスキャン

95位 David Sanborn Hideaway

デイヴィッド・サンボーン
ハイダウェイ

Warner Bros.[US]BSK3079
[1980] (LP)

むせび泣くアルト・サックス。おまけに俳優ばりの甘いマスク。当時、アイドル的存在でもあったデイヴィッド・サンボーンの5作目だ。彼の名声を決定づけた「サタデー・ナイト・ライヴ」のハウス・バンドに参加した年にリリースされた作品だけあって、番組でのイメージの延長線上にあるアーバンでリラックスした一枚として大いに売れた。週末は都会を抜け出してリッチな別荘地へ…という当時のヤッピー文化を絵に描いたような、日本で言えばわたせせいぞう的世界観が今や少々気恥ずかしい。とはいえ、もともとブルース・バンド出身だけあって、洒落た音像の隙間にちらつく絶妙な泥臭さが何ともセクシー。スティーヴ・ガッド、デイヴィッド・スピノザら名手も着実なサポートを聴かせる。（能地）

96位 Return To Forever featuring Chick Corea Where Have I Known You Before

チック・コリア&リターン・トゥ・フォーエヴァー
銀河の輝映

Polydor[US]PD6509
[1974] (LP)

エレクトリック化した前作から遡み、フュージョン的構築を完成させた瞬間の輝きを封じ込めた珠玉作品。アヴァンギャルドな16ビート感覚に満ちた各曲のテーマでは、バカテクの四人が一丸となっている。その後、息もつかせず、競い合うように各人のソロがツバぜりあう。怒涛のオカズ回しのレニー・ホワイト、想像力に満ちたチョッパー・ベースのスタンリー・クラーク、音色最高のエレクトリック・ピアノ、シンセをあやつるチック・コリア、アル・ディ・メオラのギターは若手のタッチが鋭しすぎる。電気楽器の魅力を極限まで提示したような優美さ。激しさの中に、地平線の静寂を感じさせる。凛とした精神性はこの盤の最大の魅力であり『銀河の輝映』という邦題はなかなかに秀逸。（サエキ）

97位 The New Tony Williams Lifetime Believe It

ニュー・トニー・ウィリアムス・ライフタイム
ニュー・トニー・ウィリアムス・ライフタイム

Columbia[US]PC33609
[1975] (LP)

トニー・ウィリアムスが69年にデビューさせたライフタイムは、ジョン・マクラフリンやジャック・ブルースら大物が去来したものの、メンバー交代が多く試行錯誤感が強かった。しかし75年結成のニュー・ライフタイムでは、アラン・ホールズワースのギターをフィーチャー。モータウンのセッションマンだったトニー・ニュートン(b)、後にサンタナに加入するアラン・パスクァ(kbd)ら若手を起用し、才気迸るジャズ・ロックを聴かせる。ホールズワースのファンは、同時期のソフト・マシーン『収束』やゴング『シャマル』と同等に扱うべき作品。ロックに憧れていたトニー自身にとっても、次作『ミリオン・ダラー・レッグス』と共に大いに溜飲を下げた作品だったのでは？（金澤）

CamScannerでスキャン

98. Full Moon / Full Moon

Douglas [US] KZ31964
[1972] [LP]

99. Tom Scott / L.A. Express

Ode [US] SP77021
[1974] [LP]

100. Deodato / Love Island

Warner Bros. [US] BSK3132
[1978] [LP]

CamScannerでスキャン

ジャンルとしてのフュージョン、現象としてのフュージョン

70年代以降にジャンルを跨いで起こった歴史的変化を振り返る

文＝村井康司

クロスオーヴァーからフュージョンへ

この〝フュージョン・ベスト100 洋楽編〟には、1969年から1989年までに発表されたアルバムが全100タイトル選ばれている。その執筆依頼メールを読んだとき、〝んー、69年からでフュージョンねえ…〟という違和感を感じたことをまず言っておこう。

マイルス・デイヴィス『イン・ア・サイレント・ウェイ』（69年2月録音、7月リリース）あたりを起点として、それからの20年間にリリースされた〝ジャズ×他ジャンルの音楽〟を対象とする、というのが編集部の意図なのだろうが、わたしの思っている〝ジャンルとしてのフュージョン・ミュージック〟は、76年にリリースされたジョージ・ベンソンの『ブリージン』あたりが最初、なのだった。これはリアルタイムで〝フュージョン〟という言葉を聞いたのが70年代末だった、という体験のせいなのだろう。

ジャズにソウル・ミュージックやロック、ブラジル音楽、あるいはクラシックなどの要素をブレンドして、その多くに電気楽器を使って演奏される音楽ジャンルは、70年代半ばに〝クロスオーヴァー〟という名称で紹介されるようになった。それまで、エレクトリック・マイルスやウェザー・リポート、チック・コリアの『リターン・トゥ・フォーエヴァー』、ハービー・ハンコックの『ヘッド・ハンターズ』を総称する呼び名は実はなく、強いて言えば〝エレクトリック・ジャズ〟（〝電化ジャズ〟というのもあった！）ぐらいだろうか。当時のジャズ評論家諸氏の文章を読んでみると、〝ブラック・ファンク〟〝ファンキー・ミュージック〟〝ジャズ&ロック〟〝ディスコ調〟など、苦心の跡がうかがえる。

日本のレコード会社と、『スイングジャーナル』に代表される音楽ジャーナリズムが〝クロスオーヴァー〟という言葉を大々的に使用し始めたのは76年のことだ。『スイングジャーナル』の76年1月号から、山口弘滋氏による〝今月のクロスオーバー・ディスク〟という欄が新設されて、その3月号では〝クロスオーバーとは何か〟という長文の記事を岩浪洋三氏が書いている。レコード会社の広告に〝クロスオーヴァー〟という単語が頻繁に登場し始めるのも76年からだ。

そのキャンペーンにうさん臭いものを感じた中村とうよう氏は、『ニューミュージック・マガジン』76年11月号に〝クロスオーヴァーの底にあるもの〟という論考を執筆した。中村氏はそこで〝ジャズとかソウルとかロックとかの区別がだんだんなくなって、境界線を乗り越えたところから魅力

CamScannerでスキャン

的な音楽が生まれつつあることも事実で、それは見逃せない重要な動きだ。クロスオーヴァーというわけのわからない音楽がカネやクイコで騒ぎ立てられると、ミソもクソも一緒クタにされて、かえってその重要な動きのほうが見逃されてしまうから、警戒を要する。〟と述べている。

おもしろいことに、『スイングジャーナル』の岩浪氏の論考で主として取り上げられているミュージシャンは、マイルス・デイヴィス、ウェザー・リポート、チック・コリア、ハービー・ハンコックといった〝ジャズの主流派〟たちだったのだが、だんだん〝クロスオーヴァー〟と呼ばれる音楽は、

マイルス・デイヴィス

もっとポップでライトな雰囲気のもの、ジョージ・ベンソンやリー・リトナー、チャック・マンジョーネなどに限定されるようになってきた。

そして、78年から79年にかけて、『スイングジャーナル』をはじめとする日本のジャズ・ジャーナリズム（およびレコード会社）は、〝クロスオーヴァー〟ではなく〝フュージョン〟という言葉で同じタイプの音楽を呼び表わすようになった。79年11月に発行された『スイングジャーナル増刊 モダン・ジャズ読本'80』のなかで、山口弘滋氏は〝この79年に入ってから、クロスオーバーに代る音楽用語としてフュージョンという言葉が急速に存在感を強めてきていることは否めない。〟（「ジャズ・フュージョンの現況」）と書いている。76年に大学に入学して80年に卒業し、その間、そうした音楽を聴きまくっていたわたしの感覚では、マイルス・デイヴィスやウェザー・リポート、チック・コリア、ハービー・ハンコックは〝ジャズ〟で、『ブリージン』以降のジョージ・ベンソン、リー・リトナーやラリー・カールトン、グローヴァー・ワシントンJr.やクルセイダーズなどが、ジャンルとしての〝クロスオーヴァー〜フュージョン〟なのだが、これは世代のせいなのだろうか。

ウェザー・リポート。左から、ウェイン・ショーター(s)、ピーター・アースキン(ds)、ジョー・ザヴィヌル(kbd)、ジャコ・パストリアス(b)

ジャズ側からの〝フュージョン現象〟

とはいえ、60年代末から、ジャズを含むさまざまなポピュラー音楽が〝他の音楽の要素を取り入れた音楽の冒険〟をいっせいに行なうようになったこともまた事実だ。これを〝ジャンルとしてのフュージョン〟に対する〝現象としてのフュージョン〟と呼んでもいいだろう。

マイルス・デイヴィスが電気楽器とロックやソウル・ミュージック的なビートを取

CamScannerでスキャン

Miles Davis
"Miles In The Sky"
Columbia[US] CS9628[1968]
(LP)

り入れた実験を始めたのは67年のこと。マイルスの実験は、過渡期の作品『マイルス・イン・ザ・スカイ』『キリマンジャロの娘』を経て、69年に録音された『イン・ア・サイレント・ウェイ』と『ビッチズ・ブルー』（こちらは70年発売）で完成を見た。それらのレコーディングに参加していたジョー・ザヴィヌル、ウェイン・ショーター、ハービー・ハンコック、チック・コリアといったジャズ・ミュージシャンたちは、71年から73年にかけて、それぞれのやり方で新しい〝融合音楽〟を世に問うた。

ジャズとロックの結びつきという点では、60年代から70年代にかけてのイギリスのシーンも重要だ。ロック、ブルース、ジャズなどが渾然一体となって共通の音楽家たちによって演奏されてきたイギリスでは、ソフト・マシーンのようなジャズとロックの境目に位置するバンドがあり、キング・クリムゾンにキース・ティペットをはじめとするジャズ・ミュージシャンが参加する、ということも普通に行なわれていた。トニー・ウィリアムズに誘われて渡米し、それ以後のジャズ・ギターにきわめて大きな影響を与えたジョン・マクラフリンは、イギリスのジャンル混淆を象徴するギタリストだ。マイルスの『イン・ア・サイレント・ウェイ』と『ビッチズ・ブルー』は、マクラフリンの存在なしには成立しなかったとすら言えるだろう。

ジョージ・ベンソン

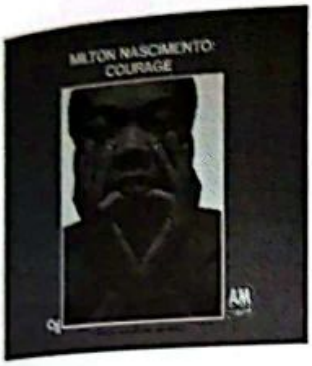
よりポップな側面としては、それまでヴァーヴに所属していたプロデューサー、クリード・テイラーが67年に立ち上げたCTI（Creed Taylor Incorporated）シリーズが〝フュージョン〟に直結している。テイラーはヴァーヴ時代から一流ジャズ・ミュージシャンにポップな曲を演奏させるアルバムを多数制作していたが、CTIではそれをより徹底させ、アートとしても鑑賞できるジャケット・デザインを施して、ジャズをお洒落な都市の音楽に仕立て上げた。ドン・セベスキーやクラウス・オガーマンの華麗な編曲とタイトなリズム・セクション、その上でのジャズ・ミュージシャンの流麗なソロ、という『プリージン』以降のフュージョンの原型は、テイラーがCTIの諸作で確立したものだ。

CTIとほぼ同時期に、プレスティッジやブルー・ノートで盛んにリリースされたアーシーなソウル・ジャズは、サウンド的にはよりブラック・ミュージックに近く、中心的なリスナーも異なっていたが、ジャズとソウルやファンクの融合という点では、のちの〝フュージョン〟を準備したファクターのひとつだ。その完成形というべきアルバムが、ドナルド・バードの『ブラック・バード』（72年）なのだろう。

ブラジル音楽からのジャズへの影響も、

CamScannerでスキャン

フュージョンを特徴づける大きな要素となった。ボサノヴァ以来、ジャズはブラジルの音楽に大きな影響を受けていたが、その流行後に登場したミルトン・ナシメントは、69年にCTIから『コーリッジ』をリリースし、ウェイン・ショーターやハービー・ハンコックに衝撃を与えた。ショーターとナシメントの共演作『ネイティヴ・ダンサー』(75年)は、ジャズとブラジル音楽のもっとも美しい融合のひとつだ。また、ブラジル人パーカッショニストのアイアート・モレイラは妻の歌手フローラ・プリムと共に渡米し、70年にマイルス・バンドに加入する。そこで知り合ったチック・コリアが、アイアートとプリムと共に録音した『リターン・トゥ・フォーエヴァー』(72年)は大ヒットし、ジャズの転機を象徴する作品となった。ウェザー・リポートに参加したドン・ウン・ロマン、スタジオ・ミュージシャンとして売れっ子になったルーベンス・バッシーニも、ブラジル出身のパーカッション奏者だ。



Milton Nascimento
"Courage"
CTI/A&M[Brazil] A&M2037
[1969] (LP)

ロックやソウルの〝フュージョン現象〟

ジャズ以外のジャンルがジャズ的な要素を求める動きも〝フュージョン現象〟だったと言える。ソウル・ミュージックの中でのジャズ的要素としては、まず、楽曲のコード進行にメジャー・セヴンスやマイナー・セヴンスといったジャズ的な和音が使われるようになったことが挙げられる。そうした楽曲をエレクトリック・ピアノを中心に置いたサウンドで演奏し、サックスがジャズっぽいソロを取ったりする、という動きが顕在化してきたのは70年代初めのこと。マーヴィン・ゲイやスティーヴィー・ワンダー、ダニー・ハサウェイなどがその代表的存在だ。

彼らの動きをもっとも敏感にすくい取ったジャズ・サイドの音楽家は、おそらくクインシー・ジョーンズだろう。69年の『ウォーキング・イン・スペース』以降、クインシーのアルバムは、それまでの〝ジャズ・ビッグ・バンド〟の形態を取らなくなり、ソウル系のミュージシャンやシンガーが導入されるようになる。そこからマイケル・ジャクソンのプロデューサーまでの道は意外と遠くなかった。

ロックの中でのジャズ的な要素の導入については、前述したイギリスのロックもそうだが、複数の管楽器がフィーチャーされてジャズ的な演奏をする、いわゆる〝ブラス・ロック〟の登場も忘れてはならない。ブラッド・スウェット&ティアーズに在籍したランディ・ブレッカー(tp)や、ルー・ソロフ(tp)、デイヴ・バージェロン(tb)などは、ジャズ系スタジオ・ミュージシャンとして70年代以降のジャズ〜フュージョン・シーンで活躍した。70年にデビューしたドリームスは、ランディとマイケル(ts)のブレッカー兄弟、ジョン・アバークロンビー(g)、ドン・グロルニック(p)、ウィル・リー(b)、ビリー・コブハム(ds)などが在籍したジャズ・ロック・バンド。商業的成功は収められなかったが、メンバーたちはジャズ〜フュージョンの立役者となった。また、ブレッカー兄弟がマイク・マイニエリ(vib)、スティーヴ・ガッド(ds)、ウォーレン・バーンハート(p)、ピート・レヴィン(b)などと

CamScannerでスキャン

Joni Mitchell
"Shadows And Light"
Asylum[US] BB704[1980]
(LP)

ンドを〝整合的〟にしたい、というアーティストやプロデューサーの意図のあらわれなわけだが、それらを聴いて演奏に惹かれたリスナーたちが、スタジオ・ミュージシャンが主役となったクロスオーヴァー〜フュージョンに入ってくる、という現象も少なくなかった。

シンガー・ソングライターやロック・バンドがジャズ系ミュージシャンを起用して、もっとも成功した例はジョニ・ミッチェルとスティーリー・ダンだろう。ジョニ・ミッチェルはトム・スコットとLAエキスプレスを、のちにはウェイン・ショーターやジャコ・パストリアスを起用して、彼女にしかできないような唯一無二の音楽を創造した。スティーリー・ダンは、ラリー・カールトン、ジョー・サンプル、スティーヴ・ガッド、ウェイン・ショーターなどをせいたくに使って、誰にも真似できない斬新なサウンドを構築した。ジョニ・ミッチェルの『シンガス』や『シャドウズ・アンド・ライト』、スティーリー・ダンの『彩（エイジャ）』と『ガウチョ』は、70年代から80年代初頭における〝ジャンルを超えたフュージョン〟のもっとも美しい成果ではないだろうか。

フュージョンと現在のジャズ

いままで挙げてきた〝ジャズ側からの他ジャンルへの欲望〟と〝ソウルやロックなどからのジャズへの欲望〟が結びついて、70年代後半の〝クロスオーヴァー〜フュージョン〟ブームが到来した、というのがわたしの見取り図だ。しかし、最初のうちは新鮮な驚きと喜びに満ちた音楽だった〝ジャンルとしてのフュージョン〟は、80年代前半ぐらいにはマンネリ化し、その輝きを失っていった。その後長らく、フュージョンはヒップホップのサンプリング・ネタとして以外はアウト・オブ・デイトな音楽とされてしまった。

とはいえ、ロバート・グラスパー、スナーキー・パピー、カマシ・ワシントン、テラス・マーティン、サンダーキャットなどの音楽は明らかにフュージョンからの影響を受けているし、現在の新しいジャズを演奏しているドラマーで、デイヴ・ウェックルやヴィニー・カリウタ、日本の神保彰からの影響を認める人たちも少なくない。そして、なにより〝現象としてのフュージョン〟は、いまも世界のあちこちでさまざまな形で欲望され、実現されているのだ。

CamScannerでスキャン

近年の再評価とその意味

ヴェイパーウェイヴ以降に発生したリヴァイヴァルの流れ

文＝鳥居真道

まずお断りしておくと、当方は87年生まれのいわゆるミレニアル世代で、当然、なにがしかの再評価の波を踏まえたうえでフュージョンという音楽に出会っている。正直に打ち明ければ十代前半の頃、フュージョンに対して〝日曜日のお昼すぎにテレビで流れているような音楽〟といった偏見を抱いていた。オックスフォード・シャツとチノパンが似合いそうな音楽と言ったらよいだろうか。やがて、フュージョンがヒップホップやR&Bのサンプリング・ソースとして使われていたり、踊れるクラブ・ミュージックとしてDJたちから選曲されたりしていると知り、ようやくフュージョンを聴くようになったミーハーな人間なのだと明らかにしておきたい。

フュージョンはしばしばヒップホップにおいて〝ネタ〟として取り上げられてきた。DJの聖典とされるコンピレーション・シリーズ"Ultimate Breaks & Beats"にまとめられた曲のなかで、フュージョン関連の音源には、ロイ・エアーズ"The Boogie Back""Lonesome Cowboy"、マハヴィシュヌ・オーケストラ"Planetary Citizen"、アルフォンス・ムゾーン"You Don't Know How Much I Love You"、ロニー・リストン・スミス"Expansions"、トム・スコット&LAエクスプレス"Sneakin' In The Back"、グローヴァー・ワシントンJr. "Mister Magic"、ドナルド・バード"Change (Makes You Want To Hustle)"などがある。また、フュージョンがサンプリングされた例として、個人的に忘れがたいのは以下の曲だ。ハーブ・アルパート"Rise"→ノトーリアス・B.I.G"Hypnotize"、ビリー・コブハム"Heather"→ソウルズ・オブ・ミスチーフ"93 'Til Infinity"、ボブ・ジェイムズ"Nautilus"→ゴーストフェイス・キラー"Daytona 500"、ジャコ・パストリアス"Portrait Of Tracy"→SWV"Rain"。

もともとフュージョンが備えていた〝踊れる〟という機能を抽出して提示してみせるDJたちのセンスも、ジャンルのイメージを刷新したと言って差し支えないだろう。そもそもフュージョンは、音楽的素養の高いジャズ・ミュージシャンが他ジャンルのスタイルを即座に消化し、血肉とすることで発展したジャンルだ。当時、大流行していたディスコ・ミュージックもその対象だった。だから、フュージョンも広義にはダ

Souls Of Mischief
"93 'Til Infinity"
Jive[US] 01241-41514-2[1993]
(CD)
オークランドのユニットによる1st。ビリー・コブハムをサンプリングした表題曲はヒップホップ・クラシックとして知られる

CamScannerでスキャン

ンス・ミュージックの一種だといえる。

イギリスのジャズ・ダンス・シーンでは、当時からフュージョンが踊れる音楽として定着していた。そうした文化はやがてレア・グルーヴやアシッド・ジャズといったカテゴリーに受け継がれていく。他方、ニューヨークでは、ロフトのデイヴィッド・マンキューソ、パラダイス・ガラージのラリー・レヴァン、ギャラクシー21のウォルター・ギボンズといったDJがフュージョンを選曲に混ぜていたことで知られている。

イタリアでも〝アフロ/コズミック〟と呼ばれるスタイルを生んだコズミックのダニエル・バルデリ、タイフーンのベッペ・ローダといったDJが、ディスコやファンク、クラウトロックなどとともにフュージョンを流していた。〝アフロ/コズミック〟にカテゴライズされるフュージョン関連の曲には、次のような曲がある。アジムス"Jazz Carnival""Young Embrace"、ジョン・トロペイ"Living In Jungle""Short Trip To Space"、ウェザー・リポート"River People""Dara Factor One"、アル・ディ・メオラ"Sequencer"。

スペイン領イビサ島のクラブ・シーンで発展した〝バレアリック〟と呼ばれるスタイルでも、フュージョンが選曲されることが多い。具体的には、ハーブ・アルパート"Rotation"、ヤン・ハマー・グループ"Don't You Know"、ジャン＝リュック・ポンティ"Ethereal Mood"、アジムス"Voo Sobre O Horizonte"などだ。

ヴェイパーウェイヴがもたらした変化

フュージョン的なサウンドの見直しを間接的に促した音楽ジャンルとして、2010年代にインターネット上の音楽ファンの話題をさらったヴェイパーウェイヴを見逃すわけにはいかない。ヴェイパーウェイヴにカテゴライズされる作品は匿名性が高く、ハイコンテクストで謎めいており、掴みどころがない。使い古された表現を借りれば、人を煙に巻くような音楽だといえる。ネオン/パステル・カラー、チープな3DCG、グリッド、グラデーション、ギリシャ彫刻、ショッピング・モールのイメージパース、おかしな日本語、グリッチ、幾何学、コンピュータ、アニメ、ヴィデオ・ゲーム、ヤシの木…といった要素で構成されたアートワークもヴェイパーウェイヴの特徴だ。

Macintosh Plus
"Floral Shoppe"
Beer On The Rug[US]（配信）
ヴェクトロイドことラモーナ・ラングレーが別名義で発表した11年作。ジャケも含め、ヴェイパーウェイヴの美学を決定づけた

ヴェイパーウェイヴはハイコンテクストなカルチャーであるがゆえに、音楽的な内容だけ見ても本質を掴み損ねてしまう。しかし、ここではさしあたって音楽的な面に注目したい。80〜90年代のブラック・コンテンポラリーやスムーズ・ジャズ、日本のシティ・ポップ、商用BGMなどをサンプリングし、テンポとピッチを落とす〝スクリュー〟と呼ばれる加工を施すのがこのジャンルの音楽的なスタイルだ。

ヴェイパーウェイヴを代表する楽曲「リサフランク420/現代のコンピュー」を例にとり、その特徴を見ていきたい。ヴェクトロイドという人物が、マッキントッシュ・プラスという名義で11年に発表した"Floral Shoppe"に収録された曲だ。サンプリングの素材として、ダイアナ・ロス"Swept Away"（84年）に収録された"It's Your Move"が使用されている。感傷的でトロピカルな、ポストAOR的な趣の曲だ。

CamScannerでスキャン

v.a.
"NuLeaf"
Numero[US] NUM107[2020]
(LP)
名レーベル、ヌメロが80年代のスムーズ・ジャズ／フュージョンを独自の視点から編纂したコンピレーション

"Get More"の冒頭8小節をループさせたものが「リサフランク420／現代のコンピュー」の土台となっている。BPMは117から88前後にまで落とされている。0・75倍だ。展開をつけるために原曲の別の部分を持ってきたり、ディレイをかけたり、さらにテンポを落としてリタルダンドするなどの工夫が施されている。

こうした手法で制作されるのがヴェイパーウェイヴだ。その素材として、しばしばスムーズ・ジャズが取り上げられる。スムーズ・ジャズはフュージョンから枝分かれしてイージー・リスニング化したジャンルで、フュージョンにヤスリをかけてつるつるにしたようなサウンドが特徴だ。

シャカタク"Night Birds"（82年）の収録曲はヴェイパーウェイヴの素材としてたびたび取り上げられている。ほかにも、サンプリングの対象として定番と化したアルバムには次のようなものがある。

ケニーG"Duotones"（86年）、ザ・リッピントンズ"Tourist In Paradise"（89年）、ラス・フリーマン"Nocturnal Playground"（86年）、ナジー"Day By Day"（88年）、ボブ・ジェイムズ&デイヴィッド・サンボーン"Double Vision"（86年）、デイヴィッド・サンボーン"A Change Of Heart"（87年）、"Close-Up"（88年）など。アール・クルー、ロドニー・フランクリン、ヒロシマの曲についても、サンプリングされた例が存在する。

こうした作品が俎上に上がるのは、スムーズ・ジャズがレストランや歯医者の待合室、あるいはウェザー・ニュースやCMのBGMとして使用されてきた歴史があるからだろう。スムーズ・ジャズが時代の徒花だと捉えられている状況を逆手に取り、〝正統な音楽史〟的なものに水を差しているのだ。さらにいえば、FM音源のシンセやドラム・マシン、シーケンサーといったその時代特有のサウンドが、ノスタルジーを喚起させるのを狙っていると考えられる。

ヴェイパーウェイヴ以降のフュージョン〜スムーズ・ジャズの再評価を象徴する動きとして、シカゴのリイシュー系レーベル、ヌメロが20年にリリースした"NuLeaf"を挙げておきたい。オブスキュアな自家製スムーズ・ジャズをまとめたコンピレーション・アルバムで、ジャケットはタバコのパッケージを模したものになっている。現在、スムーズ・ジャズは〝ヨット・ロックのジャズ版〟的な受け入れ方をされているといえるかもしれない。

"プレイヤーの復権"とフュージョン

フュージョン再評価を語るうえで、今まさに活躍中のサンダーキャット、ルイス・コール、ドミ&JD・ベックといったミュージシャンの取り組みは避けて通れない。彼らが往年のフュージョンから影響を受けているのは言うまでもないが、それ以上に、彼らの取り組みそのものが新たなフュージョンにほかならないと強調すべきかもしれない。というのも、彼らのサウンドはジャズ、ポップス、R&B、ファンク、ヒップホップ、ドラムンベース、ビート・ミュージック、エレクトロニック・ミュージックといった異なるジャンルの音楽を文字どおり融合したものだからだ。高度な技術を用いつつも、仕上がりは人懐っこいという点

CamScannerでスキャン

も往年のフュージョンとの共通点だ。

まず取り上げたいのはサンダーキャットだ。プロデューサー、ソングライター、ヴォーカリストをこなす音楽家だが、6弦ベースを駆使する超絶技巧のベーシストとして広く知られている。11年にフライング・ロータスのレーベル、ブレインフィーダーからリリースされたデビュー作の"The Golden Age Of Apocalypse"で、サンダーキャットは、ジョージ・デュークの"For Love (I Come Your Friend)"をカヴァーしている。デュークの"The Aura Will Prevail"(75年)に収録された曲だ。サンダーキャットが披露する甘いファルセットは、デュークからの影響が濃いといえるだろう。

サンダーキャットはベーシストとして、スタンリー・クラークやジャコ・パストリアスへの思慕をしばしば口にしている。ほかにもフェイヴァリットとしてジョン・マクラフリンやフランク・ザッパの名前も挙げている。サンダーキャットは、過去のレガシーを引き継ぎつつ最新型のフュージョンに取り組む音楽家の筆頭格だといえよう。

続いて取り上げたいのは、サンダーキャットに"I Love Louis Cole"という曲を書かせるほど彼を虜にするルイス・コールだ。コールもプロデューサー、ソングライター、シンガーを一人でこなす音楽家だが、超絶技巧のドラマーとしてもよく知られている。コールが影響を受けたミュージシャンとして名前をよく挙げるのはジェイムズ・ブラウンとスクリレックスだ。サンダーキャットほどフュージョンの影響はないのかもしれないが、特定のジャンルに縛られないというスタイルはフュージョン的だ。

そして、3組目はドミ&JD・ベック。超絶技巧のキーボーディストとドラマーのデュオだ。彼らは、22年にデビュー作の"Not Tight"をリリースする前からすでにオンライン上の様々なプラットフォームで存在感を示していた。動画にしたときに高度なテクニックは〝映える〟のだ。こうした広がり方も当世風だといえる。鍵盤奏者のドミは、パット・メセニーやアラン・ホールズワース、ジャコ・パストリアスのフレーズをコピーして腕を鍛えているそうだ。

最後に付け加えると、ルイス・コールともしばしば共演しているヴルフペックは、ウェザー・リポートの"Teen Town"のパロディで"Dean Town"という曲を発表している。ライヴでは観客たちがベース・ラインをシンガロングするという異例の曲だ。ヴルフペックのベーシスト、ジョー・ダートは確かなテクニックで支持を集めている。

こうしたミュージシャンたちが人気を博す状況を〝プレイヤーの復権〟だと捉えることもできる。彼らの登場により〝テクニックを全開にしてもいいのだ〟と認識を新たにした人も多かろう。プレイヤーが主役の音楽として、フュージョンが再度、見直される機運を生んだといえる。

Thundercat "The Golden Age Of Apocalypse"
Brainfeeder[US] BFCD023[2011](CD)
スーサイダル・テンデンシーズなどで活動してきたベーシストがソロ・アーティストとして発表した1stアルバム

Domi & JD Beck "Not Tight"
Apeshit/Blue Note[US] B003590702[2022](CD)
動画サイトで話題となったドラマー／キーボーディストのデュオによる1stアルバム。'Moon'にはハービー・ハンコックも参加

CamScannerでスキャン

FUSION

私にとってのフュージョン

選者アンケート

参加していただいた20名の執筆陣によるランキング結果をふまえてのアンケートをお届けします。ランキングの元になった個人リストも公開します。プロフィール欄の隣に掲載されているジャケットは、各選者が1位に選んだアルバムです。

イラストレイション＝JERRY

CamScannerでスキャン

1位	Paul Jackson Jr./I Came To Play
2位	Gong/Gazeuse!
3位	Rodney Franklin/Rodney Franklin
4位	Sea Level/Sea Level
5位	Lesette Wilson/Now That I've Got Your Attention
6位	Tom Browne/Love Approach
7位	Joyce Cooling/Cameo
8位	Allan Holdsworth/I O U
9位	Phillip Upchurch/Darkness, Darkness
10位	Richard Galliano/Spleen
11位	Hiroshima/Odori
12位	Cornell Dupree/Teasin'
13位	Shakatak/Night Birds
14位	Judy Roberts/The Other World
15位	Mark King/Influences
16位	Herbie Hancock/Sunlight
17位	Earl Klugh/Finger Paintings
18位	Joe Beck/Beck
19位	Chick Corea/Return To Forever
20位	Al Di Meola/Elegant Gypsy
21位	George Benson/Breezin'
22位	Cortex/Troupeau Bleu
23位	The Crusaders/Those Southern Knights
24位	Joe Sample/Carmel
25位	Deodato/Love Island
26位	Stuff/Stuff
27位	George Duke/A Brazilian Love Affair
28位	Gato Barbieri/Ruby, Ruby
29位	Airto Moreira/Touching You...Touching Me
30位	Hiram Bullock/Give It What U Got

油上尚志

[illegible]

[illegible]

1位	Weather Report/Black Market
2位	Miles Davis/Bitches Brew
3位	Wayne Shorter featuring Milton Nascimento/Native Dancer
4位	Cal Tjader/Guarabe
5位	Herbie Hancock/Head Hunters
6位	Steve Tibbetts/Safe Journey
7位	Cal Tjader/Amazonas
8位	Jaco Pastorius/Jaco Pastorius
9位	Azymuth/Outubro
10位	Cornell Dupree/Teasin'
11位	Airto Moreira/Touching You...Touching Me
12位	Frank Zappa/Hot Rats
13位	Gary Burton, Chick Corea /Crystal Silence
14位	Dorothy Ashby/Dorothy's Harp
15位	Herbie Hancock/Mr. Hands
16位	Eberhard Weber/Yellow Fields
17位	The Brecker Brothers/The Brecker Brothers
18位	Bobbi Humphrey/Blacks And Blues
19位	Marc Johnson/Bass Desires
20位	Deodato/Deodato 2
21位	Opa/Goldenwings
22位	Terje Rypdal/Descendre
23位	Larry Young/Larry Young's Fuel
24位	Bob James/One
25位	Michael Naura Quartett/Call
26位	George Benson/Breezin'
27位	Wah Wah Watson/Elementary
28位	Freddie Hubbard/Liquid Love
29位	Harvey Mason/Marching In The Street
30位	Ronnie Laws & Pressure/Pressure Sensitive

エブリデ

[illegible]

[illegible]

岡田拓郎

おかだ・たくろう
91年生まれ。音楽家。ファイヴァリット・ハービー・ハンコックは『ムワンディシ』からの3部作。

フュージョンも多くの音楽ジャンルと同様に規定するのが難しい。私はフリー・ジャズとは違う道での脱4ビート、脱バップイズム視点で選盤をさせていただきました。現行ジャズの流れを汲み、もう少しスピリチュアル、淡白めのジャズ・ファンク的な盤がランクに入るかと思ったが、意外にも永遠のフュージョン・クラシックらしいランキングで少し寂しい気持ち。ジャズという枠からはみ出し、多様な文化と混じり合い始めた黎明期のフュージョンではなく、ブリージンでメロウないわゆるフュージョンらしいサウンドが定着した後のフュージョンが主にランク・インは致し方なしか。

1位 Herbie Hancock/Sextant
2位 George Russell/Electronic Sonata For Souls Loved By Nature
3位 Suso Saiz/En La Piel Del Cruce
4位 Buster Williams/Pinnacle
5位 Lonnie Liston Smith & The Cosmic Echoes/Visions Of A New World
6位 Chick Corea/Return To Forever
7位 The Tony Williams Lifetime/Emergency!
8位 Jaco Pastorius/Jaco Pastorius
9位 Alice Coltrane/Eternity
10位 Pat Metheny Group/Pat Metheny Group
11位 Frank Zappa/Hot Rats
12位 Billy Cobham/Spectrum
13位 Norman Connors/Love From The Sun
14位 Gary Bartz/The Shadow Do
15位 Miles Davis/In A Silent Way
16位 Bobbi Humphrey/Blacks And Blues
17位 John Tropea/To Touch You Again
18位 Stanton Davis' Ghetto Mysticism/Brighter Days
19位 Gary Burton Quintet/Dreams So Real
20位 Weather Report/Weather Report
21位 Joan Bibiloni/Joana Lluna
22位 Wayne Shorter/Super Nova
23位 Herbie Hancock/Crossings
24位 Miroslav Vitous/Infinite Search
25位 Terje Rypdal/Terje Rypdal
26位 Jon Hassell/Power Spot
27位 Pharoah Sanders/Love Will Find A Way
28位 Larry Coryell/Barefoot Boy
29位 Stuff/Stuff
30位 Bob James/Two

金澤寿和

かなざわ・としかず
60年生まれ。AORは歌モノ・フュージョン進化系と捉え、監修『AORライト・メロウ・プレミアム03』執筆中。

カテゴリーとしてのフュージョンではなく、ジャンル・ミックスというあり方そのものが自分の音楽観の根幹。だから異なるエレメントのせめぎ合いこそ面白く、クロスオーヴァーの呼称が一般的だった70年代初頭〜中盤の作品群に惹かれる。完成度を目指すようになったフュージョンには音楽的に大きな進化が認められず、拡大再生産を続けてきたと感じる。DJを中心としたレア・グルーヴ方面での再評価は、従来フュージョン史で軽視されていたソウル・ジャズやジャズ・ファンクに目を向けさせたが、このシーンでは常に彼らの演奏家としての志向性を見落とさずにいたい。

1位 Herbie Hancock/Head Hunters
2位 Grover Washington Jr./Winelight
3位 George Benson/Breezin'
4位 Jeff Beck/Blow By Blow
5位 The Crusaders/Street Life
6位 Stuff/Stuff
7位 Donald Byrd/Black Byrd
8位 Pat Metheny Group/Still Life (Talking)
9位 Miles Davis/Bitches Brew
10位 Bob James/Two
11位 Azymuth/Águia Não Come Mosca
12位 Grant Green/Live At The Lighthouse
13位 The Brecker Brothers/Heavy Metal Be-Bop
14位 Weather Report/Heavy Weather
15位 Chick Corea/Return To Forever
16位 Weldon Irvine/Sinbad
17位 Billy Cobham/Spectrum
18位 Jaco Pastorius/Jaco Pastorius
19位 Larry Carlton/Larry Carlton
20位 The New Tony Williams Lifetime/Believe It
21位 David T. Walker/Press On
22位 Gabor Szabo/High Contrast
23位 King Curtis/Live At Fillmore West
24位 Full Moon/Full Moon
25位 Brian Auger's Oblivion Express/Closer To It
26位 The Chuck Rainey Coalition/The Chuck Rainey Coalition
27位 Gil Evans/Plays Jimi Hendrix
28位 Shakatak/Night Birds
29位 Ramsey Lewis/Sun Goddess
30位 Roy Ayers Ubiquity/Mystic Voyage

CamScannerでスキャン

ガモウユウイチ

音楽ライター／ベーシスト。『[illegible]』（旧『[illegible]』）や『ジャズ批評』などジャズ専門誌にも執筆中。

1970年代半ばから盛り上がってきたフュージョン・ブーム。ラジオやテレビで大量オンエアされて、商業主義的ジャンルとして一気に浮上してきた。ただし、同じく商業主義的ジャンルと称せられたディスコや産業ロックとは違い、ジャズを基調としているだけあって、実際に演奏しようとすると一筋縄ではいかなかった。それでも当時のアマチュア・ミュージシャンは必死にコピーしており、結果として、アマチュアの実力の底上げに大きな影響を与えたジャンルと感じる。なお、選盤については、重要作が複数あるアーティストでも、1アーティスト1作品に限定して選盤した。

1位	Shakatak/Night Birds
2位	Chick Corea/Return To Forever
3位	Herbie Hancock/Head Hunters
4位	Weather Report/Heavy Weather
5位	The Crusaders/Those Southern Knights
6位	Larry Carlton/Larry Carlton
7位	Jeff Beck/Blow By Blow
8位	George Benson/Breezin'
9位	Grover Washington Jr./Winelight
10位	Return To Forever/Romantic Warrior
11位	Stuff/Stuff
12位	Pat Metheny Group/First Circle
13位	Mahavishnu Orchestra with The London Symphony Orchestra, Michael Tilson Thomas/Apocalypse
14位	Earl Klugh/Finger Paintings
15位	The Brecker Brothers/The Brecker Brothers
16位	Chuck Mangione/Feels So Good
17位	Jaco Pastorius/Jaco Pastorius
18位	Lee Ritenour & His Gentle Thoughts/Gentle Thoughts
19位	Cornell Dupree/Teasin'
20位	Deodato/Prelude
21位	Joe Sample/Carmel
22位	Spyro Gyra/Morning Dance
23位	Quincy Jones/Sounds... And Stuff Like That!!
24位	Bob James/Heads
25位	George Duke/A Brazilian Love Affair
26位	Billy Cobham/Spectrum
27位	Azimuth/Azimuth
28位	Gonzalez/Our Only Weapon Is Our Music
29位	The Section/The Section
30位	White Elephant/White Elephant

栗本斉

くりもと・ひとし

旅＆音楽ライター／選曲家。著書『90年代J-POPの基本』がこの100枚でわかる！』が好評です。ぜひご一読を！

中高生の頃は、FMラジオでジャンル関係なくいろんな音楽を聴き漁っていた。そんな中で出会った『クロスオーバーイレブン』や『渡辺貞夫マイ・ディア・ライフ』といった番組は、僕にフュージョンという音楽の心地好さを教えてくれた。当時はCMにハーブ・アルバートやボブ・ジェイムズが出演していたし、よく行く本屋さんでかかっていたシャカタクに胸をときめかせたのもこの頃。アーバン、メロウ、コンテンポラリー、スタイリッシュ。こういう感覚を知ったのはフュージョンと出会ったからかもしれない。「ダサい」と言って聴かない時期もあったけれど、やっぱり好きです。

1位	Pat Metheny Group/Offramp
2位	Grover Washington Jr./Winelight
3位	Chuck Mangione/Feels So Good
4位	Azymuth/Light As A Feather
5位	Shakatak/Night Birds
6位	The Crusaders/Street Life
7位	Chick Corea/Return To Forever
8位	Tania Maria/Come With Me
9位	Earl Klugh/Finger Paintings
10位	Flora Purim/Open Your Eyes You Can Fly
11位	Bob James/One
12位	Deodato/Deodato 2
13位	Lonnie Liston Smith/Love Is The Answer
14位	Airto Moreira/Touching You...Touching Me
15位	Lalo Schifrin/Black Widow
16位	Herbie Hancock/Sunlight
17位	Wayne Shorter featuring Milton Nascimento/Native Dancer
18位	Donald Byrd/Places And Spaces
19位	Ramsey Lewis/Sun Goddess
20位	Ralph MacDonald/Sound Of A Drum
21位	Raul De Souza/Don't Ask My Neighbors
22位	Joe Farrell/Night Dancing
23位	Lee Ritenour/Lee Ritenour In Rio
24位	David T. Walker/On Love
25位	David Sanborn/Hideaway
26位	Dave Grusin/One Of A Kind
27位	Hubert Laws/Family
28位	Rodney Franklin/Rodney Franklin
29位	Herb Alpert/Rise
30位	Ronnie Laws/Fever

CamScannerでスキャン

近藤正義

こんどう・まさよし　58年、大阪生まれ。音楽ライター／「[illegible]」レーベル主宰。「[illegible]」は音楽の話題、[illegible]はネコの写真。

僕が大学生の時に流行り始めたクロスオーヴァー／フュージョンというジャンルは、小学生で聴いていたイージー・リスニングや洋楽ポップス、中学生の頃に全盛だったブリティッシュ・ハード・ロック、高校生の頃に旬だったアメリカン・ロックとソウル・ミュージック、そして大学生になった僕が新たに興味を持ち始めたジャズ、ブラジル、ハワイ、ラテンなど、すべてのジャンルの魅力を併せ持つ理想の音楽だった。一つのジャンルに収まりきらないエネルギーが結果的に垣根を超えてしまうことで偶発的に生まれた新しい音楽。このトキメキこそがフュージョンの原点だと思う。

1位	Lee Ritenour & His Gentle Thoughts/Gentle Thoughts
2位	Larry Carlton/Larry Carlton
3位	Pat Metheny/Water Colors
4位	George Benson/Breezin'
5位	Azymuth/Light As A Feather
6位	Chuck Mangione/Fun And Games
7位	Herb Alpert/Rise
8位	Earl Klugh/Finger Paintings
9位	Stuff/Stuff
10位	Shakatak/Night Birds
11位	Mezzoforte/Surprise Surprise
12位	Fruitcake/Fruitcake
13位	Return To Forever/Romantic Warrior
14位	Al Di Meola/Elegant Gypsy
15位	The Crusaders/Those Southern Knights
16位	Jeff Beck/Wired
17位	Miles Davis/We Want Miles
18位	Harvey Mason/Funk In A Mason Jar
19位	Weather Report/8:30
20位	John Scofield/Pick Hits Live
21位	George Duke/A Brazilian Love Affair
22位	The New Tony Williams Lifetime/Believe It
23位	Deodato/Knights Of Fantasy
24位	The Billy Cobham-George Duke Band/Live On Tour In Europe
25位	Jaco Pastorius/Jaco Pastorius
26位	Cornell Dupree/Teasin'
27位	David Spinozza/Spinozza
28位	Mike Stern/Neesh
29位	David T. Walker/On Love
30位	Steve Khan/Eyewitness

サエキけんぞう

80年、ハルメンズ、86年、パール兄弟でデビュー。最新作はパール兄弟『パール玉』。作詞家として沢田研二ほか。

フュージョンは、商業的な打ち出しとウラハラの深い意味性と音楽性が、僕の音楽観を揺さぶっている。原因は、単に売れた盤と、実験性を兼ね備えた重要盤に、赤盤があリすぎるからだろう。エレクトリック楽器の音色をロックよりも開花させた重要ジャンルなのに、頂点であるスタッフが世界的に売れたわけではない。そんな悲劇がよくない。一方で、聴きたくもない腐れフュージョンが巷に溢れすぎていて、評論シーンが包囲されている。どうすりゃいいのさ三度笠！　このままその先進性はウンコに埋もれていくのか？　未来を切り開くフュージョン論が開花するのを待っている！

1位	Herbie Hancock/Head Hunters
2位	Stuff/Stuff
3位	Weather Report/Heavy Weather
4位	Jef Beck/Blow By Blow
5位	Pat Metheny/Bright Size Life
6位	Sugar Loaf Express featuring Lee Ritenour/Sugar Loaf Express featuring Lee Ritenour
7位	Jaco Pastorius/Jaco Pastorius
8位	The Crusaders/Chain Reaction
9位	The Section/The Section
10位	Tom Scott/New York Connection
11位	The Chuck Rainey Coalition/The Chuck Rainey Coalition
12位	Cornell Dupree/Teasin'
13位	Carlos Santana & Mahavishnu John McLaughlin/Love Devotion Surrender
14位	Return To Forever featuring Chick Corea/Where Have I Known You Before
15位	George Benson/Beyond The Blue Horizon
16位	Gabor Szabo/High Contrast
17位	Miles Davis/Amandla
18位	Bob James/Touchdown
19位	Full Moon/Full Moon
20位	Harvey Mason/Earthmover
21位	Wayne Shorter/Atlantis
22位	Rique Pantoja & Chet Baker/Rique Pantoja & Chet Baker
23位	Seawind/Window Of A Child
24位	Carla Bley/Dinner Music
25位	Larry Carlton/Larry Carlton
26位	Richard Tee/Strokin'
27位	Herbie Mann/Memphis Underground
28位	Quincy Jones/Walking In Space
29位	Mike Mainieri/Love Play
30位	Ralph MacDonald/The Path

CamScannerでスキャン

柴崎祐二

しばさき・ゆうじ
53年、埼玉県生まれ。筆者に「ポップミュージックはリバイバルをくりかえす『再文脈化』の音楽形容だ」他。

1位	Miles Davis/In A Silent Way
2位	Miles Davis/On The Corner
3位	Miles Davis/Bitches Brew
4位	Miles Davis/Get Up With It
5位	Herbie Hancock/Head Hunters
6位	Weather Report/Weather Report
7位	Bernie Krause/Citadels Of Mystery
8位	Alice Coltrane/Eternity
9位	Marion Brown/Vista
10位	Jon Hassell/Power Spot
11位	The Claus Ogerman Orchestra/Gate Of Dreams
12位	Eberhard Weber/The Colours Of Chloë
13位	Steve Hiett/Down On The Road By The Beach
14位	Steve Tibbetts/Safe Journey
15位	Pat Metheny & Lyle Mays/As Falls Wichita, So Falls Wichita Falls
16位	Mark Isham/Vapor Drawings
17位	Larry Ridley/Sum Of The Parts
18位	Diga Rhythm Band/Diga
19位	Chico Hamilton/The Master
20位	Don Cherry/Brown Rice
21位	Chick Corea/Return To Forever
22位	Azimuth/Azimuth
23位	The Mike Westbrook Concert Band/Mike Westbrook's Love Songs
24位	Charles Mingus/Cumbia & Jazz Fusion
25位	Egberto Gismonti/Academia De Dancas
26位	Hermeto Paschoal/A Musica Livre De Hermeto Paschoal
27位	Donald Byrd/Places And Spaces
28位	Ornette Coleman & Prime Time/Virgin Beauty
29位	Shadowfax/The Dreams Of Children
30位	Dorothy Ashby/Dorothy's Harp

この10年くらいで、フュージョンがどんどん好きになってきた。なぜだろうと考えていたのだが、ズバリ、現代においてもはやすべての音楽が文字通り〝フュージョン（融合）〟している、あるいは〝フュージョン〟するほかのない状況になってきているからではないか。高度の情報化、グローバリゼーション、テクノロジーの伸長。世界は必然的に〝ポスト・ジャンル〟的融合を促す。すると、かつてのフュージョンの姿が、その先駆的祖型として浮かび上がってくる、という仕掛けだ。フュージョンとは、静止から逃れ続ける流動体だ。だから永遠に新しく、フレッシュなのだ。

高橋アフィ

たかはし・あふぃ
バンド、TAMTAMでドラムやミックスを担当。好きな音楽は新譜。最新の趣味はタコス作りです。

1位	Kenny G/Duotones
2位	Herbie Hancock/Thrust
3位	Azymuth/Outubro
4位	Shakatak/Night Birds
5位	Weather Report/Heavy Weather
6位	The Crusaders/Street Life
7位	Fruitcake/Fruitcake
8位	Joe Sample/Rainbow Seeker
9位	Roy Ayers Ubiquity/Everybody Loves The Sunshine
10位	Pat Metheny Group/Letter From Home
11位	George Benson/Breezin'
12位	Chick Corea/Return To Forever
13位	Shakti with John McLaughlin/Natural Elements
14位	MFSB/Mysteries Of The World
15位	Grover Washington Jr./Winelight
16位	Lee Ritenour/Color Rit
17位	The Chick Corea Elektric Band/The Chick Corea Elektric Band
18位	Dave Grusin/Night-lines
19位	Spyro Gyra/Morning Dance
20位	Jon Hassell/Power Spot
21位	Pat Metheny & Lyle Mays/As Falls Wichita, So Falls Wichita Falls
22位	George Duke/A Brazilian Love Affair
23位	Najee/Najee's Theme
24位	Joyce Cooling/Cameo
25位	Level 42/Level 42
26位	Joe Zawinul/Di-A-Lects
27位	Yellowjackets/Shades
28位	Deodato/Love Island
29位	Dave Valentin/Legends
30位	Tom Browne/Love Approach

現代にフュージョンを聞くならば、個人的にヴェイパーウェイヴ的価値観を無視することはできない。ざっくり言えば、フュージョンの商業BGM～イージー・リスニング的要素の再評価であり、シンセやレコーディングのこだわりをアンビエント／ニューエイジ方面から捉えることであり、演奏の高度さでなく音の快楽性に着目することだと私は考えている。30年以上前の音楽として〝ノスタルジー〟の中で聞くこととも言えるだろう。その意味で、ジャズ的評価はさておき、ケニー・Gの甘ったるさは完璧。ECMの作品もフュージョンとしての評価が今後より上がっていく予感がする。

CamScannerでスキャン

立川芳雄

[illegible]

フュージョンって、[illegible]という意味なのだから、そこにはさまざまなものが混じり合った多様性があるはず。けれどもそれは、ジャンルとして確立してしまった途端、家にワンパターンなものになってしまったという感がある。そんなわけで、個人的には「いかにもフュージョン」といった感じの音楽（どんな音楽だろ）は苦手です。楽器を弾くのは楽しい。だから演奏技術を突き詰めていったら、知らず知らずのうちにジャンルをはみ出すようになってしまって気づいてみたら妙な音楽ができていた…。そんなのが本物のフュージョンなのかも、と思ってます。

1位	Miles Davis/In A Silent Way
2位	Jeff Beck/Blow By Blow
3位	Weather Report/Heavy Weather
4位	The Tony Williams Lifetime/Emergency!
5位	Steve Khan/Eyewitness
6位	Chick Corea/The Mad Hatter
7位	Mahavishnu Orchestra/Birds Of Fire
8位	Brand X/Moroccan Roll
9位	Chick Corea/Return To Forever
10位	Pat Metheny Group/Still Life (Talking)
11位	The Chuck Rainey Coalition/The Chuck Rainey Coalition
12位	Agorà/Live in Montreux
13位	Gino Vannelli/Brother To Brother
14位	The 24th. Street Band/The 24th. Street Band
15位	Frank Zappa & The Mothers Of Invention/One Size Fits All
16位	Larry Carlton/Larry Carlton
17位	Deodato/Prelude
18位	Miles Davis/Agharta
19位	The Keith Tippett Group/Dedicated To You, But You Weren't Listening
20位	Nucleus/Elastic Rock
21位	Soft Machine/Bundles
22位	Gong/Gazeuse!
23位	Hatfield & The North/The Rotters' Club
24位	Gonzalez/Our Only Weapon Is Our Music
25位	Nick Mason/Nick Mason's Fictitious Sports
26位	Frank Ricotti Quartet/Our Point Of View
27位	Passport/Looking Thru
28位	Santana/Caravanserai
29位	Bruford/Feels Good To Me
30位	Joni Mitchell/Shadows And Light

土佐有明

EM F. MILL

[illegible]

クラブ・ミュージックの偉人たちが90年代に再評価した音楽、というのが筆者にとってのフュージョンのイメージだった。ケンイシイやインテンス、LTJブケムがフュージョンからの影響を語り、沖野修也などDJもフュージョンをかけることが多かった。ゴールディーもパット・メセニーの曲をリミックスしているし、この手の逸話には枚挙にいとまがない。最近の音楽シーンでは、ドラムンベース・リヴァイヴァルが進行しているが、フュージョンに最も触発されたのがまさにドラムンベースであり、その意味で、もう一度フュージョン再考／再発見が起こるのではないかと思う。

1位	Egberto Gismonti/Em Família
2位	Egberto Gismonti/Corações Futuristas
3位	Egberto Gismonti/Carmo
4位	Billy Cobham/Spectrum
5位	The Brecker Brothers/The Brecker Brothers
6位	Chick Corea/Return To Forever
7位	Mahavishnu Orchestra/The Inner Mounting Flame
8位	David Sanborn/Straight To The Heart
9位	Tony Williams/Joy Of Flying
10位	Jim Hall/Concierto De Aranjuez
11位	Miles Davis/In A Silent Way
12位	Herbie Hancock/Head Hunters
13位	Hermeto Pascoal/Slaves Mass
14位	The Brecker Brothers/Heavy Metal Be-Bop
15位	Joe Beck/Beck
16位	Shakti with John McLaughlin/Handful Of Beauty
17位	The 24th. Street Band/The 24th. Street Band
18位	Donald Byrd/Fancy Free
19位	Pat Metheny Group/Still Life (Talking)
20位	Jaco Pastorius/Jaco Pastorius
21位	Tom Scott/Tom Scott & The L.A. Express
22位	Deodato/Love Island
23位	Wayne Shorter featuring Milton Nascimento/Native Dancer
24位	Chick Corea & Return To Forever/Light As A Feather
25位	Herb Alpert/Rise
26位	Bob James/BJ4
27位	Jeff Beck/Blow By Blow
28位	Stuff/Stuff
29位	Donald Byrd/Places And Spaces
30位	Al Di Meola/Elegant Gypsy

CamScannerでスキャン

鳥居真道

とりい・まさみち
67年生まれ。音楽家。フュージョンという言葉を知ったのは音楽よりもまずドラゴンボールが先でした。

自分にはフュージョンをファンクの一種だと捉えているところがあります。そもそもファンクそのものが、ロックやラテン・ミュージックのリズムを取り入れたR&Bであり、フュージョン的な要素が強い音楽です。しかしそれを言い出したらすべての音楽はフュージョン的だと言えてしまいます。いずれにせよ自分にとってフュージョンの魅力はその非オーセンティシティーにあります。それを軽さと言い換えてもよいかもしれません。プレイヤーのソロよりも、もっぱらリフやグルーヴに興味・関心の中心があります。今回のリストにはそうした趣味が反映されているように思います。

1位	Herbie Hancock/Head Hunters
2位	Donald Byrd/Black Byrd
3位	David Axelrod/Songs Of Experience
4位	Jan Hammer Group/Melodies
5位	Herbie Mann/Memphis Underground
6位	Jeff Beck/Wired
7位	Herb Alpert/Rise
8位	Azimuth/Azimuth
9位	The Crusaders/Street Life
10位	Billy Cobham/Spectrum
11位	Stuff/Stuff
12位	Pat Metheny Group/Offramp
13位	Freddie Hubbard/Red Clay
14位	George Duke/Dream On
15位	Airto Moreira/Fingers
16位	Quincy Jones/You've Got It Bad Girl
17位	Phillip Upchurch/Darkness, Darkness
18位	Weather Report/Heavy Weather
19位	Lee Ritenour/Rit, Vol. 1
20位	Bob James/One
21位	Ramsey Lewis/Sun Goddess
22位	Tom Scott/Tom Scott & The L.A. Express
23位	Bobbi Humphrey/Blacks And Blues
24位	Jaco Pastorius/Jaco Pastorius
25位	Corneil Dupree/Teasin'
26位	Joe Zawinul/Di-A-Lects
27位	Ornette Coleman & Prime Time/Virgin Beauty
28位	Larry Coryell/Fairyland
29位	Roy Ayers Ubiquity/Everybody Loves The Sunshine
30位	Al Di Meola/Scenario

能地祐子

のうじ・ゆうこ
64年生まれ。初めて英語で会話した外タレは、六本木ピットインで会ったウォーレン・バーンハートでした。

あくまで私見だが。ジェントル・ソウツの77年からステップスがステップス・アヘッドになった83年までの6年間こそが、本当の意味で"フュージョン"の時代だったと考えている。短いけど濃い、時代の変わり目に多彩な文化が芽吹いた安土桃山時代みたいな感じだ。『アドリブ』誌は毎号、暗記するほど熟読していた。生まれて初めての"推し活"は、リー・リトナーとマイケル・ブレッカー。デイヴ・グルーシンほどのイケオジはいないと思っていた。ジョニ・ミッチェルを知ったのは、ジャコ・パストリアスのおかげだ。私にとって、いろんな音楽の交差点みたいなジャンルだった。

1位	Stuff/More Stuff
2位	The Brecker Brothers/Heavy Metal Be-Bop
3位	The Writers/The Writers
4位	Lee Ritenour & His Gentle Thoughts/Gentle Thoughts
5位	Weather Report/8:30
6位	Larry Carlton/Larry Carlton
7位	Blue Montreux (Arista All-Stars)/Blue Montreux
8位	Dave Grusin/Discovered Again!
9位	Robben Ford/The Inside Story
10位	Neil Larsen/High Gear
11位	Herb Alpert/Rise
12位	Jaco Pastorius/Word Of Mouth
13位	Earl Klugh/Finger Paintings
14位	Lee Ritenour/Captain Fingers
15位	Steps Ahead/Steps Ahead
16位	David Sanborn/Hideaway
17位	Chick Corea/Tap Step
18位	Al Di Meola/Elegant Gypsy
19位	Herbie Hancock/Thrust
20位	The Jeff Lorber Fusion/Galaxian
21位	Miles Davis/The Man With The Horn
22位	Spyro Gyra/Morning Dance
23位	Harvey Mason/Marching In The Street
24位	David Matthews Presents Grand Cross/Grand Cross
25位	The Crusaders/Street Life
26位	Pat Metheny/80/81
27位	Billy Cobham/Total Eclipse
28位	Dave Valentin/Legends
29位	Ramsey Lewis/Sun Goddess
30位	The Blackbyrds/The Blackbyrds

CamScannerでスキャン

萩原健太

はぎわら・けんた
56年、埼玉県生まれ。74年の来日公演でのハービー・ハンコックの派手な身振りとドヤ顔が忘れられません。

80年代アタマ、ぼくは某ジャズ雑誌で音楽ライターとしての初レギュラー仕事をいただいた。時代はフュージョン・ブーム真っ只中。そんな環境下、次々出るジャズ系の新譜を聞きまくっていた。『スタッフ』の稿で書かせていただいたことを繰り返せば、なにせぼくはジャズ自体を〝R&Bインスト〟的な側面から楽しむタイプの邪なリスナーなもんで。新時代のグルーヴに積極的かつお気楽にアプローチを仕掛けがちなクロスオーヴァー〜フュージョン系の動きには心躍った。そこにファンキー・ジャズやジャズ・ロックからの脈絡を見つけてはにんまりしていたっけ。懐かしい。

1位 Weather Report/8:30
2位 The Crusaders/Scratch
3位 Stanley Turrentine/Sugar
4位 Stuff/Stuff
5位 The Cannonball Adderley Quintet/Country Preacher
6位 Miles Davis/On The Corner
7位 Lonnie Smith/Mama Wailer
8位 Herbie Hancock/Head Hunters
9位 George Benson/Breezin'
10位 Donald Byrd/Street Lady
11位 Les McCann/Layers
12位 Lonnie Liston Smith & The Cosmic Echoes/Expansions
13位 Ronnie Foster/On The Avenue
14位 Cornell Dupree/Teasin'
15位 Tom Scott & The L.A. Express/Tom Cat
16位 David Sanborn Band/Promise Me The Moon
17位 Ramsey Lewis/Sun Goddess
18位 Hank Crawford/Tico Rico
19位 Freddie Hubbard/Red Clay
20位 Art Farmer with Joe Henderson/Yama
21位 Horace Silver/In Pursuit Of The 27th Man
22位 The Brecker Brothers Band/Back To Back
23位 Hubert Laws/The Chicago Theme
24位 Gato Barbieri/Caliente!
25位 Jaco Pastorius/Word Of Mouth
26位 Jeff Beck/Wired
27位 Grant Green/The Main Attraction
28位 Return To Forever featuring Chick Corea/Where Have I Known You Before
29位 Steps Ahead/Steps Ahead
30位 James Blood Ulmer/Odyssey

原雅明

はら・まさあき
音楽の物書き、ringsレーベルのプロデューサー、DJ・選曲家、早稲田大学非常勤講師など。

ジャンルとしてのフュージョンが形成されるかされないかくらいの、時代的には70年代半ばあたりまでの、様々な試行錯誤の中にあるハイブリッドでエクレクティックな音楽に惹かれてきた。あるいは、80年代に時流の音楽としてあったフュージョンからちょっとズレてしまったようなファンク、ポストパンク、あるいはアンビエントのような音楽にも惹かれてきた。それらもひっくるめて、言葉本来の意味ではフュージョンだと捉えていいと思うし、時代をさらに経ていけば、昨今のアンビエント・ジャズもフュージョンと捉えられるのかもしれない、と思ってこの選出に臨んだ。

1位 Miles Davis/In A Silent Way
2位 Wayne Shorter featuring Milton Nascimento/Native Dancer
3位 Ornette Coleman/Of Human Feelings
4位 Miles Davis/Get Up With It
5位 Ornette Coleman/Dancing In Your Head
6位 Ornette Coleman & Prime Time/Virgin Beauty
7位 Miles Davis/On The Corner
8位 Miles Davis/Bitches Brew
9位 Egberto Gismonti/Academia De Danças
10位 Zawinul/Zawinul
11位 Hermeto Pascoal/Slaves Mass
12位 Ralph Towner/Solstice
13位 Eberhard Weber/The Colours Of Chloë
14位 Steve Coleman & Five Elements/On The Edge Of Tomorrow
15位 Azimuth/Azimuth
16位 Sun Ra/Lanquidity
17位 Lyle Mays/Lyle Mays
18位 Frank Zappa/Jazz From Hell
19位 Joe Zawinul/Di-A-Lects
20位 Jon Hassell/Power Spot
21位 Chick Corea/Return To Forever
22位 Weather Report/Black Market
23位 Pat Metheny Group/Still Life (Talking)
24位 Les McCann/Layers
25位 Herbie Hancock/Head Hunters
26位 The Brecker Brothers/The Brecker Brothers
27位 Donald Byrd/Black Byrd
28位 Alice Coltrane/Radha-Krsna Nama Sankirtana
29位 Neil Ardley/Symphony Of Amaranths
30位 Herbie Hancock/Mwandishi

CamScannerでスキャン

1位 Grover Washington Jr./Winelight
2位 Eddie Harris/E. H. In The U.K.
3位 Shakatak/Night Birds
4位 Bob James, David Sanborn/Double Vision
5位 Stanley Clarke/I Wanna Play For You
6位 Stuff/Stuff
7位 Earl Klugh/Earl Klugh
8位 Chuck Mangione/Land Of Make Believe... A Chuck Mangione Concert
9位 Jaco Pastorius/Jaco Pastorius
10位 Joao Donato, Deodato/DonatoDeodato
11位 Pat Metheny Group/Still Life(Talking)
12位 Lee Ritenour & His Gentle Thoughts/Gentle Thoughts
13位 Group 87/Group 87
14位 Incognito/Jazz Funk
15位 Azymuth/Águia Não Come Mosca
16位 Hubert Laws/Romeo & Juliet
17位 George Benson/Breezin'
18位 Lonnie Liston Smith & The Cosmic Echoes/Expansions
19位 Gato Barbieri/Chapter One: Latin America
20位 The Crusaders/Southern Comfort
21位 The Chick Corea Elektric Band/The Chick Corea Elektric Band
22位 Gary Boyle/Electric Glide
23位 Cesar Mariano & Cia./São Paulo • Brasil
24位 Larry Carlton/Alone/But Never Alone
25位 The Brecker Brothers Band/Back To Back
26位 Bob James/One
27位 Morrissey Mullen/This Must Be The Place
28位 The Eleventh House featuring Larry Coryell/Aspects
29位 Herbie Mann/Reggae
30位 Spyro Gyra/Spyro Gyra

原田和典

1位 Miles Davis/On The Corner
2位 Miles Davis/In A Silent Way
3位 Chick Corea/Return To Forever
4位 Miles Davis/Bitches Brew
5位 Weather Report/Heavy Weather
6位 Return To Forever/Romantic Warrior
7位 Jaco Pastorius/Jaco Pastorius
8位 Pat Metheny Group/First Circle
9位 Mahavishnu Orchestra/Birds Of Fire
10位 Weather Report/Sweetnighter
11位 Herbie Hancock/Head Hunters
12位 Zawinul/Zawinul
13位 Wayne Shorter featuring Milton Nascimento/Native Dancer
14位 The Tony Williams Lifetime/Emergency!
15位 Don Cherry/Hear & Now
16位 Flora Purim/Butterfly Dreams
17位 The Eleventh House featuring Larry Coryell/Aspects
18位 Brian Auger's Oblivion Express/Straight Ahead
19位 Joni Mitchell/Shadows And Light
20位 Shakti with John McLaughlin/Shakti with John McLaughlin
21位 Dom Um Romao/Dom Um Romao
22位 Ornette Coleman/Dancing In Your Head
23位 Devadip Carlos Santana & Turiya Alice Coltrane/Illuminations
24位 Billy Cobham/Spectrum
25位 Ramsey Lewis/Sun Goddess
26位 George Duke/Faces In Reflection
27位 Charlie Mariano/Helen 12 Trees
28位 Mike Mainieri/Wanderlust
29位 Michal Urbaniak's Fusion/Atma
30位 Jean-Luc Ponty/Cosmic Messenger

松井巧

CamScannerでスキャン

1位 Azymuth/Águia Não Come Mosca
2位 George Benson/Breezin'
3位 Deodato/Prelude
4位 Chick Corea & Return To Forever/Light As A Feather
5位 Donald Byrd/Places And Spaces
6位 Bobbi Humphrey/Blacks And Blues
7位 Quincy Jones/Sounds... And Stuff Like That!!
8位 Pat Metheny & Lyle Mays/As Falls Wichita, So Falls Wichita Falls
9位 Herbie Hancock/Sunlight
10位 Larry Carlton/Larry Carlton
11位 Dizzy Gillespie/Free Ride
12位 Roy Ayers Ubiquity/Lifeline
13位 Joyce Cooling/Cameo
14位 The Claus Ogerman Orchestra/Gate Of Dreams
15位 David Axelrod/Strange Ladies
16位 Bob James/Two
17位 Bob James/Sign Of The Times
18位 Grover Washington, Jr./Mister Magic
19位 Joe Sample/Rainbow Seeker
20位 Weather Report/Heavy Weather
21位 Herb Alpert/Rise
22位 Patrice Rushen/Shout It Out
23位 Wilbert Longmire/Sunny Side Up
24位 George Duke/Faces In Reflection
25位 Ramsey Lewis/Sun Goddess
26位 David T. Walker/David T. Walker
27位 The Crusaders/Street Life
28位 Maynard Ferguson/Conquistador
29位 Hubert Laws/Family
30位 Shakatak/Night Birds

松永良平

ガチガチのロック教育を受けて育ったので、かつては忌むべきジャンルとして嫌んじてきた。長じてからは中古レコード店での職歴が長いせいもあって、特に好きじゃないけど結構知っているジャンルの筆頭にもなった。安価でよく見かけているので、今は「フュージョン」とはシティ・ポップやソフト・ロックと同様に、異なる文脈にある同時代音楽をなんとなく総称する用語だとわかる。僕はファンク重視よりも、フラジル音楽が果たした役割が大きいサウンドのほうが今は好き。それにしても、十把ひとからげで捨てられていたものから始まる新しいリスニングはいつの時代も面白い。

1位 Miles Davis/In A Silent Way
2位 Miles Davis/On The Corner
3位 Miles Davis/Bitches Brew
4位 Weather Report/Black Market
5位 Herbie Hancock/Flood
6位 Chick Corea/Return To Forever
7位 The Brecker Brothers/Heavy Metal Be-Bop
8位 Jaco Pastorius/Word Of Mouth
9位 Blue Montreux (Arista All-Stars)/Blue Montreux
10位 King Curtis/Live At Fillmore West
11位 Quincy Jones/Mellow Madness
12位 Lonnie Liston Smith & The Cosmic Echoes/Expansions
13位 Seawind/Seawind
14位 George Duke/I Love The Blues, She Heard My Cry
15位 Cornell Dupree/Teasin'
16位 Herbie Hancock/Head Hunters
17位 Chick Corea/The Mad Hatter
18位 Herbie Hancock/Mr. Hands
19位 George Benson/Breezin'
20位 The Crusaders/Scratch
21位 Ramsey Lewis/Sun Goddess
22位 Weather Report/Heavy Weather
23位 Weather Report/Weather Report
24位 The Crusaders/Street Life
25位 David Sanborn/Straight To The Heart
26位 Stuff/Stuff
27位 Miles Davis/We Want Miles
28位 Bob James/Heads
29位 Billy Cobham/A Funky Thide Of Sings
30位 Lee Ritenour/First Course

村井康司

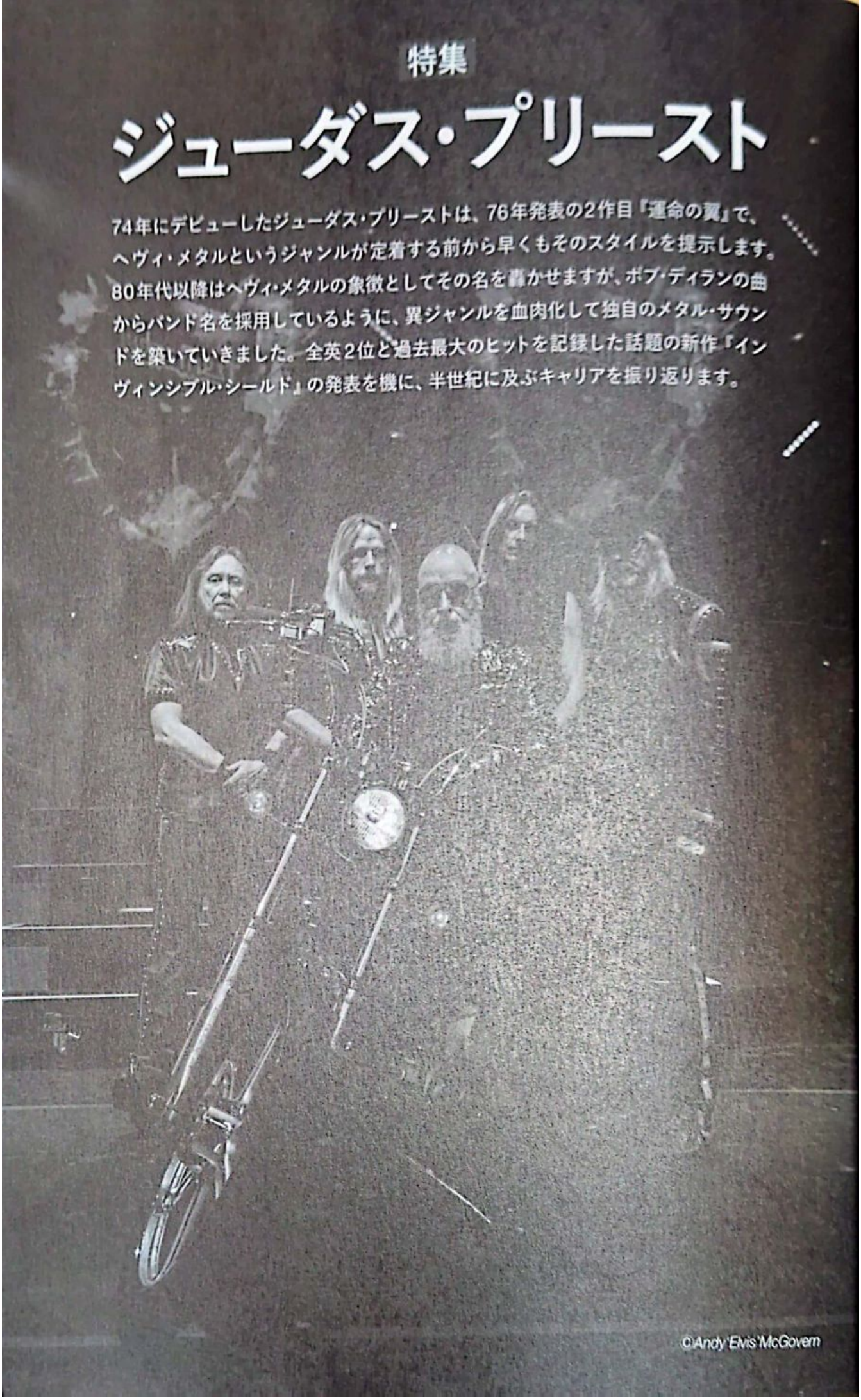
これは記事原稿に書いたことと大いに関係があるのだが、どうも70年代のマイルス・デイヴィスや初期ウェザー・リポートなどを「フュージョン」とすることに抵抗がある。クロスオーヴァー・フュージョン・ブームは70年代後半に本格化したこともあるし、単にかっこいいジャズ、と言えばいいじゃん！　それはバット・メセニー・グループにも言えることで、今回はマイルスとウェザーは入れたがメセニーは選ばなかった。もちろん大好きなんですが。グルーヴするリズムとよく練られたアレンジ、そして気持ちのいいソロ、という3拍子が揃えば、それが理想のフュージョンかな。

CamScannerでスキャン

特集

ジューダス・プリースト

74年にデビューしたジューダス・プリーストは、76年発表の2作目『運命の翼』で、ヘヴィ・メタルというジャンルが定着する前から早くもそのスタイルを提示します。80年代以降はヘヴィ・メタルの象徴としてその名を轟かせますが、ボブ・ディランの曲からバンド名を採用しているように、異ジャンルを血肉化して独自のメタル・サウンドを築いていきました。全英2位と過去最大のヒットを記録した話題の新作『インヴィンシブル・シールド』の発表を機に、半世紀に及ぶキャリアを振り返ります。



CamScannerでスキャン

左からリッチー・フォークナー（g）、ロブ・ハルフォード（vo）、スコット・トラヴィス（ds）、グレン・ティプトン（g）、イアン・ヒル（b）
©Andy'Elvis'McGovern

鋼鉄神の軌跡

革新を重ねながらもヘヴィ・メタルを貫いた半世紀

文＝杉原徹彦

ヘヴィ・メタルを代表するジューダス・プリーストが、デビュー50周年を迎えた。その節目に放った新作『インヴィンシブル・シールド』も大きな話題となっている。

ヘヴィ・メタルという、一般的には閉鎖的なイメージを持たれがちなジャンルを代表するバンドでありながら、彼らは積極的に多岐にわたる音楽的要素を取り込んできた。しかしながら、彼らを〝メタル・ゴッド〟と崇めている人たちの多くは、まるで興味がないかのようにそういった話は語らない。

以前、筆者がグレン・ティプトン（g）にインタヴュー（本誌05年8月号に掲載）した際、グレンは〈僕が聴いている音楽のほとんどは、ヘヴィ・メタルとは関係のないもの（中略）普段聴いている他の音楽が、ヘヴィ・メタルの曲を書くときに何らかの影響を及ぼしているんだろう〉と発言しているが、ジューダス・プリーストの音楽を丹念に聴き込んでいけば、この言葉は理解できるはずだ。ヘヴィ・メタルは苦手でも、ジャンルレスに大衆音楽を扱っている本誌の読者であれば、彼らの背景にある音楽は守備範囲という方も多くおられるのではないかと筆者は考えている。おこがましい言い方をすれば、いいきっかけさえあれば、

CamScannerでスキャン

聴かず嫌いの方をファンに取り込む下地がこのバンドにはあるというのが僕の立場だ。50年のキャリアを簡単におさらいしつつも、紙幅の許す限り、なるべく多くの具体例を挙げながら進めていきたい。

異ジャンルをメタル化する稀有な能力

ジューダス・プリーストがバーミンガムで結成されたのは69年。ただし、この時点でデビュー時のメンバーは一人もおらず、オリジナル・ラインナップとされるイアン・ヒル（b）とK・K・ダウニング（g）が揃ったのは70年代に入ってから。73年にロブ・ハルフォード（vo）が加入、74年にグレンが加わることで、ようやくアルバム・デビュー時のラインナップが整った。

74年のデビュー作『ロッカ・ローラ』は同年に設立されたガル・レコーズから発表。同じくガルからリリースされた76年発表のセカンド『運命の翼』はギタリスト二人を軸とする彼らのスタイルが確立された初期の傑作だが、グレンがピアノを弾く終盤の「エピタフ」にクイーンからの影響が顕著なことは、しっかりと押さえておきたい。

CBSに移籍しての3作目『背信の門』では、ガル時代にも録音したジョーン・バエズの「ダイヤモンズ・アンド・ラスト」をカヴァー。バンド名がボブ・ディランの67年作『ジョン・ウェズリー・ハーディング』の「フランキー・リーとジューダス・プリーストのバラッド」に由来することを鑑みれば、この選曲には洒落っ気を感じる。

もちろんハード・ロック系からの影響も随所に見られる。78年発表の『ステンド・クラス』収録の人気曲「エキサイター」はディープ・パープルの71年作『ファイアボール』のアルバム・タイトル曲のメタル版といった内容だ。同年発表の『殺人機械』では、エディ・ヴァン・ヘイレンのようなタッピングが聴けるが、ヴァン・ヘイレンのデビューも78年なので、この反応の速さは相当なものだ。彼らは、パンクやニュー・ウェイヴが流行ったときは大変な思いをしたという発言を繰り返しているが、英4位と本国では長きにわたって最高位を記録（新作の2位により塗り替えられた）した80年作『ブリティッシュ・スティール』では楽曲をソリッドかつコンパクトにまとめ、「ザ・レイジ」ではレゲエを導入するなどして時代に対応していたことも忘れがたい。

前書きで触れたインタヴューでグレンは、〈違う要素を取り入れながらも根底には自分たちのサウンドがある〉と発言しているが、それがもっともわかりやすいかたちで現われているのがフリードウッド・マックのカヴァー「グリーン・マナリシ」だろう。原曲は70年発表のシングルだが、スロウで重たくはあってもヘヴィ・メタルとはまったく異なる音世界。プリースト版は『殺人機械』のタイトル違いの米国盤『ヘル・ベント・フォー・レザー』に収録されているが、カヴァーと知らなければプリーストのオリジナル曲と言ってもわからない出来だ。

メタル・ファンからは不評を買ったが、北米進出を視野に入れた81年作の『黄金のスペクトル』ではギターの歪みを軽くして、ローリング・ストーンズの影響まで感じるサウンドを聴かせてくれた。

その反動もあってか、引き続き北米市場を意識した82年作『復讐の叫び』で彼らは

Fleetwood Mac
'The Green Manalishi (With The Two Prong Crown) / World In Harmony'
Reprise RS27007 [1970] (7")
ピーター・グリーン作のA面曲カヴァーはジューダス・プリーストの編曲能力の高さを示す好例

CamScannerでスキャン

ヘヴィ・メタルの象徴となる代表作を生むが、ここで時代も動く。83年開催の〈US フェスティヴァル〉が大きな契機となり、全米でヘヴィ・メタルがブームとなるのだ。

この時点で、ジューダス・プリーストはメタルの未来を託された同シーンの最重要バンドとなっていたのだが、デイヴィッド・ボウイのように変化を厭わない彼らは、続く『背徳の掟』で恐るべき進化を遂げる。LPでいえばA面は80年代ヘヴィ・メタルの最良のエッセンスが抽出されているのだが、驚愕なのはB面だ。シングルも切られた「誘惑の牙」間奏のテクノっぽいギター・リフに着目してほしい。この単音リフは、オーケストラ・マヌーヴァーズ・イン・ザ・ダーク「エノラ・ゲイ」のシーケンス・フレーズを彷彿させる。さらには、ループの構造をもつ「神への誓い」で締められる。

Orchestral Manoeuvres In The Dark
'Enola Gay / Annex'
Dindisc DIN22 [1980] (7")
表題曲のシーケンス・フレーズとB面の並びは異なるが、ピッチ・ベンドみたいなグリッサンドといい、「誘惑の牙」にはシンセ・ポップを昇華した趣がある

このB面に対しては、『復讐の叫び』推しのダイハードなファンから否定的な意見も目にするが、こういった多様な音楽的実験を試みる点こそがジューダス・プリーストの真骨頂だと筆者は思う。グレンと同じく、普段は〝ヘヴィ・メタルとは関係のない〟音楽を聴いている読者の方であればこそ、彼らの音楽に触れれば意外な背景に気づき、より深く楽しめるのではないかと思うのだ。

ループなどを導入しながらも、ヘヴィ・メタルという軸にブレがない『背徳の掟』は不朽の名盤だが、ダンス・ポップ路線への挑戦は続く。シンセサイズド・ギターを大胆に導入してモダン化を図った86年の次作『ターボ』では、シングル「ターボ・ラヴァー」のディスコ向けヴァージョンまで制作（余談だが、筆者は86年夏にザップやシェリル・リンが流れるサンフランシスコのディスコで、このヴァージョンがかかる場面に居合わせたことがある。歓喜と当惑が入り混じったフロアの様子は今も鮮明に覚えている）。現時点では残念ながら未発表だが、この時期にストック・エイトキン・ウォーターマンとのコラボレーションも進められ、21年にディスクユニオンから邦訳版も出た『ロブ・ハルフォード回想録』によれば、ロブはカイリー・ミノーグ「ラッキー・ラヴ」が大好きということだ。

Kylie Minogue
'I Should Be So Lucky / I Should Be So Lucky (instrumental)'
PWL PWL8 [1987] (7")
ロブ・ハルフォードをも虜にした全英1位のセカンド・シングル。邦題は「ラッキー・ラヴ」

ストック・エイトキン・ウォーターマンとのコラボ曲が発表されぬまま、打ち込みのドラムだけが採用された88年作『ラム・イット・ダウン』は、「ヘヴィ・メタル」「ハード・アズ・アイアン」「モンスターズ・オブ・ロック」といった曲名のとおりパブリック・イメージに合致した内容だが、打ち込みサウンドとの相性が悪く、音楽的には評価しがたい。とはいえ、チャック・ベリー「ジョニー・B・グッド」のカヴァー収録は、本誌的に重要なトピックだろう。

バンドを蘇生に導いた若手ギタリスト

現在まで在籍するスコット・トラヴィス（ds）が加わった90年作『ペインキラー』。スウィープ・ピッキングを取り入れたギタ

CamScannerでスキャン

ーツが人気のアルバム・タイトル曲をはじめ、「入魂の一作」という表現が決して大げさではない〈ヘヴィ・メタルの名盤だ。『殺人機械』のタッペックにあるような同様に、高品のギター・サウンドにあるスウィープ・ピッキングが導入されたスタイルを前新し続けていくのバンドの方向を示したと同時に、技術革新にも積極化していく作りに時代を反映するも感じたが、『ペインキラー』が時代に風化せず名作となったのも、このビートアップが要因だろう。だが、本作発表後にロブが脱退し、バンドにとっては大きな転換点となった。

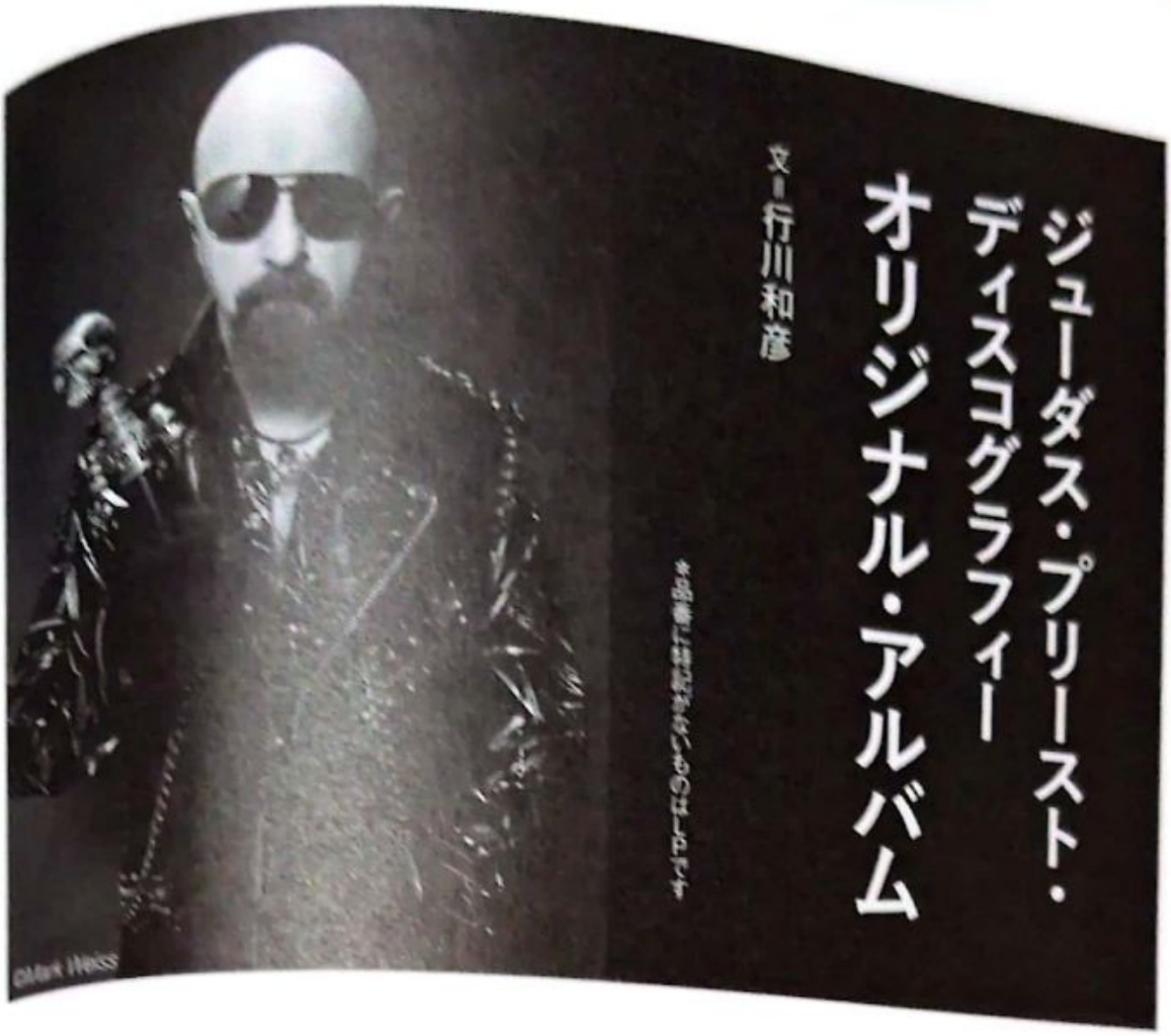
グランジが台頭した90年代前半は、多くのヘヴィ・メタル・バンドにとって逆風が吹いた。ジューダス・プリーストのような大御所であっても例外ではなく、ティム・オーウェンズ（※）を迎えた新作アルバムをレコード契約を失った中で97年と01年にリリースするも、ロブ在籍時のような好反応は得られなかった。音楽的には新世代メタル・バンドのエッセンスを導入し、結果的にはロブが復帰した05年作『エンジェル・オブ・レトリビューション』でその効果を発揮するのだが、グランジ以降の90年代に流行したヘヴィ・メタル以外のインプットがあまり感じられないというのが実は彼らしくなく、この時代の弱みとなってしまったというのが私見である。

全盛期の彼らを彷彿させる『エンジェル・オブ・レトリビューション』に続き08年にリリースされたのは、初のコンセプト作となる挑戦的な内容の『ノストラダムス』。前述した筆者とのインタヴューでグレンは〈映画のサウンドトラックが好き（中略）ドラマティックでいい〉と語っていたが、そういった嗜好が反映された作品といえる。ロック・オペラ的な作風ということもあるが、これまでで最もクラシック音楽からの影響が感じられるアルバムでもある。

10年暮れにワールド・ツアーからの引退を宣言。そして何と、翌11年にダウニングがバンドからの脱退を表明する。最後のワールド・ツアーはグレンより30歳以上も若いリッチー・フォークナーを迎えて行なわれるのだが、この新ギタリストの加入がジューダス・プリーストの蘇生に繋がったことは言うまでもないだろう。デビュー40周年のタイミングで発表された14年作の『贖罪の化身』、全英、全米6位と、全米では過去最高の6位となった前作を上回るヒットを記録した18年作『ファイアーパワー』。そして、遂に全英では5位まで上り詰めた大ヒット最新作『インヴィンシブル・シールド』と、彼らは今も最高記録を更新し続けている。親子ほど歳の離れたメンバーと共通する音楽的バックグラウンドをもつリッチーが、作品を重ねるごとにバンドにフィットしていることも成功の要因だ。

『贖罪の化身』以降の3作品は、バンドが自らのキャリアを総括したような内容になっている。リッチー自身がジューダス・プリーストの大ファンであることも大きいが、そもそも『贖罪の化身』はワールド・ツアーからの引退を発表した後に世に出たアルバムだ。バンドのキャリアを総括した内容になったとしても自然なことだろう。

『インヴィンシブル・シールド』が最終作になる可能性を鑑みると、同作のデラックス・エディションが『ザ・ロジャー』というトラックで締められるのは意味深長だ。『復讐の叫び』『背徳の掟』でも楽曲を提供したボブ・ハリガン・ジュニアの作だが、このタイトルからデイヴィッド・ボウイを連想しない人はいないだろう。スタイルに固執せず、まるで"間借り"するかのように様々なジャンルを取り込む姿勢が共通する両者だけに、何とも象徴的な曲名だろうか。



ジューダス・プリースト・ディスコグラフィー
オリジナル・アルバム

文＝行川和彦

＊品番に特記がないものはLPです

Rocka Rolla

ロッカ・ローラ

Gull GULP1005 [1974]

[A] ①One For The Road ②Rocka Rolla ③Winter ④Deep Freeze ⑤Winter Retreat ⑥Cheater

[B] ①Never Satisfied ②Run Of The Mill ③Dying To Meet You ④Caviar And Meths

地元の先輩ブラック・サバスを手掛けてきたロジャー・ベインがプロデュースしたファースト。アル・アトキンスがヴォーカル時代に作った3曲も含み、グレン・ティプトンが2曲のみでイアン・ヒルが2曲のソングライティングに関与という点も本作の特徴だ。ヘヴィ・メタルというよりハード・ロックという言葉が似つかわしいブルージーな曲も目立ち、ロブ・ハルフォードがハーモニカを吹いているのも象徴的。サイケデリックの味わいも濃く、静かなパートを活かしている点もブリティッシュ・ロックの伝統を踏まえている。

ハルフォードのハイ・トーン歌唱スタイルは既にできあがっており、機械的ではなく味のある声だ。ラヴ・ソングを含む内省的な曲も多いが、戦争をイメージするB③の歌詞はジューダス・プリーストの最新作まで続く世界観の一つ。ティプトンが早々とシンセサイザーも使ってはいるが、ツイン・ギターの使い方など後のスタイルにつながるアップ・テンポのA②には、彼らの素朴なロック愛が溢れている。まさに原点だ。

CamScannerでスキャン

Sad Wings Of Destiny
運命の翼
Gull GULP1015 [1976]

[A] ①Victim Of Changes ②The Ripper ③Dreamer Deceiver ④Deceiver
[B] ①Prelude ②Tyrant ③Genocide ④Epitaph ⑤Island Of Domination

旧来のハード・ロックとは一味違うヘヴィ・メタルの原型を提示したセカンド。引き続きアトキンス在籍時の曲も含むが、以降のほとんどの曲と同じくティプトンがソングライティングに関わる体制になり、ジューダス・プリーストの個性が確立した作品と言える。

レッド・ツェッペリンやディープ・パープル、ブラック・サバスの様々な曲からの影響を消化しつつ、静と動の対比と緩急つけたテンポでドラマチックに聴かせ、ブルースから解き放たれる過程で金属質のリフが主導であるがゆえにヘヴィ・メタル。その代表が8分近くのA①と続く②だが、ピアノ主導のインストB①、クイーンや後期ビートルズを思い出すコーラスのB④など多彩だ。フラストレイションがモチーフと思われるが、曲名からイメージできるようにバンド名にふさわしい刺激的な言葉の歌詞が最も並ぶアルバムという点でも、ヘヴィ・メタルの権化。永井豪作品をはじめ日本のSF漫画を思い出し、ファンタジックでありつつ戦いをイメージさせるジャケットも、ヘヴィ・メタルらしい。

Sin After Sin
背信の門
CBS S CBS82008 [1977]

[A] ①Sinner ②Diamonds And Rust ③Starbreaker ④Last Rose Of Summer
[B] ①Let Us Prey ②Call For The Priest / Raw Deal ③Here Come The Tears ④Dissident Aggressor

ディープ・パープルの解散直後にロジャー・グローヴァーがバンドとプロデュースしたタイミングも象徴的なサード。パンク・ムーヴメント真っただ中でも全英23位まで上昇したメジャー第1弾だ。

B①④などは2本のギター・ソロやテンポ感も含めて次作以降の曲を導くサウンドで、特に後者の曲はスレイヤーがカヴァーしたことにも先駆性が表われている。助っ人として全面参加のサイモン・フィリップスが演奏した、ダブル・バス・ドラムもポイントだ。後にアンスラックスをプロデュースするマーク・ドッドソンがエンジニアを務めた影響か、金属質が増した音作りも重要。本作の中で最もキャッチーなジョーン・バエズのカヴァーのA②は、以降セット・リストから外れない曲である。

前作の「ジェノサイド」の歌詞でもあるアルバム・タイトルやジャケットに表われているように、荘厳な佇まいもバンド名にふさわしい。〝悪魔〟と〝神〟と〝戦争〟が歌われるA①にはジューダス・プリーストの世界観が特に表われ、普遍的に現実を描く暗喩表現だ。

CamScannerでスキャン

Stained Glass

Killing Machine

CamScannerでスキャン

Unleashed In The East
イン・ジ・イースト
CBS S CBS83852 [1979]

[A] ①Exciter ②Running Wild ③Sinner ④Ripper ⑤Green Manalishi (With The Two Pronged Crown)
[B] ①Diamonds And Rust ②Victim Of Changes ③Genocide ④Tyrant
[C] ①Rock Forever ②Hell Bent For Leather
[D] ①Beyond The Realms Of Death

79年2月の東京公演の模様をピックアップした初のライヴ盤。彼が本国ではなかったハルフォードがヴォーカルを録り直したようだが、威厳とポピュラリティのバランスが取れて彼らの魅力が凝縮されたからこそ、英国チャートで初のトップ10入りを果たす。

まもなく長年、セット・リストから外されるA①を筆頭に、スタジオ録音ヴァージョンより何倍も、音がタイトかつパワフルかつソリッドで引き締まり、突き抜けている。初期のブラック・サバスを録り、以降、10年近く活動を共にするトム・アロムのプロデュース力も特筆すべきだ。そう、これは80年代のジューダス・プリーストのサウンドの予告編であった。

"解き放たれた"というアルバム・タイトルは、本作の空気感にふさわしい。下部の文字等を削除したジャケットで『プリースト・イン・ジ・イースト』という表題の日本盤の7インチEPは、「ビヨンド・ザ・レルムズ・オブ・デス」がカットされ、「デリヴァリング・グッズ」「スターブレイカー」を収めた4曲入りである。

British Steel
ブリティッシュ・スティール
CBS S CBS84160 [1980]

[A] ①Rapid Fire ②Metal Gods ③Breaking The Law ④Grinder ⑤United
[B] ①You Don't Have To Be Old To Be Wise ②Living After Midnight ③The Rage ④Steeler

英国の製鉄会社名でもあるアルバム・タイトルだが、地元の工場の金属音からも触発されていたバンドだし、全英チャート4位まで上昇した本作のバーカッシヴな音作りにピッタリだ。情緒性は必要最小限にメタルの核を濃縮し、ジャケットどおり切れ味鋭く端的。贅肉を削ぎ落した音と曲で展開し、メロディアスな曲を含もうがポップに聞こえない作りも高得点だ。

トム・アロムの単独プロデュースに加え、ドラマーがデイヴ・ホランドに固定したことも大きく、パワー・ヒッティングがバンドをリズム強化のネクスト・ステップに進めたことも実感。ティプトン＋ハルフォード＋K・K・ダウニングの共作体制の始まりでもある。

米国盤で1曲目になったA③は、歌詞も含めてハルフォードが肯定的に捉えていたパンク・ロックそのもの。結果的に彼の代名詞の曲になった問答無用のA②、ライヴで合唱必至のA⑤やB②などセット・リストの常連曲を多数収録。アイアン・メイデンをはじめとする英国の新興ヘヴィ・メタル勢との共振も言うまでもない強力作だ。

CamScannerでスキャン

Point Of Entry
黄金のスペクトル
CBS S CBS84834 [1981]

[A] ①Heading Out To The Highway ②Don't Go ③Hot Rockin' ④Turning Circles ⑤Desert Plains
[B] ①Solar Angels ②You Say Yes ③All The Way ④Troubleshooter ⑤On The Run

よりキャッチーな方向性を目指したような7作目のオリジナル・アルバム。アップ・テンポとミディアム・テンポを織り交ぜた曲は多彩で、A③はブラック・サバスの「パラノイド」を想起し、A④はセックス・ピストルズ「サブミッション」風のパートから流麗になだれこみ、締めは久々にブルース・ハード・ロック・ナンバーだ。サウンドがポップとは言わないが、全体的にコマーシャルな印象も。前作の反動か音作りもゆるめだ。

ラヴ・ソングが中心と思われる歌詞は、それまで小出しにしてきた〝根はシンプルなロックンロール・バンド〟と言いたげな内容が目立ち、バンド名とのギャップが大きい。曲や音と共振して深みと攻撃性に欠け、自問自答しているようなA④には当時の彼らの迷いが表われている。思わせぶりで抽象的なアルバム・カヴァーどおりに、すべてにおいて中途半端な緊張感で針が振り切れてない印象が拭えず、裏ジャケット等にメンバー写真が印刷されてないのも異例だ。傑作と傑作の間に挟まれている立ち位置上、過渡期にも関こえる。

Screaming For Vengeance
復讐の叫び
CBS CBS85941 [1982]

[A] ①The Hellion ②Electric Eye ③Riding On The Wind ④Bloodstone ⑤(Take These) Chains ⑥Pain And Pleasure
[B] ①Screaming For Vengeance ②You've Got Another Thing Comin' ③Fever ④Devil's Child

もやもやした状態を突破したバーフェクトなヘヴィ・メタル・アルバム。チャートでそれまでの最高の17位まで上昇した米国マーケットを意識した作りが感じられるが、適度に乾いたメジャー・コーティングの音の質感ながら、曲の特性とメロディを活かしている。

前作の反省か再度トム・アロムの単独プロデュースで、雑然としかねないバンド側の意向を断ち切ったかのようだ。ベースが軸の中低音も際立ち、ドラムの音が大きめだからメリハリ十分。クールに切り込むギター・リフの連打もツイン・ギターの掛け合いも良し。楽曲クオリティやアルバム全体の構成も見事だし、絶対的に観客が盛り上がるA①②はドラマチックな不滅の流れで、B②と共に末永くライヴの人気ナンバーだ。AC／DCのジューダス・プリースト解釈みたいなB④は、〝Devil〟使用の曲名も含めて興味深い。

以降、姿を変えながらジャケットに登場する〝メタリックなモンスター〟が初めてアルバム・カヴァーを飾った点も重要。音と歌詞の世界観を丁寧に視覚化している。

CamScannerでスキャン

Defenders Of The Faith

背徳の掟

CBS CBS25713 [1984]

[A] ①Freewheel Burning ②Jawbreaker ③Rock Hard Ride Free ④The Sentinel

[B] ①Love Bites ②Eat Me Alive ③Some Heads Are Gonna Roll ④Night Comes Down ⑤Heavy Duty ⑥Defenders Of The Faith

前作より押しが強い作りのためか若干チャートは落ちたが、絶好調をキープして確実にパワー・アップした純ヘヴィ・メタル・アルバムである。言い得て妙なアルバム・タイトルに偽りなく〝メタル聖戦〟とも言えるほど力もこもっており、メタル讃歌のA①B⑤⑥は言わずもがな、ブラック・メタルの先駆けの声で歌われるエグいB②も含めて、ヘヴィ・メタルを極めんとしたような曲の連打。むろん絵空事ではなく、B③などからは反権力のニュアンスも感じる。

トゥー・マッチなほど音の強度を高め、やり過ぎ直前までギター・ソロは派手に突き詰め、音が分厚く作られている。と同時にエンジニアのマーク・ドッドソンが、このあと米国等の新世代のメタル系を次々とプロデュースしていくことを思うと本作の鋼鉄の音作りの影響は見逃せない。まだ黎明期のスラッシュ・メタルとの同時代性を感じるA①をはじめ、ストロング・スタイルのヘヴィ・メタル・サウンドの応酬の一方で、ニュー・ウェイヴのエレポップっぽいビート感のB①は次作につながる。

Turbo

ターボ

CBS CBS26641 [1986]

[A] ①Turbo Lover ②Locked In ③Private Property ④Parental Guidance ⑤Rock You All Around The World

[B] ①Out In The Cold ②Wild Nights, Hot And Crazy Days ③Hot For Love ④Reckless

ギター・シンセサイザーを大胆に導入し、濃厚な前作の反動か〝薄口〟で迫った問題作。〝ニュー・ウェイヴ・オブ・ブリティッシュ・ヘヴィ・メタル〟ではなくニュー・ウェイヴっぽいヘヴィ・メタルのA①を筆頭に、ジャケットのイメージどおりのカラフルな流線型のサウンドが楽しめる。ポップに音がハジけてキャッチーな曲が続くが、コマーシャル性に媚びているようには聞こえない。ギター・ソロもちゃんと入るし、ヴォーカルのハイ・トーンもバッチリだし、これはこれで迷いなく潔い〝ヘヴィ・メタル〟。部分的にニュー・オーダーやデペッシュ・モードも思い起こすが、00年代以降のイン・フレイムスなどの、エレポップと交錯したヘヴィ・メタル・サウンドを先駆けたようにも思える。

やはり音と歌詞は共振し、『黄金のスペクトル』以上に俗っぽい。A④は自分らの経験を踏まえた〝検閲〟にまつわる異色の歌詞だが、怒り露わではなく〝メタル・パワー・ポップ〟と言いたい音の曲。ジューダス・プリーストの人間味を感じる一枚だ。

CamScannerでスキャン

Priest...Live!

プリースト…ライヴ！

CBS 450639 1 [1987]

[A] ①Out In The Cold ②Heading Out To The Highway ③Metal Gods ④Breaking The Law

[B] ①Love Bites ②Some Heads Are Gonna Roll ③The Sentinel ④Private Property

[C] ①Rock You All Around The World ②Electric Eye ③Turbo Lover ④Freewheel Burning

[D] ①Parental Guidance ②Living After Midnight ③You've Got Another Thing Comin'

86年の6月に米国で録ったライヴ音源を、トム・アロムのプロデュースで編集。この3か月前にリリースした『ターボ』の曲が3分の1を占めるが、同作が賛否両論だっただけに〝救済〟の意味合いも感じられる。基本的なアレンジを維持していても、やはりライヴならではのダイナミズムで一気に聴かせ、以前の曲と混ぜても違和感がない。ギター・シンセサイザーを使っていようが、ドラムの音が大きいミックスでダイレクトに顔面直撃。キャッチーな80年代の曲オンリーのセット・リストで全体的に大味だが、ひたすらクールだった『イン・ジ・イースト』との空気感の違いにも、ジューダス・プリーストを取り巻く状況の変化が表われている。

他の彼らのライヴ盤よりも歓声が大きく、ハルフォードがMCで観客を鼓舞してコール&レスポンスのコーナーを設けるなど、一般的なコンサートの臨場感の作り。近未来的なイメージのジャケットがほとんどのバンドだけに原始的なデザインのアルバム・カヴァーも異色だが、フィットしている。

Ram It Down

ラム・イット・ダウン

CBS 461108 1 [1988]

[A] ①Ram It Down ②Heavy Metal ③Love Zone ④Come And Get It ⑤Hard As Iron

[B] ①Blood Red Skies ②I'm A Rocker ③Johnny B. Goode ④Love You To Death ⑤Monsters Of Rock

トム・アロムだけではなく主要メンバー3人も久々にプロデュースをしたことが、当時のアルバム作りの微妙な状況を物語る。ヴォーカルをはじめ意気込みたっぷりのサウンドだが、ある意味、よく言えば〝頭打ち〟で、空回りと行き詰まりを感じずにはいられない。

ジャケットとアルバム・タイトルどおりに、〝叩きつける／押し固める〟仕上がりだ。ツイン・ギターのスピード・メタルへの影響がフィードバックしたようなA①、リフがレッド・ツェッペリンっぽいハード・ロックのA③など、ハイ・トーンのヴォーカルとギンギンの音が目立つ。派手なギター・ソロもバッチリの一方で、B①⑤ではアンビエント〜インダストリアルな音の〝罠〟を仕掛けるなど、随所に実験的な工夫も見られる。

カヴァーB③はロックンロールへの屈折した思いが炸裂したかのようなサウンドで、セックス・ピストルズのヴァージョン以上に破壊的。ベタな曲名に表われているように、歌詞ではロック／メタル愛をあらためて叩きつけるが、徹底していると同時に気負いも感じる。

CamScannerでスキャン

Painkiller
ペインキラー
CBS 467290 1 [1990]

[A] ①Painkiller ②Hell Patrol ③All Guns Blazing ④Leather Rebel ⑤Metal Meltdown
[B] ①Night Crawler ②Between The Hammer And The Anvil ③A Touch Of Evil ④Battle Hymn ⑤One Shot At Glory

ひとまずトム・アロムから離れ、セカンドでエンジニアを務めたクリス・タンガリーディスをプロデューサーに起用したことに、原点を見つめた意識が感じられる。ドラマーが、ボール・ギルバートもメンバーのレーサーメに在籍し、現在までジューダス・プリーストの屋台骨を支えるスコット・トラヴィスにチェンジ。前任者以上のアタック感の音が、強度を増した90年代以降の現在進行形ヘヴィ・メタル・サウンドの要になった。

むろん音楽スタイルとしてその手のジャンルを借用したわけではないが、スラッシュ・メタルやデス・メタルをはじめとするエクストリーム・メタルへの回答みたいなフレーズが、随所から聞こえてくるのがたのもしい。6分強でも長さをまったく感じさせないA①を筆頭に、前作での試行錯誤を踏まえたメタルへの意地を感じる。いい意味で悲壮感すら漂うほど、最期、の力を振り絞ったハルフォードの熱唱は感情濃度でも群を抜き、魂が震えている。全曲タイトルだけでも痺れ、媚びない鉄壁のヘヴィ・メタル・アルバムだ。

Jugulator
ジャギュレイター
Steamhammer SPV085-18782 [1997] (CD)

①Jugulator ②Blood Stained ③Dead Meat ④Death Row ⑤Decapitate ⑥Burn In Hell ⑦Brain Dead ⑧Abductors ⑨Bullet Train ⑩Cathedral Spires

モダンというより、メタルの最前線に挑む気概に溢れたアルバムである。ハイ・トーンの歌唱からハードコア・スタイルの咆哮までいける、ティム"リッパー"・オーウェンズの強靭な新ヴォーカルを活かすべく、ギターのチューニングは下げられて音の質感は無機的な色合。静かなパートを設けながらジューダス・プリースト流のエクストリーム・メタル・サウンドの中に、鋭いギター・ソロと重いグルーヴ感を忍ばせている。歌詞も殺伐とし、ニヒリスティックだ。

旧来のファンの声援いの声を押しつぶすような確信に満ちたサウンドだが、『ペインキラー』の激烈メタル路線の流れとも言える。7年間のインターヴァルの賜物でもあるし、ハルフォードの足枷がなくなったがゆえの、暴走、にも聞こえる。『ラム・イット・ダウン』から最新作までほぼ続くマーク・ウィルソンの画のジャケットという点でも、ジューダス・プリーストの連続性の中で息づく意識のアルバム。と同時にバンド名の口ゴの大胆な変化に、新生ジューダス・プリーストの覚悟も。

CamScannerでスキャン

'98 Live Meltdown

'98ライヴ・メルトダウン

Steamhammer SPV089-18542 [1998] (2CD)

[1] ①The Hellion ②Electric Eye ③Metal Gods ④Grinder ⑤Rapid Fire ⑥Blood Stained ⑦The Sentinel ⑧Touch Of Evil ⑨Burn In Hell ⑩The Ripper ⑪Bullet Train ⑫Beyond The Realms Of Death ⑬Death Row

[2] ①Metal Meltdown ②Night Crawler ③Abductors ④Victim Of Changes ⑤Diamonds & Rust ⑥Breaking The Law ⑦The Green Manalishi (With The Two-Pronged Crown) ⑧Painkiller ⑨You've Got Another Thing Coming ⑩Hell Bent For Leather ⑪Living After Midnight

98年のツアーのライヴ・テイクを編集したアルバム。当時の最新作『ジャギュレイター』の曲がセット・リストの5分の1近くを占めるが、70~80年代の曲も不穏なナンバーが中心で米国狙いの路線の曲はほとんど入ってない。『ジャギュレイター』が、ジューダス・プリーストの硬派でシリアスな流れをくみ、硬いサウンドでつながっていることを示したみたいだ。コアなプリースト・ファンを射程に入れてバンドの本質を叩きつけたようで、オーディエンスも新生ジューダス・プリーストを歓待し、サビで合唱も巻き起こる。

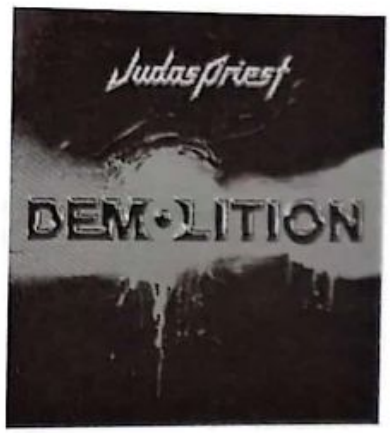
当時のハルフォードでは出せなかったと思しき声域駆使のオーウェンズの歌唱に、打ちのめされていることも想像できる観客のリアクション。鋼のヴォーカルにより、新世代のバンドに匹敵する強度で旧曲をアップデイトした。[1]⑩を始める前に「俺の名は!?」と場内に問いかけて観客が答えるなど、オーウェンズはステージ運びも上手い。2時間以上まったく弛緩せず、かといって緊張でもない。生体験した観客に感染するCD。

Demolition

デモリッション

Steamhammer SPV085-72422CD [2001] (CD)

①Machine Man ②One On One ③Hell Is Home ④Jekyll And Hyde ⑤Close To You ⑥Devil Digger ⑦Bloodsuckers ⑧In Between ⑨Feed On Me ⑩Subterfuge ⑪Lost And Found ⑫Cyberface ⑬Metal Messiah



ロゴは若干、昔のデザインに戻したが、ジューダス・プリースト史上唯一"画"や写真のないジャケットが、サウンドの"合理性"を象徴する14作目。曲ごとにソングライターは異なるが、アレンジとプロデュースを手がけただけにティプトンのカラーが強い。前作よりは旧来の色を残し、特にオーウェンズがディープに喉を震わせる③は、ハルフォードにも歌ってもらいたいほどのメタル・バラードの名曲だ。とはいえ、いかにものメロディやギター・ソロは80年代までの曲と比べればむろん激減し、インダストリアル・ロックのテイストやラップ・メタル調の曲も含む。音作りにもスキがなく、当時の米国産の新型メタルに通じるゴリ押しのサウンドとも言える。

歌詞はさらに激烈化して、エクストリーム・メタルやハードコア・パンクのような趣でもある。ますます生々しい言葉が目立つが、⑧の歌詞には極端な方向性と従来の表現の狭間の葛藤も感じられ、⑪も内省的。ラストは久々の"メタル宣言"で、次作を導いたとも言うのは僕だけではないだろう。

CamScannerでスキャン

Live In London
ライヴ・イン・ロンドン
Steamhammer SPV092-74262DCD-E [2003] (2CD)

[1] ①Metal Gods ②Heading Out To The Highway ③Grinder
④Touch Of Evil ⑤Blood Stained ⑥Victim Of Changes
⑦The Sentinel ⑧One On One ⑨Running Wild ⑩Ripper
⑪Diamonds & Rust ⑫Feed On Me ⑬Green Manalishi

[2] ①Beyond The Realms Of Death ②Burn In Hell ③Hell Is Home
④Breaking The Law ⑤Desert Plains ⑥You've Got Another Thing Coming
⑦Turbo Lover ⑧Painkiller ⑨Hellion / Electric Eye
⑩United ⑪Living After Midnight ⑫Hell Bent For Leather

ロンドンのブリクストン・アカデミーにおけるライヴ・アルバム。01年12月の収録から1年以上たってからの発売で、リリース数か月後にハルフォードがヴォーカル復帰するタイミングも〝微妙〟と言える。だが結果的にでも、オーウェンズ在籍時のジューダス・プリーストの集大成と言い切れる内容で、ファンの歓待ぶりも当然だ。

ファーストと『ラム・イット・ダウン』以外のすべてのスタジオ録音アルバムからやっている幅広い選曲が、意外とレアで嬉しい。『デモリッション』の曲は重すぎて多少違和感を覚えるが、広範囲に及びながらも一貫したジューダス・プリーストの〝ヘヴィ・メタル道〟を示したみたいだ。『黄金のスペクトル』と『ターボ』の曲も違和感なくフィットし、〝地獄つながり〟の[2]②③はオーウェンズ時代の良き〝遺産〟。昔の曲もゴリゴリの音作りだが、初期の名曲の[1]⑥は静かなバートの歌唱では歌心が溢れ、アスリート並みの肉体性を感じるそのエンディングのハイ・トーンの持続でオーウェンズの底力炸裂だ。

Angel Of Retribution
エンジェル・オブ・レトリビューション
Sony 519300 2 [2005] (CD)

①Judas Rising ②Deal With The Devil ③Revolution
④Worth Fighting For ⑤Demonizer ⑥Wheels Of Fire
⑦Angel ⑧Hellrider ⑨Eulogy ⑩Lochness

脱退時期のハルフォードのプロジェクトを手掛けていたロイ・Zがプロデュースしている15作目。ソングライティングは黄金時代の三頭体制で、やはり〝黄金時代〟のケミストリーが蘇っている。高らかな復活宣言の①のイントロからして、オーウェンズ在籍時代には薄らいでいた叙情性が滲む。音やリフにはその時期の流れも感じるが、とにかく風通しがいい。ハイ・トーンのヴォーカルが健在でも物腰が柔らかいハルフォードの声に合わせたような音域だし、格調も漂う。曲は多彩で、ブラック・サバスとエアロスミスが出会ったような③、「ボーン・トゥ・ビー・ワイルド」風の⑥、歌とピアノで進める⑨、バンド史上最長の13分半に及ぶ⑩など、意欲的だ。

歌詞は俗世から離れた作風をキープ。戦いがモチーフでも③をはじめ肯定的な意識が強く、70年代の曲を思い出す神聖な佇まいも。多少更新しつつロゴも復活し、〝翼つながり〟のジャケットのセカンドの表題から始まるブックレットの声明文にも、原点を見つめ直して〝再生〟する意思がみなぎる。

CamScannerでスキャン

Nostradamus

ノストラダムス

Sony BMG 88697315592 [2008] (2CD)

[1] ①Dawn Of Creation ②Prophecy ③Awakening ④Revelations ⑤The Four Horsemen ⑥War ⑦Sands Of Time ⑧Pestilence And Plague ⑨Death ⑩Peace ⑪Conquest ⑫Lost Love ⑬Persecution

[2] ①Solitude ②Exiled ③Alone ④Shadows In The Flame ⑤Visions ⑥Hope ⑦New Beginnings ⑧Calm Before The Storm ⑨Nostradamus ⑩Future Of Mankind

預言者ノストラダムスを題材にした物語を、103分近くにわたって繰り広げた"メタル・オペラ・アルバム"。大作志向という観点では、前作のラスト・ナンバーからの流れをくむ。外部の人間が制作に不関与だから、ティプトンとダウニングのみの初の"セルフプロデュース作"で、"シンセサイズド・ギター"も大きくフィーチャー。ドン・エイリー（kbd）が参加し、曲によってはストリングスも使われ、ティプトンが好むハンス・ジマーなどの映画音楽からの影響も感じられる。

普段と趣が異なる意識だからか、ジャケットのバンド・ロゴも違う。静かなパートを大切にしたヘヴィ・メタルが軸のバンド演奏を基本に様々な曲で構成しているが、疾走するロックンロールというよりは重厚かつ荘厳なアート。ヴェテランになっても挑戦的に攻め、浮世離れしたテーマが多かった70年代から連なるジューダス・プリーストの集大成だ。一気に全曲聴き通すには心の準備が必要だが、こういう極端なアルバムを作っておいたからこそ、"次"に進めた。

A Touch Of Evil: Live

ア・タッチ・オブ・イーヴル

Sony 88697545972 [2009] (CD)

①Judas Rising ②Hellrider ③Between The Hammer & The Anvil ④Riding On The Wind ⑤Death ⑥Beyond The Realms Of Death ⑦Dissident Aggressor ⑧A Touch Of Evil ⑨Eat Me Alive ⑩Prophecy ⑪Painkiller

ハルフォード復帰後の05年と08年の2作に伴う各ツアーから抜粋したライヴ・アルバム。ジャケットは見てのとおりだが、内容は素晴らしい。80年代のジューダス・プリーストの"第6のメンバー"とも言える、トム・アロムが久々にプロデュースしており、58分強のコンパクトにまとめた編集も相まって聴きやすいCDだ。

"ピュア・メタル・パワーとロウ・エナジーをキャプチャー"という、ブックレットに書かれたジューダス・プリーストの言葉に偽りなしのサウンドである。何しろドラムがカッコいいし、弦楽器隊の鳴りも良し。ハルフォードのヴォーカルも生々しく、ゴリ押ししないゲイのシンガーならではの繊細な歌心に打たれるばかりだ。もちろんオーウェンズ時代の曲はなしだが、昔の曲に新曲がよく馴染んでいる。既発のライヴ盤とあまりダブってない渋めの選曲もセールス・ポイントで、スロウ・パートが厳かなムードの⑤⑥や加速する⑩⑪という、6分以上の曲が続くあたりも弛緩せず緊張感をキープし、一杯楽しめる必聴の一枚。

CamScannerでスキャン

Redeemer Of Souls
贖罪の化身
Sony 88843072422 [2014] (CD)

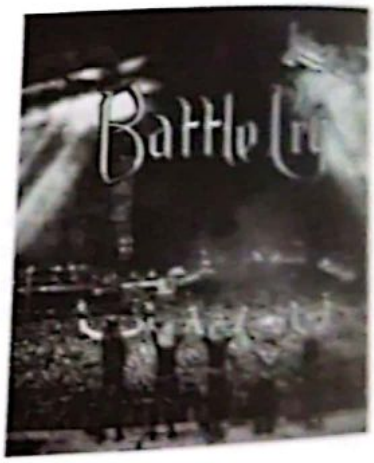
①Dragonaught ②Redeemer Of Souls ③Halls Of Valhalla ④Sword Of Damocles ⑤March Of The Damned ⑥Down In Flames ⑦Hell & Back ⑧Cold Blooded ⑨Metalizer ⑩Crossfire ⑪Secrets Of The Dead ⑫Battle Cry ⑬Beginning Of The End

[illegible]復帰にほぼ貢献したリッチー・フォークナー加入第1弾。ティプトン＋ハルフォード＋フォークナーの"新三頭体制"による共作クレジットで、クレイドル・オブ・フィルスやヘヴン＆ヘルを手掛けたマイク・エクセターが、ティプトンとプロデュースしている。

自身もその一人であるフォークナーが、"ジューダス・ファン"の望む方向性でバンドを華麗にアップデイト。"Welcome To My World Of Steel"というフレーズで幕を開ける①を筆頭に、鮮烈なリフとギター・ソロがバッチリの"ジューダス・プリースト節"全開だ。明快でダイレクトな作りは80年代の諸作を思わせ、70年代の侘び寂びや90年代以降のヘヴィ・スロウ・パートも組み込みつつ、ほどよいスピード感と適度な音圧に貫かれている点が大切。強い作風であっても強烈すぎず、ロマンも漂う。堂々としていて厳かな悲観の歌詞も、肩の力の抜けた歌声でポジティヴに昇華。ヘヴィ・メタルの矜持に満ち、まさに"魂の救世主"そのものの佳作だ。

Battle Cry
バトル・クライ～進撃の咆哮
Sony 88985302262 [2016] (CD)

① (intro) Battle Cry ②Dragonaut ③Metal Gods ④Devil's Child ⑤Victim Of Changes ⑥Halls Of Valhalla ⑦Redeemer Of Souls ⑧Beyond The Realms Of Death ⑨Jawbreaker ⑩Breaking The Law ⑪Hell Bent For Leather ⑫The Hellion ⑬Electric Eye ⑭You've Got Another Thing Coming ⑮Painkiller



[illegible]メタル・フェスティヴァル、ドイツのヴァッケン・オープン・エアで15年8月1日にレコーディングした約78分の実況録音盤。同タイトルのDVDの7曲目「ターボ・ラヴァー」とラストの「リヴィング・アフター・ミッドナイト」は外されているが、「ペインキラー」でビシッ！と締めるのもクールである。小曲の①を筆頭に当時の最新作の曲を含み、ほぼグレイテスト・ヒッツと言えるセット・リストだ。

フォークナーの"お披露目ライヴ・アルバム"でもあり、昔の曲も"現在進行形"のサウンドで瑞々しい。ソリッドかつタイトでも押しつけがましくない音の仕上がりで、ライヴらしくサウンドがやや塊の状態であっても分離良好。ギター・ソロの応酬も堪能でき、⑭の後半ではフォークナーの派手なプレイが、⑮ではティプトンの弾きまくりぶりが楽しめる。ハルフォードはうなり声も冴えわたり、絶好調のパフォーマンスに応えた観客の歓声も、野外ならではの広がりで適度に聞こえてくる。プロデューサーはトム・アロム。

CamScannerでスキャン

Firepower
ファイアーパワー
Sony 19075807382 [2018] (CD)

①Firepower ②Lightning Strike ③Evil Never Dies
④Never The Heroes ⑤Necromancer ⑥Children Of The Sun
⑦Guardians ⑧Rising From Ruins ⑨Flame Thrower ⑩Spectre
⑪Traitors Gate ⑫No Surrender ⑬Lone Wolf ⑭Sea Of Red

『復讐の叫び』や『ターボ』が派生したみたいな、加速イメージのジャケットの18作目。大半のライヴからひとまず離れたティプトンに替わって、ツアー・ギタリストも務めているアンディ・スニープが、お馴染みのトム・アロムと共にプロデュース。伝統を踏まえたモダンなメタル・サウンドを90年代半ば以降作ってきたスニープが、〝復帰〟したアロムと組んだことにより新旧のヘヴィ・メタルの感覚が見事に調和している。

全長58分強だが、緩急織り交ぜた個々の曲はわりとコンパクトでフック十分だし、サウンドはエモーショナルで叙情性も滲む。脳天気なロックンロール・ソングは本作にもないし、ラヴ・ソングと解釈できる曲もない。冷厳な現実世界を描いて〝戦い〟の意志を貫く歌詞が大半を占めるから音も頑強だが、ロブ・ハルフォードのヴォーカルはいい意味で弱さもはらむからリアルに響く。歳を重ねてますますストロング・スタイルで迫り、レイドバックとは無縁。メタルを超えて、これこそがロックの神髄だ。

Invincible Shield
インヴィンシブル・シールド
Sony 19658851642 [2024] (CD)

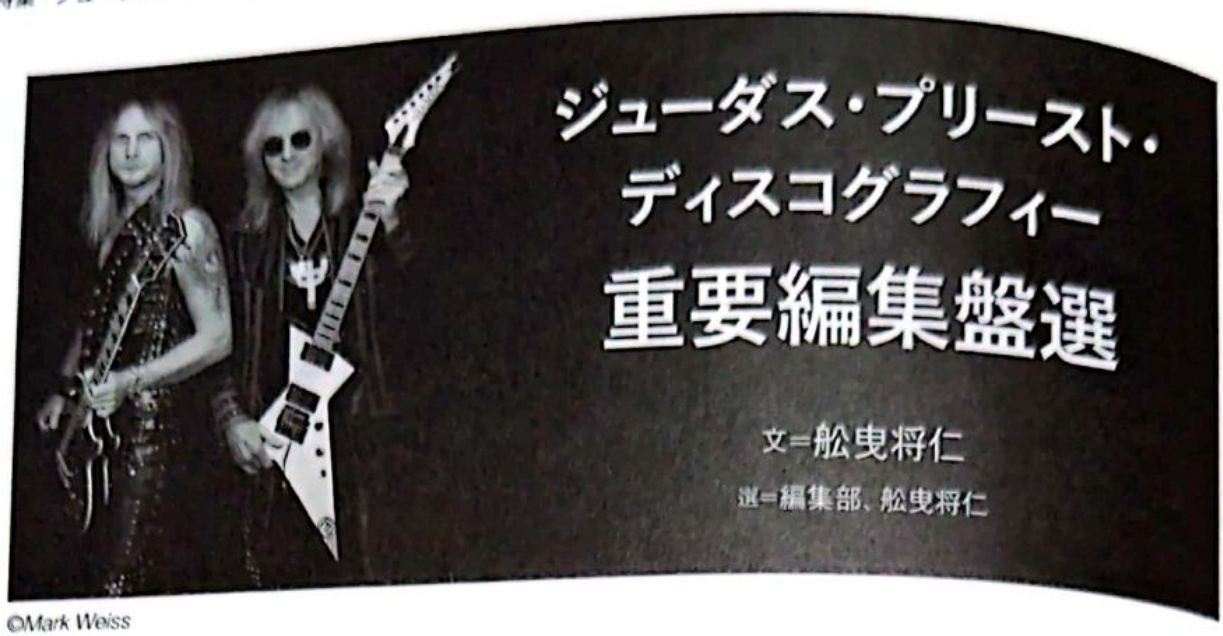
①Panic Attack ②The Serpent And The King ③Invincible Shield
④Devil In Disguise ⑤Gates Of Hell ⑥Crown Of Horns
⑦As God Is My Witness ⑧Trial By Fire ⑨Escape From Reality
⑩Sons Of Thunder ⑪Giants In The Sky

レコード・デビュー50周年にふさわしい力作である。アンディ・スニープがメインで、トム・アロムが最後の2曲を共同プロデュース。デラックス・エディションで追加した〝異色〟の3曲をあえて外し、53分弱に絞ったアルバムを一気に聴ける仕上がりだ。

アップ・テンポのキャッチーな曲の三連発で畳み掛けてから緩急の曲を織り交ぜ、⑤はややAC/DC風、フェイド・アウトが珍しい⑥はライヴで合唱必至の歌もの、⑧⑨のグルーヴはサウンドガーデンやコーンが頭をよぎる。パワフルなドラムもさることながら、硬すぎない官能的な質感のギターが目立つアルバムだ。惜しげもなく流麗なギター・ソロも重ねて繰り出され、ティプトンも演奏しているだろうが、フォークナーが弾きまくっている姿が想像できよう。

内省的かつ神話的なニュアンスを漂わせつつ、歌詞は昨今の世界情勢を見据えたかのようだ。〝団結すれば立ち、分裂すれば倒れる〟ということわざから始まるブックレットの声明文も含めて、メタル守護神としての決意を感じる一枚。

CamScannerでスキャン



ジューダス・プリースト・ディスコグラフィー 重要編集盤選

文=舩曳将仁
選=編集部、舩曳将仁

©Mark Weiss

The Best Of Judas Priest
Gull GULP1026
[1978] (LP)

74年のデビュー作『ロッカ・ローラ』、76年のセカンド・アルバム『運命の翼』を遺したガル・レコーズから発売された、ジューダス・プリースト史上初となるベスト盤。置いて飾るためのケース付きピクチャー・ディスク盤もあり。また、日本では78年の初来日公演記念盤として発売された。当然ながら全8曲ともに初期2作から選ばれているが、3作目『背信の門』に収録されたジョーン・バエズのカヴァー「ダイヤモンズ・アンド・ラスト」は、2作目用のセッションで録音されたアウトテイクのヴァージョン違いで収録されている。87年に初CD化された際に2曲を追加した全10曲入りに。01年にアメリカで再発されたCDには、78年リリース時の8曲に加えて、デビュー作でドラムを担当したジョン・ヒンチのインタヴューが収録されている。日本での最新盤である16年再発CDでは、4曲が追加された全12曲入りになり、初期2作の半数以上の曲を聴くことができるなど、内容の異なる複数のリイシュー盤がある。

Hero, Hero
Gull GUD2005～6
[1981] (2LP)

ジューダス・プリーストの人気の高まりを受けて、ガルが『ザ・ベスト・オブ…』からわずか3年後に発表した、2枚組LPで全17曲入り(組曲「ウィンター」「ディープ・フリーズ」「ウィンター・リトリート」を3曲として)のベスト第2弾。『ロッカ・ローラ』の全曲を収めているが、同作収録曲と『ザ・ベスト・オブ…』に収録された「ダイヤモンズ・アンド・ラスト」の別ヴァージョンは、『ロッカ・ローラ』をプロデュースしたロジャー・ベインによるリミックス音源で収録されている。2作目からも9曲中6曲が選ばれているが、人気曲「ザ・リッパー」がカットされているのは不可解。という声があったかどうか、89年に英キャッスル・コミュニケーションズからタイトルを『ザ・コレクション』に変更して発売されたCDでは、「ダイヤモンズ・アンド・ラスト」「キャヴィア・アンド・メス」をカットして、2作目の残り3曲を加えた18曲入りに。最新日本盤の16年再発CDは、81年の2枚組LPと同じ17曲入り。

CamScannerでスキャン

Metal Works '73-'93
Columbia 473650 2
[1993] (2CD)

『ペインキラー』でメタル・ゴッドの地位に復帰。それを受けてアナログ盤、CDともに2枚組で発表されたベスト盤。全32曲を収録。タイトルに〈'73~'93年〉とあり、彼らの全歴史を振り返るものと銘打たれているが、初期2作の曲の権利がバンド側になかったため、『ロッカ・ローラ』収録曲は一つもない。また、2作目収録曲の「ヴィクティム・オブ・チェンジズ」は79年発表のライヴ盤『イン・ジ・イースト』からのものを収録。各アルバムから満遍なく選曲されているが、トム・アロムがリマスターを手掛けており、音質・音圧のばらつきは感じられない。ディスク2枚を通してスピード&パワーを誇るヘヴィ・メタル曲が並んでいて圧巻だ。マーク・ウィルキンソンによる、歴代アルバム・ジャケットのモチーフをちりばめたイラスト・ジャケットも最高の出来。当時の日本盤CDには、メンバー写真及び年表が掲載された32ページのブックレット、また初回生産分にはメタル製バック・ステージ・パスが封入されていた。

Living After Midnight
Columbia 487242 2
[1997] (CD)

『メタル・ワークス 73・93』発表後にロブ・ハルフォードが脱退。ロブの後任にティム"リッパー"オーウェンズを迎え、97年の『ジャギュレイター』でシーンに復帰を果たす。そのタイミングで発表されたベスト盤。英盤（18曲）と米盤（16曲）で共通するのが10曲（「ヘリオン~エレクトリック・アイ」を1曲として）しかなく、3分の1ほどが異なる収録曲になっているのはファンの好みの違いがわかっておもしろい。各アルバムから数曲ずつ選ばれているが、『メタル・ワークス 73・93』とのかぶりを極力なくす意図かどうか、ヘヴィ・メタル曲重視の『メタル・ワークス 73・93』よりも音楽的な幅の広さを伝える選曲になっている。しかし、英盤がスプーキー・トゥース、米盤がフリートウッド・マックと、どちらもメタル色の薄いカヴァーから始まる意図はよくわからない。日本盤CDの収録曲は英盤に準拠。さらに、高音質SBM（スーパー・ビット・マッピング）音源で初の収録と謳われていた。

プリースト、ライヴ&レア!!
エピック（ソニー）ESCA7713
[1998] (CD)

日本独自企画の編集盤。7インチ及び12インチ・シングルのカップリングなどでアルバムには未収録のライヴ音源を中心に集めた全10曲入り。後に『メタロジー』などへ収録されるものもあるが、まとまってCD1枚で聴けるのはありがたい。ライヴ音源は公演別にまとめられていて、「イヴニング・スター」と「テイク・オン・ザ・ワールド」のカップリングだった78年のクリーヴランド公演音源が3曲、「ホット・ロッキン」のカップリングだった81年のオランダ公演音源が2曲、EPとして発売された83年のUSフェスティヴァル音源が3曲、「ペアレンタル・ガイダンス」のカップリングだった86年セントルイス公演から1曲の計9曲となっている。ラストに収録された「ターボ・ラヴァー」の〈ハイ・オクタン・ミックス〉は、「ペアレンタル…」のB面もしくは単独で86年にシングル・リリースされたもの。アルバム・ヴァージョンよりもデジタルさが強調されたアレンジの、約7分半に及ぶ長尺版というレアな音源だ。

CamScannerでスキャン

Metalogy
Legacy / Columbia COL512893 3
[2004] (4CD+DVD)

デビュー30周年を記念したボックス・セット。合成皮革張りの豪華な箱の中に4CDとDVDがセットされている。ガルとの契約問題が解消されて、デビュー作から「ネヴァー・サティスファイド」、2作目から「ディシーヴァー」「タイラント」を収録。ティム"リッパー"・オーウェンズ在籍時のアルバムからの曲を含む65曲入りだ。楽曲はほぼ年代順に並び、彼らの歴史を総括する内容になっている。大半はアルバム収録曲だが、未発表ライヴ音源の「誘惑の牙」、『ターボ』セッション時に録音された「ハート・オブ・ア・ライオン」のデモなど、レア音源もいくつか収められている。DVDには、まさに全盛期といえる82年12月12日、テネシー州メンフィスで行なわれたライヴ映像を収録。83年に日本でもVHS及びレーザーディスクで『ジューダス・プリースト・ライヴ』として発売されていた映像作品に2曲を追加したもので、同映像は、06年に『ライヴ'82〜復讐の叫び〜』としてDVD及びブルーレイで単独発売された。

The Essential Judas Priest
Columbia 82876766562
[2006] (2CD)

脱退していたロブ・ハルフォードが電撃復帰し、05年に『エンジェル・オブ・レトリビューション』を発表。その翌年にリリースされた2CDベスト。『エンジェル…』からの曲をトップとラストに配して、過去の曲を挟み込んだ全34曲入り。デビュー作とティム"リッパー"・オーウェンズ時代の2作からは選曲されていないが、それに対する不満は微塵も感じさせないほど、選ばれた曲は誰もが認める彼らのメタル代表曲ばかり。彼らがなぜメタル・ゴッドと呼ばれているかを端的に知ることができる入門編としても最適だ。08年には7曲入りのCDを追加した限定盤3CDも発売された。また、15年には2CDから「ユナイテッド」「ホット・ロッキン」「アウト・イン・ザ・コールド」の3曲をカットし、『ノストラダムス』(08年)と『贖罪の化身』(14年)からの曲と入れ替え、曲を年代順に並べ替えた全34曲入り改訂盤となって再発。その内容に準じた日本盤CDはタイトルが『メタル・クロニクル』に改められている。

British Steel: 30th Anniversary Edition
Sony 88697667402
[2010] (2CD+DVD)

全英4位を記録し、数々のシングル・ヒットも生みだした彼らの出世作『ブリティッシュ・スティール』の発売30周年記念エディション。2CDとDVDがセットされている。CD1には、01年再発時のリマスター音源によるアルバム本編と、ボーナス・トラックとして追加されていた『ターボ』セッション時に録音された未発表曲「レッド・ホワイト&ブルー」、「グライダー」のライヴ音源が収録されている。CD2には、09年8月17日にフロリダで行なわれた、『ブリティッシュ・スティール』のアルバム丸ごと再現を含むライヴ音源を収録。同作は英国と米国で曲順が異なっていたが、ライヴではアメリカでも英盤の曲順で披露されている。DVDには、CD2の映像版を収録。公演時に57歳のロブ・ハルフォードが振り絞るように響かせるハイ・トーンは、若い頃よりも強靭さを増したようで驚異そのもの。また、『ブリティッシュ・スティール』の制作にまつわるインタヴューも収録されている。

CamScannerでスキャン

Single Cuts
Sony 88697939612
[2011] (20CD)

10年末に最後のワールド・ツアーを行なうことを発表するが、そのツアー直前にオリジナル・ギタリストのK・K・ダウニングが脱退してしまう。バンドがゴタゴタしている時期に発表された本作は、彼らが77年から92年の間にイギリスで発表したシングル盤20枚をそれぞれCDフォーマットにして詰め込んだ20枚組ボックス・セット。オリジナルのスリーヴを紙ジャケ仕様で再現していて、写真や解説が掲載されたブックレットも同梱されている。アルバムと異なるエディット・ヴァージョン、各種編集盤に収録されてこなかったB面曲のライヴ・テイクなどをCDで聴くことができる。ひとつ残念なのは、12インチ・シングルにのみ収録されていた「ブリーホイール・バーニング」のギター・イントロがあるヴァージョンが未収録なこと。さすがに20枚組ボックスは敷居が高いというファンのために、A面曲だけを集めた[illegible]

The Chosen Few
Sony 88697969602
[2011] (CD)

各種ベストや編集盤をリリースしてきたジューダス・プリーストだが、そのなかでも変わり種の一枚。ハード・ロック、ヘヴィ・メタル系アーティストが選ぶジューダス・プリーストのベスト曲という、日本の音楽番組がやりそうな企画盤。しかし人選が豪華で、デフ・レパードのジョー・エリオット、メタリカのラーズ・ウルリッヒとジェイムズ・ヘットフィールド、スレイヤーのケリー・キング、ガンズ・アンド・ローゼズのスラッシュ、コーンのジョナサン・デイヴィスといったジューダス・プリーストの影響を受けた後輩たちだけでなく、ホワイトスネイクのデイヴィッド・カヴァデイル、アリス・クーパー、オジー・オズボーン、モーターヘッドのレミーといった彼らの先輩諸氏までが参加。ジョー・サトリアーニが「ペインキラー」を選ぶなど意外性もあるが、選ばれているのはどれも代表曲ばかり。もっとコアなこだわりを

Screaming For Vengeance: Special 30th Anniversary Edition
Sony 88725444662
[2012] (CD+DVD)

全米17位という成績でアメリカ進出を果たした『復讐の叫び』の、CDとDVDのセットによる発売30周年記念エディション。CDには、最初期の再発CDに比べると各楽器の分離と音の迫力が増した高音質リマスター音源による本編と6曲のボーナス・トラックを収録。ボーナス6曲のうち4曲は82年9月10日に行なわれたテキサス州サンアントニオ公演からのライヴ音源。残りの2曲は01年再発時のボーナス・トラックと同じで、82年12月12日のテネシー州メンフィス公演からの「デヴィルズ・チャイルド」、『ターボ』のセッションで録音された未発表曲「プリズナー・オブ・ユア・アイズ」を収録。DVDには、カリフォルニアで開催されたUSフェスティヴァルから、83年5月29日のメタル・デイに出演した際のライヴ映像を収録。09年にキングから発売されたDVD『USフェステ

CamScannerでスキャン

Defenders Of The Faith
Special 30th Anniversary
Deluxe Edition
Sony 88843087712
[2015] (3CD)

『復讐の叫び』に続いてヒットを飛ばした84年作『背徳の掟』の発売30周年記念エディション。CD3枚組で、CD1にはアルバム本編のリマスター音源を収録。ヘヴィ・メタル曲の数々が、重金属感を増している。01年の『背徳の掟』再発時に『ターボ』セッションからの未発表曲「ターン・オン・ユア・ライト」と、84年5月5日のカリフォルニア州ロング・ビーチ・アリーナ公演から「ヘヴィ・デューティー／ディフェンダーズ・オブ・ザ・フェイス」の2曲がボーナス・トラックとして収録されていたが、30周年記念エディションでは「ターン・オン・ユア・ライト」をオミット。CD2とCD3には、後者のロング・ビーチ・アリーナ公演をフル収録している。ファンにとってはブートレグでも有名な音源だったが、さすがオフィシャル・リリースされるにふさわしい音質に。バンドとしてもヘヴィ・メタル色を前面に押し出して人気が右肩上がりの時期で、カミソリのごとき切れ味のあるパフォーマンスを聴かせている。

Turbo 30
Sony 88875183272
[2017] (3CD)

バンド史上最大の賛否両論作となった『ターボ』。ギター・シンセサイザーの使用、メロディのポップさが増した楽曲という変化に、イギリスではチャート成績が下がり、アメリカでは前作をしのぐ17位になった。その事実も『ターボ』の性格をよく表わしているかのようだ。同作はその『ターボ』の3CD仕様による発売30周年記念エディション。CD1には本編のリマスター音源を収録。各楽器の音がクリアに分離されている一方で、デジタル感も強調されていて、改めてメタル・ゴッドらしからぬサウンドが浮き彫りに。その印象を払拭するのがCD2とCD3に収録された、86年5月22日にカンザスシティで行なわれたライヴの完全収録。『ターボ』に伴う北米ツアーからのもので、『ターボ』収録曲が他の代表曲に肉薄するメタル曲としてパフォーマンスされ、『ターボ』収録曲にも彼らの楽曲（メロディ）の魅力である攻撃性や勇壮さが色濃くあるということに気づかされる。結果、『ターボ』の再評価が高まることに。

50 Heavy Metal Years
Of Music
Sony 19439770842
[2021] (4CD)

結成50周年を記念して発表されたCD42枚組という強力無比のボックス・セット。全世界限定3000セットでリリースされた。これまでに発表した全オリジナル・アルバム及びライヴ・アルバムの305曲に、トム・アロムがリストア及びミックスを担当した未発表音源を収録した13CD（CD30〜42）の138曲、あわせて全443曲を収録している。CD30〜40には、79年のニューヨーク公演から91年のアーヴァイン公演まで計8公演分のライヴ音源を収録。CD41とCD42は〈ビヨンド・ライヴ&レア〉と題されているが、76年のスタジオ・デモ「エピタフ」以外はライヴ音源。デビュー間もない75年のアルバム未収録曲「マザー・サン」から、78年と79年の日本公演を含み、91年のモントリオール公演まで、さまざまな時代と場所のライヴ音源をオムニバス的に全25曲収録。ティム・リッパー・オーウェンズ時代のライヴ音源がないのは少し寂しい気も。ボックス・セットから16曲を抜粋したCD『リフレクションズ』もある。

CamScannerでスキャン

特集

ヴィサージとUKニュー・ウェイヴ・クラブ・シーンの夜明け

1978年、ブリッツの入り口に居並ぶ最初期のヴィサージ。左からラスティ・イーガン、ジョン・マッギオーク、バリー・アンダーソン、ビリー・カーリー、アイヴ・フォーミュラ、スティーヴ・ストレンジ、ミッジ・ユーロ ©Sheila Rock

ラスティ・イーガン・インタヴュー

“ニュー・ロマンティクス”の発火点“ボウイ・ナイト”発起人に聞く黎明期の混沌

文＝田山三樹

アフター・パンクの1978年、ロンドンの小さなナイト・クラブでひっそりと始まったイヴェント。それが“ボウイ・ナイト”である。その後、ヴィサージを結成するラスティ・イーガンとスティーヴ・ストレンジが企画したこのDJイヴェントはしかし、思わぬ発展を遂げていき、それまでありそうでなかったネオ・グラムを感じさせるニュー・ウェイヴ系のクラブ・シーンとして、“ニュー・ロマンティクス”（“ニュー・ロマンティック”とも）と呼ばれるバンドたちとともに一時代を作り上げた。

CamScannerでスキャン

今回、その仕掛け人であるラスティ・イーガンに、当事者の視点からシーンの興亡と生々しい〝内側の真実〟を語ってもらった。1-5ページにまとめたシーンの動向で概要をつかんで、ムーヴメントを追体験していただきたい。

ドイツの電子音楽に刺激を受けて

――今回は、ロンドンで起きたニュー・ウェイヴ系のクラブ・ムーヴメントについて伺いたいと思います。あなたと一緒にそのイヴェントを始めた故スティーヴ・ストレンジはのちに〝パンクはユニフォームになってしまったから〟と始めた動機を述べていましたが、あなたも同じ考えでしたか。

「一番の動機は、強く感じていた退屈さからの脱出だろうね。当時、僕はパンク・シーンにいて、クラッシュのオーディションを受けたりしていたんだけれど、リッチ・キッズに入った後、それまで〝クラウトロック〟という古臭いレッテルを貼られていたジャーマン・エレクトロニクス音楽に興味を持つようになったんだ。クラフトワークや、ブライアン・イーノと共演したクラスターとかね。一方、パンクはだんだんとただの暴力的な騒ぎの場になっていって、自分が求めるものから外れてしまった」

"Blitzed: The 80's Blitz Kids Story"
Monster/Pop Twist MVD11057D
[2023] (DVD)

――そこから次の行動に移ったわけですね。

「その頃、イギリスやパリなどでクラブ巡りをしたり、テレビ番組に出演した経験から〝シンセサイザーを使った新しいポップスは面白いぞ〟というインスピレーションを得たんだ。ドイツ勢以外でもジャーマン・ロックのコニー・プランクが手がけたイギリスのウルトラヴォックスとかマガジンなど、シンセをメインに使うバンドが多く出てきた。それで僕もエレクトロニクスを前面に打ち出した音楽を広めようと、スティーヴと一緒にビリーズというクラブで〝ボウイ・ナイト〟を始めて、グラム系やグレイス・ジョーンズの合間にジャーマンものや初期のテクノ系をかけてみたんだ。

でも、それが成功したら店側が使用料を上げてきたんで、いったんやめてドイツに渡った。デュッセルドルフでクラフトワークのラルフ・ヒュッターやフローリアン・シュナイダーと会ったり、ドイツのパンク・クラブに行ったのがすごく刺激的だった。そこでギター・サウンドの先をいくものが求められているという状況を見て、感じるものがあったね。ラ・デュッセルドルフの〈シルヴァー・クラウド〉という曲を聴いて、ディスコでかかる四つ打ちのリズムの曲で、こういうのもありなんだなとも思った。あと、イギリスとは違う、世界各国のエレクトロニック・ミュージックが普通に受け入れられているドイツの状況を見て、イギリスに帰ったらぜひ同じようにやってみようと思ったのさ」

――その頃のジャーマンものは、どこがそんなに魅力的だったのでしょうか。

「当時のジャーマン・ロックの先進的な人たちは、サウンドでも曲作りでも録音方法でも全部、先を行っていた。カンのホルガー・シューカイは、ラジオやテレビの音を取り込んでテープ編集だけで実験的なポップスを作ったんだよ。特に'Cool In The Pool'はすごかった。カンの'I Want More'やノイーの'E-Musik'もぶっ飛んでた」

――そして誕生したヴィサージですが、スティーヴとはクラブ・イヴェントと同時に

CamScannerでスキャン

ヴィサージ結成も計画していたんですか。

「というかね、ヴィサージっていうのは、リッチ・キッズで一緒だったミッジ・ユーロと僕が作っていたデモ録音から始まったんだ。ヴォコーダーを使った'In The Year 2525'やファーストにも入った'The Dancer'なんかはその頃の作品だ。そこにジョン・マッギオークやバリー・アダムソン、デイヴ・フォーミュラといったマガジンのメンバーたちも引き込み、ミッジが加入することになる新生ウルトラヴォックスのビリー・カーリーも加わって態勢が固まっていった。その計画に、伝説的プロデューサー、マーティン・ルーシェントが協力してくれて、彼のスタジオで本格的にヴィサージのレコーディングが始まったんだよ。

そして、79年暮れに新生ウルトラヴォックス初の米国ツアーに僕も同行したんだが、その時に出会ったのがロニーという女性パフォーマーでね。ミッジと構想していたバンドのシンガーには彼女がいいんじゃないかとも思ったんだが、スティーヴとはイヴェントを一緒にやっているし、彼がフロントマンとしてやっていた'The Photons'というバンドを見て、彼の方が適任かなと思ってミッジに相談したんだ。そんな経緯もあって、ヴィサージとほぼ同じメンツでロニーのシングル（スライ&ザ・ファミリー・ストーン'If You Want Me To Stay'のカヴァー）もレコーディングした。

The Photonsの'Mind Of A Toy'や'Far'といった曲もヴィサージ・プロジェクトに組み入れられ、僕はベルリンへの旅からインスパイアされた'Blocks On Blocks'や、海外経験の刺激に基づく'Visa-Age'、そして、YMOを聴いてすぐに作った〈モスクワの月〉などを持ち込んだ。'The Steps'や'Malpaso Man'なんかはその頃にメンバーみんなで観たいくつかの映画にインスパイアされている。そんななかで決まったのが、このプロジェクトでスティーヴには、バンドの顔としての役割を果たしてもらうということ。それによって僕ら他のミュージシャンは、バンドに縛られることなく他のプロジェクトにも参加できる自由を得たんだ」

新しい音楽が生んだものは

――クラブ・イヴェントの運営とバンド、二足の草鞋はどうでしたか。

「もう散々だったというか…僕はビジネスに疎かったし、スティーヴに至ってはドラッグなどに湯水のように金を使っていた。彼は…要するにやり過ぎた。ビジネス、個人的欲望、どれに対してもね。

僕はアルコールもドラッグも体質的にまったく受け付けなかったから、音楽作りやDJ稼業だけをハマる対象にできたんだな。あと、昔から友人のバンドの手助けをするのが好きなたちで、ウルトラヴォックスの米国ツアーを手伝ったり、スパンダー・バレエの最初の公式ライヴをブリッツでやるという企画を実現させたりしていたよ」

――ムーヴメントはブリッツに移ってからどんどん大きくなって、キャパが10倍くらいのカムデン・パレス開店まで到達します。これらのクラブはどのような場所でしたか。

「正直なところ、あれはムーヴメントと呼べるようなものじゃなかったよ。僕らみんな、何か特定のムーヴメントの一部として分類されることを嫌っていたからね。

それと、内情については、バンド系に限らずブリッツ周辺の多くは十代の家出少年のような連中で、セクシャリティもいろいろあったというか…。彼らのような男の子を描いたブロンスキー・ビートの〈スモールタウン・ボーイ〉という曲があるけれど、あの当時、地方から夢を持ってふらふらロ

CamScannerでスキャン

UKニュー・ウェイヴ・クラブ・シーンの動向

作成＝田山三樹

1978年

秋ごろ、スティーヴ・ストレンジとラスティ・イーガンによって、ロンドンのソーホー地区にあるキャバシティー250人ほどのクラブ：ビリーズ(Billy's)で彼らが理想とする初めてのクラブ・イヴェントが開催される。"Fame Fame Jump Abroad The Night Train" "What's Your Name"という文字が踊る、デイヴィッド・ボウイへのオマージュに溢れるフライヤーが配られ、パンクに飽き始めた若者の潜在的なグラム志向を掘り起こして好評となる。以降、週1回のペースで開催され、"ボウイ・ナイト"と称されるようになる。レコードをかけるだけでバンドの出演はなかったため、当初は音楽誌も取り上げなかったこのクラブ・イヴェントは口コミだけで広がり、やがて大きな動きとなっていく。

1979年

好評を博したイヴェントはビリーズではキャパシティ的に無理があり、常に店の外に大行列ができる状態だったため、一時期中断を挟んで、2月には新たにコヴェント・ガーデンにあるワイン・バー：ブリッツ(Blitz)に拠点を移し、スケールアップする。ビリーズから離れた後にドイツに視察旅行に行ったラスティが持ち帰った最新のジャーマン・エレクトロニック・ミュージックや、当地で視察したクラブのスタイルを加味して、ブリッツは独特の美学を持つ艶やかなファッションと、レトロでデカダンな雰囲気、そして最新のエレクトロニック・ミュージックや良質なグラム・ロックが溢れる非常にヒップな空間となった。この過程で、音楽的な幅が広がったムーヴメントの内容と比較すると狭義となった"ボウイ・ナイト"の名称は自然消滅していった。

ここまでの動きと軌を一にして、スティーヴや、当時、ラスティが在籍したリッチ・キッズのバンド仲間で、その後、ウルトラヴォックスに加入することになるミッジ・ユーロ、ウルトラヴォックスのキーボード奏者でゲイリー・ニューマンのツアーにも参加したビリー・カーリーやマガジンのメンバーたちによるレコーディング・チームであるヴィサージが、デモなどを作りつつ形を整え始める。

そして、ブリッツが作ったシーンからは、関係者らから後押しを受けたスパンダー・バレエもこの年に登場。その後、ブリッツ・クラブのハウス・バンド的な存在となり、80年にメジャーのクリサリスからシングル 'To Cut A Long Story Short'、81年にデビュー・アルバムを発表。

1980年

79年のデビュー・シングルがレコード会社側の都合で不発に終わった後、新たにメジャーのポリドールと契約したヴィサージのファースト・アルバム『フェイド・トゥ・グレイ(原題:Visage)』が11月に発売される。ヨーロピアン・フィーリング溢れる 'Fade To Grey' がシングル・カットされ、ドイツを始めヨーロッパ各国でヒットした。

この頃から、このクラブ・シーン周辺から現われた、あるいはファッションや音楽性の点で共通点があると音楽誌が見做したバンドやアーティスト(デイヴィッド・シルヴィアンやアダム・アントらはその見立てを断固拒否)を"ニュー・ロマンティクス"と呼ぶようになった。最初にこの言葉を使ったのは、のちの81年に「アインシュタイン・ア・ゴー・ゴー」のヒットを放つことになるランドスケープのメンバーで、スパンダー・バレエのファースト・アルバムをプロデュースした、リチャード・ジェイムズ・バージェスだと言われている。

ブリッツにはデイヴィッド・ボウイを初めとする各界の有名人が訪れたが、ミック・ジャガーがスティーヴのドア・ポリシー(ドレス・チェック)によって入店を拒否されるなどの出来事もブリッツの格を上げる結果となり、店の人気と共にムーヴメントはメジャーになっていく。また、ロンドンにはスティーヴの旧友らによるファンク・テイストが強い新しいクラブ、ヘル(Hell／5月開店)なども開かれブームは発展していく。だが、ブリッツ、ヘルともに秋には閉店。ムーヴメントは次の段階に移っていく。

1981年

2月にロンドンのレインボウ・シアターでニュー・ロマンティクスのイヴェントが開催され、多数のバンドが出演。さらにスティーヴとラスティはベイカー・ストリートのクラブでイヴェント"クラブ・フォー・ヒーローズ"をレギュラー開催する。

1982年

3月、ヴィサージのセカンド・アルバム『舞(ダンス／原題：The Anvil)』発売。前作からの制作チームでは最後のレコードとなる。

4月、ロンドンにこのクラブ・ムーヴメントの頂点ともいえる規模を持つクラブ：カムデン・パレス(The Camden Palace)がオープン。ビリーズ時代に比して10倍となるキャパシティ2500人の大規模なヴェニューとなるも客足は衰えず、ファッショナブルなストリート文化の拠点、そして、有名人が多く出入りするヒップなクラブとして栄える。

この時点で、当初は小さな数百人規模のクラブ・イヴェントから始まったこのムーヴメントは浸透と多様化が進み、関係者たちはそれぞれの方向に散ってファッションや音楽性も異なるバンドが多く出現した結果、コアとなる象徴的存在(特定のクラブ／アーティスト)が絞れない曖昧な膨らみを見せるようになる。そして、"ニュー・ロマンティクス"というジャンル名も、グラム復古調の派手な見た目を表わす際のムード的な言葉として機能するようになり、また他方で、カルチャー・クラブやヒューマン・リーグなど、このシーンの系譜に連なると見做されたバンドのいくつかは、以降、ムーヴメントから独立した人気を獲得して、本国イギリスのみならず、世界各国のチャートを賑わすことになる。

CamScannerでスキャン

シンの発展とともにハウス・ミュージックが始まっていくんだ」

――当時、多く創刊された新しい切り口のカルチャー・マガジンとこのシーンは密接に関わっているという説もありますね。

「〝Vibe〟の歌詞みたいなんだけど、新しい音楽が新しいスタイルと器を必要として新しい雑誌の誕生を促した。それが〝i-D〟とか〝Time Out〟といった新雑誌だ。それらは若い音楽ファンが好むクールなクラブの詳細なスケジュールを載せ、どんなバンドが出て誰が入り口でファッション・チェックをするか。そんなことまで報じていた」

――このシーンからはミュージシャン以外でも有名になった人を多く輩出していますよね。

「潮目が一変したんだ。このクラブ・シーンで働いていた者は、レコード契約を得たりデザイナーになったり、クラブを始めたり売れっ子ライターになったり写真家になったりと活躍し始めた。キャロル・ヘインズなんかが〝The Creative Workforce〟というエージェント事務所を開いたよ」

寂れた海辺の街のように

――シーンを描いた映画〝Blitzed: The 80's Blitz Kids Story〟（21年）を観ると、後の音楽やファッションに与えた影響の大きさがわかる気がしますが、そういった重要性にはいつ頃、意識的になりましたか。

「当時からクラブの文化的な重要性はわかっていたよ。残念だったのは、オーナーたちはそんなことは関知せず金儲けだけで、僕らクラブを作っていた者たちも、クラブ

スティーヴ・ストレンジ

CamScannerでスキャン

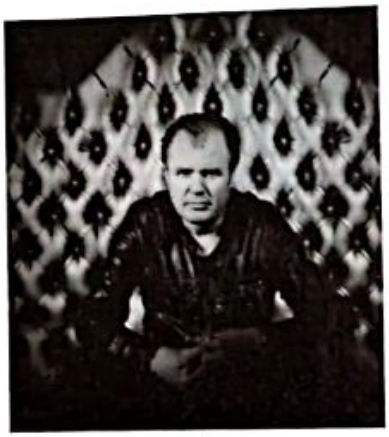
を開く場所を借りるか買うかして自分たちで経営するという頭がなかったんだな。僕自身が経営には興味を持てなかったし、彼らは税金、管理コスト、会計なんかについて捲し立て、〝こんなハードなこと、できないだろ?〟的に持っていこうとしていた。カムデン・パレス時代にその一人に〝お前なんかには風呂ひとつ管理できないよ!〟と吐き捨てられて、〝僕は毎晩180人もの人々をクラブに集めることができるんだよ。お前は清掃が全部終わったら、ちゃんと消灯して帰れよ〟なんて言い返したりしてね。儲け損なったけど、興味持てないしなあ。スタジオ54、ブリッツ、ザ・ロキシー。あの頃、イケてた場所はみんな、数年しかもたずに、あとは冬場の寂れた海辺の街のようになってしまった」

――ひとつの時代がそういう形で終わるのは辛いですね…。それでは最後に、またヴィサージの話に戻りますが、2作目『舞(ダンス/原題=The Anvil)』はファンキーなグルーヴが強く感じられますね。

「その頃になると、クラブのサウンド・システムでもエレクトロニック・ダンス・ミュージックをうまく鳴らせるようになったから、タイトル・トラックに特に顕著だが、ハードなベース・シーケンスでクラビングのことを描写する歌になっている」

――そして、3枚目の『ビート・ボーイ』は前2作から大きく変身し、オリジナルのヴィサージはここで終わるわけですが。

「『ビート・ボーイ』のメイン・アイディアは、トリガー・サウンドの実験とフェアライトでのサンプリングだった。僕は(後のアート・オブ・ノイズの)J・J・ジェクザリクに頼んでプログラムしてもらってサウンドの核心部分を作っていった。あのアルバムで僕は単独ではいい曲を書けなくて、自作曲のいくつかはひどいもんだ。でも〝Love Glove〟だけは成功した。そんな経緯でできたアルバムだから、当然のように自爆。それがヴィサージの最後だよ…。



現在のラスティ・イーガン
©Adam Szigeti 2022

本当は『ビート・ボーイ』は作りたくなかったんだ。当時、僕はエレクトロ・ビートを使ったDJがメインで、マドンナなどのリミックス・トラックを作っていたんだ。でも、スティーヴに懇願されてね。ミッジは抜けていたし、結局は最初に構想したヴィサージとは違うものになってしまった」

――でも、ヴィサージ・プロジェクトのユニット感覚はユニークだったし、新しいポップ・フォーマットを作ったと思いますよ。最初の2枚は特に、参加者全員に見せ場があるような構成ですよね。

「ヴィサージの原理原則というのは〝全員平等〟ということだったんだ。ヴォーカルでフロントマンのスティーヴは、彼のヴィジュアル的インプットが音楽そのものと同じくらい重要だから、作曲や演奏に貢献した他のメンバーと同等に扱われた。得意分野は違えど、それぞれの功績を認め合う、ウィンウィンの関係みたいなものだよ。メンバーが被っていたウルトラヴォックスとの違いは、ツアーはしないでクラブを盛り上げるためのレコードを作り、イメージ戦略としてヴィデオ作品を重視する。そんなコンセプトが実を結んだプロジェクトだったと思うよ」

〔1~2月 Eメールで〕

CamScannerでスキャン

ニュー・ウェイヴ・クラブ・シーンを知るための8作

選・文＝田山三樹

Visage "Visage"

Polydor 2490 157
[1980] (LP)

まさにシーンを代表する一枚といっていいだろう。ジャーマン・エレクトロニック・ミュージックの手法とロックンロールが融合して、クラシカルなタッチのアコースティック・ピアノが効果的にヨーロピアン感覚を演出している。表題曲中盤の、ギターのブレイクとシンセ・シーケンスが絡みながら盛り上げていく箇所など実に見事。曲間を巧みに繋ぐ構成もクラブ空間の再現のようで聴き手の気を逸らさない。"Fade To Grey"や"Mind Of A Toy"など、ゴドリー&クレームによる斬新な映像がMTVを席巻したヒット曲も収録した、時代を代表する傑作である。

Visage "The Anvil"

Polydor POLD5050
[1982] (LP)

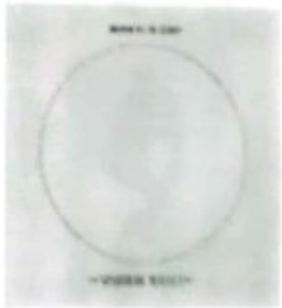
このセカンド・アルバムでは、前作で派手なギターを披露していたジョン・マッギオークが抜け、やや硬質な印象に変わった。ヨーロピアン感覚は引き継いでいるが、当時のトレンドだったファンク・テイストが取り入れられている。"Night Train"はその典型で、派手なホーンも入ったテクノ・ファンクに仕上がっている。また、当時、注目が集まり始めたアフリカン・ビート的要素が"Wild Life"で取り入れられた。ナイト・クラブ・ライフの華美なイメージを想起させる歌詞のアルバム・タイトル曲はニューヨークのゲイ・クラブからネーミングされたという説もある。

Visage "Beat Boy"

Polydor POLH 12
[1984] (LP)

前2作と違い、時流に合わない発表タイミングになってしまったのが苦しいところだが、意欲作ではある。メンバーはスティーヴ・ストレンジとラスティ・イーガン以外ほぼ入れ替わり、サウンドも大幅に変化。表題曲に顕著なように、あからさまなサンプリング音とハード・ロックなギターが耳につくアレンジが多い。まとめ役のミッジ・ユーロが抜けたことで全体の印象が散漫になっているが、ラスティがいうように"Love Glove"などはとてもキュートで出来のいいエレポップである。通常のアルバムのほかにダンサブルなカセット・リミックス版も発表された。

Spandau Ballet "Journeys To Glory"



Reformation/Chrysalis CNR1331
[1982] (LP)

映画"Blitz"の中でメンバーのゲイリー・ケンプが"スティーヴとラスティが用意してくれたブリッツという場が、普通の少年たちにパワーと勇気を与えてくれたのだ"と謝辞を述べているが、まさに彼らこそそのブリッツ・キッズの代表格だったといっていいだろう。"ブランク・シナトラとデイヴィッド・ボウイを合わせたような"と評されたトニー・ハーディーの朗々とした歌声が引っ張るパワフルでシンプルなサウンドは非常に親しみやすく、シーンの顔となっていった。この後の彼らはよりファンクな方向に進み、世界的ポップ・アーティストになっていく。

CamScannerでスキャン

Culture Club "Colour By Numbers"

Ultravox "Vienna"

Duran Duran "Duran Duran"

The Human League "Dare"

彼らがブリッツ・シーンと実質的な関わりを持つことはなかったが、そこから派生したニュー・ロマンティクスの一角を代表するバンドで、本作の"Planet Earth"の歌詞には"Ze Planets"という一節も。フリル衣装や化粧の華美なイメージ、自らを"グラフトワークとモンキーズの中間"と評した音楽性など、テクノ・テイストを取り入れたグラム系のダンス・ミュージック志向はこのシーンの雰囲気(ムード)たる資格がある。本作は彼らの1枚目で、ジョルジオ・モロダー的なシンセや効果的なノイズ要素など、時代の音をうまくア・ラ・カルト的に取り入れた佳作。

認絶ヒット「愛の残り火(Don't You Want Me)」を生んだ本作は、ブリッツのプレイリストに載っていた初期のDaniel Millerのような前衛的なスタイルを捨てた彼らが、大幅なメンバー・チェンジを経て放った新生第1弾。女性コーラス二人をメンバーに迎え、ポップなラヴ・ソングを中心に編まれたため批判もあったが、実はプロデュースはヴィサージの初期に関わったマーティン・ルーシェント。彼の自前のスタジオで制作された、リン・ドラムやMC-8など、当時の最新テクノ機材を駆使した音によって、"エレポップ"の基本形を作ったような名盤である。

CamScannerでスキャン

"Rusty Egan Presents Blitzed!"

ムーヴメントを彩る楽曲をまとめたコンピレーションで当時の喧騒を追体験

文＝田山三樹

来る6月、CD4枚組で70曲近くを収録し、総収録時間が約3～2分にも及ぶ大ヴォリュームのコンピレーション・アルバムが発売される。"Rusty Egan Presents Blitzed!"と銘打たれたこの企画盤の1枚は、DJ／ミュージシャンのラスティ・イーガン。彼が78～82年にブリッツなどでのイヴェントでかけていた曲を中心とした内容で、DJキャリアの集大成といってもいいだろう。全67曲というのは、その4倍近くある候補から絞り抜いた結果の曲数だという。

彼が過去に披露したDJセットにおいては、レギュラー的にかかる曲で構成したプレイリストが存在し、その一部は関連書籍やプログなどで公表されているが、この"Blitzed!"は、その全容を見渡せる選曲になっている。

収録曲を見ていくと、ヒューマン・リーグ"Being Boiled"、クラフトワーク"Showroom Dummies"のドイツ語版の"Schaufenster-puppen"、キャバレー・ヴォルテール"Nag Nag Nag"、ザ・ノーマル"Warm Leatherette"といった当時の最先端テクノ／ニュー・ウェイヴものが多く、中にはラスティとリチャード・バージェスの幻のユニット：Shockの"R.E.R.B."など、貴重な曲も含まれる。そしてロキシー・ミュージック"Angel Eyes"、ルー・リード"Perfect Day"、イギー・ポップ"Nightclubbing"などの元祖系（その代表格のデイヴィッド・ボウイは、許諾の関係か1曲も入っていない）、さらにジョルジオ・モロダー"Chase"、バリー・デヴォーゾン"Theme From "The Warriors"などテクノ調のサントラ曲や、ラ・デュッセルドルフやヴァンゲリスなどのプログレ勢、果てはアマンダ・レアやグレイス・ジョーンズといったディスコ・クイーン系も加わるなど、ジャンル的には縦横無尽。当時のニュー・ウェイヴ系クラブの特異な空気感が味わえるタイムマシーン的な体験を提供してくれる。

また、こうしたフロア向けの選曲で重要な要素となるヴァージョンの違いも吟味され、12インチ、再録版、ダンス・ミックスなど厳密に指定されたものが収録されており、フロアをコントロールするDJとしての矜持を示している。

全体の曲順も起承転結が感じられるもので、その構成力こそがDJラスティの才能なのだろう。当時、"未来のサウンド"と考えられたエレクトロニックを駆使した音楽を中心にフロアの空気を温めつつ、ビリー・コブハムのフュージョン"Spanish Moss "A Sound Portrait": Storm"やルルによるボウイのカヴァー"The Man Who Sold The World"など意外な曲を織り込むような、緩急を意識した見事な流れを形作っている。

エレクトロニック・ミュージックの輝きがフロアを席巻したブリッツの時代。本作はそれが凝縮された企画といえるだろう。

"Rusty Egan Presents Blitzed!"
Demon EDSL0185　4CD
6月発売予定
＊収録曲を減らした4LP版（Demon DEMRECBOX92）も発売予定

CamScannerでスキャン

デイヴ・リマー・インタヴュー

音楽ジャーナリストが現代の視点から考えたニュー・ウェイヴ・クラブ・シーンの意義

聞き手＝田山三樹

雑誌 "Smash Hits" などで活動した音楽ジャーナリストにシーンの印象を聞いた。パンク以降の時代を読み解いた "Like Punk Never Happened" や、ニュー・ロマンティクスの解説書 "New Romantics: The Look" などの著書がある。

――70年代末のアフター・パンクの時代、あなたは何か新しい動きを期待していましたか。

「ディスコとレゲエにハマりながら見守っていたけれど、その中でも特に2トーン系のスペシャルズやマッドネスといったバンドの登場は大きかった。イギリスでは特に重要で、本物のムーヴメントだったね。それと同時期にほかの動きも活発化してきたんだ」

――ビリーズでのエレクトロニック・ミュージック中心のクラブ・イヴェントは新鮮でしたか。

「週に1度、小さなクラブで行なわれていたイヴェントだ。初期はほとんど気づかなかったよ」

――他のクラブと比べて、ブリッツはどのように画期的でしたか。

「リヴァプールのキャヴァーン・クラブ、UFO（クラブ）、ロキシー。いま考えるとそういう歴史的なライヴハウスに匹敵する重要性があったかもしれないね」

――ラスティ・イーガンは、自分や周りのアーティストたちはみんな特定のムーヴメントの一部と見なされるのは嫌がっていたと語っていますが、あなたのお考えは？

「グルーチョ・マルクスの、私のような者をその一員と考えるクラブにはいたくない。という言葉を思い起こすね。ブリッツ・キッズは個性を表現したがっていたから、個人として一団の中に埋没したくなかったんだろう。その集団が自分たちが作ったものであっても」

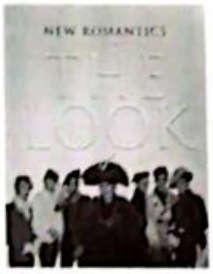
――クラフトワーク、ノイ！、クラスターといったエレクトロニック系のジャーマン・ロックは、イギリスのニュー・ウェイヴにどの程度、影響を与えたと思いますか。

「カンとクラフトワーク。本当に影響があったのはこの二者だと思う。逆にクラフトワークはデイヴィッド・ボウイの影響を受けていた部分があるんじゃないかな。そして、ジャーマン・ロックのイギリスへの影響はだいたいボウイの『ロウ』『ヒーローズ』を経由しているんだよ。80年代初期、エレクトロニック音楽はみんなドイツ的と見なされる風潮があったね」

――当時のイギリスのクラブ・カルチャーは、一般社会への影響力も持っていたのでしょうか。

「ナイト・クラブ・カルチャーの域を超えたところまで広がったとはいえないでしょう。ただ、大きく捉えるならむしろその後、さらに広がったんじゃないかな。ディスコが果たしていた機能を10年後にハウスが引き継いだようにね。いろいろ新しいシーンも出てきたし、80年代中頃のウェアハウス・パーティーの隆盛は素晴らしかったよ。だから、あれ以降のほうが、ニュー・ウェイヴの括りにこだわらなければより拡大したと思う」

〔3月　Eメールで〕



"New Romantics: The Look"
Dave Rimmer著／Omnibus［2003］

"Like Punk Never Happened: New Expanded Edition"
Dave Rimmer著／Faber & Faber［2022］

CamScannerでスキャン

グレッグ・ウィルソン・インタヴュー

イギリスにおけるエレクトロニック・ミュージックの受容実態をクラブDJの重鎮が語る

聞き手＝田山三樹

ブラック・ミュージック系のレジェンドDJとして活躍するグレッグ・ウィルソンは15歳の時から活動を始め、英国のクラブ・シーンの推移を50年近く現場で見つめ続けてきた人物である。エレクトロ・シーンでの作品や著書も発表するなど多角的にこの分野に関わり続けている彼が、ブリッツ・シーンとその影響や余波について独自の考察を述べてくれた。

――あなたの専門のブラック・ミュージック系と〝フューチャリスト〟と呼ばれるブリッツのようなエレクトロニック系のクラブとは、観客は重複していたのでしょうか。

「多少重なる部分はあったけれど、基本的にはぜんぜん違う客層だったね。ロンドンのクラブではけっこう被っていたけれど」

――デイヴィッド・ボウイやロキシー・ミュージックとニュー・ウェイヴをミックスするというラスティ・イーガンたちのやり方を当時、どのように思いましたか。

「あまり知られていないけれど、マンチェスターのPiPsというナイト・クラブがロキシー・ミュージックやボウイとニュー・ウェイヴをつなぐ方向性を作ったんだよ、ブリッツでのイヴェントが始まるちょっと前にね。そこのDJが始めた〝ロキシー／ボウイ・ナイト〟が最初なんじゃないかな。そこから系統的に近いルー・リード、イギー・ポップ、そしてクラフトワークなんかが一緒にクラブでかかるようになったんだ。僕自身はDJとしてジャズやファンクを中心にエレクトロニック系と流行りものをミックスしていた流れと、フューチャリスト系のDJポール・レイからいろいろ知識を授けられたことで、まともに意識するようになったんだ」

――当時、ドイツや他の国のエレクトロニック系は、イギリスでどう受け止められていたのでしょう。

「ドイツ系は70年代には〝クラウトロック〟といわれて一括りにされ、イギリスのクラブ・シーンとは無縁の存在だった。例外はカンのI Want More'で、これは76年のUKチャートに入っていたからね。クラフトワークだって〈モデル〉が大ヒット（81年に発売され82年初頭に1位）するまではぜんぜんかからなかった。その前の〝アウトバーン〟に至ってはキワモノ扱いだったし。

日本のYMOについては（80年に）'Computer Game (Theme From The Invaders)/Firecracker'がUKトップ20に入ったのが大きかった。イギリスではトップ40以内の曲はBBCラジオ1で一定量のオンエアが義務づけられているから、クラブやディスコに行くような若者がそれを聴いて、そちらにも広がったということなんじゃないかな。彼らの曲はとても特徴があったしね」

――ラスティたちによる英国のニュー・ウェイヴ系クラブの勃興の影響をどう分析しますか。

「アンダーグラウンドの動きが一躍メジャー化したわけだから、広範囲で影響があった。ヒューマン・リーグ、ウルトラヴォックス、

グレッグ・ウィルソン

CamScannerでスキャン

ソフト・セル、ゲイリー・ニューマン、デュラン・デュラン、スパンダー・バレエ、カルチャー・クラブ、そしてヴィサージ。彼らはみんなブリッツの動きを通じて注目が集まったといえるだろう」

——それらブリッツ・シーンから派生したエレクトロニックを積極的に取り入れた音楽は、その後のエレクトロやヒップホップとどういう関係にあると思われますか。

「この動きでUKチャートが変わると同時にNYのブロンクスでも動きが始まった。それがアフリカ・バンバータがクラフトワークやゲイリー・ニューマン、YMOを使ったミックスでやり始めたエレクトロという新ジャンルだ」

——クラフトワークやYMOはヒップホップの文脈でよく使われましたが、それは本人たちにとっては思いがけないことだったようたと感じています。あなたの見解は？

「思うに、クラフトワークにはジェイムズ・ブラウンのリズムの影響があったし、音楽の影響というものは、そうやって相互的に回っていくものだろう。バンバータはオープンな人だから〝ブラック・ミュージックかくあるべし！〟的な思い込みもなく、クラフトワーク等の曲の中に新たなファンクネスを見出したんだろうね。

実際、プログラミングされたビートというのはすごくダンサブルなところがある。君が言うように、クラフトワーク自身は（「Planet Rock」での使用で）まさか自分たちのエレクトロニック音楽がブロンクスのシーンに劇的な影響力を持って迎えられるとは想像していなかっただろう。バンバータたちが新たな魅力を発見したわけだ」

——あなたは以前の私とのやり取りの中で、ブラック系とニューキャリスト系を繋ぐ曲があったと言っていました。それで私がパッと思い浮かんだのは、クラフトワークの〈ナンバーズ〉、坂本龍一の〈ライオット・イン・ラゴス〉、マルコム・マクラーレンの〈バッファロー・ギャルズ〉、そしてハービー・ハンコックの〈ロックイット〉だったのですが、あなたの見解を聞かせてください。

「イギリスのブラック・ミュージック系DJがクラフトワークをかけるようになったのは、その曲よりフランソワ・ケヴォーキアンが84年にリミックスした〈ツール・ド・フランス〉からだろう。この曲は同じ年の映画『ブレイクダンス』に使われたのも大きかった。〈ライオット・イン・ラゴス〉は、僕がニューヨーク・エレクトロと相通じるものがあると思って83年（註：英国でのリリース年）にリヴァイヴァルさせたんだよ。82年の〈バッファロー・ギャルズ〉は、その革新的なサウンドとダンスやグラフィティなどを生き生きと描いたMVによって、ヒップホップの曲でさまざまなシーンを繋いで英国に紹介してブラック・シーンに大きなインパクトを与えた。

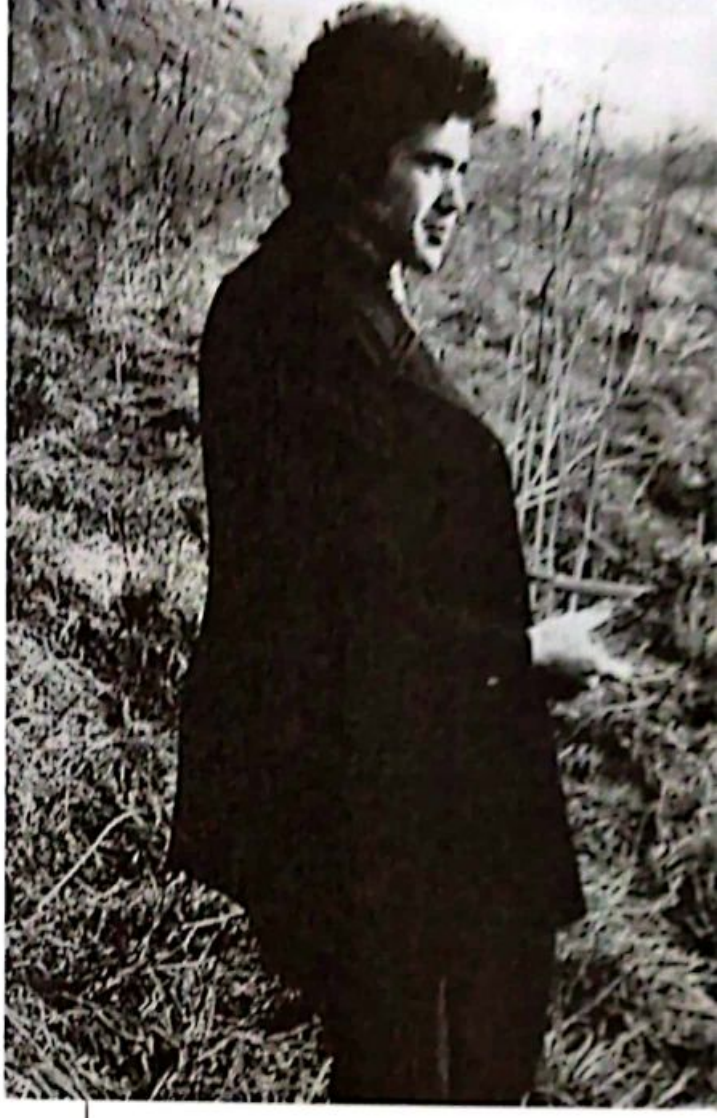
そして、〈バッファロー…〉の約半年後に出た〈ロックイット〉こそ、80年代の音楽を決定づけ、アングラな音楽だったヒップホップを世界規模のメジャーなものにする導管の役割を果たしたんだ。ニューヨークDJのパイオニア、グランドミキサーDSTのカッティングとスクラッチ、レッド・ツェッペリンなどからの巧みな引用。そしてゴドリー&クレームが作ったアニマトロニクス（ロボットを使ったSFX技法のひとつ）を駆使したヴィデオ。そのどれもが凄く、グラミーやMTVの賞を総なめにした。特に84年のグラミーでベストR&Bインスト部門を受賞したときの記念パフォーマンスでは、グランドミキサーDSTのターンテーブルの神業が全米に中継されたんだ。これはアメリカのDJカルチャーを変えたよ」

——なるほど！　このジャンルがどう発展したかがよくわかりました。

〔3月　Eメールで〕

"Greg Wilson's Discotheque Archives (Extended Hardback Edition 2023)"
Greg Wilson著／Super Weird Substance［2023］

"Street Sounds UK Electro"
Street Sounds ELCST1984［1984］（LP）
グレッグ・ウィルソンのリミックスを含む、エレクトロ・シーンの編集盤



ルーチョ・バッティスティ

イタリア音楽シーンのゴッドファーザーによる70年代の6タイトルがリイシュー

文＝石川真男

〝イタリア屈指のカンタウトーレ（シンガー・ソングライター）〟〝イタリアン・ロックの祖〟〝イタリア音楽シーンのゴッドファーザー〟といった枕詞で語られるルーチョ・バッティスティ。1943年、イタリアの中央に位置するリエーティ県の小さな街ポッジョ・ブストーネに生まれ、ミラノに出てきてリコルディと作家契約を交わすと、作詞家、モゴールとのコンビでヒット曲を量産。やがて自身も歌手としてヒット作を連発する。サンレモ音楽祭やフェスティヴァルバール音楽祭などでも数多の賞を獲得し、ミーナやパッティー・プラーヴォ、ブルーノ・ラウツィといったポップ歌手に楽曲を提供してヒットを飛ばしてきた。また、〝イタリア初のインディ・レーベルの一つ〟とされるヌメロ・ウーノをRCAイタリア傘下に設立。創作の自由を確保しながら多くのアーティストを世に送り出し、自身も98年にこの世を去るまで野心に充ちた作品を次々と生み出してきた。

そんな彼の70年代の傑作6タイトルが〝ソニー・ミュージック・プログレッシヴ・ロック・紙ジャケット・コレクション〟の第5弾としてリリースされることとなった。イタリアのポップ／ロック界をリードしたカリスマが〝プログレ〟シリーズに組み込まれる？　バッティスティの音楽にはプログレの要素ももちろんあるが、それは一部に過ぎず、広くポップ／ロック界に君臨していた存在であるのだが…。もちろん、バッティスティの名前にピンと来る向きには改めて説明するまでもないだろう。

CamScannerでスキャン

そう、後はプレミアータ・フォルネリア・マルコーニ（PFM）やフォルムラ・トレやイル・ヴォーロといった、後にイタリアン・プログレッシヴ・ロックの中核となるグループの面々をバック・バンドとして起用し、さらには、これらのグループを自身のレーベル、ヌメロ・ウーノからデビューさせているのだ。いわばバッティスティの〝門下生〟たちがイタリアン・プログレ・シーンを主導していったということだ。

だが、そうした〝人事面〟だけではない。バッティスティは、70年のアルバム『8月7日午後』でイタリアン・プログレの原型というべきものをいち早く提示している。レコード会社が当初発売を見送ったというこの曰く付きの作品は、その半数がインストゥルメンタル曲からなるコンセプト・アルバム。プログレ前夜のこの時期においては極めて斬新な作品であった。

『エモツィオーニ』

①バラの花、桃の花 ②甘い一日 ③死の時 ④心によみがえれ ⑤7と40 ⑥エモツィオーニ ⑦数えきれない女達 ⑧碧い水、澄んだ水 ⑨エラ ⑩フランチェスカじゃない ⑪愛は死なない ⑫アンナ

SICP31699

『8月7日午後』

①おお神よ ②プラタナスでの集まり ③ひとつ ④8月7日午後 ⑤私を求めるなら ⑥フィオーリ ⑦スーパーマーケット ⑧椅子

SICP31700

そうした実験性はその後の作品にも受け継がれていった。そもそもバッティスティとモゴールは様々な〝実験〟を行なうために手を組んだのだが（実際には年長のモゴールが新人作曲家バッティスティを素材に実験を試みようとしたのが始まりだったが、バッティスティ自身もそれに勝るとも劣らない先鋭性を備えていた）、それは『8月7日午後』以降も様々な形で実践された。決してプログレの様式美を追求したわけではない。持ち前の実験精神で常に新たな道を切り開き、これまでにない価値観を提示しようとしたのだ。そういう意味では、バッティスティの音楽は、形式的なプログレッシヴ・ロックではなく、本質的なプログレッシヴ・ロックと言えるだろう。

またバッティスティは、その初期からイタリア伝統の歌曲とポピュラー音楽との融合を試みていた。イタリアン・プログレは壮大なシンフォニック・サウンドを展開するグループが多いが、そうしたグループには突如甘美な歌が顔を出す瞬間が多々あり、それがイタリアン・プログレの特徴でもある。それはバッティスティからその門下生たちに受け継がれたものではないだろうか。バッティスティの実験の成果があってこそ、イタリアン・プログレのあの抒情性が生まれたに違いない。イタリアン・プログレッシヴ・ロックの様式を確立したのはPFMやフォルムラ・トレ、あるいはバンコやニュー・トロルスやアレアといった面々であることは間違いないが、その源流にはバッティスティの、そしてモゴールの先鋭性があったと言えるだろう。

バッティスティ全盛期に生まれたこの6作品。いずれも日本初CD化（『エモツィオーニ』は日本初発売）・世界初紙ジャケ化で、全タイトルに2024年最新リマスタリングが施されている。では、彼のキャリアの中でも最も実験精神に満ちた作品を1枚ずつ見ていこう。

■『エモツィオーニ』

70年12月リリースのセカンド・アルバム。難解な次作『8月7日午後』のリリースが

＊発売はすべてソニー／BEST200 CD2／紙ジャケット／歌詞・訳詞つき／解説＝片山伸／4・24発売

CamScannerでスキャン

見送られ、所属レーベル、リコルディが急遽用意したシングル・コレクションだ。66～70年に録音された楽曲が集められているゆえに、バックを務める面々も多彩。フランコ・ムッシーダ（g）やフランツ・ディ・チョッチョ（ds）らクエッリ（後のPFM）の面々、アルベルト・ラディウス（g）、ガブリエーレ・ロレンツィ（kbd）といったフォルムラ・トレの面々、そして、リベッリのジャンニ・ダッラーリオ（ds）や、同じくリベッリのメンバーで後にアレアを結成するデメトリオ・ストラトス（kbd）らが演奏している。サウンドは、ビート・ロックからシンガー・ソングライター然としたフォーク、さらにはストリングスを絡めたバラードまで様々。まだ実験性や先進性は見られないが、カンツォーネが主流であったイタリアのシーンにはこうした英米のビート・ロックは新鮮な衝撃をもたらしたであろう。また、ある意味、シンガー・ソングライターとしてのバッティスティの剥き出しの魅力が最も感じられるアルバムと言えるかもしれない。

■『8月7日午後』

70年末には完成していたにも拘らず、その難解さを憂慮したリコルディによって半年以上も棚上げされ、71年7月にようやくリリースされた作品。〝愛〟と〝非愛〟をテーマに、サウンドでもその対比を打ち出したコンセプト・アルバムであり、ブルージーなロックンロールを展開する〝非愛〟の楽曲と、プログレッシヴなインストゥルメンタルを展開する〝愛〟の楽曲が交互に並ぶ。イタリア・シーンはまだプログレ前夜であり、ここでのサウンドもシンフォニックなイタリアン・プログレとは趣きを異にするものだが、そこに渦巻く実験精神と先鋭的な野心は、後のシーンに大きな影響を与えたと言えよう。バックを務めるのはクエッリの面々、そしてフォルムラ・トレのアルベルト・ラディウスら。本作をきっかけにバッティスティがクエッリの面々にPFMの結成を勧め、そこからイタリアン・プログレの隆盛が始まった。

『人間への夢』

①三月の庭 ②ちょっとした気晴らし ③…そして君を想う ④人間らしさ：夢 ⑤どんなに美しくても ⑥獅子と雌鶏 ⑦夢のまた夢 ⑧炎

SICP31701

■『人間への夢』

69年にヌメロ・ウーノをモゴールと共に設立したバッティスティ。リコルディとの契約が終了したことで自身もようやく移籍し、その第1弾となったのが72年4月リリースの本作である。この時期、イタリアではプログレがシーンを席巻し始め、本作の制作時には、これまでバックを務めてきたクエッリの面々はPFMとしてデビューを果たしており、バッティスティも、いきなりのヒットで多忙となった彼らをセッションに招集することができず、代わりにフォルムラ・トレのアルベルト・ラディウス（g）、トニー・チッコ（ds）らからなるバンドを編成してレコーディングに臨んだ。モゴールは本作でも〝夢と現実〟のコントラストをテーマに詩作を展開しており、バッティスティも、弾き語りを軸にした枯れた味わいの楽曲と、軽快なポップ②や、後にフォルムラ・トレがレパートリーとする

『自由の歌』

①東の光 ②ルチ・ア ③鷲 ④風の中の風 ⑤とまどい ⑥君のためならばくは ⑦いい人と悪い奴 ⑧自由の歌

SICP31702

CamScannerでスキャン

アート・ロック風で、ギターのフィードバック音やエコーで綴られた実験的な(8)といった動的な楽曲とによって、滋味豊かな起伏と陰影を描き出している。

■『自由の歌』

前作から7カ月後の72年11月にリリースされた6作目。これまでのアルバムのほとんどが週間チャート1位を獲得し、年間チャートでも上位に食い込んでいたが、本作は週間及び年間チャートで初めてトップとなり、バッティスティはイタリア音楽シーンの頂点に上り詰めた。バックを務めるのは、リベッリのジャンニ・ダッラーリオ(ds)やカマレオンティのマリオ・ラヴェッツィ(g)、フォルムラ・トレのガブリエーレ・ロレンツィ(kbd)といった面々(いずれも後にイル・ヴォーロに参画)。ニュー・トロルスやレ・オルメのプロデューサーとして知られるジャン・ピエロ・レヴェルベリがオーケストラ・アレンジを手掛け、実に美しくサウンドを彩っている。バッティスティの歌声にはいつもながらに哀愁や郷愁が宿るが、全体的には明るいムードが漂う。タイトル曲は国民的愛唱歌として親しまれている。

『我が美わしき天使』

①花咲く丘 ②ブラジルの歌 ③大地への讃歌 ④我が美わしき天使 ⑤甘い約束 ⑥拒否する勇気 ⑦めまい ⑧バラ地獄

SICP31703

■『我が美わしき天使』

73年9月リリースの7作目。こちらも当然のごとく週間チャート1位を獲得し、前作を上回る50万枚のセールスを叩き出している(ただし年間1位は前年末リリースの『自由の歌』に譲り、2位となる)。録音はミラノで行なわれたが、追加レコーディングとミックスはロンドンのアビー・ロードスタジオで敢行(かのジョン・レッキーがエンジニアを務めた)。また、本作での大きな変化は、ジャンニ・ダッラーリオ(ds)、ジャン・ピエロ・レヴェルベリ(kbd)、ドゥエロ・マードレのボブ・カレロ(b)、そしてバッティスティ自身(g、kbd)の4人による小編成のバンドでレコーディングに臨んだことだ。バッティスティがアルバム全編でエレクトリック・ギターを弾くのは初めて。そうして出来上がったサウンドは、前作よりもやや内省的なトーンを帯びるが、ロックンロールにラテンやエスニック、ジャズ・ロックなど、多様なリズムが施されている。

『二大世界』

①限りなき抱擁 ②二大世界 ③無名人のうた ④天空の人々 ⑤天空の人々(パート2) ⑥二大世界(パート2) ⑦ラテン魂 ⑧サラミ ⑨新しきアメリカ ⑩タイム・マシーン ⑪自然分割

SICP31704

■『二大世界』

73年2〜3月にかけてバッティスティとモゴールはブラジルとアルゼンチンを旅している。そこで自己のラテン・アイデンティティを再認識し、〝ラテン性への回帰〟をテーマに制作したのが本作だ。同年12月にリリースされ、週間チャート1位、年間チャート8位を記録。前作での小編成バンドにブラスやコーラス隊なども加わり、多彩なキーボード群が紡ぎ出す音色や、変拍子を含む多様なリズムによって、本作はバッティスティ作品の中でも最もプログレッシヴなものとなった。とはいえ、類型的なプログレとは一線を画し、ラテン的な生命感やラディカリズムを先鋭的な筆致によって増幅させたかのような、独自の〝プログレッシヴ・ロック〟を展開している。

＊発売はすべてソニー／Blu-spec CD2／紙ジャケット／歌詞・訳詞つき／解説＝片山伸／4・24発売

CamScannerでスキャン

サントラ・キャンペーン2024

ユニバーサルの豊富なカタログから名作71タイトルが一挙リリース

ター片島吉幸

このたびユニバーサルから期間限定企画で、時代やジャンルを越えた多くのサントラ盤が復刻された。その数71作品。まずは1ページの一覧を見てほしい。古くは60年代から、新しいものでは2019年の作品まで、タイトルを眺めるだけで、半世紀に亘る洋画史を俯瞰している気分になるほどだ。

本稿ではリスト末尾の60年代作品からおよその時系列に沿い、ロックやポップスの視点で主要作を簡単に紹介していこうと思う。文字数の関係で触れられない作品もあるが、その点はご容赦を。

まずはフランス映画関連から。

60年の自身のヒット曲をモチーフにセルジュ・ゲンズブール自ら監督した映画が[71]『ジュ・テーム・モワ・ノン・プリュ』だ。ジェーン・バーキンによる吐息交じりの主題歌は、おしゃれエロ作品として日本でも大人気となった。同じくゲンズブールが関わった[67]『アンナ』ともども、90年代の渋谷系界隈でも人気が再燃した作品なので納得の復刻だ。60年代のフランス映画といえば、ミシェル・ルグランによるフレンチ・ミュージカル映画の傑作[70]『ロシュフォールの恋人たち』と[69]『シェルブールの雨傘』も忘れられない。特に後者はオリジナル・アートワークでの復刻が嬉しい限り。ルグランと並ぶ巨匠エンニオ・モリコーネの[68]『続・夕陽のガンマン』(デラックス版の発売は国内初)や[66]ニーノ・ロータ『ロミオとジュリエット』など定番も改めて再発される。

一方、60年代のアメリカではアメリカン・ニューシネマが隆盛し、そのサントラには同時代のロックやポップスが盛んに使用されるようになる。[64]『真夜中のカーボーイ』のニルソン「うわさの男」や、[63]『明日に向って撃て!』のB・J・トーマスによるバカラック曲「雨にぬれても」はその典型例といえよう。後にリメイクされた[65]『ミニミニ大作戦』(国内初CD化)の音楽はクインシー・ジョーンズが担当。自身のヒット「ソウル・ボサノヴァ」等で披露したヒップなセンスを発揮している。

「007」シリーズは第1作の[53]『007/ドクター・ノオ』から、8作目の[54]『007/死ぬのは奴らだ』までがずらりと再発。カリプソ等、カリビアン・サウンドが楽しめる62年の[53]から、ポール・マッカートニー作のタイトル曲が大ヒットした73年の[54]まで、たった10年の間の劇的な音楽の変化に驚きを禁じえない。

オールディーズが多数使われた[53]『アメリカン・グラフィティ』の重要性は今さら説明不要だろう。過去のヒット曲を用いてノスタルジックな情感を呼び起こす手法はこの映画ではっきりと確立された。その結果、このサントラへの起用によりイメージが上書きされるナンバーも現われる。例えばこの映画以降、ビーチ・ボーイズ「オール・サマー・ロング」の歌詞がどれほど胸にしみるものになったことか。同様に[48]『グリース』も、ヴェトナム戦争前のロックンロール・エラの米国を舞台にしたミュージカル映画の名作。劇中でオリビア・ニュートン＝ジョン扮するサンディの可憐さとそのノロクな

CamScannerでスキャン

[illegible]の⑰『ハイレーン・ロック』等でも使われる定番の手法となった。
　さて、70年代初頭からは映画史に残る世界的大ヒット映画が続々と登場する。例えば52『ゴッドファーザー』や49『ロッキー』のテーマ曲は、映画ファンならずとも口ずさめるだろう。
　一方、同時代のイギリスに目を向けると、セックス・ピストルズがパンク・ムーヴメントに火を点けていた。そんな彼らの姿を描いたドキュメンタリー映画が46『ザ・グレイト・ロックン・ロール・スウィンドル』だ。その前年にパンクの源流ともいえるザ・フーの活動を追った47『キッズ・アー・オールライト』が公開されているのが面白い。この時代のイギリス[illegible]ザ・フーのロジャー・ダルトリーが主演した56『リストマニア』も今回、復刻される。音楽をリック・ウェイクマンが担当しているので、プログレ・ファンも注目。
　プログレといえば、タンジェリン・ドリームが手がけた44『ザ・クラッカー／真夜中のアウトロー』と、ロジャー・ウォーターズの参加で話題となった社会派作品35『風が吹くとき』も久々の復刻で見逃せない。この時代になると彼らの作品のように、シンセサイザーを積極的に用いたサントラも多く現われる。中でもヴァンゲリスの43『炎のランナー』は、その筆頭といえよう。大ヒットしたメイン・テーマの美しさは、シンセの幻想的な音色と共に80年代の幕開けを飾るのに相応しいものだった。
　同じくシンセを用いてディスコ[illegible]エイドリアン・ライン監督作『フォクシー・レディ』は、そんな彼が音楽を手がけた映画。ドナ・サマーやブルックリン・ドリームスも参加したサントラで、モロダーはご機嫌なダンス・サウンドを創出している。そしてモロダーとライン監督はスタイルを進化させて、40『フラッシュダンス』を大ヒットへと導くのだ。本作からアイリーン・キャラの主題歌やマイケル・センベロの「マニアック」がチャートを賑わしたように、以降、サントラ・ナンバーがヒット・チャートを席巻するようになる。例えば、ダン・ハートマンが歌う39『ストリート・オブ・ファイヤー』の主題歌「あなたを夢みて」や、37『マッドマックス／サンダードーム』（日本初CD化）に出演もしたティナ・ターナー[illegible]『ファイアン・イーグル』の「ワン・ヴィジョン」、デイヴィッド・ボウイが手がけた32『ビギナーズ』の表題曲。そして極めつけは27『バック・トゥ・ザ・フューチャー』収録のヒューイ・ルイス&ザ・ニュースによる大ヒット曲「パワー・オブ・ラヴ」等、このリストの中だけでも枚挙に暇がない。その他、ニュー・オーダーやザ・スミスなど、ニュー・ウェイヴ系バンドの曲を使用した34『プリティ・イン・ピンク』も、その拘った音楽性が評価された。
　そんな傾向に相対するように、80年代はピーター・グリーナウェイ監督の作品のような、ミニ・シアター系映画も流行した。その彼と組んで詩情豊かな世界を音で演出したのがマイケル・ナイマンだ。

69

68

65

53

45

37

ら呼ぶ。[illegible]『[illegible]』[illegible]『コ
ックと[illegible]、その[illegible]』、そ
してセンチメンタルな[illegible]で多く
の[illegible]した[illegible]『ピアノ
・レッスン』と、彼の作品が多く
リストに加わっている。そのリリ
カルな音楽に改めて酔いしれたい。
他にも、ジョー・ジャクソンが
手がけた[illegible]『マイクス・マーダー』
（日本初CD化）や[illegible]『タッカー』、
バット・メセニーによる[illegible]『コー
ドネームはファルコン』のように、
AORやジャズ、フュージョン系
アーティストも映画音楽に携わる
等、サントラの音楽性が拡張して
いった時代でもあった。

90年代では、世界中に衝撃を与
えた[23]『パルプ・フィクション』
が外せない。60年代サーフ・ガレ
ージ等のヴィンテージ感溢れる既
発曲によるサントラには、ノスタ
ルジーの材料とした[53]より選曲に
監督のメッセージが強く込められ
ていた。2000年の[19]『スナッ
チ』もその系譜に入るといえよう。
[22]『エンパイア・レコード』も既
存曲で構成されているが、その斜
め上をいくセンスが売り。エドウ
イン・コリンズやジン・ブロッサ
ムズら、酒脱なアーティストの曲
が目白押しだ。そんなファッショ
ナブルな青春映画や恋愛映画が流
行ったのもこの頃。[21]『ノッティ
ングヒルの恋人』はその筆頭で、
ここからエルヴィス・コステロの
「シー」が大ヒットする。

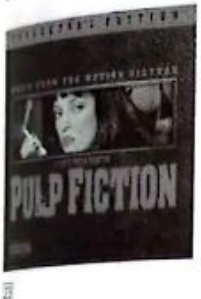
そのような都会的な流れに抗う
ように現われたのが[20]『オー・ブラ
ザー！』だ。古いブルースやカン
トリーをモチーフにしたスタイル
は斬新で、グラミー賞も獲得した。

さて、2000年代に入ると豪
華なミュージカル映画のヒット作
がいくつも誕生する。[18]『ムーラ
ン・ルージュ』や[15]『レ・ミゼラ
ブル』はその代表格。そしてミュ
ージカル映画の人気は[7]『ラ・ラ
・ランド』で頂点に達する。MG
Mミュージカルや先述の[69]等をリ
スペクトした優雅な音楽と映像で
大ヒットし、アカデミー賞も獲得。
米英でいかにミュージカルが大き
な存在であるかを証明した。

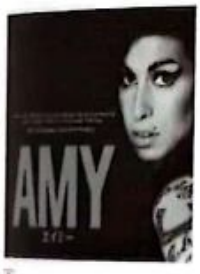
[5]『マンマ・ミーア！』も舞台
生まれのミュージカル映画だが、
すべてアバの曲で構成されている
のが肝。単一アーティストの楽曲
で物語を創作する明快さは大いに
受けて大ヒットとなった。既存曲
を用いたいわゆるジュークボック
ス・ミュージカルと呼ばれる同ス
タイルの作品は、続編[4]『マンマ
・ミーア！ ヒア・ウィ・ゴー』
をはじめ、先述の[18]や[8]『シング』
等、その後も多数作られていく。
ミュージカルではないが、近年話
題となった[1]『イエスタデイ』も
基本的にビートルズ・ナンバーで
構成された贅沢な作品といえよう。

また、[16]『ボブ・マーリー／ル
ーツ・オブ・レジェンド』やエイ
ミー・ワインハウスの半生を描い
た[9]『AMY』のように、近年は
アーティストの生涯を辿る作品が
増えてきた。各々のアーティスト
の作品がふんだんに用いられてい
るのは言うまでもない。

[illegible]



[illegible]



[illegible]

一方で、現役スターが歌うサン
トラ曲もしっかりとヒットしてい
る。例えばレディ・ガガ主演の[2]
『アリー／スター誕生』からは彼
女が歌う主題歌がアカデミー賞を
獲得し、テイラー・スウィフトら
が参加した[6]『フィフティ・シェ
イズ・ダーカー』のサントラは、
全米初登場1位を記録している。

以上、駆け足でロックやポップ
・アーティストの参加作を中心に
サントラ作品を振り返ってきたが、
俯瞰すると時代の傾向が見えて非
常に面白い。ミシェル・ルグラン
らマエストロが活躍した60年代か
ら、プログレやジャズ等、多彩な
音楽性が映画を彩る70～80年代、
そして過去の楽曲を大胆に使用し
てイメージを再構築する90年代以
降のトレンド等、この71枚を辿る
ことで映画とロック／ポップスの
深い関係を改めて実感するはずだ。

CamScannerでスキャン

サントラ・キャンペーン2024

＊発売はすべてユニバーサル ＊CD／3・27発売／各¥1200（▲＝2CD／¥1800） ＊特記のないものは歌詞・訳詞・解説つき

[1]ヒメーシュ・パテル『イエスタデイ』 UICY80381

[2]レディー・ガガ、ブラッドリー・クーパー『アリー／スター誕生 サウンドトラック』 UICY80382

[3]『エリック・クラプトン：LIFE IN 12 BARS』 UICY80383～4▲

[4]キャスト・オブ・マンマ・ミーア・ザ・ムーヴィー『マンマ・ミーア！ヒア・ウィー・ゴー ザ・ムーヴィー・サウンドトラック』 UICY80385

[5]キャスト・オブ・マンマ・ミーア・ザ・ムーヴィー『マンマ・ミーア！ザ・ムーヴィー・サウンドトラック』 UICY80386

[6]『フィフティ・シェイズ・ダーカー』 UICY80387

[7]『ラ・ラ・ランド』 UICY80388

[8]『シング』 UICY80389

[9]エイミー・ワインハウス『AMY エイミー』 UICY80390

[10]『はじまりのうた』 UICY80391／一部歌詞・訳詞・解説つき

[11]『ワイルド・スピード EURO MISSION』 UICY80392／一部歌詞・訳詞・解説つき

[12]『ワイルド・スピード MAX』 UICY80393／解説つき

[13]『ワイルド・スピードX3 TOKYO DRIFT』 UICY80394／一部歌詞・訳詞・解説つき

[14]『ワイルド・スピードX2』 UICY80395／一部歌詞・訳詞・解説つき

[15]『レ・ミゼラブル』 UICY80396／歌詞・訳詞・英語解説つき

[16]ボブ・マーリー&ザ・ウェイラーズ『ボブ・マーリー／ルーツ・オブ・レジェンド』 UICY80397～8▲

[17]『パイレーツ・ロック オリジナル・サウンドトラック』 UICY80399～400▲

[18]『ムーラン・ルージュ』 UICY80401／一部歌詞・訳詞・解説つき

[19]『スナッチ オリジナル・サウンドトラック』 UICY80402／解説つき

[20]『オー・ブラザー！』 UICY80403／解説つき

[21]『ノッティングヒルの恋人』 UICY80404

[22]『エンパイア・レコード』 UICY80405／歌詞・解説つき

[23]『パルプ・フィクション オリジナル・サウンドトラック（コレクターズ・エディション）』 UICY80406／歌詞・解説つき

[24]マイケル・ナイマン『ピアノ・レッスン』 UICY80407／解説つき

[25]ブラッド・フィーデル『ターミネーター2』 UICY80408／解説つき

[26]アラン・シルヴェストリ『バック・トゥ・ザ・フューチャー PART 2』 UICY80409／解説つき

[27]『バック・トゥ・ザ・フューチャー』 UICY80410／歌詞・解説つき

[28]『ドゥ・ザ・ライト・シング』 UICY80411／歌詞・解説つき

[29]マイケル・ナイマン『コックと泥棒、その妻と愛人』 UICY80412／解説つき

[30]マイケル・ナイマン『数に溺れて』 UICY80413／解説つき

[31]ジョー・ジャクソン『タッカー』 UICY80414

[32]『ビギナーズ』 UICY80415～6▲

[33]『アイアン・イーグル』 UICY80417

[34]『プリティ・イン・ピンク～恋人たちの街角』 UICY80418／歌詞・解説つき

[35]『風が吹くとき』 UICY80419／一部歌詞・訳詞・解説つき

[36]パット・メセニー・グループ『コードネームはファルコン』 UICY80420／一部歌詞・訳詞・解説つき

[37]ティナ・ターナー、ロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団『マッドマックス/サンダードーム』 UICY80421／歌詞・解説つき

[38]ジョン・バリー『愛と哀しみの果て』 UICY80422／解説つき

[39]『ストリート・オブ・ファイヤー』 UICY80423

[40]『フラッシュダンス』 UICY80424／歌詞・解説つき

[41]ジョー・ジャクソン『マイクス・マーダー』 UICY80425

[42]マイケル・ナイマン『英国式庭園殺人事件』 UICY80426／解説つき

[43]ヴァンゲリス『炎のランナー（25周年リマスター）』 UICY80427／解説つき

[44]タンジェリン・ドリーム『ザ・クラッカー／真夜中のアウトロー』 UICY80428／解説つき

[45]『フォクシー・レディ』 UICY80429／歌詞・解説つき

[46]セックス・ピストルズ『ザ・グレイト・ロックン・ロール・スウィンドル』 UICY80430

[47]ザ・フー『キッズ・アー・オールライト（リマスタード）』 UICY80431

[48]『グリース+2』 UICY80432／歌詞・解説つき

[49]ビル・コンティ『ロッキー（30周年記念エディション）』 UICY80433／一部歌詞・訳詞・解説つき

[50]リック・ウェイクマン『リフトマニア』 UICY80434／一部歌詞・訳詞・解説つき

[51]『ゴッドファーザー Part II』 UICY80435／解説つき

[52]ニーノ・ロータ『ゴッドファーザー』 UICY80436／解説つき

[53]『アメリカン・グラフィティ』 UICY80437～8▲／歌詞・解説つき

[54]『007／死ぬのは奴らだ』 UICY80439／一部歌詞・解説つき

[55]ジョン・バリー『007／ダイアモンドは永遠に』 UICY80440／一部歌詞・解説つき

[56]ジョン・バリー『女王陛下の007』 UICY80441／一部歌詞・解説つき

[57]『007は2度死ぬ』 UICY80442／歌詞・解説つき

[58]『007／サンダーボール作戦』 UICY80443／歌詞・解説つき

[59]ジョン・バリー『007／ゴールドフィンガー』 UICY80444／歌詞・解説つき

[60]『007／ロシアより愛をこめて』 UICY80445／歌詞・解説つき

[61]『007／ドクター・ノオ』 UICY80446／歌詞・解説つき

[62]ジョン・ウィリアムズ、アイザック・スターン『屋根の上のバイオリン弾き（30周年記念エディション）』 UICY80447／一部歌詞・解説つき

[63]バート・バカラック、B・J・トーマス『明日に向って撃て！』 UICY80448／一部歌詞・解説つき

[64]『真夜中のカーボーイ』 UICY80449／解説つき

[65]クインシー・ジョーンズ『ミニミニ大作戦』 UICY80450 解説つき

[66]ニーノ・ロータ『ロミオとジュリエット』 UICY80451

[67]『アンナ』 UICY80452 解説つき

[68]エンニオ・モリコーネ『続・夕陽のガンマン（リマスター&エクスパンデッド）』 UICY80453 解説つき

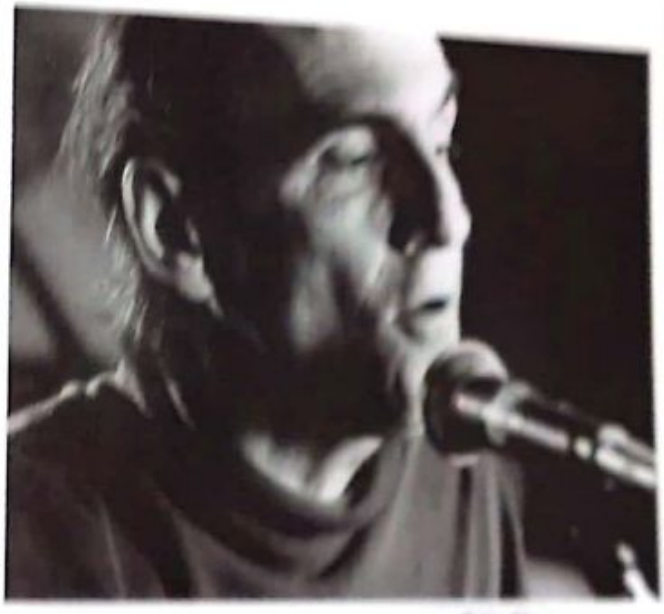
[69]『シェルブールの雨傘』 UICY80454～5▲

[70]『ロシュフォールの恋人たち（リマスター完全版）』 UICY80456～7▲ 一部歌詞・訳詞・解説つき

[71]『ジュ・テーム・モワ・ノン・プリュ』 UICY80460 解説つき

CamScannerでスキャン

ジェイムズ・テイラー



CamScannerでスキャン

[illegible]ほうはそれに比べれば落ち着いた内容。とはいえ、三十代直前から四十代いっぱい…という、名実ともに充実した時期の作品群は、先述したスタンスの微妙な変化をもたたえた、より幅広く成熟したJTの時代を俯瞰するには絶好だ。成功を収めながらも悩み迷った若き日々はすでに過去。新たな環境の下、成長した眼差しでとらえた人生の風景を淡々と紡いでゆくJTの歌声を堪能できる。

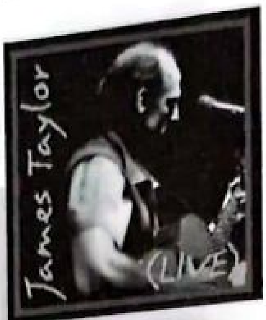
が、やっぱりそれ以前の代表曲も聞きたい[illegible]『(ライヴ)』のほうをおすすめ。これは92年の全米ツアーの記録。14公演が録音され、そこから選りすぐられた30曲を詰め込んだCD2枚組。もともとライヴ・レコーディングを前提に計画されたツアーだっただけに、セットリストは全キャリアに亘る。この時点での最新作だった『ニュー・ムーン・シャイン』（91年）までの全スタジオ・アルバムから、それぞれ最低でも1曲ずつが選ばれている。『グレイテスト・ヒッツ第2集』に収められたようなコロンビア期の楽曲群はもちろん、ワーナー期の代表曲もふんだん。ライヴ・ベスト的な作品に仕上がっている。が、もちろん円熟の四十代半ばを迎えたJTによる演奏だけに、たとえばワーナー期の「愛の恵みを」にせよ、おなじみ「君の友だち」にせよ、表現がぐっと深まっている。ドン・グロルニック（ピアノ）、クリフォード・カーター（キーボード）、マイケル・ランドー（ギター）、ジミー・ジョンソン（ベース）、カルロス・ヴェガ（ドラムス）、そしてコーラスにヴァレリー・カーター、デイヴィッド・ラズリー、ケイト・マーコウィッツ、アーノルド・マカラーら、『ニュー・ムーン・シャイン』にも参加していた辣腕メンバーたちを従え、過去曲も、その時点での最新曲も、すべてを同じ目線で極上の音世界へと昇華してみせる。凄腕メンバーたちと鉄壁のアンサンブルを構築するJT自身のギターも素晴らしい。さらに、このライヴ盤でしか聴けない「新しい讃美歌」や、ジョージ・ジョーンズのカヴァー「シー・シンクス・アイ・スティル・ケア」も。

これら2作。来日公演前の予習のために購入なさった方もいらっしゃるはず。が、それだけでなく、公演体験後の余韻を楽しむためにも、あるいは惜しくもコンサートを見逃した方の心の癒しにも最適だ。

『グレイテスト・ヒッツ 第2集』

ソニー SICP31707／Blu-spec 2／¥2000／3・27発売／歌詞・訳詞つき／解説=天辰保文

①人生の秘密 ②ハンディ・マン ③きみの笑顔 ④アップ・オン・ザ・ルーフ ⑤憶い出の町 ⑥ザッツ・ホワイ・アイム・ヒア～変わりゆく人々へ～ ⑦ドリーム・イン・リオ ⑧エヴリデイ ⑨遥かな心の歌 ⑩ネヴァー・ダイ・ヤング ⑪思い溢れて ⑫コパーライン ⑬どうぞ、光を… ⑭アナザー・デイ ⑮リトル・モア・タイム・ウィズ・ユー ⑯イナフ・トゥ・ビー・オン・ユア・ウェイ



『(ライヴ)』

ソニー SICP31705～6／2Blu-spec 2／¥2700／3・27発売／歌詞・訳詞つき／解説=萩原健太

[1] ①スウィート・ベイビー・ジェイムス ②トラフィック・ジャム ③ハンディ・マン ④きみの笑顔 ⑤人生の秘密 ⑥どうぞ、光を… ⑦エヴリバディ・ハズ・ザ・ブルース ⑧スティームローラー ⑨あこがれのメキシコ ⑩ミルワーカー ⑪カントリー・ロード ⑫ファイアー・アンド・レイン ⑬愛の恵みを ⑭君の愛に包まれて ⑮新しい讃美歌

[2] ①ウォーキング・マン ②ライディング・オン・ア・レイルロード ③サムシング・イン・ザ・ウェイ・シー・ムーヴス ④サン・オン・ザ・ムーン ⑤アップ・オン・ザ・ルーフ ⑥寂しい夜 ⑦シー・シンクス・アイ・スティル・ケア ⑧コパーライン ⑨スラップ・レザー ⑩オンリー・ワン ⑪ユー・メイク・イット・イージー ⑫想い出のキャロライナ ⑬アイ・ウィル・フォロウ ⑭きみの友だち ⑮ザット・ロンサム・ロード

〈アライヴ・ザ・ライヴ〉レーベル

XTCやトーキング・ヘッズなどニュー・ウェイヴ系を中心とした5タイトル

ライター立川芳雄

人気アーティストが放送用などに収録したライヴ音源をCD化した〈アライヴ・ザ・ライヴ〉シリーズ。これまでにも本誌で何度か取り上げてきたが、今回は3月にリリースされたアルバムのなかから5作品を紹介する。いずれも内容の充実した音源で、ファンなら一度は聴いておいて損のないアルバムだといえるだろう。

まずはクイーン+ポール・ロジャースによる[1]『ライヴ・イン・チリ2008』。クイーンは、元フリーのヴォーカリスト、ポール・ロジャースを迎えて05年頃から09年まで活動しており、08年にはオリジナル・スタジオ・アルバムの『ザ・コスモス・ロックス』をリリースした。今回の音源は、その際に行なわれた〈ザ・ロック・ザ・コスモス・ツアー〉のなかから、08年11月にチリのサンティアゴで行なわれたライヴを完全収録したもの。もともとはテレビ/ラジオ用の音源で、2枚のCDに32曲が収録されている。

収録曲の約3分の1は前述の『ザ・コスモス…』からの曲で、残りはクイーンの往年のヒット曲が中心。それに加え、フリーのヒット曲「オール・ライト・ナウ」や、バッド・カンパニーの曲も演奏されている。ライヴ会場のいわゆるノイズ・マイクで収録された音が大きめになっているようで、細かい部分を聴くという感じではないが、ライヴ全体の雰囲気を体感させるような音である。

個人的には、現在のクイーンのヴォーカリスト、アダム・ランバートはフレディ・マーキュリーに似すぎているように感じられ、むしろ異化作用を感じさせてくれたロジャース時代のクイーンが好きだったのだが、私のようなファンにとっては、おそらく心から楽しめるアルバムだろう。ちょっとコブシを効かせてブルージーに歌われるクイーンの名曲には、絶妙な魅力がある。ロジャー・テイラーがいまよりも元気なドラム・プレイを聴かせてくれるのも嬉しい。

次はXTCの2作品。[2]『ライヴ・イン・ロンドン1979』は、79年9月にロンドンのレインボウ・シアターで行なわれたライヴを完全収録したもので、BBCのラジオ番組用音源。バンドはこの直前にキーボーディストのバリー・アンドリューズが脱退して、ギタリストのデイヴ・グレゴリーが加入。3作目のアルバム『ドラムズ・アンド・ワイアーズ』を発表している。今回のCDには21曲が収録されているが、『ドラムズ…』からの曲は4分の1程度で、むしろ前作『GO2』や、初期のシングルの楽曲などが中心。全体に思ったよりパンク風味の強い演奏で、当時のロンドン・ニュー・ウェイヴ・シーンの空気感が伝わってくるような内容である。

そして聴きものは、もう一作の[3]『ライヴ・イン・ベルギー1982』。XTCは82年2月に『イングリッシュ・セツルメント』をリリースした後、リーダーのアンディ・パートリッジがライヴ活動の休止を宣言し、それからはスタジオでの活動に専念するようになったことで知られる。今回の音源は、『イングリッシュ…』リリース直後、契約消化のた

CamScannerでスキャン

[illegible]ション・ライヴのうち、[illegible]のブリュッセルで行なわれたものの記録で、同国のラジオ番組で放送されたものだ。

右に述べたような経緯のせいで収録曲数は11曲と少なめだが、聴きごたえのある貴重な音源である。残念なことに、1曲目「ランナウェイズ」は音量バランスが崩れており、しかも途中で音が途切れたりする。ただ、途中から持ち直し、中盤以降は楽器間のバランスも音質もかなり良好になっているのでホッとした。収録曲はもちろん『イングリッシュ…』からのものが中心だが、デビュー・アルバムでも取り上げられていたボブ・ディラン「見張塔からずっと」のカヴァーが聴けるのが嬉しい。スタジオ盤『イングリッシュ…』では、ギターを中心にしたごく普通のバンド・サウンドのようでいて実はそれをかなり逸脱している音が聴けるが、そうした音をライヴでも再現しようとしているのが、実にこのバンドらしいなと思う。

最後はトーキング・ヘッズの2作品。バンドは80年10月に名盤『リメイン・イン・ライト』をリリースしたが、それにともなって行なわれたワールド・ツアーは素晴らしい内容で、日本公演も非常に評判になったことを覚えている。そのツアーのうち同年12月にオランダのアムステルダムで行なわれたライヴを完全収録したものが、[4]『ライヴ・イン・オランダ1980』。ラジオ番組用の音源で、2枚のCDに15曲を収録している。

惜しむらくは音質で、高音が強調されすぎており、低音に迫力がない。そのせいでファンク／ダンス・ミュージック的な魅力がやや削ぎ落とされているのは残念だ。ただ、その点さえ除けば非常に充実した内容で、土着的リズムを知的に再構築するといったバンドのコンセプトは、見事に体現されているといっていいと思う。熱気をはらみながら醒めているデイヴィッド・バーンのヴォーカル、乱打されるパーカッション、はじゃぎまくるようなエイドリアン・ブリューのギターなど、聴きどころは多い。

そして[5]『ライヴ・アット・モントルー1982』は、個人的に今回の5作品のなかで最も良いと感じたアルバム。82年7月にスイスのモントルー・ジャズ・フェスティヴァルに出演したときの記録で、このときのステージの様子はブートレグなどで流出しており、ファンの間で高い評価を受けている。CDは全14曲を収録。音質も良好だ。

オリジナル・メンバー4人に、パーカッショニスト二人とキーボーディスト二人を加えた大編成。実力派のゲスト・ミュージシャンを迎えても素人っぽさとヘタウマ風味を失わないというのがこのバンドの強みだが、今回の音源でも、そうした彼らの魅力が存分に発揮されている。メンバーのソロ・アルバムからの曲が取り上げられているところも、新鮮な面白さがある。

[1]クイーン＋ポール・ロジャース
『ライヴ・イン・チリ2008』
IACD11316〜7

[2]XTC
『ライヴ・イン・ロンドン1979』
IACD11318

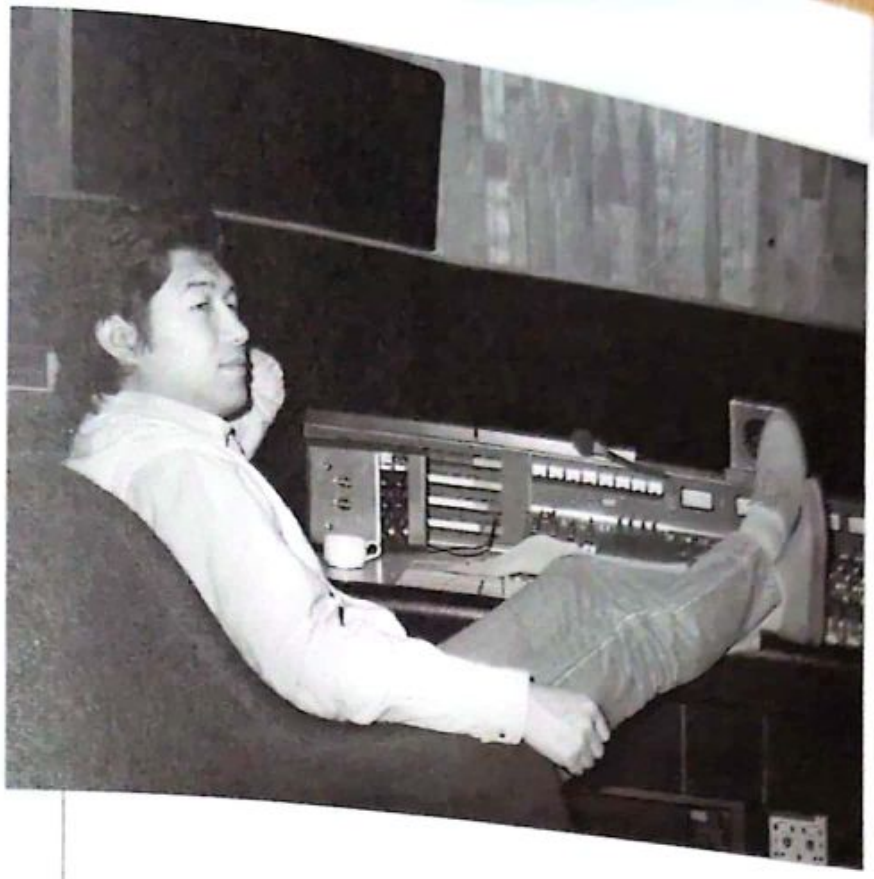
[3]XTC
『ライヴ・イン・ベルギー1982』
IACD11319

[4]トーキング・ヘッズ
『ライヴ・イン・オランダ1980』
IACD11320〜1

[5]トーキング・ヘッズ
『ライヴ・アット・モントルー1982』
IACD11322

＊発売はすべてAlive The Live（IAC）／3・1発売／オープン・プライス／英文ブックレット対訳つき／輸入盤国内仕様／完全限定盤

CamScannerでスキャン



大滝詠一

できうる限りの手法を投入してアルバムの新しい姿を見せた『EACH TIME VOX』

文＝小山守

大滝詠一の生前最後となるオリジナル・アルバムの40周年記念盤『EACH TIME VOX』がリリースされた。CD3枚、ブルーレイ1枚、アナログ盤2枚に、豪華ブックレットなど（別表参照）が付くボックスだ。その詳細をCDから解説していく。

◀「CD1」はこのボックス最大の目玉だろう。13曲すべてが初出となるミックス違い音源で、過去の数多あるヴァージョン違いからさまざまな要素を持ってきて新たな作品に仕立てたもの、といえる。オリジナルとの相違点や曲順の違いから賛否両論あるのかもしれないが、今できうる限りの手法を投入して"新しい『EACH TIME』を見せる"という気概が感じられるし、それが常に変容を続けてきたこの名盤のあるべき姿だと思う。新たにリマスタリングもされているようで、丸みを帯びたまろやかな音像になり、解像度もグッと上がって各楽器がより明瞭に鳴っているのが特筆すべき。これまでで最良の音質なのは間違いない。

それでは各曲のこれまでとの主な違いを挙げていく。いきなり未発表曲①から始まる。84年1月にラジオ番組でオンエアしたものの、大滝自身がインタヴューで「メロディができなかった」と語っているように未完成の曲だ。だから全編インストで、ほどよくハネるビートを軸にしたファンキーな演奏と、キラキラした装飾系の音が際立つ、この時期の大滝らしい夏っぽい曲といえる。インスト曲としてはしっかり仕上がっており、冒頭に持ってきたのも納得。②のイントロはオリジナルだとハープシコードにベースが重なっていたが、今回はハープシコードのみ。またエンディングが長く演奏が完全に終わっても波の音のSEが聞えるもので、『EACH TIME SINGLE VOX』（以下、『SINGLE VOX』）と同じ。そこでは間奏のサックス・ソロが別テイクなのだが、ここではオリジナル通りのテイクだ。③はイントロが雷のSEで始まるの

CamScannerでスキャン

はオリジナルと同じだが、アウトロが長く、フェイド・アウトしながらサックス・ソロを最後まで聴くことができ、この部分は『B-each Time L-ong』収録ヴァージョン。"20th Anniversary Edition"（以下、20周年盤）ではボーナス・トラック扱いだった④が、今回初めて正規扱いとなった。サンプリングSEの嵐というべき立体的カオス・サウンドの曲だが、今回はそれをあえてモノ・ミックスにしているのがさすが。それだけではなく、20周年盤に入っていた冒頭の"掛け声"がカットされ、また従来はサンプリングSEの"アミーゴ"が3回、"す・す・き・だ・だ・だ"が2回出てくるが、今回はどちらも1回しか出てこない、などの違いがあり、全体的にSEが少なめ。⑤は、オリジナルだとイントロが北村英治のクラリネットで始まるが、ここではアコーディオンに差し替わっていて、『SNOW TIME』でのヴァージョンと同じ。ただ『SNOW TIME』はアウトロでのクラリネット・ソロが約40秒なのに対し、今回は1分18秒のロング・プレイで、さらにはオリジナルのフェイド・アウトとは異なり最後まで演奏。⑥は二度にわたる野球場の歓声風SEが大きく、曲終わりでエレクトロSEとその直後に大滝の"うん、まあ割合良かったかな"が入る、『SINGLE VOX』収録のヴァージョン。しかし『SINGLE VOX』は最後のドゥー・ワップ風コーラス"バンドゥビババババン"がオリジナル通りに4回繰り返されるのだが、ここでは2回繰り返した後に演奏のみになり、これは『Complete EACH TIME』CD版の部分を採用している。続く⑦はオリジナルだと"今ではそんな君も哀しいよ"の後に入る高音の"ほぉー"という声が消されてナチュラルに処理されている。また最後のジェット機のSEが大きく、かつきれいにフェイド・アウト（『SINGLE VOX』と同じ）。

後半の⑧、"君が言うほど時間が無限になかったことも、今ではよく知ってる"のヴォーカルがテイク違い（『NIAGARA TRIANGLE Vol.2 VOX』と同じ）で、最後にギターのサステインが長く響くヴァージョン（『SINGLE VOX』と同じ）。次の⑨はイントロの前にバス・ドラムの音とカウント音が加えられている。⑩以降の終盤はなかなかに驚きの連続だ。⑩はストリングスのイントロが付いたヴァージョン。これは84年5月にプロモーション・シングルとして制作され、のちに『NIAGARA CD BOOK II』の『Niagara Rarities Special』に収録されたもの。そこではストリングスの後にすぐ歌が始まるが、今回はストリングスの後に大滝のハミングなど本来のイントロがあって歌が始まる、という新ヴァージョンになっている。⑪はオリジナルだとイントロなしで歌から始まるが、ここではハープによる短いイントロが付いていて、オリジナルのハープを伸ばしたものだろう。また『SINGLE VOX』で初出の、間奏の後に"ブルーの夜明けまで…"のヴァースが入るロング・ヴァージョンを採用。

さて、問題の⑫はオリジナルのいわゆる大エンディング・ヴァージョンが、久々の登場となった。しかしオリジナルの、ヴォーカル及び演奏がいったんフェイド・アウトしてから再びフェイド・インしてエンディング、という構成ではなく、フェイド・アウトせずそのままエンディングに至るヴァージョンだ。これは"30th Anniversary Edition"のディスク2、"純カラオケ"と同じということになる。そして、ラストの⑬は、オリジナルだとイントロがマッチ・ルータラのスティール・ギターから始まってギター・ソロへと移行していくが、ここでは最初からギター・ソロで始まっている。

アージョンはアコギのカッティングが完成形とは違う。②はここでも大滝がハミングを入れていて、メロディーを付けて完成させる意向だったのがわかる。冒頭で完成形にはないハンド・クラップが入っている。①は出だしとエンディングはできているが全体の構成がかなり異なり、演奏時間も長く、完成形はここからグッと短縮したものと思われる。⑤は二つのヴァージョンが存在し、これはファースト・ヴァージョン（「CD2」③が完成形）の初期テイクになるわけだが、アコギのカッティング中心の演奏で、大滝のハミングも一部が完成形のメロディーではなかったり、まだ固まりきっていない状態なのだろう。⑧は大エンディング・ヴァージョンで、「CD1」⑫での最後のリフレインからそのままエンディングに至るパターンが、この時点ですでにできあがっている。⑨は出だしの〝眼が逢うたびに…〟の部分がまだなく〝Magic eyes〟から始まる。⑫は前述した①のセカンド・ヴァージョン。アコギのパターンが完成形になって、全体の構成もしっかり仕上がっている。続いて、のちに『LOVE TIDE』に収録されるインスト2曲。完成形は14が駒沢裕城のペダル・スティール、15が村松昇男のギターをそれぞれフィーチャーしているが、どちらもオーヴァーダビング以前のため大滝がメロディーを歌っている。最後は⑤のセカンド・ヴァージョン16で、大滝が⑤の出来に納得しなかったため83年1月12日に再度挑んだもの。この曲と「マルチスコープ」を統合するようなアイデアがあったようで、それがしっかり形になってほぼ完成形に至っている。

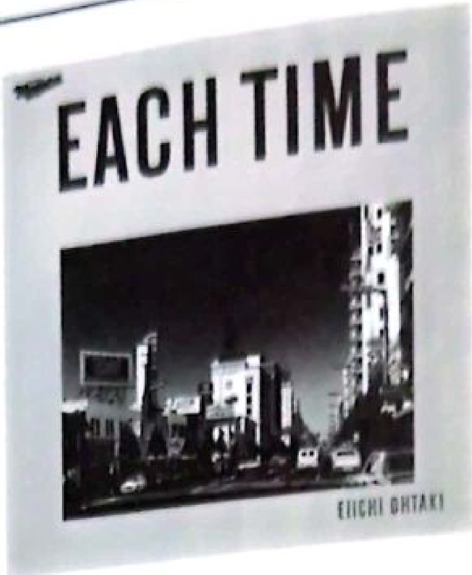
ブルーレイ及びアナログについても触れておく。ブルーレイは5・1chサラウンド音源（全曲オリジナル・ヴァージョン）が今回も刺激的だ。「恋のナックルボール」などでのSE類が空間を飛び交う立体的音像はサラウンドならではだし、「ガラス壜の中の船」あたりでのストリングスの響きに包み込まれる感覚も格別。「1969年のドラッグレース」での、ウォール・オブ・サウンドの渦の中にいるような体験は、鳥肌ものの音響快感といえる。本作初となるハイレゾ音源は、CD以上に解像度が高く、きめ細かな音像を楽しめる。アナログ盤は、個人的に今回の中で最もしっくりきた。中低域が太くしっかりと出ていて、豊かな音像を成し、音圧も力強い。やはり大滝の音楽はアナログが一番ハマる、と再認識した。

◀

「CD2」は、84年4月にオンエアされたラジオ番組に大滝がゲストで登場した際のトーク（1）がメイン。最後の「CD3」は、全曲が初公開のスタジオ・アウトテイクを時系列順に収録している。すべてテイク1～2の初期テイクなので、ストリングスなどさまざまな楽器のオーヴァーダビングを加える以前のシンプルな演奏ばかりだ。大滝は全曲でガイドライン用のハミングっぽいヴォーカルを入れ、ミュージシャンに指示を出すなど、スタジオの雰囲気が伝わってくるのも大きな魅力だろう。その中から完成形との違いで目立ったものを列挙する。

『大瀧詠一 レコーディング・ダイアリーV O L 3』（リットーミュージック刊）によれば、①は83年1月19日に一旦完成するが、3月31日に再度録り直しているので二つのヴァージョンがある。このファースト・ヴ

CamScannerでスキャン



『EACH TIME VOX』

ナイアガラ（ソニー）SRCL12700〜5／¥[illegible]／
3CD＋Blu-ray＋12インチ2枚組／歌詞・解説つき／
3・21発売

＊豪華ブックレット＋歴代「EACH TIMES」A4冊子＋32ライ
・ポスター2種＋ステッカー2種つき／アナログは重量盤
インチ33回転2枚組仕様

※完全生産限定盤アナログ（SRJL1155〜6／¥[illegible]
［1984年Original Mix］の12インチ・フルアルバムに、7イン
「フィヨルドの少女／バチェラー・ガール」を同梱。通常
盤2CD（SRCL12710〜1／¥3600）も同時発売

[CD1]＜『EACH TIME』40th Anniversary Edition＞ ①SHUFFLE OFF (40th Anniversary Version) ②夏のペーパーバック (40th Anniversary Version) ③Bachelor Girl (40th Anniversary Version) ④マルチスコープ (40th Anniversary Version) ⑤木の葉のスケッチ (40th Anniversary Version) ⑥恋のナックルボール (40th Anniversary Version) ⑦銀色のジェット (40th Anniversary Version) ⑧1969年のドラッグレース (40th Anniversary Version) ⑨ガラス壜の中の船 (40th Anniversary Version) ⑩ペパーミント・ブルー (40th Anniversary Version) ⑪魔法の瞳 (40th Anniversary Version) ⑫レイクサイド ストーリー (40th Anniversary Version) ⑬フィヨルドの少女 (40th Anniversary Version)

[CD2] ①井上大輔ラジオトーク（1984年4月） ②EACH TIME Special Edit ③恋のナックルボール（1st Recording Version） ④Cider '83 (Broadcast Mix) ⑤Cider '83 (15sec)

[CD3]＜EACH TIME Sessions＞ ①夏のペーパーバック (Take 1) ②SHUFFLE OFF (Take 2) ③Bachelor Girl (Take 1) ④マルチスコープ (Take 2) ⑤恋のナックルボール (1st Recording Version／Take 1) ⑥木の葉のスケッチ (Take 1) ⑦ペパーミント・ブルー (Take 1) ⑧レイクサイド ストーリー (Take 1) ⑨魔法の瞳 (Take 1) ⑩ガラス壜の中の船 (Take 1) ⑪銀色のジェット (Take 1) ⑫夏のペーパーバック (2nd Recording Version／Take 1) ⑬フィヨルドの少女 (Take 2) ⑭オーロラに消えた恋 (Take 1) ⑮雪のツンドラ (Take 1) ⑯恋のナックルボール (Take 1)

[Blu-ray]＜40th Anniversary Music Video＞ ①EACH TIME THE MOVIE ②ペパーミント・ブルー ＜特典映像 [Original Music Video]＞ ①ペパーミント・ブルー (1984) ②フィヨルドの少女 (1985) ③EACH TIME TV-CM (1984) ＜5.1chサラウンド音源＞ ①マルチスコープ ②夏のペーパーバック ③Bachelor Girl ④魔法の瞳 ⑤木の葉のスケッチ ⑥恋のナックルボール ⑦銀色のジェット ⑧1969年のドラッグレース ⑨ガラス壜の中の船 ⑩ペパーミント・ブルー ⑪レイクサイド ストーリー ⑫フィヨルドの少女 ＜EACH TIME 1984 Original Mix（ハイレゾリマスタリング音源）＞ ①魔法の瞳 ②夏のペ
③木の葉のスケッチ ④恋のナックルボール
ット ⑥1969年のドラッグレース ⑦ガラス壜の中の
パーミント・ブルー ⑨レイクサイド ストーリー
TIME SINGLE VOX（ハイレゾリマスタリング音
夏のペーパーバック ②木の葉のスケッチ
ッグレース ④銀色のジェット ⑤魔法の瞳
ボール ⑦レイクサイド ストーリー ⑧ガラス壜の中の
ペパーミント・ブルー ＜EACH TIME Singles・
（ハイレゾリマスタリング音源）＞ ①Bachelor Girl
ヨルドの少女 ③哀愁のフィヨルドの少女
der '83 ⑤Cider '83 (Broadcast Mix)
(15sec) ⑦ペパーミント・ブルー (Promotion Version
⑧恋のナックルボール（1st Recording Version
チスコープ ＜EACH TIME Karaoke（ハイレゾリマスタリ
ング音源）＞ ①夏のパーパーバック ②ペパーミント・ブ
ー ③木の葉のスケッチ ④ガラス壜の中の船
ェット ⑥レイクサイド ストーリー ⑦1969年のドラッグレー
⑧恋のナックルボール ⑨魔法の瞳 ⑩Bachelor Girl
ィヨルドの少女 ⑫Cider '83 Track Only
⑬Cider '83 Track Only (Tracks only, featuring
Strings) ⑭恋のナックルボール（1st Recording Ver-
sion）

[2LP]＜EACH TIME 40th Anniversary Edition＞
[A] ①SHUFFLE OFF (40th Anniversary Version
②夏のペーパーバック (40th Anniversary Version
③Bachelor Girl (40th Anniversary Version)

[B] ①マルチスコープ (40th Anniversary Version
木の葉のスケッチ (40th Anniversary Version
ナックルボール (40th Anniversary Version
ジェット (40th Anniversary Version)

[C] ①1969年のドラッグレース (40th Anniversary Ver-
sion) ②ガラス壜の中の船 (40th Anniversary Ver-
sion) ③ペパーミント・ブルー (40th Anniversary Ver-
sion)

[D] ①魔法の瞳 (40th Anniversary Version
サイド ストーリー (40th Anniversary Version
ルドの少女 (40th Anniversary Version)

CamScannerでスキャン

写真＝小岩井ハナ

梶芽衣子 インタヴュー

70年代作品の海外でのリイシューなど新たな展開を迎える女優・歌手が新作を発表

聞き手＝真鍋新一

座右の銘は〝媚びない、めげない、挫けない〟。数々の映画・ドラマでアウトロー・ヒロインを演じ、映画主題歌の思いがけない大ヒットから歌手活動も本格化。現在も世界中からリスペクトの対象となっている女優、梶芽衣子のキャリアがいま新たな展開を迎えている。昨年、海外レーベルのMeteamsoundsから『梶芽衣子のはじき詩集（うた）』が、CDとLPで再発された。聞けばなんと、今後、3年にわたってテイチク時代のアルバム5作品が復刻されるのだという。そういったことも後押しとなり、歌手としての復活を告げた18年の『追憶』以来、6年ぶりのニュー・アルバム『7（セッテ）』が完成。配信とアナログLPでリリースされることとなった。さて、前置きはこのくらいにして、役者としても歌手としても充実した日々をおくっている彼女の近況について、ご本人の言葉で語っていただこう。

海外レーベル・オーナーの言葉に驚く

――このたびはニュー・アルバムの完成、おめでとうございます。梶さんの楽曲が世界で注目されるきっかけになった映画『キル・ビル』の公開から早くも20年ですが、ここへきて、また世界規模の盛り上がりを見せています。まずは、そのご感想からお聞かせください。

「まず、とにかく驚いたのは、レーベル

CamScannerでスキャン

[illegible]ような雰囲気の方たちで、わたしが何年前に歌った演歌や歌謡曲がどう聞こえているんだろう、と不思議に思って、直接聞いてみたんです。レーベル・オーナー（マット・ロビン）はフランス人で、ロンドンに住んでる方なんですが、彼らが言うには、『僕らにとっては矢野顕子を聴くのと同じなんだ』と。だから余計にわからなくなっちゃった」

──矢野顕子さんやYMOのメンバーのソロ作品など日本の都会的な音楽を紹介してきたレーベルの人たちが、歌謡曲も同じ感覚で楽しんでいるというのは面白いですね。そこから、アルバム制作にどうつながっていったんですか。

「去年5月に、第1弾のリイシューで『はじき詩集』が発売されたとき、彼らから『新譜は出さないんですか』と聞かれたんです。それで、去年からお世話になっているテレビマンユニオンの林田浩光さんに歌をやりたいって強引にお願いして、徳間ジャパンさんに入っていただいて…。そこでトントン決まってしまったんです。それが6月。本当にすごいスピードでした」

──それはすごいスピード感ですね。それ[illegible]ですが、渋谷駅前での撮影はいかがでしたか。

「わたしが歩いていたあの場所は、『女囚さそり』の3作目（『女囚さそり けもの部屋』73年）で、手錠をつけたまま地下鉄のホームから逃げていった、ちょうど同じ場所なんです」

成田三樹夫さんが演じる刑事の腕をぶら下げながら血まみれで走っていた、あの。

「懐かしかったですよ。あの時、さんざん走った場所は再開発ですっかり変わってしまって。今回の撮影はテストなしのぶっつけ本番。しかも12月25日に、年末で人があふれかえっているところを歩いて、15分ノンストップで撮りました。ああいうのは途中で止めたら絶対ダメですね。空気が[illegible]まで一気にやりきりました。[illegible]後は編集でなんとかお願いします、と、わたしからディレクターの方にお願いしました」

梶芽衣子
『梶芽衣子のはじき詩集（うた）』
テイチク DP［1973］ LP

増村保造監督からの言葉

──ヴィデオが公開されたのが1月末なので、撮影・編集・完成までたった1か月。本当にすごいフットワークです。レコーディングの方もそうとうな急ピッチだったそうですね。

「2か月しかなかったですから。でも、いちばん大変だったのはシンちゃん（鈴木慎一郎／『7』では作詞・作曲・編曲・プロデュースを担当）です。彼が本当にがんばってくれた。あっぱれでしたね。あの期間に10曲も作って、しかもそれぞれが全部違う。ひとつとして似ている曲がないんです。改めて尊敬しました」

──今回の新作の目玉はなんといっても、『曽根崎心中』（78年）の増村保造監督（86年没）が、梶さんのために歌詞を遺されていた〈真っ赤な道〉〈恋は刺青〉ですよね。これはどういう経緯で書かれた詞なんですか。

「増村監督とは映画のお仕事以外でもよ

梶芽衣子
『追憶』
FIX OCCF0001［2018］（CD）

〝食事などをご一緒していたんですが、あるとき、入ったお店にカラオケの機械があったんです。そしたらいきなり監督に〝梶さん、ちょっと歌ってくださいよ〟とお願いされて。リクエストありますかと聞いたら〝僕は、〈弟よ〉（内藤やす子／75年）って曲が好きなんです〟と仰いました。わたしは内藤やす子さんの大ファンでしたし、打ち上げの余興なんかで歌をお願いされることがあって歌い慣れていたんです。

歌い終わるなり監督が、〝あなたは歌う使命感をお持ちなさい〟と。急にそんなこと仰るものだから、それなら監督、詞を書いてくださいよってその場の勢いでお願いしちゃったんです。それからしばらくして、お手紙と一緒に送っていただいたのがこの2曲の歌詞でした」

――それは心のこもった書き下ろしという か、監督が女優さんにあて書きで脚本を書くようなものですよね。

「その手紙には、歌い方まで指示が書いてあったんですよ。まるで演技指導をしているみたいに、〝細かく、短く切って、激しく、強く、切なく、悲しく〟って。一度にそんなことできるわけないんですけどね。でも、きっとそういう雰囲気の歌が似合うと思ってくださったんでしょう。手紙には〝もしこれがダメだったら、できるかどうか怪しいのがまだ3曲ほどあるからいつでも言ってくれ〟とも書いてあったんですよ。〝せっかくなので残りの3曲もください〟と言っておけばよかった（笑）」

――では、今回のレコーディングでは監督の言葉を思い出しながら歌われたんですね。

「いいえ、それが全然思い出してません（笑）。いつも通りの自己流です」

今だけの歌を聴いてほしい

――日活出身の役者さんは、特に音楽のレッスンを受けたりはされていなくても、みなさん天性のセンスで歌われますよね。アルバムのリリースも非常に多いです。

「それは、俳優の宿命のようなものなんです。ただ、わたしたちは〝この通りに歌ってくれ〟と言われてもできない。いつ、どこへ出ていっても音符通りに、パーフェクトに歌えるのが本当の歌手だと思うんです。お芝居なら増村監督のように妥協のない方ともお仕事ができますが、歌は難しいですね。それこそ最初に〈怨み節〉を歌ったときだって、菊池俊輔先生が〝梶さんの歌いたいように歌えばいい。僕の音符は気にしないでもいいから〟って言ってくださったおかげで、すごく楽になったんです。でも、『女囚701号 さそり』（72年）で流れる〈怨み節〉を聴くと今でもゾッとしますね。下手で」

――ご自身の映画やレコードをもう一度観たり聴いたりはあまりされないんですか。

「だって、やり直せないでしょう。観直しても、聴き直しても、反省しかないんです。なんであそこで、こうしてしまったんだろうって。わたし、満足したお仕事なんて今までひとつもないですから。歌をうたって、楽しいと思ったことがあまりなかったんですよ。もともとお仕事として歌い始めたので、やっぱり役者に専念したほうがいいかな、とかずっと迷っているところもあって。でも最近は、歌がすごく楽しい。そこが、『追憶』以降でいちばん変わった

CamScannerでスキャン

『7(セッテ)』
徳間ジャパン TJJA10060／¥4000／LP／3・24発売
[A]①真ッ紅な道 ②心焦がして ③上等じゃない ④愛の剣 ⑤恋は刺青
[B]①女… ②虫けらたちの数え唄 ③星空ロック ④とばり ⑤それだけで… ⑥修羅の花

…る曲が他に2曲ありました。

「〈女…〉は〈鬼平犯科帳〉（1989～2016年）でずっと一緒だったスクリプターの竹内美年子さん、〈虫けらたちの数え唄〉も、〈鬼平犯科帳〉の元助監督で、のちに監督になった酒井信行さんによる作詞です。二人は京都の撮影所の同期で、仲が良かったのでお願いしてみたら、真面目に書いてきてくださったんです。いつ曲がつくかどうかわからないのよ、と言っても〝そんなことはいいですから〟って。増村監督の2曲とこの2曲の歌詞は、わたしがずっと宝物として預かっていたんです」

――タイトルの『7（セッテ）』にはどう…

「そのタイトルは、アルバムにエグゼクティヴ・プロデューサーで入っていただいた杉田浩光さんからの提案でした。6月にお話が決まってから本当にすごいスピードで、タイトルまで考えている余裕はなかったんですが、杉田さんはわたしがイタリアに縁があることも知っておられた。

弟がイタリアに暮らしていて、母のお墓もそこにあるんです。ラッキー・ナンバーの7で、しかも今年でわたしは77歳。〝『7（セッテ）』でどうですか〟って言われてドキッとしちゃって。なんで気がつかなかったんだろう。絶対にそれしかない！と思っちゃいました」

――お誕生日（3月24日）に合わせたリリースということで、どうしてもこの日に出すためのハード・スケジュールだったわけですね。

「偶然にもレコーディング、リリースと、5月のライヴ日程もすぐ決まりました。そんなとき、自分が出演したZeppの『幽☆遊☆白書』が去年末から配信され、世界ランキングで2位になって…。いろんなことがいっぺんに、タイミングよく…

――『幽☆遊☆白書』の幻海師範役、ハマっていました。

「今までの日本の感覚だとどうしても年齢に合った役しか回ってこないから、またアクションもやるような役を演じたことで、海外の方も喜んでくれたみたいです。わたしがもう一度歌をやりたいなと思ったのは、アクションと同じように〝梶芽衣子はこういうこともやりますよ〟という表現がしたかったからというのもあるんです。そうしたら、なにか状況がもっと良い方向に変わるんじゃないかと思って」

――これから梶さんの活動がさらにどう広がっていくか、ワクワクしています。

「もうすぐ喜寿という年齢を迎えますが、わたしはいま、この時にできることしか考えていません。先のことはわからないし、後ろを振り返ることもない。反省はするけど後悔はしない。それは、自分自身のなかでこうしたい、ああしたいっていう信念はいつも貫いてるからなんです。もちろん失敗はたくさんしましたが、それが人生でしょう。そんな今のわたしが歌った、今だけの歌を聴いてほしいなと思います」

〔3月6日 テレビマンユニオンで〕

CamScannerでスキャン

第283回

大鷹俊一の レコード・コレクター 紳士録

写真＝三浦太輔

菅谷晋一さん

60年代のイギリス人が聴いていた
サウンドの再現を、アトリエの
オーディオで目指してます

今回お訪ねしたのは本誌の表紙デザインを2010年5月号から23年12月号まで担当してくださっていた菅谷晋一さん。僕も『定本 ジミ・ヘンドリックス――その生涯と作品――』『レコード・コレクター紳士録2』（共にミュージック・マガジン）などの装丁でお世話になりっぱなしなのだが、読者の方々には例年2月号の企画〈私の収穫〉の常連執筆者として身近な存在のはず。

「ロックを聴くようになったきっかけは、中学のころにサンヨーの工場に社会科見学で行ったときに、お土産にもらったカセット・テープなんですよ。そのカセットに何を入れていいか分かんないから、お兄ちゃんがいっぱいレコード持ってる友達に渡して、録音してもらったんです（笑）。1曲目にa-haの〈テイク・オン・ミー〉が入ってて、その中にランDMCの〈ウォーク・ジス・ウェイ〉があったんですね。すごくカッコいいと思ったんですけどヒップホップ方面には行かずにエアロスミスの方に行って、そこからキッスとかのアメリカのロックを聴きながら育ったって感じかな。

で、高校のときに、僕、巣鴨の本郷高校に通ってたんですけど、駅前の本屋に入っ

CamScannerでスキャン

左から写真家ロバート・フランクの作品集、ローリング・ストーンズ『メイン・ストリートのならず者』、そして菅谷さんが本誌の表紙デザインを手掛けるきっかけの源泉となった増刊『ローリング・ストーンズ』

たらこのレコード・コレクターズ増刊『ローリング・ストーンズ』があったんですね。ストーンズが来日することは知ってたんですけど、本を買ってみたら彼らがどういう人たちの曲をカヴァーしていたのかがよく分かって、そっち方面にものすごく興味が湧いたんです。だから、この本は自分にとってのバイブルですね。社会人になってから、この本を編集した寺田（正典）さんにどうしても会いたくなってミュージック・マガジン社に行ったのが、『レココレ』の表紙を担当するきっかけにもなりました」

その本は、今や伝説となったローリング・ストーンズ初来日公演（90年）に合わせミュージック・マガジン社から出された別冊。先日惜しくも亡くなられた小出斉さんによる、ストーンズが取り上げたカヴァー曲についての詳細な解説が掲載されていた。

「それまではガンズ・アンド・ローゼズとか、そのときのロックも普通に聴いてて、CDからカセット・テープにダビングしてウォークマンで聴きながら学校へ行くって感じだったんですが、一番衝撃を受けたのはジミ・ヘンドリクスかな。効果音とかすんごい使い方するじゃないですか。あれを聴いてたら悶々とした世界になって、そりゃセカンド（『アクシス：ボールド・アズ・ラヴ』）とかのジャケットができるよな、って。ギターはひずんでるんだけど、中には綺麗な音も混ざってて、なんかすげぇな〜って。

そうこうしているうちにストーンズのLPも揃ってきて、そのジャケを床に並べて眺めたりしてたときに写真家ロバート・フランクの存在を知ったんです（『メイン・ストリートのならず者』のジャケット・デザインを手掛けた写真家）。この人、ネガに傷つけて文字とか入れちゃうんですよね。今はMacとかで普通にできちゃうけど（笑）、そういうのがすごくカッコよくて。いつかは彼のような写真を撮ってみたいとか思うようになり、それで大学に入って色々な作品づくりを始めていった感じです」

ストーンズにしてもビートルズにしても、音楽を軸にダイナミックに他のアートやカルチャーとミックスさせていった人たちであり、音楽を通してそんな時代の洗礼を受けた菅谷さんがデザイナーへと向かっていくのは自然だったのかもしれない。ただ、当たり前なら美術大学やデザイン・スクールなどを経て、その道を進みそうなものだが、彼の場合は全く違った。

「27歳だったかな。大学出て2年くらい父親の工場で働いてたんですね。そこは金型を作るところだったんですが、自分は金型用のための設計図を描くのではなく金型を依頼する方になりたい、つまり元になる製品をデザインしたいなと思ったんですよ。で、音楽も好きだったので一番手っ取り早

CamScannerでスキャン

大阪で見つけた、あきれたぼういず「商売往来」（昭和14年）のSP。付属の歌詞カードも非常に貴重だ

ムーングロウズの代表曲のひとつ「シンシアリー」のSP盤。びっくりするほど音がいいとのことで実際に聴かせていただいたが、伸る通りヴォーカルの生々しさに圧倒されてしまった

本誌毎年の恒例企画〈私の収穫〉で菅谷さんが紹介してくれる作品はSP盤が多い。そのSPで一番最初に入手したのは、幼少時に家族と共に旧ソ連（現ウクライナ）からシカゴへ移住した初期ブルー・ノートの人気ピアニスト、アート・ホーディスのもの

ロックンローラーのジョニー・レイ、ミード・ルクス・ルイスやウィル・ブラッドリーのブギウギ・アルバムなど、ジャケが美しいSPアルバムも大好きとのこと

かったのが、遊びでやってた絵やシルクスクリーン、写真を使って、ジャケット・デザインの分野に行くことだったんですね。

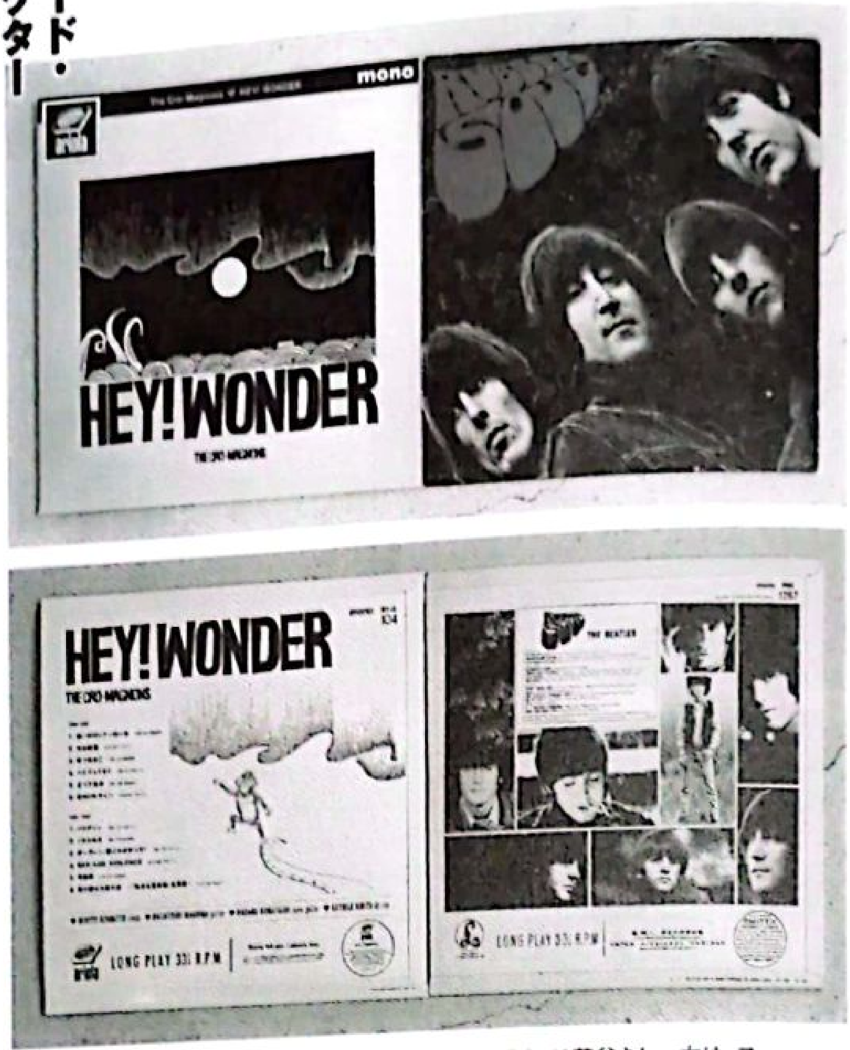
専門の勉強はしてないんで、どこ行ったらいいか分かんなかったから（笑）、映画でも話したけど佐藤（三雄）さんの事務所にふらっと行って作品見てもらったりして。で、ポンジュールレコードというレコード屋さんのバイヤーの面接に行って作品を見せたら、製品を作る方にって言ってくれて、CDジャケットのデザインをする仕事をフリーの状態でくれて、そこがスタートです。で、ポンジュールレコードの仕事が終わったときに、それを持ってパルコに行ったんですよ。そしたらレコード部門の仕事をもらって、そこで絵を描いたりジャケットを手掛けたりと、今と変わらない（笑）」

話に出てきた映画とは、『エポックのアトリエ 菅谷晋一がつくるレコードジャケット』（21年）のこと。アトリエでの製作風景や関わった人たちによるコメントで彼の世界を浮かび上がらせるこの映画は、独特のリズムが彼の内部と共振していておもしろい。そして、その穏やかな容貌とは異なる意外なほどの行動力に驚かされるが、こんなエピソードも教えてくれた。

SP盤は割れやすいので、LPの上に横向きにして収納

CamScannerでスキャン

「20歳くらいのときなんですけど、弾けないのに20数万円もするウッド・ベースを御茶ノ水の下倉バイオリンで買って、車に積んで持って帰ったんだけど、どうしたらいいか途方に暮れて（笑）。たまにボンボン鳴らす程度で、どうしようと思っていたんです。で、パコ・デ・ルシアのライヴに行ったときに二日酔いで何も食べてなくて、お腹空いてたからおにぎり買って電車内で食べたんですよ。そしたら隣に座ってる80近いおじいさんに〝電車でおにぎりなんて食べちゃダメだよ〟って怒られたんですけど、その足元を見たら赤いサックスがあって。〝サックス吹かれるんですか？　僕、ウッド・ベース買ったんだけど、どうしたらいいか分かんなくて〟って言ったら、〝じゃあウチのバンドに来いよ〟って。そこはドラムの人も元プロで、もう一人の若いピアニストとの計4人。そこで3年ほど修行させてもらいました。でも、何も教えてくれないんですよ。自由に弾いていいよ、どうせベースの音なんて聞こえないからとか言って（笑）。最後の方は、なんとかみんなに合わせられるようになりましたが」



左はクロマニヨンズの最新作。もちろん、デザインは菅谷さん。右は、フリップバック仕様アルバムの採寸のための見本として購入したビートルズ『ラバー・ソウル』の英オリジナル盤。下の写真を見ると、クロマニヨンズのジャケ裏にも『ラバー・ソウル』と同様の折り返しがあることが分かる

まるでコミック『BLUE GIANT』だ。

そんな菅谷さんの代表作とも言えるのが、ザ・クロマニヨンズのジャケットや、彼らのライヴで飾られるオブジェ類、マスコット・キャラクター〈高橋ヨシオ〉など。ザ・クロマニヨンズとのコラボも、菅谷さんの音楽観を広げるきっかけのひとつだった。

「クロマニヨンズのジャケットを手掛けることになった一番最初のころに、フリップバック（*註）の再現というテーマがありまして、折り返し部分の寸法とかを計るためにビートルズの『ラバー・ソウル』を買ったんです。モノラル盤だったんですが、

*註＝用紙に直接印刷した後、折り曲げて組み立てるジャケットの仕様。裏面の上下などに折り返しがあるのが特徴

プレイヤーはガラード、トーンアームはグレイ・リサーチ、カートリッジはGEの通称"バリレラ"を使用。グレイ・リサーチのアームを選んだのは、ビートルズ『ラバー・ソウル』の製造工場での検品作業の写真をたまたま見た際に、作業員が音の確認用に使っていたプレイヤーのアームが同社製だったため。アンプは英リーク社の製品を使用。同社の製品が、英BBCや録音スタジオのモニター・アンプとして使われていたということで選んだそうだ

スピーカーはビートルズ全盛時代の製品ということで、60年代のEMI社製のものを使用。右奥には、クロマニヨンズの2018年のシングル「生きる」のジャケに使われた木像が見える

それを聴いたらぶっ飛んだんですよ。そこからモノ盤にハマったんですが、ちゃんとモノラル用の針を用意したのに音がビビっちゃうんですね。そうしたら60年代当時のLPの検盤作業を撮った写真を見つけて、こういうトーンアームを使ってるのかと分かって、それを探してやっと手に入れたんです。それで、当時のイギリスの人があたりの音をどうやって聴いてたのかってのが再現できるようになってきて、よりモノラル盤の楽しさが深くなったんですね」

それが、現在の収集におけるひとつのテーマでもあったりする。

「僕のオーディオは、〝イギリスで聴くアメリカの音楽〟といったコンセプトで組んでいるんですよ。マディ・ウォーターズのLPを持ったミック（ジャガー）とキース（リチャーズ）が駅で再会しますよね。そのとき彼らはどういう音で聴いてたのかなってことで、ボブ・ディランとかもイギリス盤で買ってるんですよ」

当然ながら、あの当時の他のカ

CamScannerでスキャン

レコード・コレクター紳士録

"イギリスで聴くアメリカの音楽"というテーマでオーディオを構築しているので、リアルタイムで現地盤が出ていたようなボブ・ディランのようなアーティストは、なるべくUK盤で購入している

本誌初代編集長の中村とうようが86年1月号のスリム・ゲイラード特集の記事で、"デタラメ言葉のオン・パレイド"と評した「イェブ・ロック・ハリシー」のSP

左は菅谷さんが多大な影響を受けたアメリカの作家ケン・キージーの作品集。彼が主催した66年のフェスティヴァルでは、ジミ・ヘンドリクスらが演奏を披露した。右の「アクシス:ボールド・アズ・ラヴ」は、古くからの愛聴盤の一枚

SP盤と同サイズの10インチ盤にも愛着が。左上はトランペット奏者ディジー・ガレスピーのパリ録音で、イラストが可愛い。下の2枚は、ジャンプ・サウンドを代表するルイ・ジョーダン、スラム・ステュアートのアルバム

ルチャーからも強い刺激を受け、音楽遍歴を深めていっている。

「ロバート・フランクが撮ってたジャック・ケルアックとかビートニクスの方に傾倒していっちゃって、アレン・ギンズバーグとか読んでいくうちにボブ・ディランとかの関係がすごく面白くなったり。同時にケルアックたちが聴いていたスリム・ゲイラードやディジー・ガレスピーなんかも聴いていくようになっていったんですね。

あと、ビートニクスの流れでケン・キージーとかがサイケデリックな車に乗ってたりするじゃないですか。そういう、自分がアート方面で持っていた知識と音楽が、後からどんどんつながっていったんですね」

『カッコーの巣の上で』で知られる作家ケン・キージー。彼がサイケ風に塗られたバスに乗って行なったアシッド・テストなどのトリップ・イヴェントは、ビートルズ『マジカル・ミステリー・ツアー』のヒントになった。そうした流れの関係が音楽と共に自分の中に降りてくるというのは、時代や世代を超えたスリリングな体験だし、それはどこか菅谷さんの各種作品にも表われているかのようだ。

CamScannerでスキャン

70年代日本のポップス・シーンを支えた
作・編曲家／プロデューサーの歩み

矢野誠の点と線

第11回

筒美京平との点と線②

取材・文＝除川哲朗
イラストレイション＝木夷康

個性とすべき異端の理論派であることを、ともすれば負目に感じてしまうその揺らぎは、時として足枷となる場面を招くことも——。

73年の春先からは、洗足池サーキットの旧知だった南佳孝経由で松本隆と合流。『摩天楼のヒロイン』の制作・録音とオリジナル・ムーンライダーズの仕込みで9・21（9月21日のはっぴいえんど解散コンサート"CITY LAST TIME AROUND"）での同時発表を目指しながら、筒美コネクションの方では麻丘めぐみの3枚目『めぐみの休日』（73年5月）に参加している。

古風な清純歌唱に一石を投じた編曲

筒美京平との出会いを果たして、いきなり歌謡曲のメイン・フィールドへ踏み入ることとなった矢野誠の72年。いしだあゆみや南沙織の制作現場に駆り出される傍ら、まだまだ在野だったロック・サイドでも、ブレッド&バターや布谷文夫のアレンジ・演奏に勤しむなど、いわゆる二足の草鞋を履いての音楽行脚を早々に始めることとなった。

とはいえ、ブレッド&バターもデビュー曲〈僕たちの将来〉は筒美京平曲、細野晴臣も村井邦彦の現場に71年頃から駆り出されていたわけだし、矢野と筒美の邂逅が松本隆より1年早かったのも今にして思えば五十歩百歩。ロックと歌謡曲の橋渡しは各所いろんなかたちで始まっていたということだろう。

ただ矢野の場合、出自の部分で秘めたる別のジレンマもあったようだ。「はっぴいえんどみたいにバンドで積み重ねたキャリアとか持っていないにも関わらず、風都市グループに横入りしていくという（笑）」。折に触れ口にするそうした言葉尻に出てくる"横入り"。そこに複雑な心情が込められている。類なき

めぐみの休日

麻丘めぐみ
『めぐみの休日』
ビクター SJX127[1973]
(LP)

彼女最大のヒット〈わたしの彼は左きき〉のーカ月半前にリリースされたアルバムで、休日の朝から夜までのエピソードを12曲のストーリー仕立てで綴ったコンセプトは、ニール・セダカの〈カレンダー・ガール〉辺りに着想を得たようなティーン・ポップの定型といったところ。その中で、メイン・アレンジャー高田弘によるオーセンティックな中道仕様とは一味違う尖りを覗かせているのが矢野アレンジの3曲だ。荒めのアコギや弦のピチカートでビートを締めた〈素敵なドライブ〉、オーボエとフルートを繊細に巡らせた〈星のセレナーデ〉、拓いたオーケストレーションで包み込んだ〈グッド・ナイト・ママ〉。いずれも際立つ脇役に仕立てている。

「ところで、これは僕の妄想だけどさ、〈わたしの彼は左きき〉はアストラッド・ジルベルトからフランス・ギャル経由で辿り着いたんじゃないかなと思っている。誰もやってなかった新しいアイドル路線。ここが始まりだよね。決して歌い込ませたり過度に感情移入させたりせず、素の可愛い娘のままで歌わせるというのは筒美さんが最初だから」

それについては音大時代、渡辺貞夫の娘のピアノ教師をしていた頃に、帰国したナベサダ本人から受けたブラジルの香りにも共通する閃きを感じた憶えがあるという。ゲイリー・マクファーランドやガボール・ザボとの共演後に渡辺が書き下ろしたユキとヒデへの楽曲。その流れにあるヒデとロザンナ『イタリーの休日』の中の筒美楽曲と〈ブルー・ライト・ヨコハマ〉の関係性。おそらくその辺りも紐解きながら麻丘の古風な清純歌唱に一石を投じた矢野のアレンジは、翻って筒美に新たな閃きを与えたに違いない。

余談ながら、76年にチャート2位を記録した企画シングルでヒーロー高田とマイナー・チューニング・バンドの〈ソウルこれっきりですか〉があるが、これは矢野が懇意にしていた筒美アレンジャーの先輩、高田弘の編曲による余興プロジェクトだ。〝歌謡ヒット・イン・ディスコ'76〟の副題どおりファンキーな〈横須賀ストーリー〉のリフレインを軸に展開する13曲メドレーで、仕掛人はソニーの白川隆三。同年の筒美による覆面ディスコ・プロジェクト、Dr.ドラゴン&オリエント・エクスプレス（後藤次利、林立夫、鈴木茂、矢野顕子ほか）に準えてのアイデアだった。

B面はオリエント・エクスプレスの〈ピーナッツ〉のカヴァーで、その編曲・演奏がマリリン・モンロー・ハズバンド!…とは名義のみのクレジットで、矢野は全く関知していない模様。いずれにしろ、筒美や矢野に対する高田と白川の洒落っ気たっぷりの配慮が窺えて微笑ましい。加えてマイナー・チューニング・バンドは架空のスタジオ・バンドだったため（実体はサディスティックス周辺と伊集加代子）、ヒットを受けて急遽メディア出演用のアイドル・グループが組まれることになる。それがアパッチで、後に彼女たちのシングルを通じて矢野から大滝詠一へのプロデュース・リレーが実現するのは前々回で述懐した通り。1枚のシングルにこれだけの点と線が絡み合っているというわけだ。

南沙織の大らかさを最大限に引き出す

73年に戻って、『めぐみの休日』のリリースと同じ5月に矢野は、婚前の鈴木顕子とキャラメル・ママのレコーディング・セッションをコーディネイト。南佳孝に続いて松本隆

CamScannerでスキャン

がプロデュースするあがた森魚や岡林信康のレコーディングやライヴにも張り付くなど、宝島音楽事務所と風都市を忙しなく行き来する日々を送っていた。その合間を縫いながら束の間で終わってしまったのがオリジナル・ムーンライダーズ。活動の記憶として、鈴木博文が次のようなコメントを残している。

「ジァンジァンの時だって、矢野さんは南沙織のアレンジの仕事とか何かで、ステージが始まっているのに来ないんだよ。それでしようがないから、〈ホワッツ・ゴーイン・オン〉を30分ぐらい演ってた。もうやめたいなと思ったところに、バックでエレピの音がチャランと聴こえてホッとしたなんてことを憶えている」（『火の玉ボーイとコモンマン』鈴木慶一・著）

引き続き南沙織の8枚目『ひとかけらの純情』（74年2月）では、B面収録の洋楽カヴァー6曲を水谷公生と共同でアレンジ。おそらく水谷リズム、矢野ストリングスとおおまかに分担しながら、シンセ含めた鍵盤では矢野がイニシアチヴを取るような都度のチーム・プレイで進められたようだ。そつなく丁寧に仕上げた印象で、何より洋楽ポップスを涼涵としたネイティヴ・イングリッシュで歌える彼女の大らかさを最大限に引き出すことに成功している。楽曲本来のダイナミズムを殺さずにさり気なくディテールに拘ったアンサンブルの賜物だろう。

面白いのは、ここで取り上げたプレッド〈オーブレイ〉、ドン・マクリーン〈アンド・アイ・ラヴ・ユー・ソー〉、ロバータ・フラック〈やさしく歌って〉が、矢野も関わっている尾崎紀世彦の同時期の『LET ME TRY AGAIN・許しておくれ』（74年4月）でも取り上げられているところ。特に〈オーブレイ〉は、もしかしたらデイヴィッド・ゲイツ推しの矢野の意向が反映されたのかもしれない。筒美＝フィリップス本城和治ラインのディレクションによる同作。後に本城と矢野は石川セリで本格的にタッグを組んでいる。

こうした作品の出来映えから洋楽カヴァーのアレンジは矢野誠、さらに新曲を洋楽的に仕上げるのなら矢野が旬といった評判が立ち始め、発注も相次ぐようになったという。

「そうかもしれない。そういう風評が立つといろんな企画を呼び込むからね。ビートルズ・メドレー集みたいなのもやった記憶があるよ。でも裏を返せば、巷でウケる洋風歌謡に必ず潜んでいる〝なんちゃって感〟、謎の説得力を持つあの日本人特有の匂いが足りなかったんだよね、僕には」

それを浮き彫りにしたのが、スリー・ディグリーズの日本独自シングル企画だろう。松本隆／細野晴臣／矢野誠チームによる〈ミッドナイト・トレイン〉（74年10月）は、ギャンブル＝ハフのフィリー・ソウル・マナーに肉薄した正攻法。クールなカッコよさを呈していたのに対して、安井かずみ／筒美京平／深町純チームの〈にがい涙〉（75年2月）は、ずばり下世話なディスコ歌謡。しかし確実にヒット（チャート15位）させて結果を残している。

「それが筒美京平なんだよ。定めた自分の視点は1ミリもずらさない。そう言えば下世話って言葉、よく使われていたなぁ。本当は洋楽に寄せたいろんな曲も書けるはずなんだけど、歌謡曲における自分のスタイルやスタンスというのを頑として譲らない。物腰は非常に柔らかいんだけどね」

南沙織
『ひとかけらの純情』
CBSソニー SOLL62［1974］
（LP）

CamScannerでスキャン

メロディーにしろサウンドにしろ、そうした筒美イズムにはつくづく思い知らされたという矢野。『ミュージック・マガジン増刊 筒美京平の記憶』における近田春夫の指摘の〝いいメロディーを思いつく能力と、スコアが書ける能力は別物。その両方を持っている筒美さんだからこそ耐久性がある〟にうなずきながらも、また別の見方で分析してくる。

「メロディー・ライティングは線だと、僕は思っているわけ。短期記憶で前の線が上がったら対応して次の線をどう引くかという脈絡のデザイン。だから、チャイコフスキーが優れているのはわかる。すごく直線で書いているよね。でもバート・バカラックは、それをガーシュインやコール・ポーターの曲で嫌と言うほど聴いて先人がやり尽くしていることを悟った。線書きではもはや自分の時代では勝負できないと、そこで独自の変拍子とか唐突に美味しいメロディーを噛ましていくようなことを思いついたんだと思う」

〈ヘンリー・マンシーニはセンチメンタルの部分だけを強調するも、流れは壊していない。初めから泣きメロのミシェル・ルグランも然り。ただしバカラックは、流れを遮断してでも美味しいパーツを挟んでくると。

「筒美さんもそっちだと思う。ジャズやモークロンはじめ洋楽は幅広く聴き込まれていて、それらを日本特有の磁場で活かすべく狙い定めた。狙うということは想像するということ。その時点で線書きや流れの概念は飛んでしまって、ある意味破綻しているんだけど、まさにそこで〝パクッ！美味しい〟っていう瞬間が見えてくる。さらにバンドやオーケストラが入ると妙にキャッチーな、ちょっとキッチュでさえある目立ち方をするんだよ。だから雑踏の中でもキャッチされる。これが僕の思う筒美さんの秘訣かな」

続く南沙織の9枚目『夏の感情』（74年7月）は、キャラメル・ママの演奏による表題曲ほか直近シングルの両面に、チェリッシュとザリバへの提供曲カヴァーを加えた筒美作品6曲がA面。B面に当時のフォーク／ニューミュージックのヒット・カヴァー6曲を並べた構成で、矢野はシングル曲以外の8曲をアレンジしながらアルバム全体の色付けに尽力している。

南沙織
『夏の感情』
CBSソニー SOLL76［1974］
（LP）

ラインというよりオブジェとして躍らせたような管弦のアンサンブル。リズムもよりアップデートしたバンド・サウンドへと向かわせて、楽曲によっては同時期にリリースされた雪村いづみ×キャラメル・ママの『スーパー・ジェネレイション』にも通じる音像風景を浮かばせている。例えば、〈或る日〉は〈一杯のコーヒーから〉と、〈ふたりの急行列車〉は〈胸の振子〉と呼応して画続きのように思えてならない。だとすると、ここでの矢野チームは？

「キャラメル・ママ＋矢野顕子とか、小原礼＆上原ユカリとか、そういうチームの時もありましたね。だけど、それで自由にやれるようなイニシアチヴを持っていたわけではないから。まだそういう段階じゃない。主導権はあくまでも作り手やディレクター側だし、基本は書き譜のオーケストレーションでしょ。まあ、書いたのは僕だけど」

書き譜とヘッド・アレンジ。その擦り合わせが過渡期を迎えつつあり、新旧勢力の摩擦もあったようだが、両方に長ける矢野のような存在が結果的に状況を動かす原動力になっていたのかもしれない。（つづく）

＊24年4月24日（水）19時から町田まほろ座で、矢野誠と3女声によるユニット藤原定家 with 三人姉妹（小野小町、清少納言、紫式部）のライヴが開催。予約・問い合わせはまほろ座 BOOK（042・732・3021 http://mahoroza.jp）まで

CamScannerでスキャン

ソロ作品（その2）

イラストレイション＝菅野カズシゲ

スタックスを去ったスティーヴ・クロッパー氏は1973年、TMI（トランス・マキシマス・インコーポレーテッド）でのプロデューサー業を経て、レヴォン・ヘルムとのRCOオールスターズ（77年から80年）、それに参加したミュージシャンを中心に発展したザ・ブルース・ブラザーズ・バンド（78年から80年）などに関わりながら70年代を過ごしたが、その一方でソロ作品の発表はなかった。

スタックス以後にスティーヴ氏が発表した最初のソロ・アルバムは、81年、MCAからの『ブレイン・マイ・サング』であり、翌82年、同じくMCAからの『ナイト・アフター・ナイト』がそれに続いた。この2作品でスティーヴ氏はギターに加え、ほぼ全編でヴォーカルを担当したが、両者ともチャート・インすることさえなく、セールス的には惨敗。双方とも長らく廃盤状態が続いていたが、昨年、ようやく英国のBGOレコーズからCDシングル形式で再発された。

80年代のクレイジー・サウンド

――80年代初頭にリリースされた2枚のソロ・アルバムについて教えてください。

「私が最初にMCAとの契約を決めたのは、アルバム『ブレイン・マイ・サング』を出したいのなら、それプラスもう1枚、アルバムを出すという約束をしてくれ、ということで、向こうも了承したんだ。それで2枚立て続けに出したんだよ。ファースト・アルバムでヒット性のある曲は〈ブレイン・マイ・サング〉だけだったけどね。それ以上に何が問題だったかというと、彼らが私をポップ・シンガー

CamScannerでスキャン

[illegible]ラッカー（T・ジョーンズ）もジャズ・アルバムを作らされていた。

レコード店に行くと、私のアルバムは〝オールディーズ・バット・グッディーズ（＝懐メロ）〟のコーナーに入れられていた。最新アルバムなんだぜ。バカみたいな話だよな。まあ、とりあえず店には置いてあるんだから、どのコーナーに入れられていようが大した問題じゃなかったけどね。

私がケイト・ブラザーズ（＊註）をプロデュースした時（75年）にも同じ問題に直面した。この二人の白人の兄弟は、これ以上ないっていうくらいR&Bに傾倒していたが、アサイラム・レコーズと彼らのマネージャーはなにを思ったか、彼らをイーグルスのようなバンドにしようとしたんだ。私は〝彼らはイーグルスとは別ものだぞ〟と言ったが、マネージャーは〝この方向でやってくれ。その価値はあるから〟って譲らなかった。私も最終的に同意することにした。満足のいく支払いをしてもらわなきゃならなかったから」

――ご自分でヴォーカルもやると決めた経緯は。

「ジェフ・フランクリンってやつが関係し[illegible]キャンプ」のマネージャーで、私はジョンの『ナッシン・マターズ・ワット・イフ・イット・ディド』（80年）をプロデュースした。ジェフは私が歌えると思ったんだ。彼から〝MCAと契約させてやる〟って言われた。私は当時、ジミー・バフェットと仲良くしていて、彼もMCA所属のアーティストだったから、いろいろ都合がよかったんだよ」

――エンジニアのブルース・ロブとはどうやって知り合ったんですか。

「彼と会ったのはウルフマン・ジャックがホストをやっていたショウ〈ミッドナイト・スペシャル〉でだよ。私はその頃、ロサンゼルスのクローヴァー・スタジオで作業をしていたんだ。誰か手伝ってくれるやつはいないかって、ブルース・ロブと彼の兄弟、ジョーとスティーヴに電話したんだ。結局、ブルース・ロブにはアルバム2枚ともプロデュースしてもらった。

〈プレイン・マイ・サング〉は、アルバム制作の5、6年前に書いた曲で、再録音することにした。いいアイディアだと思ったから。今でもいい曲だと思うよ（ギター・リフを歌い出す）。もっとうまくやればヒットしていたかもしれない。

"Playin' My Thang"
MCA MCA5171［1981］UK
ソロとしては2枚目となるアルバム。スペシャル・サンクス筆頭にジェフ・フランクリンの名前がある

君の質問の中にアルバムの収録曲はどうやって選んだかというのがあったが、いつものやり方で注意深く選んだつもりだ。自分で歌えるものとアルバムに合ったものとをね。あのアルバムの中で気に入っているのは〈フィート〉だ（歌い出す）。〈レット・ザ・グッド・タイムズ・ロール〉もいつも大好きな曲で、ジム・ホーンがホーン・アレンジをやってくれた（歌い出す）。曲自体は素晴らしかったんだけど、歌い手がイマイチだったんだよ。〈フライ〉では自分でピアノを弾いた。信じられるかい？　デイヴィッド・ペイチがピアノの黒鍵だけ弾く方法を教えてくれたんだ。参加してくれたデイヴィッドとビル・ペインはいいピアノ・プレイヤーだった。そういえば、ピアノはもう30年くらい弾いていないな」

――ダック（ドナルド・ダック・ダン）と共作した〈ヤ・ダ・ヤ・ダ〉については。

「あれはマネージャーについての歌だ。こ

CamScannerでスキャン

ちらの注意を引こうと思って色んなことを言ってくるやつがいるだろう。〝あいつはいいやつだから〟とか何とか。要するにそいつがカネになる仕事に一枚噛んでいるってことだ。そのことを歌っている」

――このアルバムにはこの頃に作られた他の多くのレコード同様、TOTOのメンバー（ボビー・キンボールとデイヴィッド・ペイチ）が参加しています。

「当時のクレイジー・サウンドだ。今となっては、彼らにどんなことを期待していいかよく分かっているが、あの頃は別ものだったからね」

――他にもリトル・フィートのビル・ペイン、イーグルスのティモシー・シュミット、ゲス・フーのバートン・カミングスなど豪華ですね。

「A&R（アーティスト&レパートリー）やプロデューサーの役割は、その時に獲得できる一番いいミュージシャンを選んで連れてくることだ。40年前と今とではものの見方が全く異なるが、彼らはあの頃のベストだった。このアルバムではなかったが、ある時は（リトル・フィートの）ロウエル・ジョージをセッションに呼んできたこともあったよ。ジャーニーのスティーヴ・ペリーとかね」

ミュージシャンなら誰だって歌える？

――『ブレイン・マイ・サング』は、あまりに時代に寄り添いすぎて、今聴くと時代遅れに聞こえますね。逆にアルバムの約半分をマッスルショールズでデイヴィッド・フッドやロジャー・ホーキンスなどと共に録音したセカンド・ソロ『ナイト・アフター・ナイト』の方が古臭く感じません。

「彼らを使ったのも（ロサンゼルス系のミュージシャンを使ったのと）同じ理由だったんだけどな。彼らもあの頃が旬だった。ホットなバンドで、次々とヒット曲に関わっていた。ポール・サイモンの〈僕のコダクローム〉（73年）に代表されるようにね。トム・ダウドもジェリー・ウェクスラーもそのことが分かっていたからこそ、〈マスタング・サリー〉（66年）を録音するためにウィルソン・ピケットを連れていったんだ」

"Night After Night"
MCA MCA5340［1982］（LP）
前作に続いて豪華メンバーが参加しており、ジェフ・バクスターやボニー・ブラムレットの名前もある

――ソングライターのジョージ・ジャクソンとも共演していますね。彼とはどうやって繋がったのですか。

「簡単なことさ。マッスルショールズにいたら彼がやってきた。彼もあそこのレギュラーだったから。素晴らしいライターだった」

――それにしても、次のソロ・アルバムは21世紀に入ってから、ザ・ラスカルズのフェリックス・キャヴァリエとの共演盤（2008年と10年）です。どうしてこんなに時間がかかったんですか。

「（笑）まあ、あの2枚の後、すぐには出せなかったってことさ。酷いレコードを作って、身の程を思い知ったから。次はちゃんとやりたかったし」

――でも、ザ・ブルース・ブラザーズ・バンドはずっと継続してやっていましたからね。

「そう。最初の話に戻るけど、『ブレイン・マイ・サング』はザ・ブルース・ブラザーズの映画と並行してやったんだ。私はジェフ・フランクリンに〝俺は歌えないよ〟って言った。だけどあいつは〝立派に歌えるじゃないか〟なんて言いやがった。私が歌うところなんか、ただの1音符だって聴いたことなんかなかったくせにね。あいつは、ミュージシャンなら音楽を演奏しているわけだし、それ

CamScannerでスキャン

なら誰だって歌えるはずだと思っていた。そんなことあるわけないよな。私の声はシンガー向きの声質でもサウンドでもないよ。バックアップ・シンガーならともかく、ソロ・アーティストには向いていない」

——でも、レコーディングの時にプレイバックで自分が歌うのを聴いたんでしょう？

「ハハハ（大笑い）！　ほとんど演奏の方に耳が行っていたんだよ。実際、アーティストの多くはスピーカーから出てくる自分の歌をちゃんと聴いていないものなんだ。自分がやっていることを過信してね。とにかく『プレイン・マイ・サング』はクレイジーなスピードで録音していた。『ナイト・アフター・ナイト』の方は、今となってはもっとちゃんとプロモーションすればよかったのにと後悔している。（収録した〈634・5789〉に加えて）〈ナインティーナイン・アンド・ア・ハーフ〉とかエディ・フロイドやウィルスン・ピケットと作ったやつで構成すれば、もっといいアルバムになっていたと思う」

——ちゃんと焦点の合った自作自演集にすれば、良質のアルバムになっていたと。

「その通りだよ。誰でも何か期待することがあるだろう。私は『プレイン・マイ・サング』を出すか出さないかは、私自身のオプションだと考えた。一方、MCAはそうは思わなかった。彼らはなぜかこれをいいアルバムだと決め込んでたんで、〝だったらやるべきことはただ一つ。これをリリースしてくれ〟って言った。ところが、そう言ったはいいが、かなり初めから、これはヒットしないって予想できた。もう一枚出したけど、問題は（プロモーションしなかったので）誰もそれを知らなかったってことだ」

——ところで、『プレイン・マイ・サング』のアルバム・カヴァーで持っているギターのネックに入っていたインレイはカエルですか。

「そう。あのテレキャスターはリンゴ（スター）の〈想い出のフォトグラフ〉（73年）、ロッド（スチュアート）の〈今夜きめよう〉（76年）で使ったやつだ。ザ・ブルース・ブラザーズもだよ。あのギターは今、ワシントンDCのスミソニアン博物館にある。あのテレキャスターは五つのギターのパーツを組み合わせて作ったものだ。ピックアップはハムバッキングで、フレットもやり直してある」

——どうして手放したんですか。

「子供に〝いつ新しいギターを手に入れるのか〟って尋ねられたんだ。そしてギタリストだった祖父さんの祖父さん（笑）に、〝持っているだけで弾かずに、何の実入りもないなら、意味ないだろう〟って言われたんだよ」

——ところで、新しいソロ・アルバムの方はどうなったんですか。

「昨日、エンジニアがマスターを提出したよ」

——それはヴォーカル入りですか。

「そうだよ」

——バカなことを聞きますが、自分で歌ったんですか。

「ハハハハ（大笑い）！　やめといたよ。（前作同様）ロジャー・リアーレに歌ってもらった」

（つづく）

＊註＝ケイト・ブラザーズ（ケイト・ブラザーズ・バンド）は、アーカンソー州ファイエットヴィル出身の、アールとアーネストのケイト兄弟を中心に結成されたグループ。同じくファイエットヴィル出身で、クラブ経営にも携わっていたロニー・ホーキンスのバンド、ザ・ホークスと親交があったことから、ボブ・ディランとのツアーを離脱したレヴォン・ヘルムがドラマーを務めていたこともある。その縁でケイト兄弟を含む4人のメンバーは『ザ・ラスト・ワルツ』後に再編されたザ・バンドのメンバーとなった。グループは06年まで活動している。スティーヴ氏は75年に発表された彼らのデビュー・アルバム"Cate Bros."（75年）をプロデュースした。

メイ・パンが目撃したポジティヴな時間を映した映画『ジョン・レノン 失われた週末』

[illegible]

『ジョン・レノン 失われた週末』
5月10日(金)から角川シネマ有楽町、シネクイント、新宿シネマカリテ、池袋シネマ・ロサ、アップリンク吉祥寺ほか全国順次公開 配給：ミモザフィルムズ ©2021 Lost Weekend, LLC All Rights Reserved

INFO. STATION

イラストレイション＝ジミー益子

John Lennon, May Pang

エルヴィス・プレスリーとの関係を妻目線で描く ソフィア・コッポラ監督の新作映画『プリシラ』

退屈な毎日を送っていた14歳の少女が、ある日、突然、ロック・スターと恋に落ちる。ソフィア・コッポラ監督の新作『プリシラ』は、エルヴィス・プレスリーの妻、プリシラの物語だ。彼女がプレスリーと出会い、別れるまでの日々が描かれる。

完全にプリシラ目線なので、プレスリーの置かれた状況や、何を考えているのかは明らかにされない。常に取り巻きたちに囲まれているプレスリーとプリシラの距離は近くて遠い。甘ったるいほど優しいかと思うと、突然、怒りを爆発させるプレスリーに翻弄されながら、恋を通じてプリシラは大人になっていく。その内面の変化を繊細に演じたケイリー・スペイニーは、本作でヴェネチア国際映画祭最優秀女優賞を受賞した。

プレスリーの曲が1曲も使われていないのも本作の特徴だ。初めてプリシラがプレスリーに出会ったパーティで流れていたフランキー・アヴァロン「ヴィーナス」を始めオールディーズが物語を彩り、ラストにはプレスリーがプリシラとの別れの時に口ずさんだと言われるドリー・パートン「オールウェイズ・ラヴ・ユー」が流れる。プリシラ側に立つような女性の歌声で映画を締めくくるところからも、ソフィアが本作に込めた想いが伝わってきた。

村尾泰郎

『プリシラ』
4月12日(金)からTOHOシネマズ シャンテほか全国ロードショー　配給:ギャガ ©The Apartment S.r.l All Rights Reserved 2023

日本のパンク／ニュー・ウェイヴを牽引した 紅蜥蜴〜LIZARDの歴史的音源アナログ・リリース

70年代後半から80年代初頭、一大ムーヴメントとなった〝東京ロッカーズ〟。フリクションと並び、このシーンを牽引したLIZARDは日本のパンク／ニュー・ウェイヴを語る上で外せない存在であるにもかかわらず、その実態は謎に包まれていた。今回、満を持してLIZARDとその前身、紅蜥蜴の歴史的音源の、初出を含むアナログでの発売が実現した。『LIZARD』以外の5作で最新リマスターを敢行。4月5日から各500セット限定で順次リリースされる。

『いとしき悪徳』は、75年のライヴを中心に未発表曲を多数収録し、妖しいヘヴィネスに満ちたグラム・ロック時代の紅蜥蜴の魅力に迫る。A面にライヴ、B面にスタジオ・ワークを配した『SEXUS』は、より叙情的かつポップに変化する76年の紅蜥蜴を浮き彫りに。『Before After London Experience-LIVE 1979-1980-』はLIZARDに改名し79年のロンドン録音を行なう前後のライヴを収録し、シーンの熱気を封じ込めた。永遠のクラシック『LIZARD』はピクチャー盤化されて、本来のダイナミック・レンジを再現。80年に7インチで発表されたダブ・ミュージック『SA・KA・NA』は未発表を含む全8テイクで蘇った。7インチ4枚組ボックス仕様の『S-Ken Studio Days 1978』は、紅蜥蜴からLIZARDへの変身過程を記録した貴重な遺産といえるもの。全6タイトル、伝説の扉が今ここに開示される。

ヒロ宗和

紅蜥蜴『いとしき悪徳』
トランスフォーマー TMVI 001／LP／¥4500／4・5発売／歌詞つき／解説つき

CamScannerでスキャン

英国最新情報　『ジギー・スターダスト』制作過程を追うボックス

デイヴィッド・ボウイが72年に発表した名作『ジギー・スターダスト』の制作過程を数々の初登場音源も交え追った豪華ボックス"Rock 'N' Roll Star!"がリリースされる。『ジギー…』はステージで煮詰められたのちに正式なスタジオ録音が行なわれたが、本作はそんな過程がしっかり収められており、ボウイが自宅で収録したホーム・デモからアーノルド・コーンズ名義の録音、まだスタジオでアルバム制作中だった時期を含む72年1～5月のBBCテレビでのスタジオ・ライヴ、初リリースとなるアウトテイクなどが5枚のCDに詰め込まれている。付属のブルーレイ（音声のみ）には『ジギー…』のハイレゾ版と03年の5・1chミックス、アルバム完成前の曲順や収録曲が異なるヴァージョンを収めた"Waiting In The Sky (Before The Starman Came To Earth)"、シングル集、アウトテイク集のハイレゾ版が収められる。6月14日に海外発売予定。

"ジミ・ヘンドリクスの再来"と讃えられた元プロコル・ハルムのギタリスト、ロビン・トロワーの74年作『魂のギター』50周年記念盤には、アルバム本編の24年リマスター／リミックス、アルバム曲の未編集／ロング・ヴァージョンやアウトテイク、74年5月のレコード・プラントでのスタジオ・ライヴが3枚のCDに収められるが、付属のブルーレイにはアルバムのハイレゾ版に加え、5・1ch版、ドルビー・アトモス版が追加されるほか、CD収録全曲にアウトテイクが追加された拡張版となっている。5月17日英国発売予定。

ピンク・フロイド『アニマルズ』の最新ブルーレイ・オーディオは22年版収録の全ミックスにドルビー・アトモス版が追加されたもので、アートワークも一新されている。5月17日に海外発売予定。（大伏功）

米国最新情報　60年代の若きボブ・ディランを描く新作劇映画

「ライク・ア・ローリング・ストーン」の歌詞からタイトルをとった、60年代の若きボブ・ディランを描く映画"A Complete Unknown"の製作が進行中。ミネソタからNYに向かい、入院中のウディ・ガスリーに歌を聴かせ、グリニッチ・ヴィレッジのフォーク・シーンでピート・シーガー、ジョーン・バエズらと交流を深めていく内容だ。監督はジョニー・キャッシュの伝記映画『ウォーク・ザ・ライン』のジェイムズ・マンゴールド。ディラン役は若手人気俳優のティモシー・シャラメで、恋人シルヴィー・ルッソ役はエル・ファニング、ピート・シーガー役はエドワード・ノートンだ。シャラメは歌も練習中で、ディランが映画の相談役として加わったとも。現在撮影中で公開は未定。

22年にSpotifyからニール・ヤングが自身の音源を引き上げ話題を呼んだが、再びSpotifyに音源を戻すと発表した。撤退はコロナ・ワクチンの偽情報を流すポッドキャストへの不満からだったが、その契約が終わる一方、AppleやAmazonにも偽情報のポッドキャストがあると復帰を決めている。Spotifyの音質に関しては相変わらず不満で、向上を求めているが。

リトル・フィートの12年ぶりの新作"Sam's Place"はマディ・ウォーターズ、ウィリー・ディクスンらの曲を取り上げたブルース・アルバム。全曲のリード・ヴォーカルは打楽器奏者サム・クレイトンだ。ボニー・レイットが1曲でデュエットしている。発売は5月17日、Hot Tomato Productions/MRから。

同じくヴェテラン・バンドで4月に日本公演も行なっているドゥービー・ブラザーズの新作は、コンサートにも帯同したマイケル・マクドナルドが本格的に参加。プロデュースは再びジョン・シャンクスで、夏ごろには発表予定だ。（中村彰秀）

CamScannerでスキャン

東ベーソ音楽を体験する 東京区のイヴェント

東京都港区にある、文化芸術を振興、普及、啓蒙する施設のシアター1010の20周年、ギャラクシティの30周年を記念して、ゴールデン・ウィークにイヴェントが開催される。シアター1010では5月3日、バンドに有山じゅんじ、ゲストに金子マリを迎えた上田正樹 Pan Pacific が登場し、日本に根づいたソウル、R&Bのカヴァーやそこから生まれたオリジナル曲を披露する。開演は17時、料金は4500円。ギャラクシティでは5月5日、綾戸智恵ミニコルイス・バジェ&アフロキューバミーコスーと吾妻光良&The Swingin' Boppersが、米国〜ラテン音楽のさらなる深みを伝える。開演は16時半、料金は3500円（当日＝4000円）。他にも松田兄弟やハッチハッチェルのフリー・ライヴなど関連イヴェントも予定されている。詳細はシアター1010、ギャラクシティの各HPで要確認。

フェアーグラウンド・アトラクションのLP再発

奇跡の再結成と、追加公演も含む来日公演、さらには新曲の発表とニュースの絶えないフェアーグラウンド・アトラクションの名盤『ファースト・キッス』が、国産カラー・ヴィニールでリイシューされる（ソニー SIJP1097／4000円）。6月19日発売で、メンバーによる最新コメントも掲載される。

レインボーのアナログ盤をヴィジュアルで堪能する図録

リッチー・ブラックモアの79歳の誕生日、4月14日に発売となる『レインボー・オン・ヴァイナルズ』は、表題通り、レインボーのアナログ盤に特化したヴィジュアル本。A4判オールカラー512ページで、英米日盤を中心に、レインボーの作品のジャケット、盤面から付属品までの写真を掲載、解説している。リッチー、ロニー・ジェイムズ・ディオを筆頭に歴代メンバーの写真含め、その数は1800点超となる。価格は10000円。1500部限定で、発売はシンコーミュージックから。

『レインボー・オン・ヴァイナルズ』

追悼

稲垣次郎

33年10月3日生まれのサックス奏者。高校時代からプロとしての活動を始める。フランキー堺とシティ・スリッカーズ、白木秀雄クインテットなど名グループに在籍し、稲垣次郎とソウル・メディアなど自身のバンドでも活発に活動、多く作品も残した。また、スティーヴィー・ワンダーやシャーデーなどの来日公演でバックを務める一方、大滝詠一を筆頭に、西城秀樹やピンク・レディーなどのスタジオ録音でも活躍した。1月18日死去。

エリック・カルメン

49年8月11日、オハイオ州クリーヴランド生まれ。早くから音楽教育を受けるが、ビートルズなどに触発されロック・バンドでの演奏を始める。地元の人気バンド、サイラス・エリーでの活動を終え結成したラズベリーズでは、カルメン作の「ゴー・オール・ザ・ウェイ」（72年）が全米5位とヒット、バンドはパワー・ポップの祖としての評価を得ている。ソロでは75年に「オール・バイ・マイセルフ」を全米2位とした。3月11日死去。

スティーヴ・ハーレイ

51年2月27日、南ロンドンのデトフォード生まれ。幼少から大病を患い、不安定な十代を過ごすなか、ギターと作曲を始めて地元のフォーク・シーンで歌い始める。72年にはコックニー・レベルを結成し、74年発表の'Judy Teen'を英5位、75年の'Make Me Smile（Come Up And See Me）'を英1位とする。ソロを含め自作曲の数々をヒットさせた。3月17日死去。

CamScannerでスキャン

ふたつのアイコンの歴史を行き来する至福の読書体験

ザ・ビートルズVSジェームズ・ボンド
ジョン・ヒッグス著、浅倉卓弥訳／Pヴァイン／3300円

ザ・ビートルズが英パーロフォンから「ラヴ・ミー・ドゥ」でデビューした1962年10月5日は、イアン・フレミング原作による映画『007』シリーズの第1弾『007は殺しの番号（Dr. No）』が公開された日でもある。60年代の英国が誇るふたつのポップ・アイコンは偶然にも同じ日の生まれだった。

映画『ヘルプ！』でのパロディ、『死ぬのは奴らだ』主題歌、リンゴ・スターとボンド・ガールを演じたバーバラ・バックとの結婚など、パッと頭に浮かぶ両者の関連事項にとどまらず、恋愛、髪型、銃、死、そしてイングランド…と、さまざまなテーマとともにB4とJB（ジェイムズ・ボンド）の歴史を行き来するスペクタクルな読みものである。

著者は『The KLF ハウス・ミュージック伝説のユニットはなぜ100万ポンドを燃やすにいたったのか』のジョン・ヒッグス。原書は22年の刊行で、ウラジミール・プーチンがウクライナを侵攻する世界までが扱われる。

文章は、車線変更を繰りかえす。ビートルズとボンドをともに愛する評者には、至福の読書体験だった。ことことか、感動した。

ボンドに宿敵スペクターの存在があれば、一九七〇年のビートルズにはフィル・スペクターがいた。残忍な殺人者でもあるレコードプロデューサー殿である。最高。

安田謙一

エルトン・ジョン楽曲の作詞家が語った自身の遍歴

Scattershot: Life, Music, Elton And Me
Bernie Taupin著／Monoray[UK]

いまや英国文化全般におけるセレブと化している感のあるエルトン・ジョン。むろん華やかなキャリアに応じたヒット・レコードも膨大なんだが、彼の楽曲のほとんどが実はバーニー・トーピンとのコラボによることはよく知られている。パリの街路での暗いボヘミアンふうの魅惑的なカヴァー・フォトへ・人生、音楽、エルトンと私』なんて銘打たれているとおり、この本は作詞家、そしてひとりの詩人としての彼の生い立ちと音楽遍歴を綴る自伝といえるものだ。

冒頭、67年、リバティー・レコードのタレント・オーディションへ出向いたバーニーの、やはりたまたまそこへ顔を出していたレジ・ホワイト（＝エルトン）との運命的な出会いのシークエンスで始まるこの物語から浮かび上がってくるのは、意外にオーソドクスな音楽志向、そして終生変わらぬアメリカ文化への憧憬と嗜好だろう。つまり、少年時代のジョン・フォード作品のような西部劇映画やブリル・ビルディング・ポップへの傾倒（エルヴィス・プレスリーは自分の土地ではさして人気がなかったとか）。また、初期の「僕の歌は君の歌」や「ダニエル」に共通する内省的・私小説的で抒情豊かな作風が通貫しているところなど。ただし、エルトンとの楽曲造りの裏話等が希薄で、時制のめまぐるしく転変する語り口が惜しまれる。

杉原志啓

CamScannerでスキャン

「ナウ・アンド・ゼン」など3曲が加わった最新版

ビートルズ216曲全ガイド

藤本国彦著／シーディージャーナル／2200円

2015年に刊行され好評を続けるビートルズの全曲ガイド・ブックの最新アップデート版。曲の数が213から216に増えたのは〝ビートルズの最後の新曲〟として23年に発表された「ナウ・アンド・ゼン」が加わったからだ。さらにヴァーチャル・ビートルズによる「ブリー・アズ・ア・バード」「リアル・ラヴ」も、今回新たにノミネートされた。表紙の色は、当然のように「ナウ・アンド・ゼン」カラーのブルーが使われている。

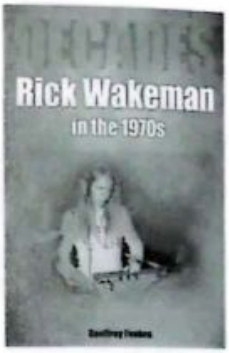
62年の「ラヴ・ミー・ドゥ」から発表時系列で書かれていて、簡潔でありながら的確な評が続いていくのが小気味いい。メンバーの曲に対するコメントがツッコミのような形で添えられていたり、お薦めのカヴァー・ヴァージョンが紹介されていたり、このあたりの遊び心が楽しい。

モノとステレオのミックスの違いや、マトリックス番号で語っていくマニアックなビートルズもあるが、こんなにもストレートに曲そのものの魅力で物語っていく本があってもいいのではないかと思った。

〝ゲット・バック・セッション〟で演奏された曲の詳細なリストがあったり、カヴァー曲の紹介があったり、資料性も存分に高い。アルバムの脇に置いて、気になった曲が出てきたらページを開く。そんな一冊としては、これ以上に最適な本はないだろう。

小川真一

イエス、ソロでの成功を達成した全盛期を詳細に紹介



Rick Wakeman In The 1970s: Decades

Geoffrey Feakes著／Sonicbond [UK]

リック・ウェイクマンといえばイエス全盛期のキーボード奏者、また『地底探検』『アーサー王と円卓の騎士たち』などソロ作品のヒット（それぞれ全英1位と2位）などが思い浮かぶが、これらの芸術的・商業的成功はすべて70年代に達成された。そんな彼の全盛期である10年間を全作品リストとともに詳細に紹介したのが本書である。

17歳でプロの世界に飛び込んだリックはデイヴィッド・ボウイ初期のヒット「スペース・オディティ」への参加とストロウブスでの活躍で名が知られるようになる。その後、イエスに加入し名作『こわれもの』『危機』を生み出すのだが、著者はかなりのイエス・ファンらしく、ここから一挙に筆致が熱を帯びてくる。イエスを抜ける決断をマネージャーに伝えた5分後に『地底探検』が英国首位達成という知らせを受ける神タイミングなど、絶頂期ならではのエピソード満載である。また、この時期、立て続けにチャートを制覇しながらも収入を次の作品に注ぎ込むような創作優先のリックの姿勢にも好感が持てた。

基本的に新取材はなく、リックの自伝やイエスの関連書籍を資料としているが、70年代初めからリックの活動を見つめてきた著者のリアルタイム体験で培われた視点こそが最も信頼できる資料だという感触を持たせてくれる一冊である。

田山三樹

CamScannerでスキャン

功績ある音楽家に学究的になりすぎず音楽面から迫る

Soまでのピーター・ガブリエル
シンコーミュージック／2500円

ックの本ということで、写真とインタヴューを期待していたのだが、冒頭20ページほどの写真は貴重なものが多いものの、インタヴューは一つだけ（日本に頻繁に来た人ではないので、当然といえば当然だが）。ただ、繰り返すが、右のことはこの本の価値を貶めるものではない。単に私にとって、予想を裏切るものだったというだけの話だ。

そして残りのページはというと、大半がディスコグラフィーおよび関連ミュージシャンについての解説で、これがかなり充実している。レコード盤のレーベルをずらりと並べたカラー・ページなどは、ちょっと『レココレ』風。というわけで端的にいえば、多大な功績のあった一人のアーティストに音楽面から迫りながら、学究的になりすぎておらず、楽しめる一冊だ。書籍そのもののサイズが大きく、読みやすいのも嬉しい。**立川芳雄**

とても良い本で、楽しんで読めたのだが、紹介に際してはちょっとだけ断りが必要かもしれない。タイトルからわかるとおり、86年に名盤『So』をリリースするまでのピーター・ゲイブリエルについてまとめた書籍なのだが、腰巻きには"脱プログレからSo世紀へ"とあり、これを見るとジェネシス脱退後の活動に焦点を絞った本かと思ってしまうのだが、ジェネシス時代のこともきちんと書かれていた。また、シンコーミュージ

生粋のファンがディープな目線でバンドの足跡を辿る

クイーン・オブ・マイ・ライフ ファンによるファンのためのファンブック
吉田聡志監修／シンコーミュージック／2500円

昨年末の「紅白歌合戦」出演や今年2月に開催された初のドーム級の来日公演、さらに新作ドキュメント映画『フレディ・マーキュリー The Show Must Go On』の公開と、常時、話題に事欠かないクイーン。実は本書も同映画とは無縁ではない一冊。著者の吉田氏は同映画の監修も担当。オンタイムでクイーンに魅了された生粋のファンで、『ミュージック・ライフ』公認のコンシェルジュという立場。それ故、ディープなファン目線で魅力を語り、足跡を辿っている。

メインはクイーン所縁の場所、例えば、レコーディング・スタジオや無名時代のフレディとロジャー・テイラーが古着屋を営んでいた跡地の他、ハマースミス・オデオン等のライヴ会場を訪ねた聖地巡礼マップ。吉田氏が19年と23年、二度に亘ってイギリス～スイスへ赴き、現地の雰囲気、当時を知る関係者から話を訊くというユニークな切り口だ。また、親日家であったバンドの意向を踏まえ、武道館や宿泊施設近辺にあった東京タワー、名古屋城、日本の美術や文化に造詣が深いフレディがお忍びで訪れた和紙舗、美術館も紹介、名所ガイド的な趣も面白い。

巻末にはかつての競合誌『8ビート・ギャグ』で馴染み深いシマあつこ氏のイラストも掲載されている。ライトに楽しく、なおかつ熱いミーハー本に仕上げられている。**北井康仁**

CamScannerでスキャン

音楽に加え映画やファッションまで踏み込む追悼本

高橋幸宏　音楽粋人の全貌
河出書房新社／1520円

それぞれの人の心の中で生きている高橋幸宏の残像を見事に蘇らせてくれる追悼本だ。関係者のインタヴュー、論考・エッセイ、過去の記事の再録、ツアー・パンフやディスク・ガイドなどの資料集と極めてシンプルな構成でありながら、本書の優れている点は音楽のみならず、映画やファッションの領域における高橋幸宏の功績にまで踏み込んでいる点。ジャケットの羽織り方や袖の通し方、ボウタイの結び方やカフスの留め具合にまで注意を払った粋人の審美眼について語るスタイリスト、祐真朋樹の述懐や高橋の主演映画『四月の魚』（86年）を撮った大林宣彦監督と高橋との〝寂しさ〟を巡る対談などは、本業の音楽から一定の距離を隔てているからこそ垣間見える本質のようなものが感じられ、愛おしい。

論考の中では、ドラマーとしての高橋の個性を分析した上で、YMOの中で細野晴臣はリズム（グルーヴ）の人、坂本龍一を和音（コード）の人だとすれば、高橋は間違いなくメロディの人だと定義する布施雄一郎の指摘には大いに感心させられた。キャリアの局面で出会った小原礼やピーター・バラカン、小山田圭吾らの談話も貴重だが、印象に残ったのは実兄、高橋信之による弟の逸話。母を亡くした高橋が傷心の思いで書いた歌詞が「出来るだけいつものように」とはなんとも切ない。**ヒロ宗和**

ユーモアを交え軽妙に描かれるベーシストの道のり

死ぬまでジャズ〜鈴木良雄・自伝
鈴木良雄著／リットーミュージック／2273円

1960年代後半から第一線に立ち、渡辺貞夫、菊地雅章、スタン・ゲッツ、アート・ブレイキー等の許で活動。現在も自身のユニットを始め、レコーディングやライヴに精力的な活動を続けるジャズ・ベーシスト、鈴木良雄の自伝が登場した。

私が感じる彼の魅力は、〝ウッド・ベースのふくよかなトーンを活かした音作り〟〝快い音程〟〝堅実にして歌うようなベース・ライン〟〝口ずさみたくなるようなオリジナル曲〟など尽きないが、本書を読んで、もうひとつの良さに気づいた。つまり、語り口のわかりやすさである。ヴァイオリンと縁の深い家系に生まれ、ピアノに熱中し、ジャズを知り、ベースを手にして頭角を現わし、十数年にわたってニューヨークに滞在し、作曲を一から学び直し、帰国後に組んだ様々なプロジェクトで多様な音楽性を探求して今に至る——その道のりが、つい微笑まずにはいられないユーモアを交えながら、軽妙に描かれている。もっとも、内容は鈴木が直接文字にしたためたわけではなく、何度ものインタヴューで得たコンテンツを整頓したと思しいが、取材・編集に携わった人物は『中牟礼貞則　孤高のジャズ・インプロヴァイザーの長き旅路』の久保木靖。つまり、話し手のノリやグルーヴ感を活かす達人が関与しているのだ。巻末の参加作品リストも嬉しい。**原田和典**

CamScannerでスキャン

COLLECTOR'S TOPIC

当山ひとみ

国内外で評価の高まるシンガーのベスト&レア曲集がリリース

文＝佐藤 ??

当山ひとみの評価が高まり続けている。シティ・ポップが盛り上がる中で、最初は「ブギー」の12インチ盤として「Sexy Robot」が注目された。そのほか、シティ・ポップの範囲が拡大するに連れてほかの作品も注目され、現在はすべての作品が人気となっている。

今回のコンピレーション・アルバム『Pretty Penny HITOMI TOHYAMA THE BEST & RARE』はそういった背景のもとにリリースされたものだ。ジャケットは人気イラストレーターの[illegible]が担当し、Night Tempo本人のクールなイメージとシティ・ポップ感を意識しているのかもしれない。昨年出たNight Tempoのアルバム『Neo Standard』でも、ペニーは1曲歌っている。ちなみに、ペニーとは当山の愛称だが、沖縄県生まれで、アメリカン・スクールとオークランドで学生時代を過ごし、ネイティブ・ランゲージが英語という本人にとっては、日本語名よりもしっくりくるようだ。

『Pretty Penny』は、83年から88年までにCBSソニーに残した計6枚のソロ・アルバムの楽曲を中心に選曲。21年に金澤寿和氏監修の『Light Mellow 当山ひとみ』がリリースされているため、これと選曲が被らないように配慮されている。話題に事欠かないので、未発表曲や初CD化曲、レア曲を中心に紹介していこう。

2枚組中ディスク1は"Pop & Groove"として、アッパーやダンサブルな曲を中心に選曲されている。④と⑥の2曲はDJ MURO、⑦はDimitri From Parisによるリエディット版で、発売当時は「シングル」の12インチに収録されていたもの。⑧は今年1月に配信されたNight Tempoの"Showa Groove"シリーズから。⑨は23年に配信された最新オリジナル曲。この5曲が初CD化となる。⑯は元トロンボーン奏者、向井滋春のソロ作『ORISSA』(82年)の収録曲で、ペニーがコーラスで参加したレア曲だ。

続いてディスク2は"Sweet & Smooth"で、バラードとメロウな曲を収録。実は、ペニーにはソウルフルなバラードの名曲が非常に多く、古くからのファンにはバラードを求める人が多い。⑧は本作のためにマスター・テープを倉庫で偶然に発見したという未発表曲で、85年1月録音の英語詞によるミディアム・スロウ。ペニー自身が作詞作曲していたらしい。⑮は山下達郎や鈴木雅之が参加したクリスマス・アルバム『THE NIGHT BEFORE CHRISTMAS』(86年)に収録されていたものだ。

『Pretty Penny HITOMI TOHYAMA THE BEST & RARE』

[1] ①SFO-OAKLAND ②SLOW LOVE ③RAINY DRIVER ④WANNA KISS - MURO edit ⑤LOVE IS THE COMPETITION ⑥SEXY ROBOT - MURO edit ⑦TUXEDO CONNECTION - Dimitri from Paris edit ⑧エキゾティック横顔 - Night Tempo Showa Groove Mix ⑨BRAND-NEW DAY ⑩SWEET SOUL MUSIC (KISS OF LIFE) ⑪SYMPHONY ⑫うたう MY LIFE ⑬HEARTBREAK CALENDAR ⑭抱かれたら ⑮PRIVATE TIME ⑯LONELY RIDER (向井滋春 ORISSA feat. Penny)

[2] ①ドア越しのGood Song ②ANYTIME ANYPLACE ③CATHY ④BEHIND YOU ⑤BABY, BABY, BABY ⑥HITOKOTO ⑦VELVET MORNING ⑧DREAMING LOVE ⑨GET MY LOVE ⑩IT'S NOT EASY ⑪[illegible] ⑫[illegible] (YOU ARE THE ONE) ⑬言い出しかねて ⑭[illegible] ⑮[illegible] ALL COMES DOWN TO LOVE ⑯SILENT NIGHT ⑰OUR LOVELY DAYS

コロムビア COCP-42211~2／¥3,300／2CD／3・6発売／歌詞つき

Reissue Album Guide

・リイシュー・アルバム・ガイド・

国内盤 P.8-25　海外盤 P.26-34

国内外でリリースされた幅広いジャンルの旧音源コンピレーションや再発アルバム、映像作品をくわしく紹介。音楽そのものはもちろん、リマスターやパッケージの出来にまでこだわって、豊富な知識をもつ執筆陣が徹底チェックします

4月のリリース情報 P.2-7

ニュー・アルバム・ピックアップ P.35-38

レコード・メーカー各社の電話番号とウェブアドレス P.7

※掲載されている価格は特記されている場合を除き税抜き定価です

INDEX

0-9

21st CENTURY SCHIZOID BAND 12

A

ALDEN, SARA 36
ART BEARS 15

B

BROOKS, TINA 20

C

CAMEL 26
CAMPBELL, GLEN 27
CHRISTIE, LOU 28
CLARK, SONNY 20
COLES, JOHNNY 20
COLLAGE 13
COLOSSEUM 8

D

DAVIS, NATHAN 16
DINNING SISTERS, THE 33
DISCUS 14
DONALDSON, LOU 21
DYANI, JOHNNY 32

E

ELECTRIC SUN 15
EVANS, BILL (TRIO) 17

F

FANTASTICA, LA 34
FLEETWOOD MAC 11
FOSTER, RONNIE 21
FRIEND & LOVER 10

G

GALLIANI, FABIO & CANTALUNA 36
GETTER, JANE (PREMONITION) 35
GREEN, GRANT 19
GUESS WHO, THE 10

H

HEATH BROTHERS, THE 32
HENRY COW 9
HESNAWI, IBRAHIM 34
HILL, ANDREW 18
HUBBARD, FREDDIE 18
HUTCHERSON, BOBBY 18
HYLAND, BRIAN 28

I

IRVINE, WELDON 16

J

JAMES, ETTA / TAJ MAHAL 30
JEWEL 30

L

LASRY, TEDDY 9
LAWRENCE, STEVE & EYDIE GORME 28

M

McLEAN, JACKIE 19
MOBLEY, HANK 19
MONCUR, GRACHAN III 19
MORGAN, LEE 21

P

PEARSON, DUKE 18
POWELL, BADEN 34

Q

QUEBEC, IKE 19

R

RICH, BUDDY & ALLA RAKHA 32
RONSTADT, LINDA 11

S

SACHS, AARON 31
SAMURAI OF PROG, THE featuring MARCO GRIECO 35
SARDE, PHILIPPE 33
SHORTER, WAYNE 20
SILVER APPLES 8
SMITH, JIMMY 20
STAMP, TERRY 27
STEELEYE SPAN 27
STEVENS, LEITH 33

T

TANGERINE DREAM 12
TAYLOR, CECIL 18
TURRENTINE, STANLEY 21
TYNER, McCOY 21

W

WHITE, CLARENCE 29

あ〜わ

淡谷のり子 24
五つの赤い風船 23
I.M.O.Band 23
角銅真実 37
ジャンクフジヤマ 37
頭脳警察 36
TAMTAM 38
パイパー 22
伴よしかず 23
秘密のミーニーズ 38
平山みき&野宮真貴 37
Plastic Dogs 38
三上寛 23
柳田ヒロ 23
山口百恵 24

various artists (v.a.)

ハートカクテル オリジナル・サウンドトラック 22
筒美京平 アーカイヴス5 25
Blank Generation: A Story Of U.S. / Canadian Punk & Its Aftershocks 1975-1981 29
Masterpiece Vol.35: The Ultimate Disco Funk Collection 30
Groove Machine: The Earl Young Drum Sessions 31
Sam Records: The Sound Of New York City 1975-1983 31

CamScannerでスキャン

New Release Information

Ahmad Jamal

・4月のリリース情報・

今月リリースされるリイシュー盤はこのコーナーで
まずチェック。紙ジャケット、生産限定盤などの
予定も可能な限りお伝えします

イラストレイション＝ジミー益子

ブルース・スプリングスティーン
『ベスト・オブ・ブルース・スプリングスティーン』

ビリー・アイドル
『反逆のアイドル［エクスパンデッド・エディション］』

リンキン・パーク
『ペイパーカッツ（シングルス・コレクション 2000-2023）』

ROCK & POP

ブルース・スプリングスティーン

『ベスト・オブ・ブルース・スプリングスティーン』

▶4・19／ソニー／¥2500

大ヒットした『ボーン・イン・ザ・USA』発表から40周年を記念して、新規ベスト・アルバムの全世界リリースが決定。73年のデビュー・アルバム『アズベリー・パークからの挨拶』から20年作『レター・トゥ・ユー』まで珠玉の18曲を収録

デフ・レパード

『炎のターゲット［2CD］』『炎のターゲット［4CD+ブルーレイ］』＊

▶4・26／ユニバーサル／¥3600（＊¥11000）／2SHM-CD（＊4SHM-CD+Blu-ray）

83年発表の代表作『炎のターゲット』の発売40周年を記念して拡大版が登場。2CDはCD1にオリジナル本編、CD2に未発表デモ音源とLAフォーラムのライヴ音源をセレクト。4CD+ブルーレイ版は、CD2が今回発掘された未発表デモ、CD3にドルトムント、CD4にLAフォーラムのライヴ音源を収録している。ブルーレイにはアルバム本編のアトモス・ミックス、5.1chサラウンド・ミックスなどのほかに、PV5曲ぶんも収められている。4CD+ブルーレイ版は初回生産限定

ビリー・アイドル

『ビリー・アイドル［エクスパンデッド・エディション］』
『反逆のアイドル［エクスパンデッド・エディション］』

▶4・26／ユニバーサル／各¥3600／2SHM-CD

ジェネレーションXのフロントマンとして活動した後にアメリカに渡って80年代前半に発表したソロ2作の拡張版。『ビリー・アイドル』のCD2にはスティーヴン・スティーヴンスをフィーチャーした82年のロキシー公演の未発表ライヴ音源を収録。『反逆のアイドル』のCD2にはヒット曲「アイズ」のプールサイド・リミックスほか、デモやアウトテイクなど当時の貴重な未発表音源などを収録

リンキン・パーク

『ペイパーカッツ（シングルス・コレクション 2000-2023）』

▶4・12／ワーナー／¥2700

21世紀のロック・シーンにおいて中心的存在となったリンキン・パークの、これまでの歩みを凝縮した新規ベスト盤。未発表曲「フレンドリー・ファイヤー」を収録

ディープ・パープル

『マシン・ヘッド：スーパー・デラックス・

CamScannerでスキャン

エディション』

▶4・24／ワーナー／¥15000／3CD+LP+Blu-ray

72年発表の歴史的ハード・ロック名盤がドゥイージル・ザッパによる24年リミックスのほか、71年の未発表ライヴなどを収めた5枚組スーパー・デラックス・エディションとなって登場。輸入盤国内仕様。初回生産限定

イーグルス

『トゥ・ザ・リミット：エッセンシャル・コレクション』

▶4・24／ワーナー／¥4000／3CD

累計アルバム・セールス1億5000万枚を超える、米西海岸ロックにおける最重要バンドの50年以上にも及ぶキャリアを俯瞰したコンピレーション。全51曲収録の決定版

スティーヴ・ハケット

『アット・ジ・エッジ・オブ・ライト～光と闇の深淵にて』
『ザ・ナイト・サイレン～天空の美情』
『ウルフライト～月下の群狼』

▶3・22／IAC／各オープン・プライス／SACD5.1chハイブリッド／紙ジャケット

元ジェネシスのギタリストが2015年から19年に発表したスタジオ作3タイトルがSACD5.1chハイブリッド盤で再発。輸入盤国内仕様

アライヴ・ザ・ライヴ

エリック・クラプトン『ライヴ・イン・ジャパン1999』＊
ロッド・スチュワート『ライヴ・イン・オーストラリア1977』＊『ライヴ・イン・テキサス1993』＊
バッド・カンパニー『ライヴ・イン・USA 1999』『ライヴ・イン・フロリダ2008』＊
ノラ・ジョーンズ『ライヴ・イン・ヨーロッパ2007』＊『ライヴ・イン・ベルギー2009』

▶3・29／IAC／各オープン・プライス／＊2CD

ラジオやテレビの放送用ライヴ音源をCD化する〈アライヴ・ザ・ライヴ〉シリーズの最新リリースは、ヴォーカルの魅力が堪能できる7タイトル。輸入盤国内仕様

エマーソン・レイク&パウエル

『神典三部作』

▶4・5／IAC／オープン・プライス／3CD

86年に発表した唯一のスタジオ・アルバムに、スタジオ・リハーサル、ライヴ音源をセットにした3枚組。輸入盤国内仕様

UFO

『聖約、シャークス&ライヴ '95』

▶4・5／IAC／オープン・プライス／3CD

マイケル・シェンカーがみたび復帰して制作した2000年作『聖約』と02年作『シャークス』に、シェンカーが2度目の復帰をした時期の95年、バッファロー公演をセットにした3枚組。輸入盤国内仕様

ソニック・ユース

『ウォールズ・ハヴ・イアーズ』

▶3・6／ディスクユニオン／¥3500／紙ジャケット

ブートレグ市場でファンから高い支持を集めていた85年のイギリス公演を収めたライヴ盤が初の公式リリース。輸入盤国内仕様

ヘンリー・カウ

『伝説』
『不安』
『イン・プレイズ・オヴ・ラーニング』
『コンサーツ』＊
『ウェスタン・カルチャー』

▶3・25／マーキー／各¥3182（＊¥4000）／SHM-CD（＊2SHM-CD）／紙ジャケット

ヘンリー・カウは、フレッド・フリスとティム・ホジキンソンを中心に結成された、カンタベリー最重要バンドのひとつ。彼らが遺したスタジオ4作とライヴ盤がアンコール・プレス再発。音は15年リマスター。各タイトルにボーナス・トラックを収録。初回生産限定

イーグルス
『トゥ・ザ・リミット：エッセンシャル・コレクション』

エリック・クラプトン
『ライヴ・イン・ジャパン1999』

エマーソン・レイク&パウエル
『神典三部作』

ソニック・ユース
『ウォールズ・ハヴ・イアーズ』

ヘンリー・カウ
『伝説』

CamScannerでスキャン

ヴァン・ダー・グラーフ
『ヴァイタル ヴァン・ダー・グラーフ・ライヴ・2CDエディション』

ジミー・キャンベル
『サン・オブ・アナスタシア』

ザ・レザーコーテッド・マインズ
『トリップ・ダウン・ザ・サンセット・ストリップ』

ザ・マッコイズ
『ヒューマン・ボール』

サン・トレッダー
『ジン・ジン』

クリス・スペディング

『無言歌:リマスタード・CDエディション』

▶3・25／マーキー／¥3000

ニュークリアス参加直後の69年に録音された、ジャズ・ロック色の強いアルバム。長年、廃盤だったが、リマスターを施されてのリイシュー。輸入盤国内仕様

ヴァン・ダー・グラーフ

『ヴァイタル:ヴァン・ダー・グラーフ・ライヴ・2CDエディション』

▶3・25／マーキー／¥3700／2CD

ヒュー・バントンの脱退を受けて、ヴァン・ダー・グラーフ・ジェネレイターからバンド名を短縮して活動を継続した彼らが78年に発表した2枚組ライヴ・アルバム。オリジナル・マスターからのリマスターによる再発。輸入盤国内仕様

オアシス

『イフ・ユー・ワー・ヒア・ナウ - ライブ・イン・ミュンヘン '97』
『ブラザース、ライブ・アット・メイン・ロード '96』

▶4・17／ヴィヴィド／各¥3100／2CD

オアシスのライヴ・アルバム2タイトル。『イフ・ユー・ワー・ヒア・ナウ - ライブ・イン・ミュンヘン '97』は97年発表のサード・アルバム『ビー・ヒア・ナウ』に伴うツアーからの放送用音源を収録。『ブラザース、ライブ・アット・メイン・ロード '96』は95年の『モーニング・グローリー』発表に伴うツアーの音源で、レアな選曲が楽しめる。輸入盤国内仕様

ジミー・キャンベル

『サン・オブ・アナスタシア』

▶4・24／ヴィヴィド／¥2700／紙ジャケット

ニック・ドレイクやキャット・スティーヴンスに通じるメランコリックでドリーミーなシンガー・ソングライター作品。69年リリース。輸入盤国内仕様

ザ・レザーコーテッド・マインズ

『トリップ・ダウン・ザ・サンセット・ストリップ』

▶4・24／ヴィヴィド／¥2700／紙ジャケット

J・J・ケールを中心とした架空のスタジオ・グループに、レオン・ラッセルやロジャー・ティリソンが集結し、ザ・バーズやボブ・ディランのカヴァーを収めた企画性の強い作品。輸入盤国内仕様

デヴィッド・ポメランツ

『タイム・トゥ・フライ』

▶4・24／ヴィヴィド／¥2700／紙ジャケット

繊細な楽曲とヴォーカルがビリー・ジョエルと比較されるニューヨーク生まれのピアノマンによる、チャーリー・カレロ制作のセカンド・アルバム。輸入盤国内仕様

ザ・マッコイズ

『ヒューマン・ボール』

▶4・24／ヴィヴィド／¥2700／紙ジャケット

リック・デリンジャーを擁する4人組がサイケデリック・ロックへのアプローチで新生面を開いた69年発表の最終作。輸入盤国内仕様

サン・トレッダー

『ジン・ジン』

▶4・24／ヴィヴィド／¥2700／紙ジャケット

ツトム・ヤマシタ率いるレッド・ブッダ・シアターからモーリス・バートを中心に発展した3人組による73年発表の唯一作。輸入盤国内仕様

そのほかのリリース

ホリーズ『ディア・エロイズ』／キング・マイダス・イン・リヴァース』／ロス・ガトス・サルバヘス『ラ・レスプエスタ』／リック・ネルソン『ロング・パケイション』

▶3・29／クリンク／各¥1500／紙ジャケット

チェリー・ピープル『チェリー・ピープル』／ジェントル・ソウル『ザ・ジェントル・ソウル』／モビー・グレープ『ワウ』

CamScannerでスキャン

マーティン&ニール『ティア・ダウン・ザ・ウォールズ』

▶3・29 クリンク 各¥1800 紙ジャケット／輸入盤国内仕様

R&B/SOUL/BLUES

チャーリー・パットン

『ザ・ラフ・ガイド・トゥ・チャーリー・パットン』

▶4・28 ライス ¥2500

ワールド・ミュージック・ネットワークの"ラフ・ガイド"シリーズから、"デルタ・ブルースの父"チャーリー・パットンの代表的な録音をコンパイルした編集盤がリリース。輸入盤国内仕様

ウディ・ガスリー

『我が祖国～ジ・アッシュ・レコーディングズ Vol.1』

▶3・31 ライス ¥3000

スミソニアン・フォークウェイズから、"アメリカン・フォーク・ソングの父"ウディ・ガスリーのオリジナル・ソングを集めた編集盤がリリースされる。輸入盤国内仕様

アーマッド・ジャマル

『カウント・エム88』
『アーマッド・ジャマル・トリオ Vol.4』
『ポートフォリオ・オブ・アーマッド・ジャマル』
『ジャマル・アット・ザ・ペントハウス』
『ハッピー・ムーズ』
『アット・ザ・パーシング Vol.2』
『リッスン・トゥ・ザ・アーマッド・ジャマル・クインテット』
『アーマッド・ジャマル・アット・ザ・ブラックホーク』

▶4・17／ユニバーサル／各¥1800／SHM-CD

"リッスン・トゥ・アーマッド・ジャマル"として、ピアニスト、アーマッド・ジャマルのアーゴ時代の作品がリイシュー。『カウント・エム88』(56年録音)ほか、全8作品が再発される

ダイアナ・クラール

ダイアナ・クラール『ディス・ドリーム・オブ・ユー』『フロム・ディス・モーメント・オン』『クワイエット・ナイツ』『グラッド・ラグ・ドール』『ウォールフラワー』『ターン・アップ・ザ・クワイエット』トニー・ベネット、ダイアナ・クラール『ラヴ・イズ・ヒア・トゥ・ステイ』

▶4・24／ユニバーサル／各¥1800

来日を記念して、ダイアナ・クラールのオリジナル・アルバムをアンコール・プレス。『ディス・ドリーム・オブ・ユー』(20年)など全7作品が廉価で再発される。初回生産限定

キアロスクーロ

ジュニア・マンス&ジョー・テンバレイ『ミュージック・オブ・セロニアス・モンク』／アール・ハインズ『アン・イヴニング・ウィズ・アール・ハインズ』＊／レッド・ホロウェイ・クインテット『スタンディング・ルーム・オンリー』／ジェイ・マクシャン・トリオ・フィーチャリング・デヴィッド"ファットヘッド"ニューマン『フーティー!』／フィル・ウッズ&ビル・チャーラップ・トリオ『ヴォヤージュ』／ジーン・バートンシーニ、ビル・チャーラップ、ショーン・スミス『ジーン・バートンシーニ・ウィズ・ビル・チャーラップ&ショーン・スミス』／ケニー・ダヴァーン、フリップ・フィリップス『スパニッシュ・アイズ～ライヴ・アット・ザ・フローティング・ジャズ・フェスティバル1995』／クラーク・テリー・クインテット・フィーチャリング・レッド・ホロウェイ『トップ・アンド・ボトム』／メル・パウエル『リターン・オブ・メル・パウエル』／テリー・ギブス&バディ・デフランコ『ワム』

▶4・24／ウルトラ・ヴァイヴ／各¥1800(＊¥2300)／＊2CD

70年にアメリカで設立されたジャズ・レーベル、キアロスクーロのカタログを再発する"キアロスクーロ・ジャズ・クラシックス"。その第5期は、ジュニア・マンス&ジョー・テンバレイ『ミュージック・オブ・セロニアス

チャーリー・パットン
『ザ・ラフ・ガイド・トゥ・チャーリー・パットン』

アーマッド・ジャマル
『カウント・エム88』

ダイアナ・クラール
『ディス・ドリーム・オブ・ユー』

ジュニア・マンス&ジョー・テンバレイ
『ミュージック・オブ・セロニアス・モンク』

アール・ハインズ
『アン・イヴニング・ウィズ・アール・ハインズ』

CamScannerでスキャン

ハービー・ハンコック&ヘッドハンターズ『ライヴ・イン・ジャパン1978』

サイケグラウンド・グループ『サイケデリック・アンド・アンダーグラウンド・ミュージック』

『コンゴ・ファンク!〜キンシャサ／ブラザヴィル 1969-1982』

小坂忠とフォージョーハーフ『もっと もっと』

森田童子『1980年11月28日札幌教育文化会館実況録音盤』

・モンク』（00年録音）ほか全10タイトルをリイシュー。輸入盤国内仕様

ジャズ百貨店

ガボール・ザボ『ジプシー '66』／アーチー・シェップ『フォア・フォー・トレーン』／アート・ブレイキー『ア・ジャズ・メッセージ』／デューク・エリントン、コールマン・ホーキンス『デューク・エリントン・ミーツ・コールマン・ホーキンス』／ライオネル・ハンプトン『ユー・ベター・ノウ・イット!!!』ほか

▶4・24／ユニバーサル／各¥1500／SHM-CD

ユニバーサル・ジャズの定番シリーズ"ジャズ百貨店"。そのアンコール・プレスが決定。アート・ブレイキー、アーチー・シェップなどの定番・名盤を廉価でリリースする

フュージョン・ライヴ

ハービー・ハンコック&ヘッドハンターズ『ライヴ・イン・ジャパン1978』
ハービー・ハンコック&ロックイット・バンド『ライヴ・イン・ジャパン1984』＊
ジャン＝リュック・ポンティ『ライヴ・イン・ジャパン1979』

▶4・19／IAC／各オープン・プライス／＊2CD

放送用アーカイヴからライヴ音源を発掘・リリースする"Hi Hat"レーベル。今回はハービー・ハンコック&ヘッドハンターズ、78年の来日公演を記録した『ライヴ・イン・ジャパン1978』など全3作品を発売。輸入盤国内仕様

WORLD MUSIC etc.

イタリアン・ライブラリー・ミュージック

サイケグラウンド・グループ『サイケデリック・アンド・アンダーグラウンド・ミュージック』／サンドロ・ブルニョリーニ『鏡張りの眼鏡をかけた男』／ジュリアーノ・ソルジーニ『ポンペルモの下で』／アレッサンドロ・アレッサンドローニ『リトモ・デルインダストリアN.2』／ダニエラ・カーサ『アメリカ・ジョバネN.2』

▶4・24／ディスクユニオン／各¥3200／紙ジャケット

イタリアで60、70年代にテレビ、映画用に制作された"ライブラリー・ミュージック"のレア盤をリイシュー。サイケグラウンド・グループ『サイケデリック・アンド・アンダーグラウンド・ミュージック』（71年）ほか、全5作品が発売される

コンゴ・ファンク

『コンゴ・ファンク!〜キンシャサ／ブラザヴィル 1969-1982』

▶4・7／ライス／¥3700

"アナログ・アフリカ"から、69〜82年に残されたコンゴ・ファンクを集めたコンピレーション盤がリリース。OKジャズやタブー・レイ・ロシュローなどの全14曲を収録する。輸入盤国内仕様

日本のロック／歌謡曲

小坂忠とフォージョーハーフ

『もっと もっと』

▶4・24／ソニー・ミュージックレーベルズ／¥2500／Blu-spec CD2

小坂忠とフォージョーハーフの唯一のアルバム『もっと もっと』がリイシュー。72年3月、郵便貯金ホールで収録された名ライヴ盤。2024年最新リマスタリング

森田童子

『1980年11月28日札幌教育文化会館実況録音盤』

▶4・24／Pヴァイン／¥2700

森田童子が80年に札幌教育文化会館で行なったライヴを記録した未発表音源が発掘。「ぼくたちの失敗」をはじめ、全14曲のパフォーマンスを収録している

高橋幸宏

『A RAY OF HOPE』
『THE DEAREST FOOL』

▶4・24／ユニバーサル／各¥2800／SHM-CD／紙ジャケット

高橋幸宏、東芝EMI時代のリイシュー・シリーズが進行中。第5弾は、98年の『A

CamScannerでスキャン

RAY OF HOPE』など2作品を再発。砂原良徳による最新リマスタリングを施している

友部正人

『また見つけたよ』『ポカラ』

▶4・20／SWAX／各¥2800／紙ジャケット

伝説的フォーク・シンガー、友部正人。その『また見つけたよ』(73年)、『ポカラ』(83年)というオリジナル・アルバム2作品がデジタル・リマスタリングを施されたうえでリイシュー

三上寛

『船頭小唄・三上寛 えん歌の世界(+6)』

▶4・20／SWAX／¥2800／SHM-CD／紙ジャケット

三上寛が73年に発表したカヴァー・アルバム『船頭小唄・三上寛 えん歌の世界』がリイシュー。ボーナス・トラックとして、日本コロムビア時代に発表したシングル6曲を追加収録する

ふきのとう

『ふきのとうLIVE 風をあつめて…』

▶4・24／ソニー・ミュージックレーベルズ／¥4500／2Blu-spec CD2

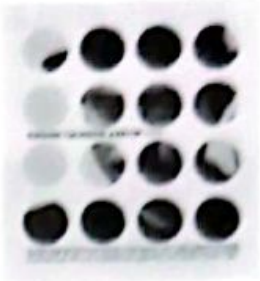
ふきのとうのデビュー50周年を記念して、80年に発表したライヴ盤をリイシュー。「春雷」はじめ、全22曲のパフォーマンスを収録する

CITY MUSIC TOKYO

『CITY MUSIC TOKYO destination』

▶4・24／ワーナー／¥2500

クニモンド瀧口(流線形)が独自の観点から日本のポップスをコンパイルする "CITY MUSIC TOKYO" シリーズ。そのワーナー編は、AB'S「DESTINATION」ほか全17曲を収録する



高橋幸宏『A RAY OF HOPE』

『CITY MUSIC TOKYO destination』

レコード・メーカー各社の電話番号とウェブアドレス

▶アオラ・コーポレーション 03・5336・6957 www.ahora-tyo.com ▶IAC 048・633・4090 interart.co.jp ▶インペリアルレコード www.imperialrecords.jp/intl(洋楽) www.teichiku.co.jp/imp(邦楽) ▶ヴィヴィド・サウンド・コーポレーション 03・3490・1070 www.vividsoud.co.jp ▶ウルトラ・ヴァイヴ 03・5485・2301 www.ultra-vybe.co.jp ▶エム・レコード 06・6608・3486 www.emrecords.net ▶キャプテン・トリップ 03・5355・5698 www.captaintrip.co.jp ▶キングレコード 03・3945・2131 www.kingrecords.co.jp ▶クリンク 049・289・3213 www.clinck.co.jp ▶サード・イアー・レコーディングス 03・5774・0364 www.third-ear.net ▶スカイステーション 03・6869・2537 ▶スペースシャワーネットワーク 03・5766・1321 music.spaceshower.net ▶ソニーミュージック 03・3515・5050 www.sonymusic.co.jp ▶ディスクユニオン 03・3511・9940 diskunion.net ▶テイチクエンタテインメント 03・5778・1711 www.teichiku.co.jp ▶東宝ミュージック 03・3201・2400 www.toho-m.co.jp ▶徳間ジャパンコミュニケーションズ www.tkma.co.jp/tjc ▶日本クラウン 03・6381・7730 www.crownrecord.co.jp ▶日本コロムビア 03・6895・9001 columbia.jp ▶ハウリング・ブル 03・5771・6966 www.howling-bull.co.jp ▶ハヤブサランディングス 03・5468・6495 www.hayabusa-landings.com ▶BSMFレコード 072・637・6718 www.bsmf.jp ▶ビートインク 03・5768・1277 www.beatink.com ▶Pヴァイン 03・5784・1250 p-vine.jp/ ▶ビクターエンターテインメント 0570・010・115 www.jvcmusic.co.jp ▶ビショップ 03・6796・3779 www.realarts.org ▶ビデオアーツ・ミュージック 03・6229・0751 www.videoartsmusic.com ▶ブリッジ 03・3710・8049 bridge-inc.net ▶ポニーキャニオン 03・5521・8000 www.ponycanyon.co.jp ▶ポリスター 03・6418・6011 www.polystar.co.jp ▶ボンバ・レコード 03・5484・0688 homepage2.nifty.com/BOMBA ▶マーキー・インコーポレイテッド 03・5414・5281 www.marquee.co.jp ▶マーキー〜ベル・アンティーク 03・3954・4896 www.marquee.co.jp ▶ミューザック 03・5468・7065 www.muzak.co.jp ▶ミュージック・キャンプ 03・5301・3771 www.m-camp.net ▶メタカンパニー 03・5273・2821 www.metacompany.jp ▶ヤマハミュージックメディア 03・6894・0288 www.ymm.co.jp ▶ユニバーサルミュージック 03・4586・2300 www.universal-music.co.jp ▶ライス・レコード 048・814・0830(オフィス・サンビーニャ) www.sambinha.com ▶ワサビ・レコード 03・5938・5309 www.wasabirecords.com ▶ワーナーミュージック・ジャパン 03・6372・0999 wmg.jp

CamScannerでスキャン

SILVER APPLES ◆ シルヴァー・アップルズ

オールデイズ(クリンク) ODRIM1017／紙ジャケット／¥1800／1・29／解説＝サリー久保田／輸入盤国内仕様

シルヴァー・アップルズはオシレーター(アナログ・シンセサイザーの波形を作る発振器)を操るシミオンことシミオン・オリヴァー・コックス三世と、ドラマーのダニー・テイラーの二人組。ニューヨーク、イーストヴィレッジを拠点に活動、68年にキャップ・レコーズからデビュー・アルバムとなる本盤をリリースした。

普遍的なキーボード奏法に頼ることのないオシレーターの浮遊するような音色と、テープ・コラージュ、ストイックなドラム・ビート、ソフトな語り口の中に妙な説得力があるヴォーカルとがあいまって、オリジナルとしか言いようがないサウンドを形成している。デビュー以前のジミ・ヘンドリクスとのセッション経験でも知られるが、その情報が単なるハイプに終わることがない、底知れぬ可能性がある。音のフォルムは完全にのちのカンやスーサイドを先駆け、テクノ、ハウス・ミュージックを示唆するものである。ニコラ・テスラの電気パフォーマンスを音楽化したようなSFロックだ。

1曲目「オシレーションズ(振動)」から、もしもビートルズがライヴ活動を続けていて、68年に「トゥモロー・ネヴァー・ノウズ」をステージで披露したなら…という妄想を駆り立ててくれる。ジョン・レノンによる絶賛にも得心がいく。

今回のリリースは、台湾ワンス・モア・ミュージック盤を使用。「オシレーションズ」と「ワーリー・バード」のモノラル・ヴァージョンに、セカンド・アルバム『コンタクト』からの2曲を加えた4曲がボーナス収録されている。

本盤の"売り"である原盤スリーヴのシルヴァーが限りなくグレイに落ち着いているのだけはちょっと寂しいが、良心的な価格を考えると、それも納得。世紀を飄々と超える、名盤です。　安田謙一

COLOSSEUM ◆ アボン・トゥモロウ／コロシアム

Repertoire(ディスクユニオン) DUPG293／2CD／¥4000／2・28／解説＝マーティン・ハンソン／輸入盤国内仕様

イギリスのジャズ・ロックの先駆けとなったジョン・ハイズマン率いるコロシアムの初期音源が、発掘・復刻に定評のあるドイツのレーベル、レパートワーからCD2枚組で23年に発表された。ハイズマンの本を書いているマーティン・ハンソン書き下ろしの詳細なブックレット付だ。ディスク1はデビュー・アルバム『コロシアム・ファースト・アルバム』発売のわずか二日前に参加した69年3月26日のライヴ・ドキュメンタリー映画『スーパーショウ』出演時の2曲と、70年5月14日のライヴから3作目収録の「ダウンヒル・アンド・シャドウズ」と2作目『ヴァレンタイン組曲』のアルバム・タイトル曲の短縮版。「ダウンヒル・アンド・シャドウズ」ではハイズマンの圧巻なドラム・ソロをはじめ、ディック・ヘクトール＝スミスのサックス、デイヴ・グリーンスレイドのキーボード、クレム・クレムソンのギターなどつわものたちの熱の入った演奏が展開される。

ディスク2は陽の目を見なかったアルバム『アボン・トゥモロウ』用に71年に録音された5曲と、そのデモ・トラックの3曲だ。「アボン・トゥモロウ」はバンドがひとつの塊となって突き進んでいき、中間部からの怒涛の進撃に快感を覚え、同曲のデモには牧歌的な雰囲気がある。12分を超える「ザ・パイレーツ・ドリーム」ではクリス・ファーロウの声が楽器と化しバンドの入魂ぶりがうかがえ、「サンク・ゴッド・フォー・シングス・ザット・グロウ」はデモと大きく違い、聴き比べも楽しめる。「スリーブウォーカー」でのグリーンスレイドのハモンド・オルガンなどキーボードは嵐のよう。ちなみに、「アボン・トゥモロウ」はその後、ハイズマンが結成したテンペストのアルバムに収録されている。　山岸伸一

CamScannerでスキャン

HENRY COW ◆ グラストンベリー・アンド・エルスホエア／ヘンリー・カウ

ベル・アンティーク（マーキー） BELLE244002／SHM-CD／紙ジャケット／¥3182／2・25／解説＝浅野淳

アヴァンギャルド・ロックの最前衛にして反対派ロック（RIO）の総本山ヘンリー・カウが産声を上げたのは68年。その活動の歴史をたどるボックス・セットは結成40周年と50周年の際にそれぞれ発売されているが、今回リリースされたのは、そのボックス・セットに収録されていた未発表ライヴを補完する内容となる新たな発掘音源集である。

タイトルにもあるように、目玉は71年のグラストンベリー・フェスティヴァルに出演した際の実況録音。メンバーはフレッド・フリスとティム・ホジキンソンの創設者二人に、ジョン・グリーヴス、それとクリス・カトラーが参加する以前にドラムを担当していたマーティン・ディッチャムという布陣で、ソフト・マシーンからの影響が後の時代よりもさらに強いバンドの初期の姿を捉えた貴重な音源となっているうえに、演奏そのものも非常に高い集中力と構成力を感じさせる内容だ。他には、73年にヴァージン・レコード所有のマナー・スタジオでフランスのTV局が撮影した映像からの音源、76年と77年のフランス公演（後者はマイク・ウェストブルック・ブラス・バンドと合流後のトラックで、フィル・ミントンが参加しての演奏）、77年のスペイン公演など、即興演奏が最終的にフレッド・フリス作の「ルインズ」へと仕上がっていくプロセスをたどったトラックは、まさに発掘音源ならではの醍醐味といえる。

クリス・カトラーによるトラックごとの解説（英文）も読みごたえがある。海外盤は22年にReRを通じて発売されているが、1曲目の録音が72年になっていたりと客観的な事実についての誤認はいくつかあるので、その点に関しては正確な情報に言及した解説の付く日本盤の存在がありがたい。　松井巧

TEDDY LASRY ◆ $e=mc^2$／テディ・ラズリー

ベル・アンティーク（マーキー） BELLE244001／SHM-CD／紙ジャケット／¥3182／2・25／解説＝宮坂聖一

テディ・ラズリーは、フランスのプログレ・バンド、マグマの初期メンバーで、1作目から3作目までの作品にサックスやフルートなどで参加していた。父親のジャック・ラズリーは現代音楽家で、ラズリー・バシェ音響組織というグループを結成し、金属パーツを組み合わせて作った創作楽器による演奏を行なっていたらしい。テディの方は60年代フランスで、演劇と音楽を融合させたパフォーマンス・グループ、太陽劇団の中心的人物として活躍していた。本作はテディがマグマ脱退後の76年に発表したソロ・アルバムで、これまでまったく再発されなかったが、このたび初CD化となった。オーストリア盤と日本盤があるが、ここで紹介する後者の方は紙ジャケ仕様だ。

内容はというと、実験的要素を前面に出しながらもポップな雰囲気を漂わせたインストゥルメンタル・ミュージック。誤解されることを恐れずにいえば、坂本龍一の作品に近いものを感じさせる。基本的にはキーボード類を中心としたすべての演奏をテディが行なっているのだが、一部の曲に、マグマのベーシスト、ヤニック・トップと、フランス・ジャズ界の大物ドラマー、アンドレ・チェカレリが参加しており、この二人の演奏がいい。なかでも「ナンセンス」という曲は、チェカレリのドラムとテディのマリンバによって作られる民俗音楽風のリズムが魅力的で、アルバム中でも最大の聴きどころだと思う。他にも野蛮さや土着性で味つけされたような曲は多いのだが、それらはあくまでも、楽曲内の適切な箇所にバランスよく組み込まれている。つまり全体としては、フランス的知性を強く感じさせる音なのだ。20世紀ヨーロッパ現代音楽界の正嫡が、さらりと一筆書きで作ったような一枚である。　立川芳雄

CamScannerでスキャン

THE GUESS WHO ◆ シェイキン・オール・オーバー〜ゲス・フー (1965-1967) ／ゲス・フー

オールデイズ(クリンク) ODR7340 ／紙ジャケット／¥1500 ／1・29／解説＝上柴とおる

60年代終わりから70年代前半のポップス界で活躍したカナダ出身のロック・バンド、ゲス・フー。大ヒットを記録した「アメリカン・ウーマン」や、その後にメンバーのランディ・バックマンらがバックマン・ターナー・オーヴァードライヴで活動したことから、ハード・ロックの元祖的な存在に見られることもあるが、60年代初頭からのチャド・アラン＆ザ・リフレクションズ〜ザ・エクスプレッションズ名義での活動を含めると、この時代のポップスの歴史を体現するような興味深いものだと思う。本CDは65年にジョニー・キッド＆ザ・パイレーツをカヴァーして初チャートインを果たした「シェイキン・オール・オーヴァー」を表題に、65〜67年までのシングルを中心に纏められたコンピレーションで、「アメリカン・ウーマン」以前の彼らの姿を俯瞰できる内容となっている。

その「シェイキン…」は古いロック・ファンにはザ・フーのライヴ・ヴァージョンが何と言っても馴染み深いだろうが、オリジナルにかなり忠実ながらワイルドさを増したゲス・フー・ヴァージョンも実にカッコいい。だが収録曲の多くはビートを効かせつつも、どちらかというとコーラスなども活かしたソフトなポップ・サウンドが中心なのも先のようなイメージを彼らに持っている人には意外に感じられるかも。フィル・スペクター的なニュアンスからアーサー・アレキサンダーをカヴァーするようなセンス、ランディ・バックマンの曲作りの方向性など、やはりこの頃はビートルズを始めとしたブリティッシュ・インヴェイジョンの影響の大きさも偲ばれる。「イッツ・マイ・プライド」でファズのかかったギターのハードな要素も混じってくるあたりには来る時代の予感も。

青山陽一

FRIEND & LOVER ◆ リーチ・アウト・オブ・ザ・ダークネス／フレンド・アンド・ラヴァー

オールデイズ(クリンク) ODRIM1015／紙ジャケット／¥1800／1・29／解説＝八亀弘和／輸入盤国内仕様

フレンド＆ラヴァーはジムとキャシーのポスト夫妻からなるデュオ。

ヒューストン生まれのジム・ポストが64年夏にカナダ、アルバータ州で行なわれたフェスに出演していたフォーク・グループ、ラム・ランナーズのステージでアクロバティックなダンスをしていたシカゴ生まれのキャシー・コンを見初めて…というような情報はウェイン・ジャンシック著『ただ1曲のスーパーヒット』(音楽之友社)の第2巻に書かれている。つまり、彼らは一発屋として認知されている。

「リーチ・アウト・オブ・ザ・ダークネス」は67年にヴァーヴ・フォアキャストから発売された。ジム・ポストの作でプロデュースはジョー・サウスとビル・ロウリー。レイ・スティーヴンスがキーボードを弾き、弦編曲を手掛けている。歌詞はサマー・オブ・ラヴにふさわしいメッセージ性を持ち、翌68年6月に最高10位のヒットとなった。印象的なベース・ラインはビズ・マーキー(「アルビー・スクエア・モール」)や、ピチカート・ファイヴ「これは恋ではない」(アルバム『月面軟着陸』収録ヴァージョン)などでサンプリング使用されている。

本盤は、その「リーチ・アウト…」をタイトルに冠した68年、彼らの唯一のアルバムに、「リーチ・アウト…」のシングル・ヴァージョンと、そのB面の「タイム・オン・ユア・サイド」を加えた全13曲入り。ポップ狂ならきっと曲名を見ただけでぐっと身を乗り出してしまう「ボストン・イズ・ア・ラヴリー・タウン」にはじまり、フォーク・ロック、ハーモニー・ポップ、リズム＆ブルース風味のグルーヴィーなダンス曲、シタールをフィーチャーしたグルーミーなアシッド・ポップなど、時代を反映した、聴きごたえのあるナンバーが揃っている。

安田謙一

CamScannerでスキャン

LINDA RONSTADT ◆ ウェン・ウィル・アイ・ビー・ラヴド '74 & '75／リンダ・ロンシュタット

Straight(ヴィヴィド) VSCD4630~1 / 2CD / ¥3100 / 2·21 / 解説＝池上尚志 / 輸入盤国内仕様

ストーン・ポニーズを経ての69年のソロ・デビュー以降、西海岸シーンで地道に活動してきたリンダ・ロンシュタットが本格的にブレイクを果たした74年と翌75年のライヴが2枚組CDにパッケージされた本作は、ニューヨークのKPFRとカリフォルニアのKMETの各FMラジオでオンエアされた音源を収録。ベティ・エヴェレットをカヴァーした「ユーア・ノー・グッド」が初の全米1位を記録し、乗りに乗っていた時期であり、充実したバンドを率いたリンダの20代後半の若々しい歌声が楽しめる内容になっている。

ディスク1は74年7月21日のニューヨークはマイ・ファーザーズ・プレイスにて。時期としては同年11月のアルバム『ハート・ライク・ア・ホイール』大ヒット直前。バラードでゆったりと始まるが、彼女の代表曲にもなったバディ・ホリーやエヴァリー・ブラザーズのカヴァーでは持ち前のパワフルな歌唱で盛り上げる。アンドリュー・ゴールドやケニー・エドワーズらお馴染みの面々の冴えわたったバックアップもいい。エド・ブラックのスティール・ギターが活きるパッツィ・クラインの「アイ・フォール・トゥ・ピーセズ」からリトル・フィート、イーグルスと続くあたりは売出し中カントリー・ガールの面目躍如。アルバム・タイトルになる新曲でしみじみと締めくくる。

ディスク2は75年4月13日、カリフォルニアのバークレイ・コミュニティ・シアター。74年との被り曲は多く、オープニングも同じだが、ヒットの後だけに観客の熱気も一段階アップしている。前年より整理されたシンプルさで聴かせる「ユーア…」からマーサ＆ザ・ヴァンデラス「ヒート・ウェイヴ」への流れではソウル／ロックンロール方面に振ってきた印象。2枚の聴き較べも面白いだろう。 **青山陽一**

FLEETWOOD MAC ◆ シティズン・マック1990／フリートウッド・マック

Straight(ヴィヴィド) VSCD4632~3 / 2CD / ¥3100 / 2·21 / 解説＝池上尚志 / 輸入盤国内仕様

90年のフリートウッド・マックといえば、リンジー・バッキンガムの離脱後、ビリー・バーネット(vo、g)、リック・ヴィトー(g、vo)の二人が加わって『ビハインド・ザ・マスク』を世に問うた時期。鉄壁の5人体制が崩れて離れたファンもいたかもしれないが、アルバムの出来も悪くなかったし、ライヴでも気合いのこもった充実した演奏を繰り広げていたことはこのCDを聴いてもわかると思う。収められているのは8月25日のマンチェスターはメイン・ロードでのもの。サッカー場での堂々たるスタジアム・ショウで、構成もしっかり練られている。

冒頭の「ザ・チェイン」がコーダ部分だけなのは残念だが、5人時代のヒット曲が多く演奏され、リンジーを彷彿させるビリーの歌声もあり、リンジーの不在感はほとんどない。ピーター・グリーンを深く信奉するリック・ヴィトーの加入効果は大きく、「ストップ・メッシン・ラウンド」「アイ・ラヴド・アナザー・ウーマン」などでのピーターが憑依したようなブルーズ・ギターは圧巻だし、5人時代にはあまり聴けなかったスライド・ギターもたっぷり弾いていて、60年代末のマックが帰ってきたような高揚感がある。

もちろん既存メンバーの頑張りも顕著。80年代ノリの「イズント・イット・ミッドナイト」の歌いっぷりや、声を張り上げてメンバーを紹介するクリスティン・マクヴィーの元気さはそれまでにない印象があるし、叫び声を上げながらドラム・ソロをかますミック・フリートウッドの様子も一時期より活力を取り戻したように聞こえたりもする。「ドリームス」「リアノン」「ゴールド・ダスト・ウーマン」あたりの"スティーヴィー・ニックス劇場"も健在。この時期でしか聴けないレアなパフォーマンスだ。 **青山陽一**

CamScannerでスキャン

21st CENTURY SCHIZOID BAND ◆ ライヴ・イン・ジャパン2002 (CD+DVD) ／21stセンチュリー・スキッツォイド・バンド

June Dream (IAC) IACD11312~3 CD+DVD 紙ジャケット オープン・プライス／2・16／解説＝無署名／輸入盤国内仕様

ロバート・フリップがいないのでキング・クリムズンの名は使えなかったが、多くのキング・クリムズン・ファンにとって02年の21stセンチュリー・スキッツォイド・バンドの初来日コンサートは楽しめるものだったと思う。その11月6日の新宿・東京厚生年金会館ホールでのライヴの模様は、CDとDVDのセットで03年にユニバーサルから日本発売された。本作はその再発だ。DVDは完全収録で、CDは「明日への脈動」と「イフ・アイ・ウォズ」をカットしたもの。

メンバーは、イアン・マクドナルド、マイケル・ジャイルズ、ピーター・ジャイルズ、メル・コリンズに、当時はまだキング・クリムズンとの活動歴がなかったジャッコ・ジャクジクの5人。演奏されているのは「クリムゾン・キングの宮殿」「エピタフ」「風に語りて」などお馴染みのクリムズンの曲、マクドナルド＆ジャイルズのアルバムから「バードマン」「明日への脈動」、イアン・マクドナルドの「レット・ゼア・ビー・ライト」「イフ・アイ・ウォズ」、マイケル・ジャイルズの「プログレス」だ。

ここでの演奏は、自分たちも携わったキング・クリムズンの曲に敬意を払い、原曲に極めて忠実だ。コリンズとマクドナルドがともにフルートやサックスで演奏する場面も随所にある。キング・クリムズンの曲におけるヴォーカルはジャクジクだが、マクドナルドの「イフ・アイ・ウォズ」など、メンバーそれぞれが発表したアルバムの収録曲は本人たちが歌っている。コンサートは「エピタフ」で感動的に終わり、アンコールは「バードマン」、そして誰もが納得の「21世紀のスキッツォイド・マン」だ。カメラワークはもとより、演者にフォーカスする映像のつなぎ方が素晴らしい。 山岸伸一

TANGERINE DREAM ◆ アンダーウォーター・サンライト・イクスパンディド・エディション／タンジェリン・ドリーム

Esoteric / ベル・アンティーク(マーキー) MAR244012／¥2800／2・25／解説＝宮坂聖一／輸入盤国内仕様

ジャーマン・ロック界を代表するユニット、タンジェリン・ドリームが86年にリリースしたスタジオ・アルバム。制作時のメンバーは、グループの創設者であるエドガー・フローゼと、70年代前半から参加しているクラウス・シュルツェ、そして本作から新たに加入したパウル・ハスリンガーという3人である。ハスリンガーはウィーン国立音楽大学で学んだ作曲家／キーボーディスト／ギタリストで、90年代初頭までタンジェリン・ドリームに在籍し、その後はソロになって、ゲームや映画の音楽などさまざまな分野で活躍するようになる人物。本作でも彼の活躍が目立っているようだ。

アルバム・タイトルが示唆するとおり、どの曲も海中の世界を描いたものになっていて、16ページあるカラー・ブックレットの裏表紙には、美しいイルカの写真があしらわれている。音楽性をひとことで言うと、70年代タンジェリン・ドリーム風の電子音楽をベースにしながら、そこに80年代風のポップなプログレの要素を加味したといったところだろうか。ライナーでも指摘されているが、ハスリンガーの弾くギターは元ジェネシスのスティーヴ・ハケットを連想させる。また、アコースティック・ピアノの抒情的なソロで始まるシンフォニックなナンバーもあって、このあたりにもハスリンガーの個性が強く出ているようだ。ボーナス・トラックが1曲追加されているが、これがタンジェリン流のメロウなファンク風ナンバーといった風情で、なかなか面白いと思う。全体にニューエイジ・ミュージックの領域へと向かっているような音だが、ギリギリのところで踏みとどまっており、そこに“前衛ロック界の巨匠”ともいえるこのグループの個性といったものが感じられる。 立川芳雄

CamScannerでスキャン

COLLAGE ◆ 妖精伝説　コラージュ
Mystic / ベル・アンティーク(マーキー)　MAR243991　¥3000　1-25　歌詞　解説=宮坂聡一　輸入盤国内仕様

COLLAGE ◆ ムーンシャイン　コラージュ
Mystic / ベル・アンティーク(マーキー)　MAR243992　¥3000　1-25　歌詞　解説=宮坂聡一　輸入盤国内仕様

ポーランドを代表するプログレッシヴ・ロック・バンド、コラージュの初期2作品が再発CD化された。紙ジャケット仕様ではないが、日本で再発されるのは十数年ぶりのことで、22年に発表された新作『オーヴァー・アンド・アウト』で彼らを知ったという新しいファンにも嬉しい再発といえるだろう。

コラージュは、社会主義政権下にあったポーランドの首都ワルシャワで84年に結成された。中心となったのはギターのミレク・ギルとドラムのヴォイチェフ・シャコフスキで、メンバーを入れ替えながら音楽性を煮つめていく。89年にポーランドの民主化が実現し、その翌年に同国のレーベルから発表したデビュー作が『妖精伝説』である。道化師が描かれたジャケットから初期のマリリオンを想像させるが、音楽的にもズバリそのもので、ポンプ・ロック/ネオ・プログレッシヴ・ロックと呼ばれたペンドラゴンやIQなどとも共通する音楽性をもっている。それらのグループ同様に、ジェネシスを思わせるリズム・パターンや楽曲展開があり、特に10分超えのタイトル曲には、その影響が色濃く表われている。ミレク・ギルが各曲で奏でる泣きのギターもスティーヴ・ハケットやスティーヴ・ロザリー直系といえるものだが、緩急のきいたフレーズ作りのセンスには特筆すべきものがあり、楽曲の叙情性に多大な貢献をしている。また、手数の多いドラム、歌心のあるベース、ゲスト・メンバーだがシンフォニックなアレンジやテクニカルなプレイに秀でたキーボードと演奏面も充実。10分を超えるのはタイトル曲のみで、展開に複雑さはないし、メロディも親しみやすいとあって、同作は本国でも高い人気を得た。また、後に世界配給が実現し、日本のプログレ・ファンの間でも東欧プログレの名作と話題を呼んだ。

93年にジョン・レノンの曲のカヴァー集『ナイン・ソングス・オブ・ジョン・レノン』を発表したコラージュは、オランダのSIミュージックと契約を結び、オリジナル・アルバムとしては2作目となる『ムーンシャイン』を94年に発表する。オランダでレコーディングを行ない、歌詞もすべて英語にするなど、世界進出を視野に入れて制作された。ミレク・ギルとヴォイチェフ・シャコフスキ以外のメンバーは交代していて、専任キーボーディストを加えた5人編成で録音されている。前作と比べるとサウンドのクオリティ向上が顕著で、各種キーボードの音色がふくよかになり、泣きのギターのサステインも迫力が増している。曲の構成も前作以上に練り上げられていて、14分に及ぶ「イン・ユア・アイズ」、11分の「ウィングス・イン・ザ・ナイト」、12分の「ムーンシャイン」と、三つある大作曲のどれもがドラマチックに仕上げられている。ロベルト・アミリアンのヴォーカルは線の細さが気になるが、シンフォニックなキーボードをバックに泣きのギターがグイグイ盛り上げていくインスト・パートは、叙情派プログレ・ファンの琴線に触れるはず。当時はSIミュージックからポンプ・ロック系アルバムが多数リリースされていたが、そのなかでも際立つ叙情性の高さで注目を集め、本作をもってポーランドを代表するプログレッシヴ・ロック・バンドとして広く認知されるようになった。

舩曳将仁

CamScannerでスキャン

DISCUS ◆ ファースト／ディスクス
アルカンジェロ(ディスクユニオン) ARC7390／紙ジャケット／¥3000／3・6／歌詞／解説=Tetsu Rockind

DISCUS ◆ トット リヒト! 光へ!／ディスクス
アルカンジェロ(ディスクユニオン) ARC7391／紙ジャケット／¥3000／3・6／歌詞／解説=Tetsu Rockind

DISCUS ◆ ライヴ・イン・スイス(オフィシャル・ブートレッグ)／ディスクス
アルカンジェロ(ディスクユニオン) ARC7392／紙ジャケット／¥3000／3・6／歌詞／解説=Tetsu Rockind

インドネシアの伝統音楽を取り入れている西洋のロック・バンドやテクノ系アーティストを挙げるのは比較的かんたんだが、本国インドネシアでそういうことをしている人を挙げるのはなかなか容易ではない。95年に結成されたというディスクスも決してメジャーな存在ではないが、非欧米圏のプログレッシヴ・ロックを熱心に追いかけているリスナーならその名を耳にしたことはあるだろうし、かつてイタリアのメロウ・レコーズから発売されていたデビュー・アルバム、フランスのムゼアから発売されていたセカンド・アルバムを入手済みの人もいるだろう。実際、彼らの音楽は複雑な変拍子や高度なアンサンブルのなかにインドネシアの伝統音楽だけでなくジャズ、メタル、エレクトロニック・ミュージック他、多種多様な要素が目まぐるしく出入りするスタイルを取っている。しかしその一方では、それらの要素が爽快な伸びやかさを湛えた楽曲のパーツとして有機的に相互作用し合っている印象もある。オリジナル作と未発表ライヴ音源集が同時リリースされたいま、彼らの素晴らしい音楽ができるだけ多くの人の耳に届いてほしいとの願いを込め、かならずしも聴き手を選ぶ音楽というわけではないという点をまず強調してから、各音源を紹介することにしたい。

『ファースト』は99年に発表された1作目。作曲でも演奏でも中心になっているのはアメリカでクラシック音楽を修めた経験を持つイワン・ハサン（ギター、キーボード、ヴォーカル）だが、女性ヴォーカル、管楽器、ヴァイオリン、ベース、ドラムス、ガムラン等、それ以外のメンバーたちの演奏技術も作曲能力も非常に高い。楽曲は1曲を除き、すべてディスクス結成前に書かれたものだと解説文にあったが、急場しのぎの感はなく、一言で言えばとても完成度の高い内容だ。次作以上のヴァラエティに富んだ曲調に先の事情の片鱗が窺えるとはいえそうだが、それも魅力に思う人は少なくないだろう。ボーナス・トラックは後述するライヴ盤に収録の音源と同時期（05年）のジャカルタ公演から。ライヴだけに、いっそう彼らのすさまじさを実感する。

『トット リヒト！ 光へ！』は03年発表の2作目。1曲目から祭祀的な歌唱、変則リズムのクロスオーヴァー・ジャズ、プログレッシヴ・メタル、チェンバー・ロック、ガムラン、女性ヴォーカル入りのポップ・ソングといった要素がこれでもかと飛び出る驚きの展開（同曲の09年のライヴ・ヴァージョンが今回のCD化に際して追加収録された）ながら、アルバムのトータル性は1作目より高い。もともと本人たちはジャズ・フュージョンを志向していたものの、聴衆やメディアの間ではプログレッシヴ・ロックとして評価する声が強かったための路線調整というのが面白いが、そのなかでもインドネシアのバンドとしての個性は維持されている。

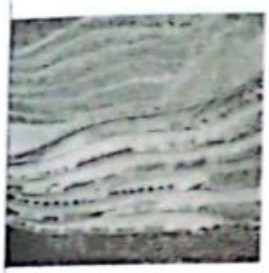
『ライヴ・イン・スイス（オフィシャル・ブートレッグ）』は、05年にスイスのチューリヒで開催されたプログ・ロック系フェスに出演時の全6曲。なんでも同ライヴ盤がリリースされたのは、旧作と合わせて発売する予定だった新作の完成が遅れて代案が必要になったためだとか。新作のニュースもその代案も歓迎ファンにとっては嬉しさしかない。

CamScannerでスキャン

ART BEARS ◆ ホーブス・アンド・フィアーズ／アート・ベアーズ
ベル・アンティーク(マーキー) BELLE243998 / SHM-CD / 紙ジャケット / ¥3182 / 2・25 / 歌詞・訳詞 / 解説＝坂本理

ART BEARS ◆ ウィンター・ソングズ／アート・ベアーズ
ベル・アンティーク(マーキー) BELLE243999 / SHM-CD / 紙ジャケット / ¥3543 / 2・25 / 歌詞・訳詞 / 解説＝坂本理

ART BEARS ◆ ザ・ワールド・アズ・イット・イズ・トゥデイ／アート・ベアーズ
ベル・アンティーク(マーキー) BELLE244000 / SHM-CD / 紙ジャケット / ¥3182 / 2・25 / 歌詞・訳詞 / 解説＝坂本理



アート・ベアーズは、フレッド・フリス、クリス・カトラー、スラップ・ハッピーのダグマー・クラウゼという、後期ヘンリー・カウの3人によるアヴァン・ロック・ユニット。全3作のオリジナル・アルバムは、15年にSHM-CD／紙ジャケット仕様で再発されているが、今回はそのアンコール・プレスが実現した。

78年のデビュー作『ホーブス・アンド・フィアーズ』は、もともとヘンリー・カウの作品として制作が進められていたため、上記3人以外のカウのメンバーも参加している。アルバムはベルトルト・ブレヒトとハンス・アイスラーが書いた「自殺について」から始まるが、78年といえばデイヴィッド・ボウイがアイソラーⅡツアーでブレヒト作の「アラバマ・ソング」を披露していた時期。同ツアーは『ロウ』と『ヒーローズ』発表に伴うものだが、ボウイの＜ベルリン三部作＞と同様に、本作にも実験性に富んだ仄暗い欧州サウンドが横溢している。ボーナス・トラックは79年のライヴ4曲。当時のポスターもリサイズ復刻されている。

ヘンリー・カウ解散後の79年に発表された次作『ウィンター・ソングズ』は、ヴォーカルのクラウゼ、ドラムスのカトラー、そのほかの楽器を担当するフリスの3人編成になったことで、ファーストの延長線上にありながらも作品の純度が高まった印象だ。とりわけ「夏の車輪」「奴隷」「世捨て人」「鼠と猿」と続くLPではA面後半にあたる4曲は、フリスがギターやヴァイオリンなど様々な楽器を幅広い曲調に応じて効果的に用い、彼らの最良の部分が反映されているように思う。ボーナスは本作関連の2曲。オリジナル盤付属のリーフレットも同梱されている。

81年発表の最終作『ザ・ワールド・アズ・イット・イズ・トゥデイ』は、「海外資本投資家の歌」にはじまり、「狗教者たちの歌」「独占者たちの歌」など"歌"の付くタイトルが目立つ、より"歌"に焦点を当てた内容だが、メッセージ性の強い最終曲「目覚めよ、イギリス！」は歌詞がありながら歌が入らないことで、逆に強烈な印象を残す。ボーナスは別名義による84年録音の「海外資本投資家の歌」など3曲。LPの初回盤に付いていたブックレットも再現されている。　杉原徹彦

ELECTRIC SUN ◆ 天地震動～ジミ・ヘンドリックスの魂に捧ぐ／エレクトリック・サン(ウリ・ジョン・ロート)
Alpha Experium / ベル・アンティーク(マーキー) MAR244011 / 紙ジャケット / ¥2700 / 2・25 / 解説＝白谷潔弘 / 輸入盤国内仕様

ウリ・ジョン・ロート(g、vo)がスコーピオンズ脱退後にウレ・リトゲン(b)、クライヴ・エドワーズ(ds)と結成したエレクトリック・サンのファースト・アルバム『天地震動～ジミ・ヘンドリックスの魂に捧ぐ』(79年)が、オリジナルのデザインに少し手を加えたジャケットで再発。スコーピオンズではジミ・ヘンドリクスとクラシックという自身の音楽的素養を発揮していたウリだが、トリオ編成のこのバンドでは、ジミからの影響を前面に打ち出した。注目の追加トラック二つは曲タイトルが付いているものの、裏ジャケットに"Bonus Improvisations"と記載されているとおり、即興演奏を主体とした78年のセッションだ。　杉原徹彦

CamScannerでスキャン

WELDON IRVINE ◆ ザ・プライス・オブ・フリーダム／ウェルドン・アーヴィン

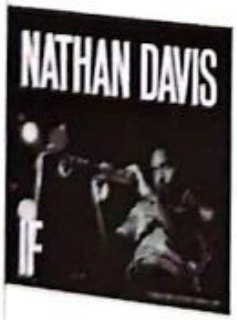
Pヴァイン PCD94190／紙ジャケット／¥2400／2・7／解説＝若杉実
Pヴァイン PLP7406／LP／¥5500／5・15

多面的な音楽活動を繰り広げた鍵盤奏者／作・編曲家／プロデューサー、ウェルドン・アーヴィン（1943-2002）。その晩期の力作が、新たなジャケットで国内盤化された。99年2月、4人の白人私服警官から19発もの弾丸を受けて絶命したアマドゥ・ディアロ（享年23歳、NYのブロンクスに住んでいたギニア系移民。ちなみに発砲されたのは41発）の事件がきっかけで生まれた一枚だ。その点ではエリカ・バドゥ「A.D.2000」、パブリック・エナミー「41:19」、ブルース・スプリングスティーン「アメリカン・スキン（41ショッツ）」などと共通する。アルバム・カヴァーには、ウェルドンのヒップホップ・プロジェクト名といっていいであろう "mAster-Wel" の文字もおどる。

99年中にリリースされたようだから、相当なハイペースで作曲や録音が進んだことに疑いはない。Qティップ、タリブ・クウェリ、モス・デフ、ドン・ブラックマン、カーラ・クックら錚々たる顔ぶれが協力し、ウェルドンも "mAster-Wel & Company" や "Future Heads" といったユニットを率いて登場。ブラックマンとのデュオも披露する。即興演奏の妙味に浸る類の作品ではなかろうが、巧みなストーリーテラー／構成者としてのウェルドンの姿は鮮やかに浮かびあがる。示唆にも起伏にも富む展開に接するうち、筆者が思い出したのはキャノンボール・アダレイの『ビッグ・マン』（75年）やデューク・エリントン『マイ・ピープル』（63年）といった作品だ。あの堂々としたヴォーカルやナレーションの感覚が、時を経てラップに乗り移っているとも感じ、同時に "ぜひこれを舞台化してほしい" "3次元で体感したい" との気持ちが湧いた。なお、前述の私服警官4人は裁判で "無罪" となっている。　原田和典

NATHAN DAVIS ◆ イフ／ネイサン・デイヴィス

Pヴァイン PCD94192／紙ジャケット／¥2400／2・21／解説＝若杉実
Pヴァイン PLP7403／LP／¥3980／6・19



マルチ・リード奏者、ネイサン・デイヴィスによるジャズ・ファンクの名盤。渡欧していた60年代に頭角を現わして以来、モーダルな素地を培ってきた逸材だ。帰国後はおもにピッツバーグを拠点としたとされるが、この『イフ』は郷里、カンザスシティでの76年録音。5ピース・コンボ（単管カルテット＋パーカッション）での本盤は、同年リリースの大編成作品 "Suite For Dr. Martin Luther King, Jr." （ジャズ・ファンク・チューンを複数含み、シンセも導入）とも大枠での方向性は重なるが、ぐっとタイトな印象を受ける。演奏陣でひときわ目をひく名はエイブラハム・ラボリエル(b)で、裏ジャケには "Introducing Abraham Laboriel" と副題のように記されてもいる。ラボリエルの録音キャリアはこの数年前に始まったばかりのはずだが、後年に名をなす彼の演奏が、本盤で大きく前面に打ち出されたのは事実といえる。

そのラボリエルのうごめくベース、オフ・ビートにからむエレピなどをバックに、ダーティな音色も交えたフルートが冴えるジャズ・ファンク・クラシック 'Stick Buddy' や、豪快なテナー・ブロウを効かせたグルーヴィなミディアム 'Tragic Magic' など、手ごたえある演奏が並ぶ。うねるグルーヴと枯れたフルート音が絶妙な 'New Orleans'、リズム隊がポリリズミックに躍動する 'African Boogie'、ソプラノ・サックスが疾走するブラジリアン・テイストの 'Bahia'、活気に満ちた4ビートの 'Mr. Jive By Five' などが聴きどころ。また、バス・クラリネットが印象的な表題曲や、前年に他界したキャノンボール・アダレイに捧げたアルト・サックス主体の 'A Thought For Cannon' などスロウ曲も良く、聴きごたえ大の逸品である。　出田圭

CamScannerでスキャン

BILL EVANS TRIO ◆ ライヴ・イン・ロンドン1965／ビル・エヴァンス・トリオ
Hi-Hat(IAC) IACD11308／オープン・プライス／2・16／解説＝石沢功治／輸入盤国内仕様

BILL EVANS TRIO ◆ ライヴ・イン・イタリー1979／ビル・エヴァンス・トリオ
Hi-Hat(IAC) IACD11309~10／2CD／オープン・プライス／2・16／解説＝石沢功治／輸入盤国内仕様

ラジオ音源やテレビ音源などから発掘されたアーカイヴをリリースしているHi Hatから、ビル・エヴァンス・トリオの2作品がリリースされた。

『ライヴ・イン・ロンドン1965』は、65年3月2日から11日にかけて、ロンドンのロニー・スコッツ・クラブで収録された音源を収録したもの。『ワルツ・フォー・デビイ』などを61年に録音したものの、トリオの仲間であったベースのスコット・ラファロを交通事故で失った後の時期である。このアルバムでは、ベースのチャック・イスラエル、ドラムのラリー・バンカーとの新たなトリオの演奏を聴くことができる。

「ビューティフル・ラヴ」での洒脱なピアノを聴いていると、スコットの死去後、ビルがアルコールや薬物への依存症に陥っていたことが嘘のように感じられる。そして、チャックとラリーとのインタープレイは、ビル・エヴァンスが新たなトリオとともに再起したことを雄弁に物語る。ラリーのダイナミックさは、ピアノと美しいコントラストを成している。「アワ・ラヴ・イズ・ヒア・トゥ・ステイ」でのピアノのタッチの強さとタイム感も心地よく、「スプリング・イズ・ヒア」は、繊細さと蠢きが同居するような演奏。ビルが作曲したとの説もあるマイルス・デイヴィスの「ナーディス」では、複雑に絡み合うトリオの演奏に息を飲む。終盤の「マイ・ロマンス」から「ファイヴ」への流れは、華やかでトリオのテクニックを見せつける。

『ライヴ・イン・イタリー1979』は、79年11月のイタリア、ピエモンテ公演の音源を収録した2枚組。ここではドラムのジョー・ラバーベラ、ベースのマーク・ジョンソンとのトリオ編成だ。そして、ビルが80年9月にこの世を去るまで1年を切った時期のライヴ音源でもある。なお、79年12月のドイツ公演の音源もHi Hatからすでにリリースされている。

「マッシュのテーマ」では、演奏に豪放さが顔を出し、3人のそれぞれのプレイがワイルドさを増していきながらも均衡を保つ。ポール・サイモンの「きみの愛のために」は、そのメロディを美しく解体しながら再構築するかのようなピアノが響きわたる。「マイ・ロマンス」では、ジョーのドラムが大きなアクセントになり、マークのベース・ソロへと続く。ミシェル・ルグランの「ノエルのテーマ」や、ジョージ・ガーシュウィンの「愛するポーギー」は、ビルによる独奏で、衰えることのなかったプレイの鋭さ、雄弁さを体験することができる。ビルの独奏は、このライヴ盤のハイライトでもある。「アップ・ウィズ・ザ・ラーク」や「ターン・アウト・ザ・スターズ」でもピアノが冴えわたり、マークのベースがそこに向かい合う。「ファイヴ」には、ライヴの始まりや休憩前に演奏していたブレイク・チューンならではの遊び心と混沌がある。「スプリング・イズ・ヒア」には、このトリオの持つロマンティックさが横溢している。ここでの「ナーディス」は15分におよび、ビルのピアノはアブストラクトといえるほどの演奏を聴かせ、ジョーやマークもソロを展開していく。これもまたライヴ盤のハイライトだ。熱演の後、「バット・ビューティフル」で美しく締めくくるのも粋である。

宗像明将

CamScannerでスキャン

ANDREW HILL ◆ ダンス・ウィズ・デス／アンドリュー・ヒル
ブルーノート(ユニバーサル) UCCQ9646／UHQCD／¥2000／2・28／解説＝岡崎正通

BOBBY HUTCHERSON ◆ サンフランシスコ／ボビー・ハッチャーソン
ブルーノート(ユニバーサル) UCCQ9647／UHQCD／¥2000／2・28／解説＝原田和典

CECIL TAYLOR ◆ ユニット・ストラクチャーズ／セシル・テイラー
ブルーノート(ユニバーサル) UCCQ9648／UHQCD／¥2000／2・28／解説＝岡崎正通

DUKE PEARSON ◆ ザ・ライト・タッチ／デューク・ピアソン
ブルーノート(ユニバーサル) UCCQ9649／UHQCD／¥2000／2・28／解説＝高井信成

FREDDIE HUBBARD ◆ ブルー・スピリッツ／フレディ・ハバード
ブルーノート(ユニバーサル) UCCQ9650／UHQCD／¥2000／2・28／解説＝原田和典

名門、ブルー・ノートの創立85周年を記念した、日本独自企画のリイシュー・シリーズ"ブルーノート@85"。第2弾となる今回は20タイトルがリリースされたが、そのうち10枚を紹介する。米ブルー・ノートのアナログ復刻シリーズでも腕を振るう名エンジニア、ケヴィン・グレイが最新リマスタリングを施し、オリジナル・マスター・テープの音を可能な限り忠実に再現。どのタイトルも日本独自企画の限定盤で、UHQCD仕様となっている。

評論家のナット・ヘントフがそのプレイを"分類不能"と評したのが、アンドリュー・ヒル(p)の『ダンス・ウィズ・デス』(68年録音)。ヒルは過小評価されていた時期もあったが、彼の衣鉢を継ぐジェイソン・モランの活躍などもあり、近年その真価が認められつつある。本作は、60年代のヒルの発掘音源のうちのひとつ。チャールズ・トリヴァー(tp)とジョー・ファレル(ss、ts)の2管編成による作品で、4ビートの間隙を縫って3拍子のフレーズが紛れ込む「パーテーションズ」が出色だ。昨今、J・ディラの紡いだ脱臼しているようなビートをジャズ・ドラマーが採り入れることが一気に増えたが、ヒルはピアノでそれを先取りしていたようなところがある。彼の演奏は、千鳥足でふらついているようなタイム・フィールを有しているのだ。

ボビー・ハッチャーソン『サンフランシスコ』は70年にロサンゼルスで録音された、ヴィブラフォン奏者のアルバム。『モンタラ』(75年)と並び、クラブ・ジャズやレア・グルーヴの文脈で再評価され、脚光を浴びた作品として有名だ。4曲目の「ウム」は、アイス・キューブ、マドンナ、ビースティ・ボーイズにサンプリングされている。本作はボビーのリーダー作ではあるが、内容としては実質的にテナーとオーボエを吹くハロルド・ランドとの双頭作と言っていいだろう。

セシル・テイラー『ユニット・ストラクチャーズ』は、既存のジャズの形式を破壊しつつ、同時に新たな秩序を構築せんとする意気込みが伝わる66年録音。打楽器を習っていたテイラーらしく、鍵盤を叩きつけるようなパーカッシヴなプレイも耳を惹く。7人編成の中でも特に目立っているのが、ジミー・ライオンズのアルト。彼が全体の疾走感を倍加させ、荒々しさととげとげしさをもたらしている。もっと評価されてしかるべき存在だ。

デューク・ピアソン『ザ・ライト・タッチ』は、ドナルド・バードの名盤『フュエゴ』でフックアップされていたピアニストの67年録音盤。ピアノ・トリオに5名のホーン奏者が加わる編成だが、ハード・バップをピアソンなりに拡張／拡大したような、志の高さと探究心／冒険心が感じられるアルバム。フレディ・ハバードのトランペットが一頭地を抜いている印象だ。

フレディ・ハバードの『ブルー・スピリッツ』は65年録音の作品で、ふたつのセッションから成るが、コンガやユーフォニウムを含む8名編成の「ソウル・サージ」「クンガ・ブラック」が白眉。スライド・ハンプトンのラージ・アンサンブルやクインシー・ジョーンズ・オーケストラで活動した経歴を持つ、ハバードの作曲家／編曲家としての才能が十全に発揮さ

CamScannerでスキャン

GRACHAN MONCUR III ◆ エヴォリューション／グレイシャン・モンカーIII世
ブルーノート(ユニバーサル) UCCQ9651／UHQCD／¥2000／2・28／解説＝岡崎正通

GRANT GREEN ◆ グリーン・ストリート／グラント・グリーン
ブルーノート(ユニバーサル) UCCQ9652／UHQCD／¥2000／2・28／解説＝高井信成

HANK MOBLEY ◆ ノー・ルーム・フォー・スクエアーズ／ハンク・モブレー
ブルーノート(ユニバーサル) UCCQ9653／UHQCD／¥2000／2・28／解説＝藤本史昭

IKE QUEBEC ◆ ヘヴィー・ソウル／アイク・ケベック
ブルーノート(ユニバーサル) UCCQ9654／UHQCD／¥2000／2・28／解説＝藤本史昭

JACKIE MCLEAN ◆ デモンズ・ダンス／ジャッキー・マクリーン
ブルーノート(ユニバーサル) UCCQ9655／UHQCD／¥2000／2・28／解説＝村井康司

れた作品となっている。

グレイシャン・モンカーIII世『エヴォリューション』は、60年代に頭角を現わしたトロンボーン奏者の初のリーダー作。63年に録音された。本作にも参加しているジャッキー・マクリーンのクインテットに召集され、注目を浴びるようになったモンカーのプレイは堅実かつ堅牢。彼の発する野太い音色も賞賛に値するが、トニー・ウィリアムス(ds)、ボビー・ハッチャーソン(vib)、リー・モーガン(tp)が脇を固めているのも大きなプラス材料だろう。

グラント・グリーン『グリーン・ストリート』は、ニューヨーク進出後第1弾となる61年録音盤。ギター、ベース、ドラムから成るトリオ編成で、グリーンのアタックの強い単音を駆使したソロが存分に味わえる。シャープで鋭利なタッチといい、クリーンで澄み渡った音色といい、文句なしの演奏だ。オクターヴ奏法を得意としたウェス・モンゴメリーとは対照的なプレイ・スタイルが彼の個性である。

ハンク・モブレーの『ノー・ルーム・フォー・スクエアーズ』は、マイルス・デイヴィスの録音にも参加したテナー奏者の63年録音盤。モブレーの歌心溢れるテナー、リー・モーガンのヴァイタルなトランペットもいいが、これがブルー・ノートへの2度目の録音となるアンドリュー・ヒルの存在感がかなりデカい。彼ならではの先進的なセンスが持ち込まれることで、新風が吹き込まれているのは間違いない。

アイク・ケベック『ヘヴィー・ソウル』は、コンポーザー／プレイヤーとして「ブルー・ハーレム」という曲をブルー・ノートに提供したテナー奏者の61年録音盤。フレディ・ローチのオルガンが加わることで、過去作よりもソウル・ジャズ色が前景化。ケベックのファンキーなプレイが冴え渡る。なお、ローチはこれがレコーディング・デビューとなる。

アルト奏者のジャッキー・マクリーンは、ブルー・ノートに9年間で21枚のアルバムを残しており、後期はフリー・ジャズから影響を受けた作風も目立つ。67年録音の『デモンズ・ダンス』も、50年代に較べると、ハードでパッションに満ちたソロが突出している印象。アドリブはやや一本調子だが、ウディ・ショウ(tp)の起伏に富むプレイがそれを補って余りある役割を果たしている。

これらのアルバムを支えたのは、ブルー・ノート創設者にしてプロデューサーのアルフレッド・ライオンに他ならない。たとえば、ライオンのデューク・ピアソンへの信頼は厚く、63年に同社のA&Rだったアイク・ケベックが死去すると、ライオンはその仕事をピアソンに引き継がせる。ピアソンはプロデューサーとしても、レコーディングでライオンの傍らにおり、多くを学んだと証言している。

あるいは、セシル・テイラーの『ユニット・ストラクチャーズ』。この尖鋭的で前衛的な作品をブルー・ノートがリリースした事実は、同レーベル（つまりライオン）の懐の深さを物語っている。さらに、テイラーのディスコグラフィーを見ると、実は、彼が本当に望む条件で録音された作品はきわめて少ないことが分かる。本作はその中の一枚としても貴重であり、ライオンの深い理解がなければ世に出なかっただろう。その功績を改めて称えたい。　土佐有明

CamScannerでスキャン

SONNY CLARK ＊ダイアル・S・フォー・ソニー／ソニー・クラーク
ブルーノート(ミニバーサル) UCCQ9662 UHQCD ¥2000 2・28 解説＝高井信成

JIMMY SMITH ＊ミッドナイト・スペシャル／ジミー・スミス
ブルーノート(ミニバーサル) UCCQ9656 UHQCD ¥2000 2・28 解説＝藤本史昭

TINA BROOKS ＊トゥルー・ブルー／ティナ・ブルックス
ブルーノート(ミニバーサル) UCCQ9664 UHQCD ¥2000 2・28 解説＝藤本史昭

JOHNNY COLES ＊リトル・ジョニー・C／ジョニー・コールズ
ブルーノート(ミニバーサル) UCCQ9657 UHQCD ¥2000 2・28 解説＝原田和典

WAYNE SHORTER ＊ナイト・ドリーマー／ウェイン・ショーター
ブルーノート(ミニバーサル) UCCQ9665 UHQCD ¥2000 2・28 解説＝村井康司

先月号に続き、ブルー・ノート創立85周年記念のリイシューから10枚をご紹介。レーベルを代表するピアニストであり、日本でも人気の高いソニー・クラーク。『ダイヤル・S・フォー・ソニー』は57年録音で、ブルー・ノートでの初リーダー作だ。表題曲は重心の低い、ブルーズ感覚溢れるこの時代ならではのハード・バップ。鍵盤に指があたる様子まで伝わるリアルな録音だ。贅沢な3管で、カーティス・フラー(tb)がサウンドの重心の低さに貢献大。粒立ちのいいピアノを際立たせる。アート・ファーマー(tp)はのちのちよりも音色・プレイともに鋭い。

ヴァーヴに移籍する前、ブルー・ノートには1500番4000番台通して多くの録音を残したジミー・スミス(org)。『ミッドナイト・スペシャル』は、63年発表の『バック・アット・ザ・チキン・シャック』と同じく60年4月のセッションで録音された作品で、スタンリー・タレンタイン(ts)、ケニー・バレル(g)らが参加。ブルーズ感覚と都会的でクールなテイストを兼ね備えた、人が音の幅を広げるが、表題曲はじめルーズな構成・演奏で、ジャズの原典としてのジャム的な雰囲気も。『ワン・オクロック・ジャンプ』はバレルが曲を意識してか、フレディ・グリーン的四つ切りギターでアプローチ。オルガン・ジャズ、ソウル・ジャズは、バップ以前のジャズへ先祖帰りする部分がときどき感じられて面白い。

リーダー・セッションはあったが、生前発表されたのはこの60年6月録音の『トゥルー・ブルー』のみというティナ・ブルックス(ts)。ど真ん中のハード・バップではなく、6曲中5曲を占めるオリジナル曲は、テーマのメロディ、コード、モードの扱い、曲展開にかなりの工夫が感じられる。『テーマ・フォー・ドリス』などラテン・リズムの組み込み方も繊細で、モードっぽさもある。フレディ・ハバード(tp)、デューク・ジョーダン(p)らが参加している。

ジョニー・コールズ(tp)のブルー・ノート唯一のリーダー作が『リトル・ジョニー・C』(63年録音)。表題曲は、デューク・ピアソン(p)の即興的なソロから始まり、浮遊感が印象的だ。ジョー・ヘンダーソン(ts)作の『ボーボー・ジョー』はリー・モーガンの『サイドワインダー』的だが、メロディはひねりがきいている。コールズはふくよかさ、繊細さなど、多彩な表情を聞かせる。ハーフ・バルブ的な演奏も出てきて、コールズがデューク・エリントン楽団に在籍経験があることも納得。彼はギル・エヴァンズ楽団、チャールズ・ミンガス楽団などに在籍経験があり、戦前ジャズとモダン・ジャズを繋ぐ感覚もある。

ウェイン・ショーターのブルー・ノートにおける初リーダー作が『ナイト・ドリーマー』。64年4月録音。マッコイ・タイナー(p)、エルヴィン・ジョーンズ(ds)らジョン・コルトレーン・グループの中心メンバーのほか、リー・モーガン(tp)も参加。ミステリアスな浮遊感のあるショーター節、『オリエンタル・フォーク・ソング』など民謡調のモード系、ブルーズ…とバランスのよい内容。マッコイの叙情的な持ち味もよく伝わる。ショーター云々というよりはジャズ作品として秀逸だが、彼の品の良さはよく出ている。ジャケット・デザインもよい。

リー・モーガンの65年録音作が『インフィニティ』

LEE MORGAN ◆ インフィニティ／リー・モーガン
ブルーノート(ユニバーサル) UCCQ9658／UHQCD／¥2000／2・28／解説＝原田和典

LOU DONALDSON ◆ ミッドナイト・クリーパー／ルー・ドナルドソン
ブルーノート(ユニバーサル) UCCQ9659／UHQCD／¥2000／2・28／解説＝藤本史昭

STANLEY TURRENTINE ◆ コモン・タッチ／スタンリー・タレンタイン
ブルーノート(ユニバーサル) UCCQ9663／UHQCD／¥2000／2・28／解説＝岡崎正通

McCOY TYNER ◆ エクステンションズ／マッコイ・タイナー
ブルーノート(ユニバーサル) UCCQ9660／UHQCD／¥2000／2・28／解説＝村井康司

RONNIE FOSTER ◆ トゥー・ヘッディド・フリープ／ロニー・フォスター
ブルーノート(ユニバーサル) UCCQ9661／UHQCD／¥2000／2・28／解説＝岡崎正通

ジャッキー・マクリーン(as)や、当時のマクリーン・グループのメンバー、ラリー・ウィリス(p)、ビリー・ヒギンス(ds)らも参加している。81年まで発表されなかった作品で、1年前にヒットした「サイドワインダー」のような曲はないが、演奏はいい。ハード・バップにモード的アプローチを加え、鋭いソロも聞ける。モーガン作のタイトル曲はアラビック・モード的な雰囲気もあり、こうした曲調でのマクリーンはよい。ウィリスも好プレイ。

ブーガルー、というとラテン・ファンはニューヨークのラテン音楽のスタイルを思い浮かべるだろうが、ジャズ・ファンだとルー・ドナルドソン(as)の「アリゲイター・ブーガルー」を思い出す方が多いかもしれない。そのドナルドソンが68年3月に吹き込んだのがこの『ミッドナイト・スリーパー』。サックスの音色がよく、ジャズ的ニュアンスとラテン（「エリザベス」はボレーロ）が入り交じった感覚がある。「ラヴ・パワー」は、リズムのアクセントがシドニー・ベシェあたりの戦前ニューオーリンズ・ジャズを思い出させたり、多様な要素が入っている。ジョージ・ベンソン(g)は、ピッキングのいろんな工夫が聞こえてきて面白いプレイ。

スタンリー・タレンタインは、ヴィブラートのちょっとした部分に色気があるサックス奏者。コマーシャルすぎるところはあるが嫌いではない。『コモン・タッチ』は68年録音で、当時のパートナー、シャーリー・スコット(org)が参加したアルバム。二人の共演盤としてはブルー・ノート5作目で、最終作となる。ポップな表題曲（リッチー・コールが78年に発表した『アルト・マッドネス』で、エディ・ジェファーソンが歌っていた記憶がある）、「風に吹かれて」や「ブーガルー」という曲など、ジャズ寄りで歌のないサックス～オルガン音楽という趣で、個人的には楽しめる。ジミー・ボンダー(g)も、クッキリした音色でテキパキ弾いていてよい。

ブルー・ノートにもリーダー作は多いマッコイ・タイナーの、発表順で5作目となる作品が『エクステンションズ』。70年2月の録音で、ウェイン・ショーター(ss、ts)、ゲイリー・バーツ(as)、アリス・コルトレーン（ハープ）、エルヴィン・ジョーンズ(ds)などが参加。じつは叙情的だったりと多面的な持ち味のあるマッコイの、王道モード・ジャズ路線、または、ジョン・コルトレーン譲りの民俗楽器採用路線が捉えられている。4曲中3曲にアリスが参加。ハープとはいえ、民俗楽器のテイストを含んだ音色は独特で、マッコイも72年の『サハラ』で琴を演奏する際に影響を受けている。個人的な好みだが、こうしたサウンドのジャズはひじょうに面白いと思う。

50年生まれのオルガン奏者、ロニー・フォスター。72年録音の初リーダー作が『トゥー・ヘッディド・フリープ』だ。1曲目「チャンキー」から、細かいリズムのアプローチとリフで新世代感が漂う。ベースはエレキ（ゴードン・エドワーズ）とアコースティック（ジョージ・デュヴィヴィエ）の2本体制。アレンジャーも付き、全体のサウンドにも丁寧な気配りが感じられる。表題曲のリズム展開はじつにかっこいい。時代の変遷や、70年前後を境とした新旧の音楽の繋がりも伝わる好盤。　後藤幸浩

CamScannerでスキャン

バイパー ＋ ライヴ・ブリーズ

ステップス STPR042 UHQCD ¥2500 4・17 歌詞 解説＝近藤正義

リンドラムを使用するなど実験的でありながらも、"リゾート・ミュージック"という独特のスタイルを確立して人気を得たバイパー。近年は、アメリカでのアルバム・リリースなどを契機に、国内だけではなく海外でもシティ・ポップとして注目を集めている。23年にはベスト・アルバム『バイパー・クール・セレクション』をリリース。ボーナス収録されたライヴ音源の「Sunshine Kiz」が話題となり"ライヴ音源をもっと聴きたい"というリクエストが多数寄せられ、初のライヴ・アルバムのリリースに至った。

84年9月の渋谷ライヴ・イン公演からは、11曲を収録。山本圭右(vo、g)、山本耕右(g)、島村隆(kbd)にサポート・ミュージシャンという、5thアルバム『LOVERS LOGIC』(85年)時の編成。スタジオ盤で打ち込みだった楽曲が生ドラムで演奏され、もともと彼らが持っていた、バンドとしてのグルーヴ感が溢れたサウンドに。未発表ナンバーだった「Moonlight Drive」も収録。

84年7月、横浜のシェル・ガーデンで収録された「Seaside Runner」には、前述したメンバーに加え、村田和人がコーラスで参加。82年5月に高田馬場、LAで収録された「南風にのせて」は、山本圭右、島村、疋田ジョージ(vo)という、結成当時の3人によるもの。3曲が収録された01年8月、赤坂のエレクトリック・チャーチ・ラヴでのライヴでは山本耕右がベースも兼任するが、「Show Me」では『SUMMER BREEZE』以降でベースを担った井藤弥がプレイしている。楽曲は収録アルバムごとにまとめられ、さらにオリジナル・アルバムの曲順ほぼそのまま。監修者、近藤正義のこだわりと愛情を感じさせてくれるライヴ・コンピレーションとなっている。　ガモウユウイチ

ハートカクテル オリジナル・サウンドトラック ＋ v.a.

ワーナー WPCL13523-4 2CD ¥3500 2・14 解説＝わたせせいぞう

シティ・ポップのリヴァイヴァル以降、永井博や鈴木英人をはじめとして、当時の作品のアルバム・ジャケットを手がけたイラストレーターたちにも再び注目が集まっている。わたせせいぞうもそのなかの一人で、非リアルタイム世代を含む新たなファンたちが彼の作品を支持している。本作は、そんな彼の代表作である『ハートカクテル』のテレビアニメ版(86年10月から88年3月にかけて日本テレビ系列でオンエアされた)の放映に際してリリースされた6枚のサウンドトラック盤から、わたせ自身が選んだ楽曲を集めた2枚組のコンピレーション・アルバムだ。

ディスク1には、ラテン・ジャズの代表的アーティストである松岡直也と、多くの劇伴仕事で知られる島健が手がけた楽曲を収めている。両者ともに、わたせせいぞうの描く都会的で洒脱な人間模様をさりげなくもり立てるようなメロウ&スムーズなトラックを寄せている。和田アキラや高橋ゲタ夫、高水健司、松下誠など、フュージョン～シティ・ポップ界屈指のプレイヤーによる盤石の演奏も楽しめる。ディスク2の前半には、クラシック系作家、三枝成彰による曲が並ぶ。室内楽風の端正な曲が主となるが、これもまた、『ハートカクテル』という作品の世界観を巧みに下支えしている。後半には、島健が手がけたWebアニメ『ワンダーカクテル』の楽曲や、昨年、NHK総合で放映された『ハートカクテル カラフル』からの楽曲がボーナス・トラックとして収録されている。

わたせが描いた"あの時代の豊かな男女の恋愛模様"は、それが希少なものとなってしまった現代だからこそ、よけいに眩しく感じられる。ここに収められた音楽の艶やかさもまた同様だ。　柴崎祐二

五つの赤い風船 ✦ ボクは広野に一人居る
URC(ソニー・ミュージックレーベルズ) MHCL30970〜1 / 2Blu-spec CD2 / ¥2727 / 2・28 / 歌詞

三上寛 ✦ コンサートライヴ零孤徒 三上寛1972
URC(ソニー・ミュージックレーベルズ) MHCL30972 / Blu-spec CD2 / ¥1818 / 2・28 / 歌詞

柳田ヒロ ✦ HIRO
URC(ソニー・ミュージックレーベルズ) MHCL30973 / Blu-spec CD2 / ¥1818 / 2・28 / 歌詞

I.M.O.Band ✦ Cata-Coto
URC(ソニー・ミュージックレーベルズ) MHCL30974 / Blu-spec CD2 / ¥1818 / 2・28 / 歌詞

伴よしかず ✦ 青春彷徨
URC(ソニー・ミュージックレーベルズ) MHCL30975 / Blu-spec CD2 / ¥1818 / 2・28 / 歌詞

URCレコードの名盤復刻もいよいよ佳境を迎え、第8弾に突入。五つの赤い風船、6枚目のオリジナル・アルバム『ボクは広野に一人居る』(72年)はロン・バドリック・プロデュース、ハリウッドのRCAレコードでのスタジオ盤と、西岡たかし宅でのアメリカ探訪懐古談の合間に72年3月11日、エンバシー・オーディトリアム公演の模様が挿入されるライヴ盤の2枚組。「まぼろしの翼とともに」「どこかの星に伝えてください」「遠い世界に」など風船クラシックの数々が、日本での彼らの立ち位置など知らない西海岸の一流プレイヤーによって縦横無尽に演奏される。その結果、楽曲のクオリティの高さや西岡のメロディ・メイカーとしてのセンスの良さを改めて確認させられる。長野隆が作曲し、ヴォーカルをとったカントリー・フィール溢れるタイトル曲や、松本隆作詞のほのぼのとした歌詞が風船の世界にマッチする「えんだん」も収録。在りし日のラジオ番組を聴いているようなライヴ中継も楽しい。

三上寛の『コンサートライブ零孤徒 三上寛1972』(72年)は、日本武道館、新宿厚生年金会館小ホール、高円寺会館でのステージから抜粋されたライヴ集。柳田ヒロのピアノが入る「よいしょよいしょ」を除いてギター1本の弾き語りだが、「あなたもスターになれる」の終盤では怒涛のフリー・ジャズが導入されるなど油断ならない。ドスの効いた喉から情念を放出させることにかけては、三上を凌ぐ者はいない。オリジナル・アルバム未収録の「犯されたら泣けばいい」、十八番である小林旭のカヴァー「落日」、島倉千代子と同名異曲の「東京だよおっ母さん」など、〝なんでもいいからぶち壊せ、なんでもいいからさらけだせ〟の三上イズム満載。聴き疲れを催すような怒涛の10曲を収録している。

柳田ヒロ、3枚目のソロ作『HIRO』(72年)は、田中清司、武部秀明、マオらと結成したサンズ・オブ・サンの『海賊キッドの冒険』(72年)で展開した、松本隆とのタッグを発展させたソフト・ロック名盤。石川晶、杉本喜代志、村岡建といったジャズ・ロックの名手に加え、高中正義や矢野顕子がバックを務める。松本隆の紡ぐ風街的世界に柳田のボッサ風インストがクロスし、さまざまな交流が自由な風となって音盤を駆け巡る。大滝詠一の名曲と同じ詞に柳田が別の曲を付けた「乱れ髪」も収録。

『Cata-Coto』(73年)は、五つの赤い風船の長野隆、都会の村人の金森幸介と太田ぼう、そして秋山たかしで結成されたI・M・Oバンド唯一のアルバム。金森が都会の村人で構築してきた世界に風船の長野が加わり、和やかさと哀愁に満ちたアコースティック・ポップが完成されている。金森作の「悲しい日々」「雨上がりの街」は、70年代の喪失感や漂泊感を表現した名曲。玉木宏樹のヴァイオリンや渋谷毅の弦アレンジなど、こまやかな采配も効いている。

『青春彷徨』(76年)は、名古屋の伝説のバンド、八事裏山フォーク・オーケストラのメンバーだった伴よしかずのソロ・アルバム。URC最終期の作品とあって〝ポプコン〟的な色彩も強いが、春のもの憂い倦怠感を歌った「春はネコと一緒に」、虚しさと向き合う「ピエロ」などにURCイズム継承者の意地が感じられる。西岡たかしや長野隆も参加。ヒロ宗和

CamScannerでスキャン

山口百恵 ◆ GOLDEN BEST MOMOE DISCO & SOUL

アルテライト(ソニー・ミュージックレーベルズ) MHCL30920／Blu-spec CD2／¥2300／11・8／歌詞／解説=Yuki"T-Groove" Takahashi

かわいいアイドル全盛の70年代。その満面の笑みに対して、クールな冷笑で登場してきた山口百恵はかっこいいアイドルの先鞭をつけた。横須賀育ち、複雑な生い立ち、ふと垣間見せる醒め切った大人の表情。ロックンロール・ウィドウとしての彼女の資質は、ダウン・タウン・ブギウギ・バンドの「涙のシークレット・ラブ」を聴いて自ら阿木燿子＝宇崎竜童に楽曲を依頼したエピソードや、夫となる三浦友和が初期のRCサクセションのサポート・メンバーだったりしたことからも充分に窺い知れる。

本盤は山口百恵全作品の中から、76年以降に発表されたダンサブルな要素を持つ楽曲のみに焦点をあてたコンピレーション。ヒット曲はドラマ主題歌「赤い衝撃」のみというマニアックさだ。代表曲の「横須賀ストーリー」と並び"横須賀三部作"と称される阿木＆宇崎ラインの「I CAME FROM 横須賀」「横須賀サンセット・サンライズ」の収録が嬉しい。エディ藩が歌う「横浜ホンキートンク・ブルース」の味わいを出せる女性歌手は他にいないだろう。アース・ウィンド&ファイアを彷彿させるアレンジが素晴らしい「ダンシング・スターシャイン」、ゴダイゴのトミー・スナイダーが書き下ろし、スロウ・バラードから突如、ファンキー路線にシフトする「ワン・ステップ・ビヨンド」。NSPの天野滋が作詞して元GSリンド＆リンダースの加藤ヒロシが作曲、加藤と元キング・クリムゾンのゴードン・ハスケルらが演奏するラテン風ディスコ歌謡「東京の空の下あなたは」といった珍品まで収められている。山口百恵という絶好の素材を得てAOR、ラテン、フィリー・ソウル、フォルクローレなどの味付けが施された70年代ディスコ変遷史。面白い企画盤だ。

ヒロ宗和

淡谷のり子 ◆ 歌手 淡谷のり子～歌に託した半世紀

コロムビア COCP42215~6／2CD／¥3000／2・21／歌詞／解説=服部良一ほか

3月まで放送されていたNHKの朝ドラ「ブギウギ」で菊地凛子が演じた主人公のライヴァル役、茨田りつ子のモデルとなったのが淡谷のり子。笠置シヅ子とともに再び脚光を浴び、過去音源の再発へ結びついた。本アルバムは昭和48年度芸術祭参加作品として、1973年11月にリリースされた2枚組LPがオリジナル。キャリア44年目を迎えていた、大ヴェテランの円熟した歌声を堪能できる。

二葉あき子のヒット曲として知られながらも、実は淡谷がオリジナルの「夜のプラットホーム」や、淡谷が自ら訳詞を手がけたスタンダード・カヴァー「夜のタンゴ」などの名歌が、親泊正昇や大柿隆のアレンジで華麗に甦る。合間に挿入される杉村春子の語りが楽曲をより際立たせているのが特徴。アルバムのために岩谷時子といずみたくが書き下ろした「ブルースを歌う女」に始まり、ラストは淡谷版「マイ・ウェイ」ともいうべき「ひとすじの道」が万感の想いを込めて歌われる。ボーナス・トラックには、代表作「別れのブルース」の4態が収録された。37年のオリジナル録音、60年の再録音版はモノラルで。それに演奏を重ねた67年のステレオ版、40周年記念のアルバム用に録られた69年版も。それから4年後の本アルバム・ヴァージョンに至るまで、名曲が熟成されてゆく様子が窺える。ブックレットに寄せられた当時の文章の再録は、服部良一による"淡谷のり子論"、さらに"歌手 淡谷のり子さん"と題されたいずみたくの談話も収録。レコーディングの際、淡谷は自分で譜面を丁寧に書き直し、完全に自分のものにしてからスタジオに臨んでいた、という慎ましやかなエピソードが興味深い。信念に生きた歌手、淡谷のり子の人生が凝縮されたアルバムである。

鈴木啓之

CamScannerでスキャン

筒美京平 アーカイヴス5 ✦ v.a.

オーダーメイドファクトリー(ソニー・ミュージックレーベルズ) DQCL807 4CD ¥6000 2・16 歌詞

筒美京平が作曲した膨大な作品からレア曲を集めて編んだアンソロジー。シリーズ第5弾は、60曲のうち20曲が初CD化となる。CD4枚組のうち1枚には、24曲のオリジナル・カラオケが収録されている。

ディスク1は"70年代"。元ブルー・シャルム、桑原一郎の3曲から。73年に発売した2枚目のソロ曲「ここより永遠に」は阿久悠の作詞による、小松左京の小説『日本沈没』のイメージ・ソング。続けて、74年のデビュー曲「愛のかけら」をはじめ7曲が収録された三浜鉄平。「破局」や「君と生きる」などは西城秀樹を彷彿させる。「自由であれば」の大らかな歌唱が魅力だ。石黒ケイ、77年のデビュー曲「恋人時間」はレゲエ歌謡。イントロも「アイ・ショット・ザ・シェリフ」風。清水健太郎「ブルー・ハレーション」「サザーン(南行き・逃避行)」は高濃度のAOR歌謡。中古レコード屋で78年のアルバム『MR. LONELY』を探す愉しみが増えた。

ディスク2は"80年代"。といいつつ、79年、川崎麻世による桑名正博のカヴァー「哀愁トゥナイト」ではじまる。マリー with メデューサが4曲、喜屋武マリーのMarie(マリー)名義の2曲も収録されている。メデューサでの81年の「ムッシュ So Long」など、一聴して筒美作品だとわかる人はいないであろう。ストレートなガールズ・ロックだ。東京JAP、85年の「熱風ラプソディ」はオリジナル・サヴァンナ・バンド風、ムラート・ポップ歌謡の名曲。XIW-XIE(シェーシェ)、87年の「恋するBilly the Kid」のニュー・ウェイヴ感覚もひたすら愉しい。平山みき「バラの奇跡」は、87年の「冗談じゃない朝」のB面曲。奥田圭子、87年の「Single Woman」はハッとするほどいい曲だ。

ディスク3は"90年代"。RASH with Hip Bone & Tee's「PEACE & EXTASY」は92年の曲。補作詞と編曲者のなかにエクスタシー・ボーイズ、雨宮志狼の名があるハウス歌謡。94年の「PUMPS A GO! GO!」など、神崎まきの4曲は90年代=R&Bディーヴァ歌謡の時代を強く感じさせる。鈴木蘭々、95年の「泣かないぞェ」(これも筒美曲)のカップリング「叱られたくて」も60年代ポップス風の佳曲。櫻田宗久、97年のデビュー曲「愛の奴隷」からの「恋の呪文はヤムヤムヤム」「純情ハートブレイク」と続くシングル3連発もまとめて収録。藤井隆に通じる歪(いびつ)な歌謡曲愛にむせ返る。市川実和子「愛の干物」は大滝詠一プロデュースで、アルバム『Pinup Girl』(99年)からの収録。

ディスク4はオリジナル・カラオケ集。ここまでの3枚は一部を除いて馬飼野康二、萩田光雄、船山基紀ら、編曲に関しては別の作家を起用した曲ばかりだったが、この盤は筒美京平の作・編曲による24曲で固められている。朝丘雪路「雨がやんだら」から、南沙織「17才」、浅田美代子「赤い風船」、太田裕美「九月の雨」、中原理恵「東京ららばい」、ジュディ・オング「魅せられて」など70年代、CBSソニーの女性歌手のヒット曲がこれでもかと並ぶ。歌の不在により、メロディのえげつないまでの"強さ"を思い知らされる。優雅「胸さわぎ」や、平山三紀「真夜中のエンジェル・ベイビー」をオリジナルのオケで歌える日が来るとは!

安田謙一

CamScannerでスキャン

CAMEL ◆ Air Born: MCA & Decca Years 1973-1984
Decca [EU] 5398942 27CD+5Blu-ray

現在バンドを牽引するギタリスト：アンドリュー・ラティマーの健康悪化により、昨年、予定されていた日本を含む50周年ツアーを棒に振ってしまったキャメル。その後ニュースは途絶えたままだが、彼らの結成から全盛期までを音源と映像でフォローしたCD27枚＋ブルーレイ5枚の超大32枚組ボックスがリリースされた。内容を大雑把に説明すると、まず73〜84年に発表されたスタジオ・アルバム全10作を、ベン・ワイズマンがオリジナル・マスターから新規リマスター。そこに各シングル・ヴァージョンやデモ音源を大量追加している。中でも初期作に貴重な未発表音源があり、デビュー作より先に録音された 'Sarah' と、デッカ移籍後の初アルバム『ミラージュ』のデモ5曲が聴きモノ。このうち4曲は収録曲の初期ヴァージョンだが、8ビート・シャッフルの 'The Traveller' はその後、オミットされ、'Freefall' に差し替えられる。また『ミラージュ』『スノー・グース』のアウトテイクなど、近年の映像作に収められただけのレア曲も収録。とにかく枚数が多いので旧CDとの聴き比べができていないが、オリジナル・リマスターは総じてナチュラルな音で聴きやすい。

でも、このボックス最大の魅力は、初出を含むライヴ音源の充実にある。彼らは今までの再発でも未発表ライヴ音源をボーナス収録してきたが、2枚組拡大版『スノー・グース』『ムーンマッドネス』以外は、どうも小出しに止まっていた印象。でも今回は74年マーキー・クラブ、76、77年ハマースミス・オデオンの3公演フル・ヴァージョンを新ミックスで収録。75年のオーケストラ入り『スノー・グース』再現公演は、未発表だったアンコール曲「レディ・ファンタジー」入りの完全収録となった。すなわち78年の2枚組『ライヴ・ファンタジア (A Live Record)』収録曲は、本来在るべき形で全曲がココに収録されたことになる。他にもBBCラジオ／TV出演時の74、75、77、81年のライヴ音源、77年のブリストルとリーズ公演の一部、さらに初期記録で有名な "Greasy Truckers" 参加曲、そしてライヴ作『プレッシャー・ポインツ』は丸ごと収録。既発音源が多いものの、今あるものすべてをブチ込んだようなヴォリューム感に圧倒される。

またブルーレイ3枚には、『キャメル』『ミラージュ』『スノー・グース』『ムーンマッドネス』『ヌード』という5作の5.1chサラウンド・ミックスやハイレゾ音源を収録。個人的には、スティーヴン・W・テイラーのミックスがアルバムによりリヴァーブ過多に感じてしまうが、音数の多い『スノー・グース』など楽器の分離が際立ってサウンドが鮮明になった。またその副産物と思しき16トラックからのニュー・ステレオ・ミックスをCD3枚に収録。そして残るブルーレイ2枚が映像アーカイヴ。特にディスク31は、73、75、76、77、81年のBBC関連ライヴ映像集で、オリジナル編成からリチャード・シンクレアやメル・コリンズ在籍期、キット・ワトキンス在籍期など、メンバー変遷が絡むキャメルの歩みを一気に掴める。熱心なファンなら既発DVDで既視だと思うが、レストア効果も高く、こうしてワン・ボックスに集成されたのが嬉しい。

金澤寿和

CamScannerでスキャン

STEELEYE SPAN ◆ Live At The Bottom Line, 1974

Omnivore [US] OMPE1136012

スティーライ・スパンはブリティッシュ・エレクトリック・トラッド・バンドの中でも、とりわけ繊かな味わいに特色があり、日本のファンの間では特に初期のアルバムに評価が集中しているけれど、72年にクリサリスに移籍してからは、アルバムごとにエレクトリック色を強め、彼らを商業的な成功へと導いた。ジェスロ・タルのイアン・アンダーソンがプロデュースした74年作『ナウ・ウィ・アー・シックス』は、それまでのキャリア中、最大のヒット・アルバムとなる。

本作は同年に行なった通米ツアーのうち7月4日、ニューヨーク、ボトムラインでのライヴ。現地のFM局WNYUが収録した。もちろん初登場音源だ。オリジナル・メンバーのマディ・プライアーとティム・ハートを中心に、ドラマーをレギュラー・メンバーに加えた6人編成。演目はすべてトラッドだが、初期の繊かな演奏ぶりとは異なり、とても楽しいパフォーマンス。ジグにリールにバラッドありのプログラムに、中規模ヴェニューの聴衆が湧きに湧いている。 宇田和弘

TERRY STAMP ◆ Blue Redondo

Just Add Water [US] JAW068 LP

元サード・ワールド・ウォーのシンガーであり、ソングライターのテリー・スタンプ。本作は彼がファースト・ソロ・アルバム "Fatsticks" を発表した後、カリフォルニアに渡り、77～78年の間に録音した曲をまとめたアルバムだ。全曲がレコードでは未発表になっていた曲との表記があるが、これは78年に自身のレーベルから本作と同名のカセットが出ており、そこに収録されていたことを指しているものと思われる。カセットは全21曲で、本作は12曲が収録されている。

全曲がテリー・スタンプの作で、1曲のみ60年代に彼が参加していたマイク・ラビン&ザ・デモンズのラビンとの共作がある（68年作曲）。スタンプがアコースティック・ギターを弾いて歌うほかは、バス・ドラムがリズムを刻み、コーラスが付く程度のシンプルなアレンジだが、楽曲はロックンロール、ブギ、シンガー・ソングライター的な弾き語りなど様々。派手さとは無縁の味わい深い仕上がりで、いずれも彼のヴォーカルが生々しく伝わってくる。 白谷雪弘

GLEN CAMPBELL ◆ I Am A Lineman For The Country: Sings Jimmy Webb

Ace [UK] CDTOP1641

カントリー・ポップのビッグ・ネーム、グレン・キャンベル。かのレッキング・クルーや、幾多のクラシック・ロック盤で名演を響きわたらせたセッション・ギター・プレイヤーが出発点だったのは説明不要だろう。また、殿堂入りを果たすはどのメガスターダムへ躍り上がる契機となったのが、ジミー・ウェッブの楽曲による一連のヒット盤によることも同様。

本作は、そのウェッブ・ナンバー「恋はフェニックス」「ウィチタ・ラインマン」「ガルヴェストン」といった大ヒット曲はもとより、67～82年録音のすべての彼の作品を網羅したもの。よってむろん、センチメンタルな「ハニー・カムバック」や荘厳な「マッカーサー・パーク」のような佳曲もたっぷりだ。つまり、どれもメロディアスで品がよくて滑らかなポップ・フレイヴァーにあふれた楽曲と、キャンベルのしみじみとした温厚な人柄がにじみでたヴォーカルがひとつに交じりあう、いかにもの洗練されたカントリー・レコードだらけ。ファンならずとも改めて感じ入る好盤だろう。 杉原志啓

CamScannerでスキャン

BRIAN HYLAND ✦ Ginny O, Ginny - Brian Hyland Singt Deutsch

Bear Family [Germany] BFX15335 / LP

いわゆるティーン・ポップ隆盛の61年、愉快なミリオンセラー「ビキニ・スタイルのお嬢さん」を皮切りに幾多のヒットで知られるアイドル・スター、ブライアン・ハイランド。つい最近、ベア・ファミリーのヴァイナル・シリーズで珍しい音源の再発があったんで紹介しておこう。

LPタイトルの "Ginny, O Ginny" は、わが国でも62年、邦題「いとしきジニー(ジニー・カム・レイトリー)」としてリリースのヒット盤の曲名なんだが、ポイントはそこに〝ドイツ語でうたう〟と冠されているところ。つまり、88年編纂の発盤の復刻というわけだが、むろんNYベル・サウンド・スタジオで録音の音源はもっと古くて62年。「涙の口づけ」等、AB面全8テイクで、バッキング・トラックは既発のレコードと同じもの。要するに、往時、英米でちょくちょくみられた外国語版の焼き直しのひとつで、いまとなってはノヴェルティの一種としかいいようがない。とはいえ、それこそコニー・フランシスの日本語レコードのごとく、貴重かつそれなりの感興もある。 杉原志啓

LOU CHRISTIE ✦ Gypsy Bells:Columbia Recordings 1967

Ace [UK] CDTOP1601

63年のデビュー・ヒット「悲しきジプシー」始め、脳天に突き刺さるような甘いファルセット・ヴォイスが印象的なルー・クリスティー。代表曲はむろん66年、MGMからリリースの全米No.1「恋のひらめき」だ。で、直後にコロンビアへ移籍し同社ではさっそくアルバムも制作となり、その先駆けとしてこの際、録音の一曲「シェイク・ハンズ・アンド・ウォーク・アウェイ・クライン」をシングル発売。これがしかし、かろうじてチャートへランクインのマイナー・ヒットというわけで、結局、アルバムもお蔵入りとなる。

Aceレーベルが発掘の本作は、まさにその完全未発表の15曲にコロンビアでの全シングル・トラック6曲をそえたもの。収録テイクの制作はフォー・シーズンズでおなじみチャーリー・カレロで、楽曲は前記「シェイク・ハンズ…」等、ルーの最初期からのパートナーだったトワイラ・ハーバートやバート・バカラック/ハル・デイヴィッドの作品など、ヴァラエティに富むポップで貴重なコレクションといってよい。 杉原志啓

STEVE LAWRENCE & EYDIE GORME ✦ The Original Hits

Real Gone [US] RGM1707

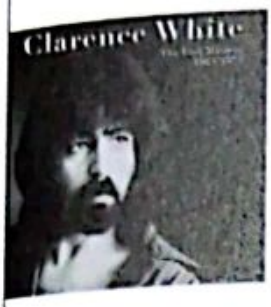
50年代から人気だったテレビMC、アーサー・ゴドフリーのいわゆるスター誕生番組「タレント・スカウト・ショウ」から出現のスティーヴ・ローレンス。派手すぎず、地味すぎずの風貌に似合わないスウィートでロマンチックな「かなわぬ恋」(63年/1位)や「プリティ・ブルー・アイズ」といったヒット盤は広くしられているところだろう。もうひとり、やはり別のTVショウを通じて彼と結ばれたイーディ・ゴーメもラテン調の陽気な「恋はボサ・ノバ」等、結構な数のヒットを放ったフィメール・シンガーだ。

本盤は、それぞれのヒット曲はもとより、キャロル・キングの書いた「アイ・ウォント・トゥ・ステイ・ヒア」のようなデュオの代表曲を集めたタイトル通りの両者のベスト・アルバムとなる。また、共にヒットの途切れていた72年、ちょくちょくスティーヴのヒット作品をカヴァーしていたダニー・オズモンドのいたオズモンズをフィーチャーした、「ウィ・キャン・メイク・イット・トゥゲザー」のさりげない収録もウレシイ。 杉原志啓

CamScannerでスキャン

CLARENCE WHITE ✦ The Lost Masters 1963-1973

Liberation Hall [US] LIB5035



クラレンス・ホワイトが73年に29歳で他界してから昨年50年目を迎え、その音楽人生を振り返り、63～73年に録音したレア音源を14曲収録した編集盤。

仕掛人は、クラレンスの数多くの貴重音源をシェラ・レコーズで発掘したジョン・デレガート。まずは、エリック・ワイズバーグとマーシャル・ブリックマンの“New Dimensions In Banjo And Bluegrass”に始まり、ロジャー・ブッシュとのセッションやタット・テイラーやケンタッキー・カーネルズのものなど、ブルーグラス時代から数曲ピックアップ。エレクトリック・ギターを手にしてのナッシュヴィル・ウェストでのサウンドは実にエキサイティング。エヴァリー・ブラザーズの名曲 'I'm On My Way Home Again' はリハーサル・テイクで、ドン・エヴァリー(?)の演奏指示まで入っている。バーズ後期の名盤“(untitled)”の佳曲 'Yesterday's Rain' もリハーサル・テイク。バーズ終焉の前後には、ブルーグラス時代を彷彿させる演奏を披露していたのだ。

中村彰秀

Blank Generation: A Story Of U.S. / Canadian Punk & Its Aftershocks 1975-1981 ✦ v.a.

Cherry Red [UK] CRCDBOX147 5CD

75～81年の北米パンク黎明期を包括したCD5枚組。全130組が1曲ずつ5枚のCDに収められている。やや開きにくいのは難点だが、ハードカヴァーの中に綴じ込まれた上質な厚手な紙の60ページのブックレットには、収録曲が入っていたレコードのジャケットやアーティストの写真と、解説を印刷。もちろん、録音状態の違いが気にならないマスタリングも施されている。

オープニング・ナンバーは、リチャード・ヘル＆ザ・ヴォイドイズによる本作の表題曲。序盤はラモーンズやテレヴィジョン、モダン・ラヴァーズ、ハートブレイカーズ、ディクテイターズ、デッド・ボーイズといった、パンク・ファン以外にもわりと知られているであろうバンドが続く。とはいえマニアックなアーティストも多く、音楽性が幅広いセレクションもポイントだ。“アメリカとカナダのパンクの歴史とその余震”という副題に偽りなく、76年前後に各地でゆっくり生まれていったパンク・ロックに加え、その影響下のニュー・ウェイヴ～ポストパンクなどのバンドもたくさん収めているのだ。メロウな曲も含まれているが、パンクから派生したパワー・ポップの一つの流れと思えば納得もできよう。おおざっぱに時系列で構成されているとはいえ音源発表順に縛られてないが、種々雑多なようで違和感なく曲が連なり、混沌とした中にもニヒリスティックな原始の息吹に包まれた仕上がりである。

ラスト・ナンバーはマイナー・スレットの 'Minor Threat'。ハードコア・パンクの登場で締めた作りということだが、だからこそ70年代スタイルからの橋渡し的な存在でもあるブラック・フラッグを筆頭に、SSTレーベル周辺のバンドが外されているのが残念だ。とはいえ、だだっ広いアメリカ大陸で発表された数えきれない7年間の“パンク”の中から、よくぞこれだけあちこちから選曲した！と評価したい。ニューヨーク・ドールズのベーシストが後にW.A.S.P.のフロントマンになるブラッキー・ローレスとやっていたキラー・ケイン・バンドのシングルなど、重箱の隅を掘り起こしたようなレアな名曲もいっぱいだ。限られた数のメジャーなアーティストとたくさんの無名バンドが同居しているのも敷居の低いパンクならではの魅力で、そういうコンピレーション盤が作られたという点でも画期的な労作である。

行川和彦

CamScannerでスキャン

JEWEL ✦ Spirit

Craft [EU] 0888072521803 2CD

米国ユタ州生まれのシンガー・ソングライターが98年に出し、〝ビルボード200〟のチャートで3位まで上昇したセカンドの25周年記念盤。28ページのブックレットが封入された6面の紙ジャケット仕様で、鮮やかな音の仕上がりのリマスタリングを施した計154分38曲入りである。

ディスク1の本編は、マドンナの数作に参加してきたパトリック・レナード(kbd他)がプロデュース。前作のフォーク色をキープしつつ多彩な楽器の使用でロック感が増し、曲によってはヒップホップからの影響も感じる。シングル用のミックスなどを追加。ディスク2は99年のライヴが半数を占め、バンド演奏とギター弾き語りが楽しめる。10曲目以降は初出の音源で、『グッバイ・アリス・イン・ワンダーランド』(2006年)に収める'Last Dance Rodeo'のデモも含むが、当時録った未発表曲が多いと思われる。ニルヴァーナっぽいリフの'Down'や、オペラ声楽経験を活かしたユーモラスな'Beeswax Operetta'など、興味深い曲ばかりだ。

行川和彦

ETTA JAMES / TAJ MAHAL ✦ The Earthquake Relief Concert 1989

Equinox [UK] EQCD6048

ライヴ盤というのは元来あまり思い入れがない。だがエタ・ジェイムズはその例外の一人と言ってもいいが、実際、63年にナッシュヴィルのクラブで録られたものはアーゴから出され、名盤の誉れ高い。それは彼女がスタジオだとこぢんまりとなりがちなのに対して、パワー重視のライヴだと思い切りふるまえるからだろう。とはいえ、これは89年にオークランドで開かれたコンサートを収録したものである。全盛期からはかなり経っている。正直最初は違和感があった。彼女はアン・ピープルズになりたいのか。

実際、ハイのスタイルをお手本にしていることはその選曲からもわかる。だが自分の持ち歌である「アイド・ラザー・ゴー・ブラインド」あたりから徐々に本領を発揮し始め、アーゴ時代の大ヒット「アット・ラスト」あたりで自分の領域に引き込んでゆく。さすが。でもバックはいまいちかな。

残りはタジ・マハールで、日本で観た時よりも芯がない。意外な組み合わせだった。

鈴木啓志

Masterpiece Vol.35: The Ultimate Disco Funk Collection ✦ v.a.

Vinyl Masterpiece [Netherlands] PTG34259

ベン・E・キング・ジュニアの「ユー・アー・ザ・フューチャー」を見て毎月送られてくるインディのシングル盤に心をときめかせていた頃を思い出した。盤面には87年とある。いまから40年近くも前の話である。ところが90年代に入ると、CD全盛となり徐々にそうしたシングルの数は減った。いわば本CDはシングルが最後の花を咲かせた80年代のシングル作品に主にスポットを当てたものと言ってもいい。そのジュニアに加えデイヴィッド・シーとラリー・ベイリーが記憶に新しいが、今聞いても少しも色あせていないことに驚かされる。

他はLPと12インチの作品が主となるが、打ち込みを主体としたダンス・サウンドにキレのいい歌、という点が共通しており改めていい時代だったなあと感慨にふけるところも。特にメル・ストロングとシェリー・ベイン&フィリップ・イングラムの2曲はすばらしい。後者はLP&12インチで持っていたことあとから思いだしたが、シュプリームスにいたシェリーってこんなに歌えたっけ。

鈴木啓志

CamScannerでスキャン

Groove Machine: The Earl Young Drum Sessions ✦ v.a.

Kent Soul / Ace [UK] CDTOP1629

MFSB一番手のドラマーであるアール・ヤングは、言わずと知れたフィリー・ソウルのグルーヴ・マスター。本誌21年2月号の特集「この曲のドラムを聴け！」には登場しなかったが、四つ打ちのディスコ・ビートを世界に広め、ハウスの礎を築くなど、その影響の大きさは計り知れない。そんな彼のドラム名演集だ。

並ぶのはシグマ・サウンド・スタジオ録音を中心とした65～77年の名曲。ヤングのホームとも言えるトランプス、その前身であるヴォルケイノスが序盤を飾り、フィラデルフィア・インターナショナル・レコーズ設立前夜～黄金期、サルソウルのディスコへと行き着く流れはフィリー・ソウルの歴史そのものだ。クライド・マクファーター、B・B・キング、チャールズ・マンによるフィリー詣で曲の収録も心憎い。オープン・ハイハットを特徴とする腰が浮き立つようなドラミングは、こうして並べて聴くと、タイトなプレイとリラックスした演奏があることがわかる。曲ごとの解説やロング・インタヴューを含むブックレットも充実。 林剛

Sam Records: The Sound Of New York City 1975-1983 ✦ v.a.

Edsel [UK] EDEL0177 3CD

40年代後半から活動するレコード業界の重鎮サム・ワイスがディスコ・ブームに乗じて75年に設立したサム・レコーズ。NYを拠点とし、一時期コロンビアが配給したサムに関しては、2015年に英ハームレスがほぼ12インチ・ヴァージョンで固めたコンピを出していたが、同じCD3枚組となるこちらはオリジナル版を中心に様々なミックスを用意した36曲入りだ。

幕開けはレーベル第1弾となったドリス・デュークによるマリーナ・ショウ曲のカヴァー。が、主軸は当然、ダンス・ミュージックで、サルソウル・オーケストラに倣ったジョン・デイヴィス＆ザ・モンスター・オーケストラ、夫婦デュオのマイク＆ブレンダ・サットン、ポール・カイザーが手掛けたライズの曲を複数入れつつ、ヴィッキー・Dや元ファースト・チョイスのワーデル・パイパー、リロイ・バージェスのコンヴァーションなど同社ではシングルのみで終わった面々の曲を並べている。ヒップホップやエレクトロへの接近も含めて、ポスト・ディスコ期のNYシーンの鼓動を伝える作品集だ。 林剛

AARON SACHS ✦ Quintet, Sextet And Octet Ensembles

Fresh Sound [Spain] FSRCD1143

ヘレン・メリルの最初の夫だったアーロン・サックスは、1940年代にレッド・ノーヴォやベニー・グッドマンの下で名を上げ、その後も数々のビッグ・バンドで活躍したNYC出身の名リード奏者。クラリネットが主楽器だが、テナー・サックスでもなかなか良い味を出していた。そのわりにリーダー録音は少ないが、それらすべてが充実した内容で聴き逃せない。

このCDには、後にXanaduのLPに収録されるシングル盤2枚分のManor録音を除くすべてのリーダー録音が収められており、サックスの実力を存分に味わえる。四つのセッションのうち日本でリリースされたことがあるのは、54年のBethlehem盤（ハンク・ダミコのリーダー録音と抱き合わせで12inch化）とDawnの"Jazzville, Vol.3"に収められた56年録音の7曲のみで、57年にRamaへ録音したオクテットとクインテットの11曲は国内盤にはなっていない。モダン・クラ奏者としてはもちろん、ウォームによくスウィングするテナー奏者としての魅力も存分に楽しめる一枚だ。 大村幸則

CamScannerでスキャン

BUDDY RICH & ALLA RAKHA ◆ Rich A La Rakha

Modern Harmonic [US] CDMH8297 CD
Modern Harmonic [US] LPMH8297 LP

以前に一度CD化されているが、久々の再発売。今回は、Modern Harmonicというレーベルから CDとLPでリリースされることになった。スピード感に満ちた歯切れ良いドラミングで知られるバディ・リッチと、ラヴィ・シャンカルの共演者として知られるタブラ奏者アラ・ラカとの共演録音で、ラヴィ・シャンカルが曲を提供し、アレンジャー及びコンダクターとしても関わっている。

いったいどんな音が出てくるのか初めて聴くときは少々恐ろしかったが、シャンカルに代表されるインド音楽がロックやジャズの世界から大きな注目を浴びていた1968年という時期に録音されたこのアルバムからは、極めて真摯にインド音楽とジャズとを融合させようという意思がひしひしと伝わってくる。ジャズ・サイドからはポール・ホーン(fl)の参加があるのみで、あとはシタール、タブラ、タンプーラなどの奏者たちがリッチを囲んでいるが、とてもナチュラルなリズムが自然発生し、ジャズとインド音楽の対話がきちんと成り立っている。大村幸則

THE HEATH BROTHERS ◆ Paris '76

Sam [EU] SRLP29 LP

サックスのジミー、ベースのパーシー、ドラムスのアルバートの三兄弟が揃ったヒース・ブラザーズは75年結成。ピアノに辣腕スタンリー・カウエルを迎えてストラタ・イーストからリリースしたデビュー作『マーチン・オン』（76年）は不朽の名作だ。今回の発掘音源は同年のパリでのスタジオ・ライヴ。おそらくストラタ盤は全曲が披露されたと思うのだが、今時のトレンドであるLP発売の形でとりあえず3曲が陽の目を見た。

オープニングはジミーの60年代の曲'One For Juan'。得意の演歌調、そこはかとなくファンキーな持ち味が既に全開でもこの人は常に真摯である。一方『マーチン・オン』からの2曲は原曲がわりと忠実に再現される。カウエルの弾くカリンバ、パーシーのベイビー・ベース（ボディと音域はチェロ、チューニングがベースと同じ）、アルバートのアフリカ由来のチャルメラがエキゾチックなムードを高めながらも、けっしてオーヴァーヒートせず、むしろ渋い姿を確認できただけでも満足である。松尾史朗

JOHNNY DYANI ◆ Afrian Bass

Red [EU] RR1233391 LP

南ア共和国出身のジョニー・ディアニといえば1960年代からドゥドゥ・プクワナ(as)、クリス・マクレガー(p)、ルイス・モホロ(ds)らと共に世界進出した猛者。45年生まれ、わずか40年の人生だったが欧州拠点に多彩な共演歴を誇り、とりわけスティーヴ・レイシーの『森と動物園』(67年)、ダラー・ブランド（アブドゥラー・イブラヒム）との"Good News From Africa"（73年）でその名はジャズ史に刻まれる。ベースが本職ではあったもののピアノの腕前も達者だった。

そんな彼の復刻盤はフレディ・ハバードのブルー・ノート盤などでお馴染みのドラマー、クリフォード・ジャーヴィスとのデュオによる79年のイタリア録音。なかなか稀有なベースとドラムスとのバトルの場面はLP時代の目いっぱい[illegible]占める長尺曲のみだ。これがまた[illegible]自由な対話に溢れた即興もので、[illegible]ころが20数分があっという間。A面の[illegible]はベースのソロはダラー・ブランドの[illegible]ピアノがコツコツと鳴るディオ。[illegible]十八番の曲目も披露される。松尾史朗

THE DINNING SISTERS ◆ Buttons And Bows: The Best Of The Dinning Sisters

Acrobat [UK] ADDCD3493 / 2CD

ザ・ディニング・シスターズは、カンサスシティで生まれオクラホマで育った9人兄妹の中の三姉妹、エラ"ルー"ディニング、ユージニア"ジーン"ディニング、ヴァージニア"ジンジャー"ディニングの3人によって1930年代末に結成されたヴォーカル・グループ。40年代後半、ルーが抜け、一時、ジェーン・バンダーデンに交代するが、すぐに末娘のドロレスに代わる。

当時、大人気のジ・アンドリュース・シスターズの線をいくコーラス・グループで、47～48年頃が最高潮の時期だ。'My Adobe Hacienda' 'I Wonder Who's Kissing Her Now' 'Beg Your Pardon' 等でヒットを飛ばすが、アンドリュース・シスターズの陰に隠れた存在で、一番のヒットはタイトルにもなっている 'Buttons And Bows'（ボタンとリボン）だった。40枚ほどのシングル盤を出していて、本2枚組はそれらシングルにトランスクリプション等を加え53曲入り。大半の録音をカヴァーしていて、彼女たちの録音のほぼ全貌を知ることができる。 高田敬三

LEITH STEVENS ◆ The War Of The Worlds / When Worlds Collide

La-La Land [US] LLLCD1630

流線型の宇宙船や銀色に輝くロケットなどが強烈な印象を残したジョージ・パル製作の古典的SF映画『宇宙戦争』（53年）と『地球最後の日』（51年）のカップリング・サントラが再登場となった。

12年前の初出（パル特撮映画2CD中のディスク1という形）では収録の叶わなかった前者で9分、後者で5分弱ほどの音素材がノイズ除去技術の進歩で初音盤化となり、その中でも特に今回注目されるのが、『宇宙戦争』での侵略火星人を扱った音楽表現の数々。SFではオーケストラを構成する楽器以外は一切使わないという作曲家、リース・スティーヴンスの処方は、一義的にはスクリーンに対時する観客の心に働きかけながらも、同時にその音の普遍性をバネにして、暗い画面に浮かび上がるパル十八番の極彩色特撮をある種サブリミナルな効果で際立たせていて、何とも興味深い。ラジオ出身で、ジャズやポップスにも明るいスティーヴンスだが、その原点にあるのはピアノ伴奏者というキャリアなのだという。これも面白い話だ。 上原昭一

PHILIPPE SARDE ◆ Tess

Music Box [France] MBR230

原作小説を、監督のロマン・ポランスキーに紹介したという亡き妻＝シャロン・テイトへの献辞から始まる映画『テス』（79年）のサントラが、公開時にリリースされた仏LP用編集音源と、そもそものソースとなっている映画用音源とを併せ収録する仕様で初登場となった。音楽担当はフィリップ・サルドで、本作はこの後コンビを組むことになる英国出身のオーケストレイター＝ピーター・ナイトとの初顔合わせ作品ともなった。

2in1で増補版が出ていた経緯もあって、全くの初音盤化となる音楽は5分ほどに留まるが、劇での登場順に全音楽を聴きとおすことで、運命という名の悲劇が静かに風景の中に溶け込んでゆくような、この映画ならではの感動を改めて追体験できるのがファンにはなんとも嬉しいところ。米・日のサントラLPにそれぞれ収録されていたプロモーション用の楽曲＝ラリー・バトラー楽団による主題曲のカヴァー録音1曲と、ピエール・ボルトの手によるイメージ音楽2曲は本盤には未収録となっている。 上原昭一

CamScannerでスキャン

LA FANTASTICA ✦ From Ear To Ear

Now-Again [US] NA5234LP LP

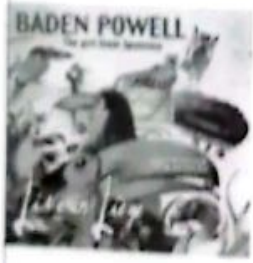
先号に続き、ジョー・バターンが設立したゲットー・レーベルの第4弾。発表は1970年代初頭。サックス奏者サムエル・レオーンが率いる11人編成のバンドで、74年にはメリカーナ・レーベルから『2001』というアルバムも発売している。

針を下ろした瞬間、おおニューヨーク・サルサ〜ってフィーリングが噴き出してくる。インディ・レーベルの、B級の良さではなく、ファニア・レーベルらど真ん中の高揚感あるサルサだ。レオーンらメンバーによる全曲オリジナルは、B②'Telegrama'がラテン有名曲「コーヒー・ルンバ」によく似ているとか、既視（聴）感のあるメロディもキャッチーだし、2トランペットとテナー・サックスの3管ホーンズも良い響きだし、ヴァイヴもいいアクセントになっている。ブルックリン生まれのローカルなメンバーだそうだが、ボレーロ'Latin Blues'は雰囲気でているし、ラスト'Sassie'のラテン・ジャズもなかなかの好演。幅広い音楽性を持ち、ひとつひとつのクォリティが高いレア名盤。

山本幸洋

BADEN POWELL ✦ The Girl from Ipanema: Live In Liége

Fremeaux & Associés [France] FA8607



バーデン・パウエルが、1987年にベルギーのリエージュで開催された国際ギター・フェスティヴァルに出演した際の音源が、幅広くワールド・ミュージックの音源を紹介するフランスのレーベル、フレモー＆アソシエから"The Girl From Ipanema: Live In Liége"として発表された。収録曲は全12曲で、ギターのみのソロ演奏だが、バーデンは曲によって歌も聴かせる。YouTubeに、ここには収録されていない演奏がアップされているので、実際のステージでの演目はもっと多かったと思われる。

ライヴ盤ではよく1曲目に収められている「ヴェント・ヴァヂオ」からはじまり、ボサノヴァ、ショーロ、フォホー、ジョンゴなどジャンルを越えたブラジルの音楽を、バーデン独特のスタイルとアレンジで聴かせる。「ポリーニョ・ジ・パペウ／ア・プリメイラ・ヴェス」では得意のスキャットを交えヴォーカルも披露している。「トリブート・ア・メイラ」は82年に他界した師匠メイラに捧げた演奏だ。

駒形四郎

IBRAHIM HESNAWI ✦ The Father Of Libyan Reggae

Habibi Funk [Germany] HABIBI0242 CD

Habibi Funk [Germany] HABIBI0241 LP

ハビービ・ファンクの24作目はリビアのレゲエのパイオニア、イブラヒム・ヘスナウィの編集盤。54年にリビアの首都トリポリで生まれたイブラヒムは、ロックやブルースに感化されてギターを弾いていたが、75年に電器店で働いていた友人からボブ・マーリーを聞かされてレゲエにのめりこむようになったという。

カダフィ独裁政権下で外国の音楽が抑圧された時代であったにもかかわらず、レゲエの汎アフリカ主義や自由や解放のメッセージが権力側に好ましいものと映り、音楽活動に支障をきたすことなく政府の支援も受けたという。イブラヒムが歌うのは、数曲を除きアラビア語リビア方言。ルーツ・レゲエとダンスホールのスタイルを咀嚼したサウンドはこなれていて、ギター・ソロなども堂に入っている。リビアにレゲエが根付いたのは、レゲエがリビアの民俗音楽のジムザメットとリズムが似ていたことや結婚式での聖歌の行進など、レゲエと親和性の高い要素がいくつもあったことが解説の中で指摘されている。

萩原和也

CamScannerでスキャン

New Album Pickup

・ニュー・アルバム・ピックアップ・

ヴェテランの新作から注目の新人まで、
編集部が選んだおすすめの新録アルバムを紹介します

THE SAMURAI OF PROG featuring MARCO GRIECO ◆ ア・クワイエット・タウン／サムライ・オブ・プログ・フィーチャリング・マルコ・グリエコ

Seacrest Oy/マーキー（ベル・アンティーク） MAR244005／紙ジャケット／¥2800／2・25／歌詞／解説＝祖父尼淳／輸入盤国内仕様

ベーシストのマルコ・ベルナルドを中心に、多国籍メンバーが参加するプログレ・ユニットの新作。近年は多彩なミュージシャンとのコラボ作が話題を呼んでいるが、本作は22年作『アンセム・トゥ・ザ・フェニックス・スター』でコラボしたイタリア人作曲家、マルコ・グリエコとの再タッグ作となった。作家としても活躍するマルコの推理小説を元にしたストーリー作で、教会で殺された女性の犯人は誰かという謎を追いながら楽しむ、一風変わった作品となっている。

往年のプログレへの憧憬が強いユニットだけに、演奏や曲構成は凝りに凝っている。サスペンス・ドラマらしいスリリングな演奏、ヴァイオリンやフルートの音色を活かした多彩なアレンジなど、数多くのミュージシャンが適材適所で物語を盛り上げている。起伏に富んだ音楽だけでも聴きごたえのあるドラマチックな作品だが、小説の内容が分かったほうがより深く楽しめるだろう。それだけに歌詞などの対訳がないのは、英語力の乏しい身には少し辛いものがある。 **舩曳将仁**

JANE GETTER PREMONITION ◆ ディヴィジョン・ワールド／ジェーン・ゲッター・プレモニション

Esoteric/マーキー（ベル・アンティーク） MAR244010／紙ジャケット／¥3000／2・25／歌詞／解説＝宮坂聖一／輸入盤国内仕様

女性ギタリスト、ジェーン・ゲッター率いるジェーン・ゲッター・プレモニションの新作。ジャズ／フュージョン／ロック系のソロ作もリリースする彼女だが、このバンドではプログレッシヴ・ロックへと大きく傾倒したサウンドを展開する。

今作のメンバーは、私生活でのパートナーでもあるアダム・ホルツマン（kbd）、元テスタメントのアレックス・スコルニック（g）、デイヴィッド・バーンのツアーなどで活躍してきたボール・フレイジャー（b）、ジャズ・サックス奏者、オリヴァー・レイクの息子であるジーン・レイク（ds）といった面々。こうした凄腕たちを纏め、その中心でギターを弾き、歌うのがゲッターだ（曲も書く）。サウンドには前作同様、キング・クリムゾンやポーキュパイン・ツリーなどの意匠が見られるが、いくらか柔らかになり、ポップな要素が増した印象。派手なインタープレイには傾かず、あくまで楽曲を聴かせるべく様々な音楽要素を巧みに織り交ぜながら、実に味わい深い“プログレッシヴ・ロック”を奏でている。 **石川真男**

CamScannerでスキャン

SARA ALDEN ◆ There Is No Future

Prophone[Sweden] PCD312

ロシアの脅威にさらされるスウェーデンの新進ジャズ・シンガー、サラ・アルデンのデビュー作。彼女は、22年に5トラック入りのミニ・アルバム“A Room Of One's Own”を発表したが、フル・アルバムは初めてだ。地球を取り巻く戦争や環境問題から、努力して求めなければ明るい未来は考えられない状況を踏まえ、アルバムに“There Is No Future（未来はない）”とタイトルを付けている。

彼女は、スウェーデンの鬼才コントラバス奏者／作曲家のアンダーシュ・ヤーミンの薫陶を受け、英国のジャズ・ヴォーカリスト、ノーマ・ウィンストンを慕っている。現代的で、少し前衛的な歌手だ。本作では、スタンダード5曲と自作5曲を歌い、叫びから入る‘Misty’などにはノーマ・ウィンストンの影響が感じられる。しっとりとしたムードで入るが、後半は自問するように同じフレーズの繰り返しで盛り上げる曲が多い。最後の‘What A Wonderful World’では、本当にそうか？という意味だろう、“world”の語を削ったりしている。　高田敬三

FABIO GALLIANI & CANTALUNA ◆ チャオ オカリナ!／ファビオ・ガッリアーニ&カンタルーナ

リスペクト RES346／¥3000／3・20／歌詞・訳詞／解説＝ファビオ・ガッリアーニほか

オカリナ七重奏団、G・O・Bのメンバーであるファビオ・ガッリアーニが、22年に結成したカルテットのデビュー・アルバム。オカリナ発祥の地であるイタリアのブードリオから届けられた作品だ。オカリナ、アコーディオン、ギターを基本的な編成として、ときにヴォーカルも。伝統的なヨーロッパ音楽や地中海音楽を周遊するかのように演奏していく。

アイルランド民謡の「ダニー・ボーイ」の演奏を聴くと、オカリナの高い音がヨーロッパ音楽の古層へと導くかのようだ。かと思うと、イタリアのダンス音楽であるタランテラの「ナポリのタランテラ」は、軽やかにして躍動的。「シシリアのワルツ」で使われるオカリナは6種類。「ハバ・ナギラ」ではダルブッカも使われ、その視座はヨーロッパにとどまらない。かつ、ウクライナの「オデッサ・ブルガリッシュ」や、90年代までパレスチナの国歌だった「マウティニー」を収録するなど、平和を希求する姿勢を明示している点には、このプロジェクトの強い気骨を感じた。　宗像明将

頭脳警察 ◆ 東京オオカミ

ブレインポリス・ユニオン BPU012／¥4000／2・5／歌詞

パンタが逝去する約1年前の22年8月にレコーディングしていたという、最後のオリジナル・アルバム。パンタとトシ以外のメンバーは前作にあたる『乱破』（19年）とほぼ同様の、若手主体となる総勢7人編成。分厚くて骨太なロックを中心としつつ、ファンク、タンゴ、ジャズ、ブギなど多彩なアプローチを試みていて、パンタの集大成的なサウンドとしても捉えられる。エネルギッシュで張りがあって、鮮度たっぷりのいい演奏だ。パンタはひとつひとつの言葉を噛みしめるようにとても丁寧に歌い、時として懸命に声を張り上げていて、やはり胸に迫るものがある。全体として、重い緊張感が貫くロック・アルバムといえるだろう。

なによりもクライマックスのバラード「絶景かな」は絶品というしかない。パンタの最後の心境を“絶景”という未来や希望を込めた言葉で表わし、渾身の歌声を聴かせていて、それは遠巡の果てにたどり着いた境地と思える。彼が最後までポジティヴでリアルなアーティストだったことが伝わってくる作品だ。　小山守

CamScannerでスキャン

平山みき&野宮真貴 ◆ アーティスト/ホットな地球よ

スペースシャワー DDCB12985／2CD／¥3000／2・14／歌詞

平山みきと野宮真貴によるユニットで配信リリースした2曲がCDとしてリリースされた。2曲とも筒美京平が生前、橋本淳に自作曲を託したもの。筒美のメロディに作詞家、橋本が推敲を重ねて完成した2曲がこの、それぞれ芸歴54年と43年のデュオの歌唱で陽の目をみた。プロデュースも橋本淳による。

「アーティスト」の橋本による歌詞には盟友、筒美への個人的な記憶と強い想いがこもっているが、これを軽く、ポップに聴かせるのがコンビの流儀だろう。編曲は船山基紀と与田春生による。「ホットな地球よ」は本間昭光の編曲。流麗なストリングスとアッパーなダンス・ビートの融合はピチカート・ファイヴ「大都会交響楽」を彷彿させる。ボーナス・ディスクには、23年9月にビルボードライブ東京で行なわれた〝野宮真貴、渋谷系歌謡曲を歌う。〟から、「アーティスト」などのデュエット曲をはじめ、平山がソロで歌う「真夏の出来事」「いつか何処かで」など橋本＝筒美コンビの7曲をライヴ音源で収録。 安田謙一

角銅真実 ◆ Contact

ユニバーサル UCCJ2233／¥3000／1・24／歌詞

野外の環境音を録音したり、ceroなど他のアーティストと共演したり、さらには、打楽器奏者ながらギターを弾きこなすだけでなくそのチューニングの狂いまで面白がったりと、楽しげに音と戯れ続ける角銅真実。この4年ぶりの新作では、さらにその感性があらわになった印象だ。

たとえば、水の音で幕を開ける冒頭の「ｉｏｅｏ」から、早くも言葉は意味と音の間を行き来して聞き手を翻弄する。母音の発音を面白がり、その音を重ねたりずらしたりして聴覚を揺さぶってくるこの曲は、まるで音のずれを愛でるスティーヴ・ライヒの作品のようでもある。また、故郷でもある長崎の民謡を取り上げた「長崎ぶらぶら節」も興味深い。こぼれ落ちる弦の音や溢れ出るドラムの音などを組み合わせ、斬新な手法で和の伝承文化を再構築した圧巻の一曲だ。その他、寓話のような詞の世界も独創的なうえ、乾いた彼女の声も聞き手のノスタルジアを絶妙にくすぐってくる。そしていつしかこの幻想的な〝音〟絵巻に心奪われてしまうのだ。 片島吉章

ジャンクフジヤマ ◆ 憧憬都市 City Pop Covers

ボニーキャニオン PCCA06277／¥3000／3・6／歌詞

口コミで〝あの人に似ている〟なんて話題になってから早くも15年。亡き村上〝ポンタ〟秀一の後押しもあって、すっかり昨今のシティ・ポップ・ブームの先駆け的な存在として認知されたシンガー・ソングライターが、満を持してカヴァー・アルバムを発表した。これまでもオリジナル以外のレパートリーを録音しているし、ライヴでもかなり披露している。それでもあえてアルバムにまとめただけあって、他のアーティストには追従できない選曲とヴォーカル力を堪能できる。

再評価された松原みき、八神純子、大橋純子といった女性シンガーの名曲から、オリジナル・ラブやbenzoといった90年代まで視野を広げたことも本作の醍醐味のひとつだ。benzoの「真昼」は学生時代にすでに歌っていたというから筋金入り。杏里「WINDY SUMMER」のホーン・セクションをフュージョン風ギターでなぞったり、「夏の終わりのハーモニー」をアカペラにしてみたりと、アレンジもひねりが効いている。類似企画は数あれど、これぞ真打ちだと言いたい。 栗本斉

CamScannerでスキャン

Plastic Dogs ◆ The Third

アール(ディスクユニオン) RRCD0015 紙ジャケット ¥2500 2・28 歌詞

アシッド・マザーズ・テンプルや吉田達也、内橋和久などの周辺…すなわち日本のアヴァン・ジャズ・ロック・シーンの中枢で、かれこれ20年にわたって足跡を残してきたサックス奏者、小埜涼子。彼女が活動の拠点を名古屋に移して結成したのがプログレッシヴ・メタル・バンド、Plastic Dogsだ。19年にデビュー・アルバムを発表し、本作で3作目となる。

サックス＋ギター2名＋ドラムスという4人編成で絶大なインパクトの演奏を繰り広げる。超絶変拍子の嵐で、そのサウンドはとても日本のバンドとは思えない。アルバム中間部を占める4楽章からなる「Frexivent Suite」は、演奏時間計2分弱——となれば、ジョン・ゾーンの影響は明らか。いまの時代、日本の地方都市にこれだけの音楽を生み出す有能なミュージシャンたちがいるとは。自主制作盤ながら、小埜自身が手がけているジャケット・デザインのレヴェルはなかなかのもの。音楽に負けず劣らずのインパクトだ。これを手に入れるだけで充分な価値がある。 坂本理

TAMTAM ◆ Ramble In The Rainbow

Peoples Potential Unlimited 番号なし 配信 1・19

TAMTAMは、2010年デビューのバンド。レゲエとダブを軸としたポップなサウンドを志向した初期から、時がたつごとに大胆な音楽的変遷を経てきた。そんな彼らが、オブスキュアなディスコ／ブギー作品の発掘リリースなどで知られるアメリカの名門、ピープル・ポテンシャル・アンリミテッドから、初となる海外流通EP作品をリリースした。レゲエやR&Bなど、これまで培ってきた各要素がよりいっそう自由に展開されているのに加え、近年、国内外の音楽シーンでリヴァイヴァルを見せてきたニューエイジ系のサウンドにも接近し、堂々たる新機軸を聴かせてくれる。

いつも以上に驚かされるのは、そうした新たな要素を取り入れる咀嚼力の高さだ。昨今“ニューエイジ風”の作品は多いものの、それをここまで自らの個性に引き寄せ、絶妙な距離感で血肉化した例は稀だろう。奥ゆかしくも力強い演奏とミックス、そして、ヴォーカルの放つ芳香。さっそく海外で話題になっているのにも納得。 柴崎祐二

秘密のミーニーズ ◆ Our new town

なりすコンパクト・ディスク(ハヤブサ・ランディングス) HYCA8066 ¥2500 1・24 歌詞

東京を拠点に活動するバンド、秘密のミーニーズ。夏秋文尚(ムーンライダーズ、ジャック達)をプロデュースに迎えた本作は、前作までメイン・ヴォーカルを務めていた菅野みち子が音楽活動を休止したため、オリジナル・メンバーの淡路憲が復帰。ゲスト・ヴォーカルにmayugenを迎えた3声のコーラスが美しく、フォークやカントリーを取り入れたロックに豊かな歌声が乗った楽曲は、60年代の米西海岸サウンドを彷彿させる。淡路の太くてよく伸びる歌声は飛行機雲のように清々しい軌跡を描き、ギター・ソロもしっかりと聞かせる骨太でダイナミックなバンド・サウンドとあっている。

「雲の影」という曲があるが、初期ピンク・フロイドを思わせるサイケ要素が織り交ぜられているのも特徴だ。ただ、過去の音楽をなぞるのではなく、現代的な視点で取り入れているからこそ瑞々しく“自分たちの音楽をやる”という気概に満ちている。シンプルな言葉で綴った歌詞からもバンドの世界観が伝わってくる、詩情豊かな日本語ロック。 村尾泰郎

CamScannerでスキャン